Star Ocean3　After Story

壬代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｔａｒ　Ｏｃｅａｎ３　Ａｆｔｅｒ　Ｓｔｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ２７９８Ｔ

【作者名】
壬代

【あらすじ】
　クリムゾンブレイド補佐として、クレアの恋人として公私共に順調な生活を送っていたフェイトの元に、エリクールにはないはずのエリミネートライフルが発見されたという報告が入る。一方、マリアは一年ぶりにグリーテンから帰国した、虚空師団〈風〉の師団員クレセント・ラ・シャロムと出会う。――彼女の帰国後、シーハーツに降りかかる数々の事件。それらは時間を遡り、隠匿されたシーハーツの闇を曝け出していくことになる。
　スターオーシャン３、本編後のアフターストーリー。フェイトと

マリアがエリクールで紡ぐもう一つの物語。
※１２／０２　第一章完結しました。

人物紹介（前書き）

ざっくり登場人物紹介。ネタバレなしで随時追加します。

人物紹介

□聖王国シーハーツ

・五柱

フェイト・ラインゴッド：主人公。軍部担当。破壊の紋章をもつ。クレアの恋人。

マリア・トレイター：政界担当。改変の紋章をもつ。元反銀河連邦組織クォークのリーダー。フェイトの姉。

ソフィア・エスティード：施術担当。繋ぐ紋章をもつ。士官学校で施術講師をしている。

セレン・ウォン：開発担当。元抗魔師団の師団長。不治の病をかかえている。クレアの幼馴染。

・光牙師団「光」

クレア・ラーズバード：師団長。クリムゾンブレイドの片翼。シーハーツ軍総司令官。

ヴァン・ノックス：一級構成員。実父にグラオ・ノックスをもつ。アルベルの弟。クレアの右腕。

セフィリア・S・フラン：最年少一級構成員。クレアを尊敬して

いる。

・封魔師団「闇」

ネル・ゼルファー：師団長。クリムゾンブレイドの片翼。クレアの幼馴染。

アストール・ウルフリッヒ：一級構成員。

タイネーブ：二級構成員。ネル直属の部下。ファリンの相棒。

ファリン：二級構成員。ネル直属の部下。タイネーブの相棒。

・連鎖師団「土」

ネイビス・ティモール：師団長。アゼルの幼馴染。

・抗魔師団「炎」

ルージュ・ルイーズ：師団長。クレア、ネル、ヴァンとは幼馴染。

ディルナ・シュテンノ：三級構成員。商家シュテンノ家の三女。

・幽静師団「水」

アゼル・クロイツ：師団長。ネイビスの幼馴染。

・虚空師団「風」

シレーネ・リシャス：師団長。クレセントのことになると暴走癖がある。

クレセント・ラ・シャロム：二級構成員。ペターニ領主の一人娘。

・その他

シーハート27世：シーハーツ女王。アペリスの聖女。

ラッセル：執政官。

エレナ・フライヤ：施術開発部部長。

ユティ・ウォン：セレンの妹。医師見習い。

１－００　雨の音

ザァァァァ……。

大粒の雨が少女と少年を容赦なく濡らす。

全てを洗い落としてしまうかのように強く、そして長い雨。

金髪の少年は瞳に焦りと不安の色を浮かべ、地面に倒れる銀髪の少女の白い喉に刃を突き付けている。そのまま振り下ろせば、その脆い喉は容易く突き抜けるだろう。

しかし、少女は動かない。ただ、曇りの無い瞳で真っ直ぐに少年を見つめている。

少年の刃を持つ両手がカタカタと震えて出したとき、少女の唇が微かに動いた。

「――――」

少年の眼から雫が零れ、少女の頬に落ちる。

少女は優しい笑みを浮かべ、泣き崩れる少年を抱きしめた。

「だいじょうぶ」

雨の音さえ掻き消すような澄んだ声。

それは、少年が知るどんなものよりも優しく、そして暖かな響きだった。

※

眼が覚めると、そこには見知ったいつもの天井。
この夢を見るのは何度目だろうか。もう数え切れないほど見てきた気がする。

「あれから……八年も経つのか」

起き上がり、何も無い天井を見上げる。まだ、先ほどの声が耳に残っていた。
優しい、何よりも優しい声が耳の中で木霊する。眼を閉じれば、銀髪の少女が瞼の裏に鮮明に映し出されていた。

「ごめん、クレア……」

微かな呟きは、虚空に吸い込まれていった。

１－０１　安息の日々

その日、ゲート大陸にある聖王国シーハーツの首都シランドでは、その厳かな都に相応しくない空気に包まれていた。
季節はもう冬に入るというのに、まるで夏のような熱気。
その中心にいるのが、上半身裸の中年と蒼髪の好青年。
ちぐはぐな組み合わせだが、二人ともこの界隈では知らぬ者のほうが珍しいほどの有名人だ。
街中の歩く人々が一度は立ち止まり、何も見なかったように立ち去っていく。そして二度とその場所を通ろうとはしない。
通りにある店は既に鎧戸が下ろされ、早々に店じまいをしている。
誰もが彼らに巻き込まれる事を恐れていた。
彼ら――元クリムゾンブレイドの片割れアドレー・ラーズバードと、国の英雄フェイト・ラインゴッドに。

「いい加減観念せんかい！」
「だから、結婚なんてまだ早いってば！」

アドレーが怒鳴る度に、その巨躯から稲妻に似た施力の塊が放たれ、飛び火したそれらが周囲のものを破壊する。フェイトは時折自分に向かってくるそれを剣でいなしながらも反論を続けた。
既にアドレーとフェイトの周囲の外観は台無しになっている。
喧嘩ならモーゼル砂丘にでも行ってやってくれ、誰もがそう思ったがそれを口に出せる強者はいなかった。
口では収まらなくなった喧嘩が更にヒートアップしていく。

「もういい加減にしてくれ、よっ！」

フェイトの強烈な横蹴りが炸裂する。アドレーは手元も見ずに刀

の柄で受け止めた。元クリムゾンブレイドは伊達ではないらしい。

「ええい！　とにかく結婚せんか！　それともなにか、お主はクレアとの結婚が嫌だと申すのか！？」

「そ、そんな事言ってないだろ！　大体これは僕らだけの問題じゃないんだ。クレアの意見だって聞かないと」

「かっ！　お主がそんなのだからクレアが他の男に靡くんじゃ！！」

素通りしようとした人々が足を止める。フェイトも眼を丸くして、手にしていた剣を落としそうになった。

「そ、それどういう事だよ！？」

「あやつもなかなかの男だからのぉ。ワシもあやつなら認めてもよいと思っておる」

髭に手を当て、ニヤリと笑うアドレーの眼が妖しく光る。

「だから、何の話だよ！？」

フェイトは自分でも焦っていくのが分かった。

クレアに限ってそんなことあるはずがないと信じてはいる。しかし、付き合い始めてから分かったことだが、彼女は男に対してあまりにも免疫が無い。仕事ならいざ知らず、プライベートではネル以上なのだ。

「あやつとクレアは光牙師団に入った頃からの仲じゃなからな。もしや、という可能性もあるじゃろ」

「そ、そんなわけ……」

「ないと言えるかのぉ？　お主が最後にクレアと過ごしたのはいつじゃ？」

「い、一週間前……だけど」

フェイトの答えにアドレーはやれやれと首を振る。

「ほれ、全然ではないか。あやつは光牙師団員じゃからな。毎日顔を合わせておろう」

「うっ」

「先程も一緒におったしの。万が一ということも――」

「ありません」

「ぐはぁっ！」

澄んだソプラノが聞こえたかと思うと、アドレーの巨体が綺麗な孤を描き空中を舞った。

あまりの唐突な出来事にフェイトは呆然と立ち尽くしている。

軽く十メートルは飛んだだろう、アドレーが地面に落ちる音で漸くフェイトは正気に戻った。そしてそこに居るであろう人物に向けて、フェイトは引きつった笑いを浮かべながら声をかけた。

「や、やぁ、クレア」

銀髪の女神はにこりと笑顔を浮かべ、フェイトに向けて手を翳す。

銀色の紋章がクレアの手に集束し、輝きを増していく。

やばい。

フェイトがそう思ったときには時遅く、アドレーのそれとは比べ物にならないほどの稲妻が頭上から降り注いだ。

※

「……まったく、あなたもあなたよ。お父様の言う事なんかにいちいち反応して」
「面目ない」

あれから小一時間。眼を覚ましたフェイトはクレアの自室にて説教を受けていた。
本来ならフェイトよりアドレーに非があるはずなのだが、説教と聞いて騒ぎ出した為、早々にクレアの容赦ない蹴りによって沈められた。
手加減なしの一撃が利いたのか、先程から床にめり込んだままピクリとも動かない。

「あの後始末は一体誰がつけてくれるんでしょうね？」
「責任もって僕とアドレーがやるよ」
「よろしい」

正直アドレーが破壊したものよりクレアの一撃の方が被害は大きかったのだが、フェイトは敢えて黙っていた。
クレアはフェイトの答えに満足そうに頷く。
が、それも束の間。すぐにまた呆れ返ったような顔になった。

「それにしてもあんなこと信じるなんて、ほんとに単純なんだから」
「返す言葉も無いよ」
「まぁまぁ、それもフェイト様がクレア様のことをそれだけ大切に想っているということですよ。クレア様だって実は嬉しいでしょう？」
「ヴァン、それは私をからかっているのかしら？」
「とんでもありません。そんな恐れ多い」

常人ならたじろぐクレアの睨みを流し、穏やかな笑みを湛える男

性は、ヴァン・ノックス。クレア率いる光牙師団〈光〉の一級構成員である。

肩にかかるくらいの金色の髪に真紅の瞳。左側の横髪を軽く縛っている。穏やかではあるが視線は鋭く、その眼光は常に何かを考えているようだった。

「嘘をつきなさい。絶対からかってるじゃない」
「それは被害妄想というものです、クレア様」
「上司に対して、言うわね」

表情こそ余裕を装っているが、クレアの口調は悔しそうだった。フェイトにはそれが珍しくて、小さく吹き出してしまう。

「クレア相手によくやるなぁ、ヴァンも」
「聞こえてるわよ、フェイト」
「あだっ！　い、いはいよ！」

クレアの手がすっと伸びてフェイトの頬を容赦なく引っ張る。地味だが、物凄く痛い。

フェイトが両手を挙げて降参のポーズを取ると、クレアは最後に一度ぎゅっと引っ張ってから手を離した。

「あいたた」
「余計なこと言うからよ」
「ああ、真っ赤。大丈夫ですか？」

そう言いながら、ヴァンはフェイトの赤く染まった頬に手を近づける。

「あ、冷たい」

「冷やさないと後々痛みますからね」

ヴァンの手からはひんやりとした冷気が放たれていた。
氷の刃にならない程度に施力を調節し、冷気だけを作り出しているらしいが、詳しい原理はフェイトには分からない。

「こういうことはクレア様がやって差し上げればいいんですけどね。何分素直じゃないもので」
「ヴァン！」

クレアが怒鳴る。先程までのポーカーフェイスは跡形も無く消え去っていた。
ヴァンは次々と繰り出されるクレアの言葉の槍を穏やかな笑みで交わしていく。

「……あのクレアにまるで動じないなんて」

フェイトは半分感心して、もう半分は羨ましそうに呟く。フェイトはクレアに口で張り合える人物など、女王以外いないとさえ思っていた。
そういえば以前、クレアとヴァンの口喧嘩を耳にした時は、フェイトが全く知らない難解な単語が飛び交っていた。正直聞いてるだけでも頭痛がした。この二人の語彙力は半端ない。
更にヴァンは、政治、武術においても非常に優秀な人物だった。こと剣術、体術に関してだけを言えばフェイトですら本気を出さなければないらい程の腕前なのである。
ついでに言えば人柄も良く、クレアとの相性も文句無し。
という風に大変優秀な人材のわけだが、シーハーツの人々の少数は彼のことを疑念の眼差しで見ていた。
その理由はよく分からないが、おそらくヴァンの出生に関係して

いるのではないかとフェイトは考えている。
以前、シーハーツ六師団である抗魔師団〈炎〉の部隊長ルージュ・ルイーズから聞いた話では、ヴァンの父はグラオ・ノックス。元アーリグリフ三軍の一つ〈疾風〉の団長だったという。
つまり、ヴァンはアルベルの弟にあたる。しかし、今はラッセルの養子になっているなど、とにかく謎が多いのだ。
もしかしたら父親の母国に寝返るかもしれない。そんな不安がヴァンへの疑念を持たせたのだろうか。
そしてこれはフェイト自身が気になっていることだが、母親の存在が全く持って不明なのである。
ヴァンがラッセルの養子になったのは一歳にも満たない頃であるというから、ヴァンが覚えているはずもない。
アルベルも物心ついた時には母親はいなかったと言うし、父親に聞いても応えてくれなかったらしい。
育ての親であるラッセルは何か知っているらしいが、彼も一切口を開こうとはしなかった。
クレアやネルに聞いてみても、知らないと答えるだけだった。クレアの方はラッセルほどではなくとも思い当たる節はあるようであったが。
ただ、分かるのは、ヴァンが施術を使えることからしてシーハーツ人であったということ。
アルベルは確か今年で二十五歳。二十五年も前ならアーリグリフとシーハーツはまだ友好関係にあったわけなのだから、おかしな話ではない。
ヴァンが母親の母国のシーハーツの軍人になる理由もある。
だが、きっとそんな簡単な話ではないとフェイトは思っている。
それだけの話ならラッセルやクレアが隠す理由がない。
しかし、フェイトは気になりつつも、敢えて調べようとはしなかった。ヴァンからしてみれば気持ちのいい話ではないだろうし、事情も知らない異国人の自分が首を突っ込んでいい話ではない。

そして何より、クレアが止めるのだ。クレアに言われてはフェイトもこれ以上追求することは出来ない。

それにフェイトはヴァンと信頼していた。ヴァンのクレアを慕う気持ちは決して嘘ではない。ヴァンに負けないくらいクレアを想っているフェイトだからこそ、その気持ちが痛いほどよく分かっていた。

「ああ、もういいわ。なんだか私一人ムキになって馬鹿みたいじゃない」
「ははっ、スッキリしました？」
「今の一言がなければしてたかもしれないわ」

クレアは笑顔で指を鳴らす。
また始まるか、とフェイトは思ったが、いい加減クレアも疲れたらしい。ふぅ、と息を吐いて椅子からベットへと移動した。

「それよりも、ヴァン。非番の日くらい敬語は止めてって言ってるじゃない」
「そうだよ、僕も様付けなんてされちゃ気が重い」
「ですが、一応立場というものがありますから」
「ヴァン」

クレアは期待するようにに、フェイトは頼み込むようにヴァンを見る。
ヴァンは二人の顔を見比べ、苦笑しながら首を振って両手を挙げた。

「……やれやれ、敵わないね。クレアにも、フェイト君にも」
「ふふ、あなたに敬語なんて似合わないもの」

「”君”もいらないんだけどなぁ」
「まぁまぁ、それくらいは勘弁してくれよ。いきなり呼び捨ては心臓に悪い」
「わかった。でもいつか取ってくれよ」
「善処するよ」

ヴァンは困ったように笑い、胸に手を当てた。それを見たクレアがくすくすと笑う。

「ヴァンの善処する、は当てにならないのよねぇ」
「え、そうなのかい？」
「おい、クレア。失礼なこと言うな。フェイト君、クレアの言う事信じないほうがいいからな」
「残念でした。フェイトはきっと私のことを信じてくれるわよ」

起き上がったクレアがフェイトの腕に抱きつく。突然のことにフェイトの顔が一瞬で朱色に染まった。

「く、クレア！？」
「フェイト？　顔真っ赤だけど……風邪？」
「い、いや、その……」

まさか、密着されてると恥ずかしいなどと言えるはずも無く。フェイトは赤くなった顔を見られないようにそっぽを向き、黙り込んでしまった。

クレアは不思議そうに首を傾げて、壁に寄りかかってフェイトに同情の眼差しを向けていたヴァンを見上げる。

「フェイト、どうしちゃったの？」
「おまえ、ほんと相変わらずだよ……」

窓を通って、穏やかな風が窓際のパルミラの花を揺らす。
その甘い香りを楽しむように眼を細めたクレアをヴァンが愛おしそうに見つめていたことに、フェイトだけが気づいていた。

１－０２　晴れ、ときどき雨

「で、何の用かしら？　出来れば手短に。即刻に」

ペターニの街角にある喫茶店。

流れるような蒼の髪を持った凛とした女性が、目の前の茶髪の童顔娘を見る。

茶髪の童顔娘――ソフィア・エスティードは引きつった笑いをしながらお茶を啜った。

「マリアさん、私のこと嫌いですか？」

「……そうでもないわよ」

「その間が気なりますけど……まぁいいです。いまに始まったことじゃないですし」

「訂正するわ。やっぱり嫌い」

ソフィアの笑顔に対して、マリアは冷ややかな視線を向ける。

チャリ、とマリアは自分の分のお茶代を机の上に置き、席を立った。ソフィアはマリアさんらしいな、と感心しながらも彼女の服を引っ張って行かせようとはしない。

「ちょ、待ってくださいよ」

「なによ。クレアとフェイトを引き離そうなんてことなら協力しないわよ」

「ええ！？　なんでですかぁ」

本当にそんな用件だったのか、とマリアは呆れてソフィアを見た。

「私にはなんの得にもならないからよ」

「損もしないじゃないですか」
「時間の無駄だわ」

今度こそマリアは喫茶店を出て行った。
本当に出て行くとは思っていなかったのか、ソフィアは慌てて勘定を済ませてマリアの後を追いかける。

「待ってくださいよ、マリアさんっ！　さっきのはちょっとしたお茶目ですって！」
「うるさいいわねっ！　鬱陶しい。正直鬱陶しいわ」
「ひどいっ！　そんなひどいです！」

わざとらしく泣きまねをするソフィアをマリアは華麗にスルーし、シランドへ向けて歩いていく。
カツカツと石の道を靴で鳴らし、空を見上げる。曇っていた。マリアは顔を顰め、足を速めた。

ペターニ北門を抜け、イリスの野へ出た頃、ソフィアが追いついてきた。マリアは小さく舌打ちをし、目の前の魔物に向けて苛立たしげにフェイズガンの引き金を引いた。
ただの銃弾が紋章に包まれ巨大なレーザーへと変化する。飲み込まれた魔物は塵一つ残さずに消滅した。

「時間の浪費だわ」

肩に掛かった髪を払い、銃をホルスターに収める。力を使った後でも、以前のような頭痛や眩暈はしない。
マリアはこの一年弱、ある人物の元でアルティネイションを完璧

にマスターさせていた。

「うわぁ、マリアさん容赦ないですね」

ソフィアはマリアの後ろからひょいと顔を出し、先程まで魔物が居た場所を凝視した。

「本当ならあなたを撃ちたいところなんだけどね」

「マリアさん、冗談に聞こえないです」

「当たり前でしょ。本気なんだから」

さらりととんでもないことを言うマリアにソフィアは額から冷や汗を流す。

「で、何の用？　また馬鹿なこと言うようならアレと同じ末路を辿るわよ」

「遠慮します。私まだ死にたくないので。――で、実はこれなんですけど」

ソフィアが慎重に鞄から出したものを見て、マリアの整った眉が動く。

マリアは手渡されたそれを見て、本物のようね、と呟きソフィアに視線を戻す。

「あなたやフェイトが持ち込んだもの……なわけじゃないわよね」

「はい」

「バンデーンのは――」

「既に全て処分済みです。あの後フェイトが念入りにスキャナーで探してましたから取り残しも有り得ません」

ソフィアの表情も口調も真剣そのものだ。
マリアは眉間の皺を一層深くして、溜息を吐いた。

「……めんどうくさくなりそうだわ」

マリアは空を一瞥する。その手には、黒く光るエリミネートライフルらしき銃がしっかりと握られていた。
灰色の空から、静かに雨が降り出した。

※

シランドの近郊にある修練場で二人の男女が向かい合っていた。
そして、それを少し離れた所から一人の青年が見守っている。

「本気で行きますよ」
「ええ、手加減なんてしたら減俸よ」

ヴァンが腰の鞘から白銀の剣を抜くのを確認すると、クレアも愛刀の柄に手をかけた。手をかけるだけで抜こうとはしない。

「クレアの獲物は刀か。そういえばアドレーも剣じゃなくて刀を使ってたっけ」

しかし、実際にアドレーがそれを抜刀することなど殆ど無い。ソフィアの杖のようなものかと思っていたが、実は違うのかもしれない、とフェイトは思った。

「では、参ります」

短く告げると、ヴァンは地面を強く蹴り、高く飛び上がった。そのまま懐に手を入れ、数本の小刀をクレアに向けて投げつける。クレアはそれを紙一重のところで避けるが、一本が長く靡くマフラーを掠めた。

「かわされましたか。でも……」

クレアが小刀に気を取られている間に背後に着地したヴァンはその無防備な背中に向けて鋭い突きを繰り出す。

――決まった。

ヴァンが、フェイトが思った。

だが、

「残念」

「くっ！」

クレアは驚異的ともいえる速さで半身になり、これをかわした。ヴァンはすぐさま前のめりになった体勢を立て直そうとするが、その隙を見逃すクレアではない。くるりと身体を回転させ、逆にヴァンの背後をつく。

手には、先程ヴァンが投げた小刀。

「私の勝ち」

クレアが無邪気な笑みを浮かべた。

ヴァンはひとつ溜息を吐いて降参のポーズを取り、剣を手から落とす。カラン、と白銀の剣が石畳を鳴らした。

「……獲物くらい抜いてくれてもいいじゃないですか」

「ふふ、残念でした」
「俺もまだまだってことですか」

口調こそ変わらなかったが、表情はやはり悔しそうだった。
小刀が下ろされたのを確認して、クレアに向き直ったヴァンは眼を丸くした。クレアの顔がヴァンに負けず劣らず悔しそうだったのだ。

「なんてね。抜かなかったんじゃなくて抜けなかったのよ。そんな余裕なかったわ」
「は？」
「それに避けれたのだってあなたが寸止めするつもりで威力を抑えたからだし」
「え、ええと……」

ヴァンは答えに困り、頬を掻く。その眼前に整った長い指が突きつけられた。

「もう一度」
「え？」
「もう一度よ。今度は別のやり方で勝ってみせるわ」
「残念だけど」

子供のようにムキになるクレアを止めたのはフェイトだった。その表情はどことなく暗い。
ただならぬ様子に、クレアとヴァンの表情が強張る。

「何かあったの？」
「ああ。ヴァン、君は急いでネルを呼んできてくれないか？　きっとペターニに居ると思う」

「は！」
「見つけたらすぐにシランド城の会議室まで来るように伝えてくれ」
ヴァンは頷くと、すぐさまペターニに向かって駆け出した。
フェイトはクレアに視線を向ける。クレアは口の中が異常なまでに渇くのを感じた。ぎゅっと手を握り締め、フェイトの言葉を待つ。
フェイトは通信機に一度目をやってから、再びクレアに向き直る。
「バンデーンの残党が……シランド近辺に潜伏しているかもしれない」
「それはどういった理由でかしら？」
流石だ、とフェイトは思った。多少なりの動揺は見られたものの、クレアは冷静だった。
クレアはそれなりの事情を理解している。フェイトがこの星に残ると決めた時、国の重要人物だけには知らせておいたほうがいいと思い、クレアを始めとするシーハーツ六師団の師団長達にはその旨を伝えたのだ。
「マリアから通信が入ったんだ。子供がシランドの近くでエリミネートライフルを拾ってソフィアに渡したらしい。幸いにも安全装置がかかっていたから間違って発砲されることはなかったんだけど」
「そう、良かった。……拾ったってことはバンデーンの姿を見たわけじゃないのね？」
「ああ。けど、可能性はゼロじゃない。ただ、気になるところもある」
「武器をわざわざ落とすなんて馬鹿な真似、普通はしないわよね」
クレアは首を振って、額に手をあてる。きっとその頭の中では色々な問題が駆け巡っていることだろう。折角平和な日常が訪れたの

に、すぐに問題はやってきた。クレアの表情が曇る。
出来るなら二度とこんな顔はさせたくなかった。フェイトは拳を握り締め、空いた手でクレアの肩をそっと抱き寄せる。

「フェイト？」
「大丈夫。絶対何も起きない。僕が起こさせない」
「……ええ、ありがとう」

クレアは束の間眼を閉じ、身体を預ける。どちらのともいえない心音が、優しく鼓膜に届いた。
時間にしたら数分後も経っていないだろう。クレアはゆっくりとフェイトから身を離した。

「至急対策本部を設置します。ネルが戻り次第対策を立てるわ」

シーハーツが誇る紅き双剣の片翼が、身を翻す。

「フェイトはルージュに連絡を。何かあってからじゃ遅い。迅速に事を解決します」
「仰せのままに」

クリムゾンブレイド直属、〈守護三柱〉が一つ蒼き騎士はその場に跪き、頭を垂れた。

１－０３　守護の三柱

クリムゾンブレイド直属の部隊〈星海〉、守護三柱とも呼ばれる部隊がシーハーツい新設されたのは、いまよりおよそ三ヶ月ほど前。フェイトやマリア、そしてソフィアがエルクール二号星に移り住むことを決めてから半年後のことだった。

〈星海〉は部隊とはいっても構成員はたったの三人。任務の内容も三人が同系統のものではなく、それぞれの担当管轄は全く異なる部類なのである。

一人は軍部。一人は政務。一人は施術。一つ一つの部隊の職務内容が決まっているシーハーツではまさに異色の部隊であった。

そして、他の部隊と大きく異なる点はもう一つある。

それはクリムゾンブレイドの承認を得た時に限り、その任務を代行出来るということ。

通常特Ａ級の重要案件はクリムゾンブレイドのみの管轄であった。

しかし、アーリグリフとの戦争、星の船の襲来、卑汚の風。短期間に様々な問題がゲート大陸を襲い、国内は混乱の渦に飲まれた。

そのような状況下でクレアとネルはとても二人では捌ききれないような仕事を、その類まれなる才能と努力によってなんとかこなしてきたのである。

とはいえ、いくら優秀とはいっても人間。そのような激務をいつまでも続けられるはずもなかった。

「ネルが倒れたって！？」

「フェイト」

その日、ネルが倒れたと聞いたフェイトは息を切らしながらネルの自室に飛び込んできた。ネルが眠るベットの脇にある椅子に腰掛

けていたクレアが、口元に指を当てフェイトの名前を呼ぶ。
フェイトはそこで漸く冷静になり、まるで借りてこられた猫のように身を縮こまらせた。

「ご、ごめん」
「本当、心配性ね。ネルなら大丈夫よ。過労みたいだから二、三日も寝てれば良くなるわ」
「そうか。……良かった」

脱力したように、フェイトはその場に座り込んだ。
その様子を見て軽く微笑んだクレアは優しくネルの髪を撫でながら眉根を寄せる。

「無理も無いわ。ここ数ヶ月働きづめだったんですもの」
「それは君もだろ？　ネルも君ももっと休みを取るべきだ」
「無理よ。クリムゾンブレイドが二人揃って休んだりなんかしたら仕事が進まないわ」
「なら、僕が手伝うよ」

フェイトが立ち上がる。クレアは首を横に振った。

「気持ちは嬉しいけど、私たちしか取り扱えないものなのよ」
「クリムゾンブレイドしか？」
「ええ。重要度の高いものとかね」
「そう、か」

残念そうに呟くフェイトにクレアは小さく微笑んだ。

「でも、心配してくれてありがとう、フェイト。それだけで充分私は頑張れるわ」

「クレア」

疲れを隠せないクレアの顔色を見て、フェイトは顔を歪めた。
自分に力があれば。そう思わずにはいられなかった。

「さて、そろそろ私は仕事に行かないと」
「なにか手伝えることはないのかい？」
「ネルを看ててあげて。私が一番に望むことはそれよ」
「わかった。ネルのことは任せといてよ」

フェイトは力強く頷く。
お願いね、と言って扉を開け、部屋の外に出ようとするクレア。
しかし、

「クレアっ！」

突然、クレアの身体が崩れ落ちた。フェイトは慌てて手を伸ばす。
だが、クレアを抱き止めたのは手を伸ばしたフェイトではなく、

「ほんと、あんたもネルもバカなんだから」

腰上まである朱色の髪を二つに結った、気の強そうな女性――抗魔師団〈炎〉の師団長ルージュ・ルイーズだった。

「るー……じゅ」

かろうじて意識を保っているといった感じのクレアがか細い声をあげる。ルージュは呆れたような瞳をクレアに向け、その身体を抱き上げた。

「あんたは軍人としては立派。でもね――」

ルージュは一旦言葉を切る。そしてフェイトを一度チラリと見て、また視線を戻した。

「親友や恋人としは失格。見なさいよ、あのフェイトの顔。情けないったらありゃしないわ」

クレアはゆっくりとフェイトを見る。それはもう情けない顔だった。

眉は下がり、何か言おうとしては思いとどまり、また口を開きかけては閉じるを繰り返している。

「フェイト……」

「クレア」

クレアが手を伸ばすと、フェイトはそれをしっかりと握り締めた。

「ごめんなさい、私はもう大丈夫だから」

「でも、クレア」

「ルージュ、ありがとう。もう降ろしていいわ」

「却下よ」

「ちょ、ルージュっ」

「フェイト、ちょっとクレア借りるわね」

ルージュはそう短く言うと、クレアを抱きかかえたまま部屋を出る。

一人残されたフェイトはどうしようか迷っていると、

「行きなよ」

背後から凛とした声が聞こえた。
何時に間に起きたのか、ネルが上半身を起こしてフェイトを見ている。
フェイトは一瞬戸惑ったが、やがて意を決したように頷くと踵を返してルージュの後を追ったのだった。

「だぁかぁらぁ！　このままじゃクレア達が壊れちゃうって言ってんのよ！　この数ヶ月クレアが一体何キロ痩せたと思ってんのよ！　ただでさえ痩せてるってのに……羨ましいったらないわっ！！」
「る、ルージュ」
「……あなたね」

ルージュ、クレアそしてフェイトはラッセル執政官の部屋に居た。
ルージュは仁王立ちになり、ラッセルの机を軋ませるほどに強く叩いている。途中から全く関係ないことを言い出すルージュにフェイトは苦笑し、クレアは額に手を当て、盛大な溜息を吐いた。
眉間の皺を更に深くし、明らかに怒りをあらわにしているラッセルに尚もルージュの暴言は続く。

「ちょっと聞いてるの！？」
「で、一体どうしろというのだ？」

ラッセルがルージュを見上げる。ルージュはニヤリと笑い、目を細めた。

「エレナ様発案のアレ。そろそろ出しちゃってもいいんじゃない？」
「おまえ、知ってたのか」

「抗魔の情報網、ナメないでよね。で、どうなのよ？」
「ルージュ、何のこと？」

完全に蚊帳の外になっていたクレアとフェイトだが、とうとう耐え切れずにクレアが口を挟む。ラッセルとルージュが驚いたようにクレアを見た。

「あんた、知らなかったの？」
「ふん。おまえと違ってクレアは忙しいのだ。そんなことに時間を割いている暇はなかったのだろうな」
「なによ。あんなだだ漏れの情報時間を割くまでもなく分かったわよ。クレアとネル以外の師団長はみんな知ってでしょうね。情報管理に問題あるんじゃないの？」
「偉そうに言うな。しかし、まぁ……そうだな。クレアとネルには無理をさせ過ぎている」

ラッセルがゆっくりとした動作で椅子から立ち上がる。それを見たルージュの顔が輝き、未だ唖然としているクレアとフェイトに向けてウインクする。
ラッセルは扉に手をかけると、顔だけ振り返る。その表情はどこか穏やかだった。

「クレア、フェイト」
「はい」
「は、はい」
「フェイトは一時間後にマリアとソフィアを連れて謁見の間まで来い。クレアはそれまで部屋で休め。ルージュはエレナを連れて来い」
「「は？」」
「はいはーい」

訳が分からずお互いの顔を見合わせるフェイトとクレアを尻目に、ルージュは軽い足取りでラッセルと共に部屋から姿を消した。

※

「えええ！？」
「そ、そんな……」
「唐突ね」
「ラッセル様、そんないきなり……」

シランド城の謁見の間にフェイトの絶叫が、ソフィアの驚愕の声が、マリアの抑揚の無い声が響いた。クレアまでもが驚きの表情を隠せないでいた。

その声にラッセルは顔を顰め、女王は穏やかに微笑み、エレナは不満そうな声を上げる。

「ひどぉい。そんなに私の案が嫌なのぉ？」
「い、いえ。そういうわけでは……」
「それともなぁに？　クレアちゃんとネルちゃんにこのまま働きなさいって？」
「そ、そんなことは！」
「エレナ、言葉を選べ」

ラッセルがエレナを嗜め、一つ大きな咳払いをする。

フェイトはついムキになってしまったことを恥じるが、隣に立っているクレアが嬉しそうにしていたので良しとした。

「で、具体的な内容は？」

一番冷静に状況を分析していたのはマリアだった。相変わらずの涼しい顔でエレナとラッセルを見る。

ソフィアは口をポカンと開けたまま何も言えずにいた。

「流石におまえは冷静だな」

「こういうの初めてじゃないのよ。嬉しくないことに」

その物言いにフェイトは思わず苦笑した。おそらくクォークのリーダーに推薦された時の事を言っているのだろう。あのクリフのことだ。今のように唐突だったに違いない。

「マリアちゃんの質問に関しては私が答えるわねぇ」

「止めてくれ、日が暮れる。ルージュ」

「はい」

今までにこやかな笑みで沈黙を保っていたルージュがフェイト達の前に立つ。

「具体的に話すと日が暮れちゃわないことも無いけど、面倒だから端折るわね。この部隊はシーハーツ六師団と決定的に違う点があるの」

フェイトは女王の前でさらりと普段の大雑把さを曝け出すルージュに半ば関心する。

ルージュは人差し指を立て、口を開く。

「それは構成員の管轄が全て違うということ。ま、構成員って言ってもあなたたち三人だけなんだけど」

「具体的には？」
「軍、政治、そして我が国の象徴とも言える施術」
「仕事内容は？」
「シーハーツ六師団の管理、ラッセル様の補佐、新設される予定の施術士養成所の管理」
「そんな重大なものを私たちに任せていいのかしら？　この国に来て一年も経たない、ましてや異星人である私達に」
「おまえたちには実力がある。それで十分だ」

マリアとルージュの会話にラッセルが口を挟む。

「それに、陛下も民も、皆おまえたちを信頼している」

フェイトが、マリアが、ソフィアが目を見開いた。まさかあのラッセルからそのような言葉が聞けるとは思っていなかったのだ。

だが、フェイト達は実際そう言われるだけのことをしてきた実績があるのは事実だった。

フェイトは言わずもがな、永きに渡ったアーリグリフとの戦争を終結させた和平の使者。国の英雄として広く名を馳せている。

マリアはエリクールに移住してから、様々な政治問題について助言してきた。クォークのリーダーとして活動してきたのは伊達ではない。彼女の功績は目を見張るものだった。彼女がいなければ国の復興は今の二倍の時間がかかっていたとさえ言われている。

そしてソフィア。彼女はあるいはフェイトやマリアよりずっと身近に国民に信頼され、慕われた人物である。彼女はその回復術の腕を生かし、多くの人を救ってきた。シーハーツ人だけでなく、アーリグリフ人も、裕福な人も、貧乏な人も、分け隔てなく。

そんな彼らは今や国民から絶対の信頼を受けていた。そうでなければ、ラッセルは決してフェイト達を認めはしなかっただろう。

「誰も異論は言うまい」

ラッセルの穏やかな口調が響き、弾かれたように三人の顔が引き締まった。覚悟を決めた目だった。

その瞬間を待っていたかのように女王が立ち上がり、透き通った声がそこに居る全て者の耳に優しく届いた。

「フェイト・ラインゴット」

「はい」

フェイトが跪く。

「マリア・トレイター」

「は」

マリアが跪く。

「ソフィア・エスティード」

「は、はい」

ソフィアが跪く。

「以上の三名をクリムゾンブレイド直属部隊〈星海〉に任じます」

フェイト、マリア、そしてソフィアが深く頭を下げる。

こうして、聖王国シーハーツに新たな部隊が誕生した。

１－０４　風の帰還

「あれからもう三ヶ月も経つのか」
「なによ、やぶからぼうに」

シランドへ向かいルムを走らせている途中、フェイトは何気なしに呟いた。懐かしむように空を見上げ、目を閉じる。
穏やかな風がフェイトの、クレアの頬を優しく撫でる。緑に満ちた大地。そこかしこから聞こえる鳥の囀りや木々の揺れる音がまるで子守唄のように響く。
先程までの剣呑な雰囲気は微塵も感じられなかった。まるで何事も無かったような空気。
少しでもクレアの不安を和らげようと、フェイトは移動中ずっと他愛の無い会話を続けていた。エリクールに住み着いた当初こそルムの扱いには苦労していたフェイトだが、今ではもう手放しでも問題なく操れるほどに成長していた。

「いや、思い出してね。あの時は大変だったなぁ」
「そうね。叙任式の後三日三晩大騒ぎ」
「アドレーなんか『このまま式をあげるぞ！』とかなんとか騒いでさ」

まいったよ、と両手を挙げ、フェイトは苦笑する。

「あら、私は別に良かったけど」
「え！？」

フェイトは勢いよくクレアの方を向く。が、すぐにその失敗に気付いた。

「冗談よ。単純な英雄さん」
「うっ」

クレアのしてやったり、といった笑みにフェイトは押し黙る。

「でも、ほんと大変だったんだからな。君はうまく逃げてたけどさ」
「知ってるわよ。これでもあの人の娘ですからね」
「……なぁ、今度母さんにＤＮＡ鑑定してもらわないか？」
「いいわ。そんな決定的な証拠欲しくないもの」

そう言うクレアとフェイトの表情はどこか楽しそうだった。

「またそんなこと言って、アドレーが泣くぞ」
「少しくらい娘離れするといいんじゃないかしら」
「それは同感。ところで、僕がアドレーに捕まってる間は何してたんだい？」
「なんか引っかかる言い方ね。私だって大変だったのよ。お父様のほうがまだマシって思えるくらいに」
「え？」
「恋愛話が好きな女の子達の恐ろしさ、知ってる？」
「大変だったな」

フェイトは即答する。その手の話が大好きな幼馴染を持ったおかげでクレアが体験したであろう苦労は嫌というほど理解できた。

「うまく逃げたつもりだったのよ。でもまさかネルがルージュの言いなりになってるなんて思いもしなかったから……油断したわ」
「弱み、握られたな」
「ええ。それに泣きそうな顔して『ごめん、クレア』なんて言われ

たから怒るに怒れなかったわ」
「ネルも気の毒に」

フェイトとクレアは同時に溜息を吐いた。

「結局その後はずっと質問攻め。病み上がりだっていうのに……仕事してたほうが楽だったかも」
「ははっ。でも、僕は最後に君と踊れたから満足だったよ」
「よく言うわよ。散々人の足踏んでおいて」
「う……わ、悪かったよ。ヘタで」

フェイトはバツが悪そうにそっぽを向く。
対するクレアは悪戯っぽい笑みを浮かべ、追い討ちをかけた。

「あんなに自信満々に『僕と踊ってくれませんか？』なんて言うんですもの。私てっきり……」
「も、もう止めてくれ！」

フェイトの顔は真っ赤だった。恥ずかしさを振り切る為に速度を更に上げるが、クレアは悠々と追い抜いていく。
するりとフェイトの横を通り抜け、茶目っ気たっぷりの笑顔を見せてくる。完全な不意打ちとなったその笑顔に、フェイトの顔は瞬く間に赤く染まった。

「ふふっ、シランドまでどっちが先に着くか競争よ、フェイト！」
「ちょ、そんな急に！」

イリスの野に二人の男女の声が響き渡る。
鳥が、木々が、風が、全てのものが二人を見守るかのように、優しい歌を奏でていた。

※

鬱蒼とした森の中、時々通行の邪魔になる蔦や枝を手でどかしながら数人の男女が足を進めていた。誰もがシーハーツやアーリグリフでは見慣れない服装を身に纏っている。

「あと少しでペターニに着きますね」
「はい、懐かしいです」

軽装の男が快活な笑みを見せる。横を歩く小柄な女性は表情を変えないままペターニの街があるであろう方向に目線をやった。
言葉とは裏腹に、その瞳には「懐かしい」などという感情はない。

「もう一年以上経ちますからね。あっちも大変だったようで」
「アーリグリフとの戦争の終結。まだ信じられません」
「私もです。でも、良かったですよ。本当に」

男は心底嬉しそうな顔をして、胸元のペンダントに手を添える。
女性は不思議そうに首を傾げると、肩にかかる白銀の髪が揺れた。

「それは？」
「ああ。妻と娘の写真が入ってるんです。可愛い娘でして、明日で四歳になるんですよ」
「誕生日には間に合いそうですね」
「はい。去年祝ってやれなかったですからね。今年は盛大にしてやらないと」

男がペンダントの蓋を開く。幸せそうな笑顔が写っていた。それを見る男の顔もまた、幸福という二文字を表情に変えたように、優しげに綻んでいる。

その様子を横目で見つめていた女性の翡翠の双眸が悲しげな色を宿す。しかし、そのことに気付くものは誰もおらず、すぐに女性の瞳に映った悲哀も姿を消した。

森が徐々に拓け、これまで木々の合間を縫って薄っすらと差し込むだけだった光が眩いほどに彼らに降り注ぐ。目の前に広がる見慣れた風景に、周囲の空気が沸き立たった。

「見えた！　ペターニ東門です！」

誰かが叫んだ。歓喜と興奮に満ちた声が空気を震わせる。

女性もほっと安堵の息をつき、顔を門へと向けた。その瞬間、光が横を通り抜ける。

「え？」

ドサリ、と何かかが倒れる音。女性はゆっくりと背後を振り返る。

誰かが叫んだ。恐怖と絶望に満ちた声で。

「これは」

ふらり、と女性が一歩後ずさり、震える手を口へ当てた。

「……なぜ」

ついさっきまで幸せそうに笑っていた男が、目を見開いて倒れている。その胸に空いた黒々とした穴を見据え、女性はそれが何を意味するのかを瞬時に理解した。彼が放つその死臭は、あまりにも嗅ぎなれたものだったからだ。

強く、強く握られた彼の拳にしっかりと握られた淡い光を放つペンダントを見据えながら、女性は静かに視線を伏せた。

※

「……見せ付けてくれるわね」

「この事態に追いかけっこでご登場とはね。流石、と言えばいいのかしら？」

「ルージュ、止めるんだ」

「マリアさんも。……確かにちょっとムカつきますけど」

会議室でフェイトとクレアを待ち受けていたのは、ジト目で頬杖をつくルージュと、腕を組んで椅子に座るマリアの悪態だった。

一応ネルとソフィアは庇ってくれているようだが、ネルも苦笑い、ソフィアにいたっては庇ってくれているのかすら疑問だ。

王都に着く前には二人とも軍人の振る舞いに戻っていたのだが、どうやら見通しが甘かったらしい。見られていたと知ったフェイトとクレアの顔が朱に染まっていく。

「まぁ、そんなバカップルは放っておいて。本題よ」

「ま、マリアさんっ！」

クレアが更に顔を赤くして叫ぶが、マリアは気にも留めないように書類を回していく。

これ以上言っても無駄だと悟り、クレアは渋々と中央の席に着く。それを合図にしたかのようにクレアから見て右手にフェイト、マリア、ソフィアの順。そして左手にネル、ルージュが腰を下ろした。

クレアはざっと手元の資料に目を通し、納得したように頷く。顔を上げたクレアの瞳は、聡明な指揮官のものだった。

「まず始めに。この件に関しては〈光〉、〈闇〉、〈炎〉、〈星海〉であたります」

「〈土〉は？　あれも国内担当でしょう？」

「現在、ペターニの商人や貴族に不穏な物資の流れが確認されています。今そちらの手は抜けません」

「なるほど。了解よ」

マリアが納得したのを確認すると、クレアはソフィアに視線を向けた。

「ソフィアさん」

「はい」

「その銃を拾った子供の証言を、出来るだけ詳しく話して下さい」

「分かりました」

ソフィアは一度頭の中を整理するように目を閉じてから、はっきりとした声音で喋り始めた。

「その子の話では、その銃を拾ったのは一昨日の午後三時頃。場所はシランドの城壁のすぐ傍の茂みです。習ったばかりの施術の練習をしようと人に迷惑のかからない場所を探していたところ偶然発見したらしいです。その場で一度引き金を引いたらしいのですが、安全装置がかかっていたため発射されることはありませんでした。その後それを持ち帰り、翌日私を驚かせようと持ってきたようです」

「親御さんには？」
「話してなかったそうです」
「そうですか。ありがとうございます。マリアさん」
「解体してみたけど、それに書いてある通りで本物よ。模造品って可能性も捨て切れなくはないけど……ほぼゼロだと思っていいわ」

クレアの言わんとしていることを読み取ったマリアが先に結論を述べる。

クレアは顔の前で両手を組み、それに額を当てる。こうして何かを考えるときに両手を組むのは、クレアの癖だった。

数分悩んだ末、クレアは顔を上げた。

「考えられるのは三つ、ですね」
「一つはバンデーンの残党。一番シンプルな考えね」

真っ先に反応したのはルージュだった。机を指でカツカツと鳴らしている。

「もう一つは、フェイトたちみたいな先進惑星からの来訪者」

ネルが続ける。ソフィアがなるほど、といった感じに手を叩いた。

「ただ、どちらの場合にも問題がある」
「そうね」

蒼の髪を持つ双子が重々しく口を開いた。彼らの言うであろうことはその場の誰もがわかっていた。

「まずは前者。これはバンデーンの残党の場合は武器を落とす理由が分からない。それに今更侵略を始めようとする理由もない。セフ

ィラが狙いならとっくにカナンのほうへ行っているはずだ」
「そして後者。このエリクールは私たちが居ることもあってクリフたちが常にその宙域を監視させている。なにかあったら連絡が来るはずだわ。見落としの可能性も低いわね。加えてバンデーンと同じく武器を落とす理由もない」

そう、どちらにしてもおかしな要素が多すぎる。クレアやマリアがいくら頭を悩ませても答えは出なかった。
沈黙が広がる中、それを破ったのはソフィアだった。

「あのぉ、残りの一つっていうのは？」

おずおずと手を上げ、クレアに視線を向ける。クレアは両手を組み直し、ソフィアを真っ直ぐに見た。
だが、その視線はソフィアではなく、何処か遠い別の場所へ向けられている。
束の間の沈黙の後、クレアは褐色の瞳を鋭く細めて告げた。

「技術国家グリーテンです」

「いくらこの大陸より文明レベルが高いからと言って、流石に無理なんじゃ……」
「ええ。ですが、否定は出来ません」

真っ先にソフィアが疑問の声をあげる。ソフィアの疑問ももっともだった。そんなことはクレアだって分かっている。ただ、何か、何かがひっかるのだ。

「なんたってずっと鎖国中の未知の国ですものね」
「でも、師団員を送り込んでるんですよね？」
だったら何か情報が、と言いかけてソフィアはその言葉を飲み込んだ。
クレアの纏う雰囲気が明らかに変わったのを敏感に感じ取ったのだ。
「グリーテンへ向かった師団員とは、一年以上連絡が取れていません」
ソフィアだけでなく、マリアやフェイトまでもが驚愕に目を見開く。ネルとルージュは視線を伏せた。
「必ず一ヶ月毎に報告が来ていたの。でも一年と少し前、それが途絶えた。通常なら確認と引継ぎの為に人員を送り込むんだけど……」
「アーリグリフとの戦況の悪化で、それが出来なかった」
ルージュとネルが詳しい説明を付け加える。次に疑問を持ったのはフェイトだった。
「なら、なぜアーリグリフとの戦争が終わったのに人を送らないんだい？」
「入れなかったのよ」
「え？」
「警備が以前よりずっと厳重になっていた。以前使っていた潜入経路全てが閉鎖されていたの」
クレアが再び手を組み直す。

「だからいま、グリーテンの情報は一切入っていないわ。たまに噂で聞くことはあっても、確かな情報じゃない」
「その噂って言うのは？」
「そうね。強いて挙げるものがあるとするなら……アルゼムの鷲卿が亡くなったことくらいかしら」
「アルゼムの鷲卿？」

聞きなれない響きにフェイトは首を傾げた。
次の瞬間、ソフィアの咳払いが聞こえたかと思うと、マリアの肘がフェイトの脇腹に刺さる。

「いっ！」
「あなたね。いくら自分の管轄じゃないからってそれくらい覚えときなさいよ」
「え、そ、そんなに有名人物なのかい？」
「グリーテンを統べるドールマスターの一人だと言われている人物さ」

呆れ顔から戻ったネルが助け舟を出す。ソフィアが目線でフェイトのバカ、と言ってる。フェイトはばつが悪そうに顔を逸らすと、クレアがくすりと笑った。

「笑うなよ」
「あら、勉強不足なあなたが悪いんじゃない？」
「そうそう。フェイトってば軍や治安の調整ばかりで政治はからっきしなんだから」

クレアとルージュのダブル攻撃を受けてはフェイトが適うはずもない。ぐうの音も出ないフェイトに笑いが起こった。

張り詰めていた空気が幾分か和らぐ。

「そ、そんなことより話を」

フェイトが照れ隠しに話を進めようと資料を持ち直した、そんな矢先だった。

「申し上げます！」

会議室の扉が勢いよく開かれ、見知った男性が姿を現した。

「ヴァン、ノックもなしに何事ですか！」

クレアが立ち上がり、部下を嗜める。

「申し訳ありません。ですが、即刻お耳にいれたいことが……」

「この場で構いません。言いなさい」

ヴァンは乱れた息を整えるために一息つき、意を決したようにクレアを見据えた。

「クレセント・ラ・シャロム他数名――グリーテン派遣部隊が帰国しました」

誰かの手から零れ落ちた資料が床に落ち、赤い絨毯の上に散らばった。

1－05　暴走

寒空の下を飛ぶ一匹のエアードラゴンの背に腰を下ろしていたアルベルは、肌を切るような風の冷たさに小さく身震いをした。

「アルベルの旦那、大丈夫ですかい？」

「ふん、これくらいどうってことねぇよ」

強がってはいるが、唇を紫にして震えいては説得力の欠片も無い。疾風の兵士は苦笑して、話題を切り替えた。

「ところでなんだって急にシーハーツに？」

「野暮用だ」

「コレですか？」

「殺すぞ、阿呆が」

兵士は小指を立ててニヤニヤと笑うが、アルベルが刀の切っ先を突きつけてやるとすぐに前に向き直った。

カルサアを抜け、アリアスに入った頃から徐々に気温は上がり、ペターニ上空を飛んだ頃には既に雪は止んでいた。こうなると居心地が悪いのは鎧をしっかりと着込んでいる疾風兵士のようで、片手で起用に手綱を操り、兜を脱ぐ。

兜の下から出てきた顔は、喋り方や雰囲気からは想像もつかないほど若い男。アルベルより若干下、といったところだろうか。いかにも人当たりが良さそうな青年だった。

その顔には見覚えがあったアルベルは、眉根を寄せつつ青年に声をかける。

「おまえは、〈疾風〉の？」

「ああ、はい。不肖の輩ながら団長やらせてもらってますデュラン・フォルモントです。もっとも、アルベルの旦那が竜と契約するまでの間の繋ぎみたいなもんですがね」
「ってことはこの男爵級の竜は……」
「お察しの通りでさ。こんな俺ですからね、早いとこ疾風団長なんて降りたいんですよ」

デュランは笑った。年齢に合わない年よりじみた笑い方だった。色々な笑い方をする、とアルベルは思った。しかしそのどれもが、本当の笑いではない気がした。

「安心しろよ。このヤマが片付いたらとっとと契約済ませててめぇを引きずりおろしてやる」
「そう願いたいものです」

今度こそ、二人の間に完全な沈黙が広がった。

※

「クレセント・ラ・シャロム、只今帰還致しました」

小柄な女性は流れるような動作で女王の前に跪くと、彼女のシルクのようにきめ細かな白銀の髪がさらりと肩から滑り落ちた。

女性というには幼い顔立ちである、クレセント・ラ・シャロムは一年以上帰らなかった部隊を仕切っていた人物で、〈風〉の二級構成員であった。

およそ一年ぶりの帰国だというのに、クレセントの態度は落ち着いている。まるで普段通りの報告をするような彼女の姿勢は、どこ

か異質だった。

「クレセント、無事でなによりです」
「勿体無いお言葉です、女王陛下」

女王の言葉には優しさが溢れていた。クレセントの言葉には一切の感情がなかった。

クレセントの人らしくない冷めた声に、同じくその場に跪くフェイトは息を呑む。横目でクレア、ネル、ルージュを見るが、彼女らの表情は変わらない。むしろ、安堵しているような顔だった。

「して、クレセント」

ラッセルが話を切り出す。

「早々で悪いが聞きたいことが山ほど……」
「クレセントぉっ！！」

が、壁を打ち破らんほどの声が聞こえたかと思うと、次の瞬間にはクレセントの身体は忽然と消えていた。

ワンテンポ遅れて聞こえる、鈍い音。フェイトの隣から聞こえる溜息の合唱。

フェイトがぎこちない動作で頭だけを音のほうへ向けると、頭から血を垂れ流すクレセントと、

「クレセント、大丈夫!?　怪我してない!?　心配したんだから！」

虚空師団〈風〉師団長、シレーネ・リシャスが崩壊した柱の下にいた。柱の下から顔を出して大声を上げているのを見ると、どうや

ら無事のようだ。
クレセントも下半身を柱の下敷きにされながらも、冷静にシレーネを見ている。

「シレーネったら」
「まったく」
「あほね」

クレアが額に手を当て、ネル、ルージュが呆れたように腕を組んだ。

「た、大変だ。クレセントさんを助けないと」
「大丈夫よ、フェイト」
「心配するだけ無駄だね」
「っていうか、シレーネはいいんだ」

フェイトが柱をどかそうと足を進めようとしたとき、クレアに肩を掴まれた。ルージュの呟きは無視される。

「大丈夫ってあんなの女性の手でどうにか出来る重さじゃ――」
「問題ないわよ、あれくらい」

ルージュが顎でシレーネを指す。フェイトは戸惑いながらもそれに従う。次の瞬間、フェイトは目を疑った。
シレーネの身体から旋風が巻き起こる。小さな小さな風の渦が徐々に大きさを増していった。
風の刃が柱を細かく切り刻む。

「風陣？　でも大きさが……」

ネルのそれとは比べ物にならないくらいの風の渦。もはやそれは風の防護壁としてあるべき大きさを超えていた。
フェイトが呆然とその様子を眺めていると、横に居たネルの息を呑む音が聞こえた。

「あ、あの馬鹿！　クレア！」
「ええ。フェイトは自分でなんとかしてね」
「え、え？」

ネルがクレアの名前を呼ぶと、さも分かってる、と言わんばかりにクレアは応える。
狼狽するフェイトを残し、クレアは女王の下へ駆け出した。素早く詠唱を行うと、手を天に向けて翳す。

「打ち消しなさい――プロテクション！」

半径十メートル以上はある光の防護壁が女王とラッセルを覆う。
ルージュとネルも自らの周りに防護壁を張った。
そして、風の渦が謁見の間を飲み込んだ。

漸く風が収まった頃、シレーネは閉じていた目を開けた。そして未だに頭から血を流すクレセントをぎゅっと抱きしめる。

「クレセント無事！？　どっか痛くない？」
「あ、あの、シレーネ様……周りを……」
「何々――あ」

シレーネはクレセントに言われるがまま振り向き、そのままの姿勢で固まる。

綺麗に飾られた調度品や絨毯は跡形もなく消え去り、謁見の間は清々しいまでにこざっぱりとした空間と化していた。
シレーネは顔に手を当てて天を仰ぐ。

「あちゃー、またやっちゃった……」
「あちゃー、じゃないわよ、このバカ！　殺す気!?」
「これで何度目だい？」
「今回は減俸じゃ済まされないかもしれないわね」

防護壁を解いたルージュ、ネル、クレアがシレーネとクレセントを取り囲む。三人の顔を見回し、シレーネはへらっと笑った。

「まぁまぁ。みんな無事だったんだから……結果オーライ？」

ね、とシレーネがウインクをした時、

「そんなわけがなかろうがっ！」

ラッセルの叫びが響き渡った。

「こんの大馬鹿者が！　陛下にもしものことがあったらどうしてくれる!?」
「んもー、ラッセル様ってば声大きい。クレセントの耳壊れたらどうしてくれるのよー」
「やかましい！　クレセント、その馬鹿から離れろ！　おまえにまでアホが伝染る!!」
「は!?　もしかしてラッセル様ってクレセント狙い!?　止めてよ、この子は私のです！　絶対にあげませんからね！」
「おまえは何を言っているのだ!?」

「……ったく何やってるんだか」
「フェイト、大丈夫？」
シレーネとラッセルの意味の無いやりとりが繰り返される中、多量の切り傷を作って床につっぷくしてるフェイトをクレアが抱き起こした。
「あ、いたた……」
クレアが回復術を唱えると、淡い銀色の光がフェイトを包み込み、傷が瞬く間に消えていく。
フェイトはゆっくりと身体を起こした。
「ありがとう、クレア」
「そういえば、あなたはプロテクション使えなかったわね」
「ああ。にしてもネルとルージュも助けてくれたっていいのに……」
フェイトが不貞腐れたようにネルとルージュを見ると、二人は顔の前で手を合わせた。
「す、すまないね」
「ほら、私ｔａｔｉってばクレアと違ってせいぜい一人分なのよねぇ」
あはは、とルージュの口から乾いた笑いが漏れる。
尚もフェイトがルージュとネルを見ていると、後ろから頭をはたかれた。
「いてっ」

「はいはい。そこまで。まずはあのお馬鹿さんを止めるわよ」

クレアは手をパンパンと叩く。ネルがクレアに歩み寄り、指でシレーネを指す。

「止めるったってクレア。あいつ止めるのは大変だよ？　頼みの綱の陛下は止める気なさそうだし」

ネルの言葉通り、女王は楽しそうに口元を綻ばせてシレーネとラッセルを見ていた。なるほど、止める気はなさそうだ、とフェイトは思った。

有能な女王なのだが、どうも甘い、というか大らか過ぎるところが多々あった。先程まで自分が怪我しかねない状況だったというのに、その顔には怒りも焦りも無い。あるのは穏やかな微笑だけだった。

「そうよ。前あの人止めようとしてヴァンがズタボロになったの忘れた？」

「そんなことあったのかい？」

「そ。あれ以来ヴァンってばシレーネに近づこうとしないのよね」

フェイトはチラリとシレーネを見る。シレーネは決して小柄ではないものの、どこにヴァンをズタボロにする力があるのか分からないほど細身の女性なのだ。

人は見かけによらない。フェイトはその言葉を改めて思い知った。

「で、どうするんだい？」

ネルが再度クレアに尋ねる。クレアはにっこりと笑って言った。

「平気よ。あの人が素直だったら、穏便に済ませるわ」

クレアがくるりと身を返してシレーネの元に歩いていく。クレアの笑顔を目の前にしたネル、フェイト、ルージュは恐怖で身体を硬直させた。そして、シレーネに深く同情したのだった。

「もぉ、やだやだ。いい、クレセント。もうラッセル様に近づいちゃダメだからね。報告は部下にやらせなさい、部下に」
「そういうわけには……」
「むしろおまえがくるな！　毎度毎度支離滅裂な報告ばかりしおって！」
「ちょっと、聞き捨てならないんだけど　私の報告書のどこに不満が――」
「シレーネ」

舌を噛まないのが奇跡と言えるほどの速さで喋り続けていたシレーネの言葉がピタリと止んだ。シレーネが顔だけをクレアに向ける。もしこの動作に音をつけるとしたらキリキリなどと、まるで機械仕掛けの人形のような音がしていることだろう。

「く、クレア……もしかしなくても、怒ってる？」
「ご明察。分かったのなら大人しくして貰えるかしら？」
「ご、ごめんね。クレセントが帰ってきたっていうもんだからつい……」

意外と素直に折れた。それはあれほどの殺気を向けられればそうなるかもしれないが、本来の性格も大人しいほうなのだろう。
しゅんと項垂れて、シレーネは女王に頭を下げた。

「申し訳ありません、陛下。如何様にも処罰して頂いて構いません」

「いいのですよ。久方ぶりに愉快な時間でした」
「陛下」
笑って許そうとする寛大過ぎな女王に、ラッセルは厳しく言い立てる。
「甘やかしてはいいことはありませぬぞ。たかだか柱をどけるのにあんな……」
「クレセントがそれだけ大切ということです。喜ばしいことではありませんか」
「全く、陛下は甘すぎますぞ」
そう言ったきり、ラッセルは黙った。
シレーネは女王に笑顔を見せて、クレセントを振り返る。
「さぁ、クレセント。陛下に連絡、を……」
シレーネの声が尻すぼみになる。その目はクレセントの頭から流れる血を捕らえていた。
音速を上回る速度でクレセントに駆け寄ったシレーネは、細い両肩をぐっと掴む。
「ちょ、どーしたのその血!?」
――今更なにを。
その場に居る誰もが心の中で突っ込んだ。
「誰!?　誰にやられたの!?　まさかフェイト君!?」
「え、僕!?」

唐突に名前を出され、フェイトの声は思わず裏返った。
シレーネは鬼のような形相でフェイトの胸倉を掴み挙げる。

「私のクレセント傷物にするなんていい度胸じゃ――」
「懲りてなかったようね、シレーネ」

クレアの怒気を含んだ声と共に耳を塞ぎたくなるような音が響き、シレーネの身体が崩れ落ちた。
開放されたフェイトはその場にしりもちをつき、顔を顰める。そして、目の前に白目をむいて転がるシレーネを見て、また顔を引きつらせるのだった。

「よし、これでいいわね。あとは何処か怪我したとこない？」

そんなシレーネとフェイトをまるでないもののように、クレアはクレセントに医療施術を施していた。

「大丈夫です。有難う御座いました」
「いいのよ。それで報告、お願いできるかしら？」
「はい」

クレセントは変わらない瞳で女王の前に立ち、喋り始めた。
――閉ざされた国での出来事を。

106　風と孤独

空は鈍色一色で、真っ白な雪が静かに石畳の上へと降り注いでいる。小さな、どこにでもあるような一軒屋の窓から顔を出したクレセントは、舞い散る雪に負けないほど白い手を窓から突き出し、空へ向けた。

手のひらに舞い降りた雪は刹那の冷たさをクレセントに残し、跡形もなく溶け、指の隙間を通って地面に飲み込まれた。

赤くなった手のひらから伝わる、じん、という痺れに、クレセントは自嘲めいた笑みを浮かべる。こんなにも心の中は冷めているというのに、身体は人並みの暖かさを持っている。暖かさなど何も救ってはくれないのに、と口の中で呟き、クレセントは瞳を閉じた。

誰も、何も救ってなどくれない。生まれた時から既に……。

「クレセント様、いらっしゃいますか？」

扉を規則正しいリズムで鳴らす音に、クレセントは深い思考の底から拾い上げられるように覚醒する。窓を閉めて自らのデスクに腰掛け、凛とした声で言う。

「どうぞ」

「失礼します」

顔を出したのはグリーテン風の服装に身を包んだ中年の男だった。手には報告書だろうか、数枚の紙を持っている。

「これが今週の首都ヴォルケーフの調査書です。これと言った変化はありません。ですが、所々でゲート大陸に未知なる文明がもたらされたとの噂が広まっています。あくまで一般人の会話の中でです

が」
「そうですか。ご苦労様でした。――ああ、それと」
「既に二名の者が報告書を持ってシーハーツへ出発しました」
先んじてそう告げた男にクレセントは頷いて、彼の手から報告書を受け取る。
「今頃は城壁を抜けているかと」
「無事に辿りついてくれるといいのですが」
「平気ですよ。今までだって何事も無かったんですから」
クレセントもそう思いたかった。しかし、今朝方から絶え間なく襲ってくる胸騒ぎはそんな余裕を与えてはくれない。
かと言って、クレセントには今更どうすることも出来ないし、ただの感で定期報告をさせないわけにはいかない。両肩に重く圧し掛かるような不安を振り払うかのように頭を振って、椅子から立ち上がった。
「では、わたしたちはそろそろ食事にしましょう。すぐに作ってしまいますから、皆さんはどうぞ休んでください」
「そんなクレセント様自らなさらずとも……我々のほうで準備しますので、どうぞお休み下さい」
「いえ、かまいません。料理は嫌いではないですし、丁度手を動かしたかったので」
そう言うとクレセントは男の横を通り抜けて部屋を出ようとしたが、
「クレセント様！」

叫び声にも似た声が耳に入り、足を止めた。
廊下の端から騒がしい足音が鳴り、二人の兵士が姿を現す。

「どうしたのですか？」
「おまえたちはシーハーツに向かっているはずじゃ」

クレセントと男が訝しげに二人の男を見る。
二人の男は不安と焦りを含んだ顔をクレセントに向けた。

「シーハーツに繋がる脱出経路が全て封鎖されていました！」
「な、何だと！？」

驚愕する副官の横で、クレセントは整った眉を潜めた。しかし、まだ言葉を発することはせず、報告の続きを黙って促す。

「国内の下水道は全て機工兵に見張られ、その他の経路は破壊、もしくは修復されていました」
「バカな……我々の存在に気付いたというのか」
「いえ、元より感づかれてはいたのでしょう。しかし、このような行動に出てくるとは……」

クレセントは握った手を口元へ持っていく。

「考えていても仕方ありませんね。街の様子を見てきます。それまであなたたちはここで待機していて下さい」
「そんな！　危険です！」
「そうです。偵察なら我等が参ります」

先程戻ってきた二人組みの男が、外套を羽織い出て行こうとするクレセントの前に立ち塞がる。

「ですから、クレセント様はここで――」

待っていて下さい。

その言葉は続かなかった。背後で開く扉の音に、師団員の男は息を呑んで振り返る。

決して通すまいと思っていた。こんな非常事態に上官一人を危険地に飛び込ませるなど言語道断。たとえ誰かが命を落とす結果になろうとも、偵察は自分達の役目のはずだった。

だというのに、彼女は既に扉の前に立ち、今まさに外へ出んとしている。

「いつの間に」

彼女の横に立っていた中年の男さえ、驚愕に目を見開いていた。

クレセント・ラ・シャロムには音が無い。

以前、シーハーツで誰かがそう噂しているのを耳にしたことがあった。足音も、剣を振る音も、呼吸の音も、生きている音も。全ての動作が最小限の音でこなされ、その動きを捕らえられる者はいない。

〈音無しの風〉。その言葉は敬意よりも畏怖の呼び名であった。

「万が一のことがあれば即刻退避。機密書類は持ち運べない場合、全て処分して下さい」

しかし、今この場にクレセントを恐れ、忌む者など誰一人としていない。皆、クレセントを信じ、憧れた者達だった。

クレセントもそれは十分に分かっていた。だからこそ、死なせたくなかった。気付かぬうちに、彼らを危険晒したくないと思っていた。

「わたしなら大丈夫です。逃げるときもわたしのことは気にせず、生き残ることだけを考えて下さい。ここに来たときに約束したでしょう。必ず全員で帰ると」
「クレセント様」
「無事お帰りするのを待っています」
「アペリスの加護があらんことを」

部下の言葉を小さな背中に受けながら、クレセントは夜のヴォルケーフへと溶け込んだ。

夜の街とは言っても、明かりはそこかしこから発せられ、大通りはまるで昼間のような明るさだった。
シーハーツで言う営力が発達しているらしく、夜になれば松明の光が灯るだけのシーハーツでは考えられない光景だ。

（特別目立った動きは見られない、か）

クレセントはごく普通の一般人となんら変わりないように振舞いながら、しかしその翡翠色の双眸は辺りの異変を一片たりとも見逃すまいと鋭く細められている。
確かに脱出経路は全て封鎖されていた。やはりスパイが国内に居ることは知られていたのだろう。しかしそんなことは承知の上であった。要は捕まらなければいいわけなのだから。
その点では、少なくとも機工兵が出動されることも見張りの兵士が増えていないことから、心配はないようだった。

（それにしても、どうしていまになって……）

これだけ完璧に封鎖されているとなると、大分前から侵入、脱出経路は全て露見していたはずだ。クレセントも全く感付かれていないとは思っていなかったが、それら全てが押さえられているとはさすがに思ってはいなかった。

しかし、今考えるべきはシーハーツの潜伏を完全に見破った諜報力ではなく、見破った上で放置していたという事実。それはおそらく、彼らグリーテンにとってシーハーツが取るに足らない存在であるという自信の現われだろう。

だが、取るに足らない存在を今になって国外から出せない事態が起きた。もしくは、何者も国内に入れたくない、か。

（どちらにせよ、何か起きているのは確かなようですね）

物言わぬ城塞都市。何かが動き始めていた。

※

「――そのまま一年間、わたしたちはグリーテンで過ごしました」

クレセントはそう言って一度言葉を切った。ゆっくりと息を吐き、話を続ける。

「そして、半月前。突然地下水路の警備が解かれたのです。罠である可能性も否定はできませんでした。しかし、何時また封鎖されてしまうか分からない状況です。この好機を逃す手はないと、脱出に踏み切りました」

「クレセント、危ないことしちゃダメって言ったのにぃ」

何時の間に起き上がってきたのか、シレーネがクレセントにピッタリとくっついている。

「シレーネ、そのままでいいから黙っときな」

また何か言い出す前にネルが釘を指した。

そのままでいい、と言われ、シレーネは満面の笑みを浮かべるが、クレセントは微かに眉を下げてネルを見た。

その視線を感じ取ったネルが、手を挙げて「すまないね」と言うと、クレセントは仕方ないといった感じに瞳を伏せる。

「それで、あなたたちが無事に帰ってきたと言う事は」

クレアが先を促すようにクレセントに問いかける。クレセントは頷き、再び口を開いた。

「はい。追手も一切なく、シーハーツに着くまで何事もなく進んだのですが……」

クレセントは口篭った。瞳を強く閉じ、必死に何かに耐えているようだった。

やがて、クレセントは自分の腕を強く握りしめ、瞳を開いた。

「ですが、ペターニ東門に着いた時、一人の兵士が突然倒れ――命を落としました」

その場に居る者全員が息を飲んだ。

「何があったのか、どんな攻撃を受けたのか、まるで検討もつきま

せん。ただ……」
「ただ？」
「兵士が倒れる前……光のようなものが、横を」
クレセントの言葉は最後まで発せられなかった。後ろに立っていたフェイトが急にクレセントの肩を掴んだのである。
驚いたような目を見開くクレセントに、フェイトはずい、と詰め寄った。
「光の矢……それは本当なのか！？」
「え……は、はい」
あまりの剣幕にクレセントはたじろぐ。
その更に後ろではクレア、ネル、ルージュが険しい表情を浮かべていた。
「やっぱり、グリーテンの仕業なのかしら」
「断言は出来ない。でも」
「可能性は高くなったわね」
「それまでだ」
これ以上は無用だと判断したラッセルが口を開く。
「クレセントはグリーテンの調査書と共にこの件に関しての報告書を後ほど持って来い。クレア、ネル、ルージュ、フェイトは引き続き調査を続行しろ」
聖王国シーハーツに仕える兵士は揃って胸に手を当て、謁見の間を後にした。

「私は？」
そんな中、一人なんの指示も出されずに置いて行かれたシレーネは慌てて皆を追いかけたのだった。

「あの」
「どうしたの？　クレセント」

謁見の間を出て、二階の階段付近の廊下へと差し掛かった時、不意にクレセントが口を開いた。全員が足を止め、代表してクレアが問う。
クレセントは控えめにフェイトの方を見た。

「この方は……？」
「あ、そっか。フェイト君が来たのって丁度クレセントがグリーテンに行った後だから、知らないのも無理ないか」

シレーネの言い方にクレセントは首を傾げる。

「来た？」
「そう。この子はシーハーツの人間じゃないのよ」
「シレーネさん」

フェイトが慌てたように口を挟む。この調子ではフェイトが異世界の人間だということまで喋ってしまいそうな勢いである。余計な混乱や誤解を招かないためにも、クレセントにはうまく誤魔化しておきたかった。
シレーネはそんなフェイトの意図を汲み取って、大丈夫、と片目

を瞑った。

「実はフェイト君はグリーテンの技術者でね。あ、もしかしたらクレセント知ってるかな」

「いえ」

「そっかそっか。それで、彼とそのお仲間さんが新開発の乗り物でお父さん助ける為に敵の所へ行く途中で故障してアーリグリフに堕ちてネルに拉致されちゃってクレアが口説いて――」

「すみません。通訳お願いします」

クレセントは変わらぬ表情でシレーネから視線を外す。

「私が説明するよ」

あらぬ疑いをかけられたネルが溜息混じりに一歩前に出た。

「なるほど。そうだったのですか」

一通りの説明を受け、クレセントは漸く納得したようだった。

「でも、驚きました」

「え、何がだい？」

全く驚いていないような顔で、クレセントは言う。

「空を飛ぶ機械など、耳にした事が無かったものですから」

「あ、あー……それは、その……」

フェイトの額から嫌な汗が吹き出る。
グリーテンという国をフェイトよりもよく知っているであろうクレセントに対し、一体どう誤魔化そうか悩んでいると、助け舟は意外にもクレセントから来た。

「機密だったのでしょうか」
「そ、そう！　グリーテン国内でも技術者の間だけの機密でね」
「そうですか。申し遅れました。わたしはクレセント・ラ・シャロム。虚空師団〈風〉の一員で、主にグリーテン監査の役目をおっています」

クレセントが思い出したように言って、手を差し出す。フェイトは微笑んでその手を握った。

「僕はフェイト、フェイト・ラインゴッド。よろしくお願いします、クレセントさん」
「クレセントでいいですよ」
「無理無理、クレセント。フェイトってばバカ丁寧だからいきなり呼び捨てなんて――」
「分かった。よろしく、クレセント」
「早くないっ!?」

ルージュが間髪居れずに突っ込む。

「なんでよ！　私の時は半年間呼んでくれなかったじゃない！」
「い、いや。だってルージュのほうがかなり年上だったから、気が引けてたっていうか……」
「かなりって四つ！　四つ！　四歳だからぁ！　――ってフェイト、あんた」

ぎゃんぎゃん喚いてたルージュがピタリと止まる。その後ろでクレアとネルとシレーネも苦笑いを浮かべ、フェイトを見ていた。
フェイトはわけが分からずクレセントに視線を向けると、同じように眉を下げていた。

「……僕、なんかマズイこと言ったかい？」
「いえ、そんなことはないのですが……」
「フェイト」

言っていいものか、と口篭るクレセントの肩にクレアが手を置きフェイトを見る。口に手を当て、必死に笑いを堪えていた。
一人置いてけぼりにされたフェイトは面白くなく、唇をへの字に曲げる。

「なんだよ。皆して笑ってさ」
「クレセントは私たちと同い年よ」
「ああ、そうです――かあああああ！？」

絶叫が長い廊下に木霊した。
フェイトはクレセントとクレアの顔を交互に見比べ、口を金魚のように開閉させる。

「お、同い年？」
「はい」
「二十四？」
「はい」
「年上？」
「フェイトさんのお年にもよりますが」
「二十」
「なら、そうなります」

驚くほど短い会話を終えたフェイトは、壁に手をついて空を仰いだ。

そして、再びクレセントをまじまじと見る。

確かにそう考えて見れば、見えなくも無い。整った顔立ちや落ち着いた雰囲気は大人っぽいと言える。が、やはり、どんなに多く見積もっても十七、十八。いや、やはり十四、五がいいところだ。

フェイトがそのままクレセントを正面から凝視していると、クレセントは居心地悪そうに顔を逸らした。

「こら、フェイト。女の子をまじまじと見るのはマナー違反よ」

クレセントに変わってクレアがフェイトを叱責する。シレーネの視線も痛いのでフェイトは頭を掻いて視線を外した。

「ごめん。あまりに以外だったから。あ、クレセントさん」

「いいですよ。そんな急に畏まらなくても」

「う、うん。じゃあ僕もフェイトでいいから」

フェイトがそう言うと、クレセントは申し訳なさそうに首を振った。

「すみません。あまり呼び捨てというものに慣れていなくて」

「そうなのかい？」

「ああ。この子は部下にもこの口調だよ」

ネルがクレセントの頭をぽんぽんと撫でる。その様子は同い年の同僚というよりも、むしろ年の離れた姉妹のように見えてしまい、フェイトは思わず笑みを零さずにはいられなかった。

※

「クレセント」

その後、場所を会議室に移して、クレセントに国内の問題について話していると、紫の髪の男性と、青空のような空色の髪の青年が姿を現した。

名前を呼ばれたクレセントは顔を上げ、その人物に視線を向ける。紫髪の男性は、フェイト達には目もくれずに早足でクレセントに近寄る。そして、ほっと胸を撫で下ろすと、息を吐き出しながら顔を綻ばせた。

「怪我は、ないようだな」
「はい。心配をおかけしてすみません、ネイビス様」
「いや、無事ならいいんだ」

ネイビスと呼ばれた男性はさっと顔を逸らしてそう言った。横に立っていた青年もクレセントに微笑みかける。

「ご無事で何よりです、クレセントさん。心配しましたよ」
「ありがとうございます」

クレセントは淡々とした口調だったが、二人は別段気にする様子もなく、笑顔で対応している。むしろネイビスに到っては顔が赤い。つまりは、そういうことだろう。

フェイトはこの二人と直接話したことはない。だが、ハッキリと見覚えがあった。城内では勿論のこと、確か叙任式のときも。

「もしかして、〈土〉と〈水〉の？」
「ん、ああ。そういえば、話すのは初めてか。俺は連鎖師団〈土〉の師団長、ネイビス・ティモールだ。ネイビスで構わない。で、こっちが」
「初めまして。僕は幽静師団〈水〉の師団長、アゼル・クロイツです。僕もアゼルと呼んで下さい」

二人とも友好的な笑顔だった。ネイビスのほうは若干冷めたイメージを受けるが、これまでに培ってきたフェイトの選択眼は彼らの善良さを感じ取った。

「よろしく、ネイビス、アゼル。僕はフェイト・ラインゴッド」

型通りの自己紹介を終えると、ネイビスがフェイトのことをジロジロと見る。

そして、ニヤッとした笑みを浮かべ、フェイトの肩に腕を回した。

「おまえ、あの堅物のラーズバードを落としたんだってな。なかなかやるねぇ」
「堅物？」
「ちょっと、ネイビス！」

フェイトが片眉を上げ、クレアが顔を赤くして叫んだ。ネイビスは、おまえだって知ってんだろ、と更に顔を歪めて笑う。

「コイツは昔っから男っ気がなっくってな。いままで彼氏の一人もいなかったんだぜ。ま、ただの鈍感だな。全く、鈍いんだよなぁ、うちの女どもは」
「それで何人の男性が涙を飲んだか分かりませんね」

手を顔の前でひらひらと振りながら、ネイビスはくつくつと笑う。
アゼルもクスリと笑い、クレアに視線を向けた。クレアはバツが悪そうに顔を逸らして、覚えてなさいよ、と小さく呟いた。

「ま、一人例外もいるけどな。たいしてモテないくせに人一倍敏感な奴が」

ネイビスがルージュに視線を向けた。
ルージュはニコリと口だけで笑って、ネイビスの頭を鷲掴みにする。ミシミシと、嫌な音が鳴り、ネイビスの顔から血の気が引いた。

「それ、誰のことよ」
「お、おまえじゃないことは確かだ」
「そ、ならいいのよ」

ルージュは満足そうに頷いて手を離した。
頭を抑えて蹲るネイビスに、アゼルが、自業自得です、と呆れたように肩を竦める。

「それで、ネイビス君たちは何か用だっだの？」
「あ、ああ。そうだった」

シレーネが声をかけると、ネイビスは思い出したように立ち上がり、クレセントに向き直った。

「おまえも長期任務で疲れただろう。そんな疲れも吹き飛ぶようなうまい料理を出す店を見つけたんだ。きっと気に入るはずだ」

ネイビスは嬉々とした表情でクレセントの手を引き、そのまま会議室を出て行こうとする。

だが、

「すみません」

その手は、無造作に振りほどかれた。

呆然と立ち尽くすネイビスから目を逸らし、クレセントは胸元から淡く輝くペンダントを取り出して、ぎゅっと握った。

「わたしには、行かなければならない所がありますから」

「それ……例の兵士の遺品か？」

ネイビスがハッとした目でクレセントを見る。

クレセントは何も応えなかった。ただ黙って、ペンダントを握っている。

「それはおまえだけが背負うものじゃない」

「いえ、わたしの責任です。失礼ですが、ネイビス様にこそ、これは関係のないことです」

「クレセント！　おまえまたそうやって！」

「では、失礼します」

そう短く言うと、ネイビスの言葉を無視して、クレセントは会議室から姿を消した。

途端に静まり返る会議室。何を言えばいいのかわからず、ただクレセントの出て行った扉を見据えていたフェイトの耳に、鈍い音が響く。

「ネイビス」

振り返れば、絨毯に視線を落として壁を殴るネイビスの姿。血の滲んだ拳を強く握り、唇を噛み締めたネイビスは、喉の奥から押し

出したような低い声で言った。

「くそっ……あのバカヤロウが」

吐き捨てられたような呟きは、拳から流れる血と共に、床に広がる赤い絨毯に吸い込まれていった。

１－０７　目覚めた感情

窓一つない密閉された室内を照らす唯一の明かりは、机上に置かれた銀燭から零れる微かな光。そのような薄暗い空間の中に椅子に腰をかけた男と、その前に立つ男の影がぼんやりと浮かび上がる。

「そうか。万事順調のようだな」

落ち着いた男の声。その声は僅かながら、しかし確かな喜びの感情を見せていた。

「はい。我々は次の行動に移ります。“あれ”を移動させる手段はいかに？」

こちらは若い男の声。先の男と違い、何の感情もこもってない声だ。

「抜かりはない。だが、一つ変更点がある。例の件は、こちらで処分することにした」

瞬間、若い男の顔に驚愕の色が浮かび、すぐに逆上したように男に掴みかかった。

「何故ですか！？　あれは我々がやってこそ意味がある！　他人にやられても意味がない！」

「落ち着け。万が一にも君達が疑われでもしてみろ。その後の計画は全て台無しだ」

「しかし、それではあいつが救われない！」

男の胸倉を掴んだまま、若い男は項垂れる。男は若い男の腕を掴むと、決して乱暴にならない手つきで手を離した。

「救うとは？　彼らへの報復が君たちの望みではあるまい。確かに奴の気は晴れるかもしれんな。しかし、彼らはほんの一端に過ぎないのだぞ」

「それは……」

「それに復讐するだけで終わりなら、君は我々の協力など必要なかったはずだ」

そこで男は言葉を切り、言い聞かせるような口調で、若い男の肩に手をかける。

「改革、それこそが君たちの望みだろう？」

「はい」

「こんな所でいらぬ疑いをかけられでもしたら、その望みは叶わなくなるかもしれぬのだぞ」

「ですが――」

「我々と君たちとの契約を忘れたわけではないな？」

「……」

「君たちが約束の品さえ渡してくれるのなら、私も約束は守ろう。彼女の引渡しと例のもの」

若い男の表情が動く。

「……分かりました。ではその間我々は何をすれば？」

「待機だ。くれぐれも無茶はするな。君は必要な人材だ」

若い男は無言で男に背を向け、扉へ向かうと、そのまま一度も振り返らずに部屋の外へと消えていく。

しっかりと扉が閉められ、足音が遠ざかっていくことを確認した男は本棚へ手を伸ばした。一冊のファイルを手に取り、無造作に開く。男の口元が歪に吊り上げられた。

「そう。君の換えはいない、あの人形と違ってな」

※

その日、聖王国シーハーツは午後から雪が降っていた。ペターニの石畳も、今では真っ白なヴェールに覆われて煌いている。

しかし、そんな神秘的な光景などマリアにとっては何の感慨もない。青い髪に降り積もる雪を払いながら、マリアは忌々しげに空を見上げた。

「突然降り出すなんて聞いてないわよ、全く」

意味のない悪態を吐きながら足を進めていると、綺麗に整えられた花壇へと辿り着く。もう花壇を作った人物はいないというのに、相変わらず綺麗なままだった。

気候が温暖で、雪が降ることなど滅多にないシーハーツではこうして一年中花がそこかしこに咲いている。白い地面から顔を出す色とりどりの花は、見ているだけで心を穏やかな気持ちにさせた。

「ソフィアがよくここに来るのも、分かる気がするわね」

私には全く似合わないけど、と呟いてマリアはその場を去ろうとし、向かいの家から聞こえる叫び声に足を止めた。

静かな雪の日には不似合いな、悲痛な叫び声だった。

マリアはそっと家に近づき、窓から中を覗き込む。
そこに居たのは、まだ年若い女性と白銀の髪を持つ女性。そして、小さな女の子。

「あの子……」

マリアはその白銀の髪の女性に見覚えがあった。そう、ほんの数時間前のことだ。シランド城ですれ違ったのを覚えている。
もっとよく顔を見ようと、マリアが窓に近づくと、年若い女性――おそらく少女の母親――の声がはっきりと耳に届いた。

「どうして貴女たちが生きて、あの人だけが帰ってこないのよ！？」

誹謗中傷の嵐だった。
第三者であるマリアですら耳を塞ぎたくなるような言葉を浴びせられているというのに、白銀の髪の女性は怯みもせず立っていた。まるで女性の言葉に対し何も感じていないように。まるで、彼女には感情がないのではないのかと疑うほどに、女性は眉一つ動かすことなくそこにいた。
そんな彼女の態度が女性の怒りに油を注いだのだろう。罵倒はさらに苛烈に、理不尽に続いていく。

「部下を見殺しにしてよく平気ね！？　あの人の命なんてどうでもよかったってこと！？　私は一年以上もあの人のことを待っていたのよっ！」

白銀の髪の女性の表情が微かに動き、何か言いかけて、口を噤んだ。
マリアはここで漸く理解した。白銀の髪の女性の正体。

（あの子が、クレセント・ラ・シャロム。グリーテン潜入部隊の指揮をとっていたのが、こんな子なんてね）

マリアは髪をかき上げた。

（――それに、シャロム家）

ゆっくりと記憶を掘り返していく。

シャロム家。ラッセルと共に政治の世界に深く関わりだしているマリアは、この名前をよく知っていた。

確か、彼女の母親は造反の疑いで要注意人物に指定されてたはずだ。

ペターニの領主でもあるシャロム家は商家の取り纏め役をも務める優秀な家柄で、実績もシーハーツ内では常にトップクラスを誇る大貴族ではあるのだが、一つの問題があった。

シャロム夫人がペターニの商人を抱き込み、裏でなにかを企んでいるとの情報が複数件入っているのだ。その件に関してはマリアが行政に携わるずっと前から証言が取れていることであり、以前から調査を続けていたのだが、現在の時点で決定的な証拠はなく、煮え切らない状況が続いていた。

そういえば、シャロムの一人娘はずっと任務で出ているとラッセルが言っていたのを思い出しながら、マリアはふたたびクレセントに視線を向ける。

「返してよ！　あの人を、返しなさいよぉ！」

ついに女性が泣き崩れた。その場にペタリと座り込み、顔を両手で覆う。

クレセントは静かに女性に近づき、淡く光るペンダントを差し出した。

「これを……」

「――っ！」

女性をそれをみるやいなや、クレセントの手から乱暴に奪い取り、両手で固く抱きしめた。

クレセントがそんな女性に深く頭を下げ、しかし何も言わずに家を出ようした時、何かが彼女の服の裾を引っ張った。クレセントが視線を下に向けると、ぬいぐるみを抱いた少女が大きな瞳でクレセントを見上げている。

「ぱぱ、帰ってこないの？　わたしが悪い子だったから、きらわれちゃったの？」

「……っ」

クレセントの翡翠色の瞳が、初めて大きく揺れた。無感情だった瞳が僅かな生気を宿し、少女を見る。

床に膝をつき、クレセントは少女を強く抱きしめた。突然のことに少女は目を白黒させている。クレセントは優しく少女の髪を撫で、瞳を閉じた。

瞼の裏に映るのは、幸せそうな笑顔でペンダントを握っていた、男の顔。

――可愛い娘でして、明日で四歳になるんです

照れ臭そうに、でも本当に幸せそうに、男は言ったのだ。

「違う。あなたは悪くない。お父さんはあなたの事を、本当に……

大切に想ってた」

クレセントは想う。あの時の男の気持ちを。

「じゃあ、なんで帰ってきてくれないの？　今日ね、わたしの誕生日なの。前の前の誕生日は、これをくれたんだよ」

少女は手に持っている兎のぬいぐるみをぎゅっと抱きしめた。

――去年は祝ってやれなかったですから、今年は盛大に祝ってやらないと

まる鋭利な刃物で胸を抉られたかのような衝撃がクレセントを襲う。無意識のうちに服の上から胸を強く握るが、痛みが鎮まることはない。

「お姉ちゃん、泣いてるの？　どこかいたいの？」

少女の小さな手がクレセントの頭を撫でた時、クレセントの瞳から大粒の涙が零れた。抑えるものが決壊してしまったかのように、クレセントの涙は止まらない。

これが悲しいということだろうか。クレセントは初めて抱く感情に一抹の不安を覚えた。胸が苦しくて、どうにかなってしまいそうなのだ。

しかし、いくら胸を押さえようとも、その痛みと苦しみは引かない。

絶望でも、恐怖でもないこの感情は一体何なのか。答えの出ない自問自答を重ねながら、クレセントはまた涙した。

「ごめん……なさい……」

自らの頬を流れる雫を肌で感じながら、クレセントはひたすらに謝罪の言葉を繰り返した。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

そう、何度も。何度も。胸を襲う確かな痛みを感じるたびに、また一筋流れる涙を感じながら、クレセントは謝罪の言葉を繰り返す。

壊れた人形のように、ひたすらに同じ言葉を吐き出し続けた。

※

「クレセントってどんな子なんだい？」

ネイビスとアゼルが退出し、ルージュとシレーネも私用で席を外した会議室で、フェイトは真向かいの席に腰掛けるネルとクレアにそんな質問をしていた。

その質問にネルとクレアは顔を見合わせ、困ったように笑う。

「どうかしたのかい？」

「申し訳ないんだけど、私たちもあの子に関してはあまりよく知らないのよ」

フェイトは首を傾げた。先ほどの会話のスムーズさから見て、それなりにクレア達と親しい間柄かと思っていたからだ。

ネルが足を組みなおして、言った。

「まぁ、全く知らないってわけじゃないよ。でも、ほんとにちょっとしたことだけさ。それでもいいかい？」

「うん、それは問題ないよ」

フェイトは頷く。

「クレセントはペターニ領主の娘でね。師団に入ったのは十八の時だったかな。代々商家であるシャロム家の娘が軍属に入るっていうんで、一時は結構話題になったんだよ」

「実力も皆の期待を遥かに超えていたわ。特に武器の扱いと発想の転換に関しては、天才よ」

「あの子にかかればこんなペンだって立派な武器になる」

そう言ってネルは机に置いてあった羽ペンを、指でくるくると回した。

「それともう一つ。隠密としての才能も抜きん出ていたのさ」

「あの子ね、軍の中じゃ〈音無しの風〉って呼ばれてるの」

「おとなし？　音が無いってこと？」

フェイトの問いに、ネルとクレアは同時に頷いた。

ネルは手にしていた羽ペンを真上に放り、それをキャッチする。

「そう。音が無い。気配がない。生きている音がしない。あの子に尾行なんかされたら、私でも察知できるか分からないよ」

「ネルが？　嘘だろう？」

ネルは隠密のエキスパートであり、国内でも一、二を争う実力者だと聞いている。そんなネルが察知できないほどの隠密が二級構成員に留まっているわけがない。

「他の能力に何か問題があるのかい？」

「いいえ。指揮、武力、施術。どれをとっても劣るところはないわ。――むしろ、優秀すぎるくらい。本来なら、一級構成員か師団長になっててもおかしくはないでしょうね」
「なら、なんで」
「母親に問題があるんだよ」
ネルは羽ペンを置き、机に頬杖をついた。その顔は不機嫌極まりない。
「シャロム夫人の造反疑惑。あんただって耳にしたことくらいあるだろう？」
「確か……ペターニの商人たちを纏めてなにかやろうとしてるってやつ、だったっけ？」
ネルのあからさまに不機嫌な態度にフェイトは少々戸惑いつつ返す。
クレアは苦笑して、言葉を継いだ。
「その通りよ。そんな疑いのある人物の娘をそう易々と一級構成員、ましてや師団長になんて出来ない。頭の固い貴族さんの考えね」
「なるほど。ネルが不機嫌なわけが分かったよ」
情に厚いネルのことだ。母親に疑いがあるからといって、才能のある娘まで被害を蒙っていることが気に入らないのだろう。
ネルはガタリと椅子から立つと、扉に手をかけた。
「ネル？」
「むしゃくしゃしてきたから、ちょっとファリンたちのところに行って身体を動かしてくるよ」

そう言うと、ネルは苛立たしげに靴を鳴らして出て行った。その後姿を見て、クレアは肩を竦めて笑った。

「可哀想に。疲労で倒れたりしなきゃいいけど」

「ハハ」

機嫌の悪いネルに八つ当たりのように扱き使われるタイネーブとファリン。その状況が容易に想像できてしまい、フェイトは小さく苦笑する。

「そういえば、また話は変わるんだけど」

「なに？」

一先ず話しがひと段落したところで、フェイトは気になっていたもう一つの話題を切り出す。

「クレセントってシレーネさんやネイビスからやけに好かれてるようだけど……」

クレアは突拍子もないフェイトの疑問に、一瞬目を丸くしてから、ああ、と笑った。

「シレーネは私も分からないわ。ただクレセントのことは師団入りする前から知っていたらしいけど」

「へえ。でも、シレーネさんの変わりようには驚いたよ。ちょっと抜けてる大人しい人ってイメージあったから」

「でしょうね。私だって驚いたわよ。任務でクレセントがちょっとでも怪我するとすぐ暴走。その度にラッセル様の雷が落ちてたわ」

そう言って額を抱えるクレアの姿は、その時に怒ったであろう被

害の現状をありありとフェイトに伝えてくれた。
フェイトはその暴走で満身創痍にされたことを思い出し、大きく身震いをする。

「ネイビスに関しては……なんか言うのも馬鹿らしいというか……」
「もしかして、クレセントに勝負しかけて負けちゃって、再戦してるうちに――なんてね」
「……」
「え、本当に？」

クレアが黙り込む。フェイトとしては冗談のつもりだったのだが、どうやら的を射てしまったらしい。
まさか、そんなベタな。
フェイトがそう思って乾いた笑いを浮かべたところで、クレアが溜息混じりに口を開いた。

「ネイビスは単純だから。異例の速さで二級構成員にまでなったクレセントが気になったらしくてね。しつこく頼んで、ようやく一度だけっていう約束でクレセントが了承したのよ。……結果はクレセントの圧勝」

クレアは背もたれに寄りかかり、呆れとも微笑みともつかない、曖昧な表情で続けた。

「その頃、ネイビスは〈闇〉の一級構成員で、腕が立つって評判だった。彼もそれは自覚していて、少し天狗になっていたところがあったのも、まぁ事実ね。そんな彼が師団に入ってたった三年の、それも見た目華奢な子に負けたなんてことがあったら」
「相当悔しかっただろうね」
「そういうこと。でもお陰でネイビスはサボリがちだった訓練も真

面目に取り組むようになったんだけどね」

それでもクレセントには負け続きだけど、とクレアは付け加える。

フェイトはなるほど、と頷いて、今まで手をつけていなかった紅茶を口に含む。クレアが注いでくれたものだ。

少し苦めのそれも、クレアが注いでくれたことを考えると甘く感じ、そんなことを思う自分はもうどうしようもないくらいに彼女に惚れてしまっているのだと、フェイトは苦笑してしまった。

「ところでさ、さっきネイビスが〈闇〉の一級構成員だったって言ってたけど、どうして今は〈土〉にいるんだい？」

何気ないフェイトの言葉にクレアの瞳は大きく見開かれた。ただならぬ雰囲気に、フェイトは手に持っていた紅茶を置く。

カップの中の液体が不安げに揺れ、波紋が広がった。

「ごめん、聞いちゃいけないことだった、かな」

「ううん、フェイトは悪くないわ。でも……ごめんなさい。私の口からは言えない」

「そうか、分かったよ」

「ごめんなさい」

「気にするなよ」

フェイトは身体を伸ばして、申し訳なさそうに項垂れるクレアの頭に手をやり、緩々と撫でる。

クレアは擽ったそうに目を細め、極上の笑顔を見せた。

「不思議ね。こんな些細なことが、幸せでたまらない」

「僕もだよ。君と居るだけで幸せだ」

「ふふ、相変わらずくさい台詞ね」

「そう言うなよ」

フェイトは困ったように笑ってクレアの頭から手を離し、椅子から立ち上がる。

そして、そのまま机を迂回して、優雅に椅子に腰掛けるクレアの前に立った。

「クレアだって満更でもないだろ？」

「ええ、すごく嬉しい」

そう言ってクレアも立ち上がり、少し背伸びをしてフェイトに口付ける。微かに触れるだけのキス。

一瞬ぽかんとしていたフェイトだったが、すぐに照れたような笑みを浮かべ、そっとクレアの唇に自分のそれを重ねた。

たった、それだけ。

それでも、彼らは十分すぎるほどの幸せを感じていた。

ただ傍に居るだけでこんなにも胸が満たされることの幸福。

幸福という言葉は、まさにこの瞬間のためにあるのだろうと、フェイトはそっとクレアを抱き寄せながら目を閉じた。

しんしんと降り積もる雪がシランドを包み込む中、一つになった男女の影は暫く離れることはなかったのだった。

※

両目を赤く腫らして先ほどまでいた家屋から出てきたクレセントは、花壇の傍にあるベンチに腰をかけている青髪の女性を一瞥するが、すぐに視線を逸らして歩き出す。

クレセントが女性の横を通り過ぎた時、女性は視線を真正面に向

けたまま、口を開いた。

「どうしてあなたが謝るの？　この国の隠密は命を捧げる覚悟で任務に臨んでいると聞いたのだけど」

クレセントが足を止め、振り返る。

初対面でぶしつけな質問をされているにも関わらず、嫌な顔一つしない。

「ずっと見ていたのはあなただったんですね」

「ええ、悪いとは思ったけど、好奇心が勝ったわ。それで、どうして謝ったの？」

「ペターニを目前にし、わたしは気を抜いてしまいました。もし、あの時もっと注意を払っていたなら」

「防げていたかもしれない、と？」

クレセントは頷く。

女性は口の端を吊り上げて笑うと、おもむろに立ち上がった。

「構えなさい」

「え？」

クレセントは突然のことに眉を顰めるが、彼女の威圧的な雰囲気に少し身体を強張らせ、前を見据えた。

その瞬間、

「――っ！？」

光の弾丸がクレセント頬を掠める。

クレセントは驚きのあまりその場に座り込み、どくどくと脈打つ

心臓を右手で強く押さえた。
女性が腰から何かを取り出したのは見えていた。だが、そこから光が放たれたと思ったときには、既に生暖かいものが頬を伝っていた。
真っ白な雪の絨毯に、紅い花が咲く。
「あなたは……だれ、ですか？」
クレセントが動揺に満ちた目で女性を見ると、彼女は平然とした顔で小型の金属の塊を仕舞っていた。
ばさりと髪をかき上げ、女性がクレセントに歩み寄る。
「油断してなかったら、避けられた？」
避けるどころか、少しでも身体をズラすだけで精一杯だった。この身長で敵と対等に渡り合うために会得した身のこなしも、なんの役にも立たなかった。
もし、あの時油断していなかったとしても、あの男性は。
「助けられなかった……ということですか」
「そういうことね。だからあなたが気に病むことなんてないんじゃない？」
ぶっきら棒な口調だったが、どことなく優しさを感じる声色だった。女性の表情も、クレセントを責めているようなものではない。
クレセントは不思議で仕方なかった。一体この人物は何をしたいのだろう、と。
人を小馬鹿にした態度をとったかと思えば、今は優しげな雰囲気。こんな人物に合うのは初めてだった。
クレセントが不思議そうに女性を見つめていると、女性は罰が悪

そうに顔を顰める。

「……そういう問題でもないわよね。ごめんなさい」

女性はいまだ座り込んだままのクレセントの前に膝をつくと、傷口へ手を当てた。途端、蒼い紋章が浮かび上がり、傷は跡も残さずに消える。

「本当は当てるつもりじゃなかったんだけど、まさか動くとは思わなかったわ」

「わたしは……余計なことしたのですね」

眉を下げて、クレセントが言う。

女性は気まずそうに頬を掻いて立ち上がり、クレセントに手を差し出した。

「いえ、その、ほ、褒めてるのよ。まさか初見で動かれるなんて思ってなかったから」

「まぐれです」

クレセントはその手を握り、立ち上がる。

「あなたね、人が折角褒めてるんだから素直に嬉しがりなさい……って何よ、その顔」

まるで珍獣でも見るかのような目で見あげてくるクレセントを女性は訝しげな目で見据えた。クレセントは慌てて首を振る。

「いえ、不思議な人だと思って」

「それ、褒めてるの？」

「そのつもりですけど」

控えめにクレセントが言うと、女性は渋々ながら納得したようだった。

「もういいわ。なんだか馬鹿らしい」

「ご、ごめんなさい」

「なんであなたが謝るのよ」

「いえ、なんとなく」

俯きがちにそう言うクレセントの額に、女性はびしっと指を突きつける。

そのまま、二、三回額を小突き、腰を曲げて顔の高さを合わせた。真っ直ぐに自分を見つめてくる彼女の視線を、クレセントはなんだか擽ったく思った。

「いいこと。自分が悪くないのに謝らないことね。謝ったらその時点で負けよ」

「あ、はい――どうかしたんですか？」

今度はクレセントが首を傾げる番だった。女性がさっきのクレセントと同じように目を丸くしているのだ。

そして、ふっと優しい笑みを浮かべた。

「なによ、笑えるんじゃない」

「え……？」

クレセントは自分の頬に手を持っていく。触ったところで分かりなどしないのだが、無意識のうちに手は動いていた。

「わたしは――笑っていますか？」
「え、ええ」

クレセントがあまりにも信じられないといった口調なので、女性は眉を顰めながら頷いた。
が、次の瞬間クレセントから出た言葉に、女性は思わず仰け反ることになる。

「笑ったのなんて……物心ついた時以来、初めてです」
「はぁ！？」

素っ頓狂な声がペターニの路地に響く。
女性はクレセントの肩をがっしりと掴むと、腰を曲げて顔を覗き込んでくる。

「嘘でしょう？」
「嘘？　なぜ、わたしが嘘を？」
「友人と遊んで笑ったりとか、何か楽しいもの見て笑ったりとか、色々あるじゃない」

女性がそう言うと、クレセントは困ったように眉を下げた。視線を逸らし、行き場を失ったそれを道端に作られた小さな雪だるまへと向ける。

「……友人は、いませんでした」
「え？」
「友人らしい友人が思い当たらないんです」

寂しいことですね。
その言葉をクレセントを続けることが出来なかった。

寂しい、そんなこと今まで一度だって思ったことがなかったのに。
クレセントは急に不安になった。この女性と居ると、奥深く、誰にも触れられないようにしていたものが引っ張り出されるようなのだ。

「ど、どうしたのよ？」

いきなり黙り込んだクレセントをどう思ったのだろうか。女性の声に僅かな焦りが伴う。クレセントは自分の手をゆっくりと胸に持っていくと、小さく囁くように言った。

「なんだか、不思議です、とても」
「は？」
「このようなもの……わたしには過ぎた望みなのに」

そう言って、悲しそうに微笑む少女のような女性に、マリアは無意識のうちに眉根を寄せていた。
何時だろうか。こんな微笑みを見たことがあった。

『仕方……ないですよね。やっぱり叶わない夢だったのかな』

浮かんだのは、ソフィアの顔。
まだクレアとフェイトが今の恋人関係へと発展するよりも前に、ソフィアはフェイトに告白した。だが、その時にはもうフェイトの心はクレアのことで一杯だった。そのことを知ったソフィアは泣きそうな顔で、声で、マリアに微笑んだのだ。
どうして諦めるんだろう、とマリアは思った。諦めたらそこで終わりなのに、と。

聞き分けの悪い子供と思われるかもしれない。引く事だって大事かもしれない。でも、

『決して諦めないで。最後まで生きて。あなたにはそう出来る力があるのだから』

母の言葉が、最後の優しい笑顔がその時のマリアの脳裏を掠めた。その言葉を聞き、胸に秘めたあの日以来、マリアは諦めた事などなかった。どんな逆境の中でも、どんなに辛いときも。

ルシファーとの戦いで全てを消されそうになった時も、諦めなかった。

諦めなかったから、自分は確かにここに存在していると信じたから、今生きているのだ。

そのことはマリアにとって胸の内に秘められた確かな誇りであり、母が残した形見でもあった。だからこそ、マリアは諦めるということが何よりも嫌いだった。

しかし、目の前の女性は幸せになることを諦めている。

マリアは掴んだままだったクレセントの肩に、更に力を込めた。細すぎる肩はそれだけで折れてしまいそうだったが、そんなことは気にしない。

「諦めるんじゃないわよ」

「はい？」

「努力したの？　手に入れるためにあなたは動いたの？」

マリアの真剣な眼差しに、言葉に、クレセントは身体を強張らせる。

そして、顔を伏せ、震える声で言った。

「この世界に、わたしはなにも期待していません。それにわたしに

は、そんなこと望む資格も――」
「資格？　そんなの誰が決めたのよ。神様？　自分が嫌だって思うなら神にだって抵抗しなさいよ」
「神、に？」
「そうよ。例え神がお前は幸せになるなと言うなら、そんな神倒せばいいわ」

そう言ってマリアはクレセントの肩から手を離し、ホルスターからフェイズガンを抜いて空に放つ。光の軌跡はまっすぐに空に伸び、雲間から差し込む太陽の光と一体化した。

「あなたを倒してでも私は幸せになる、ってね」

自信たっぷりに微笑むマリアの顔は、一筋の光に照らされていた。クレセントは暫く呆然とその笑顔を見つめていたが、やがて小さく吹き出した。

「か、神様を倒すって……っ」

くすくすと笑うクレセントを見て、マリアは急に自分が恥ずかしいことをしたような気になった。顔に熱が集まり、朱色に染まっていく。

「わ、笑うことないじゃない！　人がどんな気持ちで……っ」
「ふふっ……ご、ごめんなさ……あははははっ」
「ちょっとっ！」

堪えきれなくなったクレセントは、ついにその場に膝をつき、お

腹を抱えて笑い出した。
地面についた膝から伝わってくる雪の冷たさを感じながら、クレセントは笑う。
息が苦しい。
喉が痛い。
しかし、クレセントはそれもいい、と思った。
今までずっと怖かった。この感情を曝け出して、何かを欲して、止まらなくなることが。己の運命を見失うことが。
こんな世界には、なんの期待も抱かない。そう思うことで、自分を守ってきたのかもしれない。こんな自分でもと希望を抱いて、それが崩れるのが怖かったから。
でも、神をも倒すと言ったこの蒼髪の女性が居てくれるなら、何も怖くない。
近いうちに別れの時が来ると分かっていても。
今はただ、この味わったことのない心地良さに身を委ねていたい。
そう思い、クレセントはまた笑うのだった。

108　シャロム家

フェイトとクレアの居る会議室に息を切らせたヴァンが飛び込んできたのは、夕日の橙色で室内が紅色に染まる時刻だった。

静かな会議室に緊張が走った。クレアもフェイトも息を飲んでヴァンの言葉を待っている。

神妙な面持ちでクレアの前に跪くヴァンの額から、汗が一滴落ちる。ヴァンは手の甲で汗を拭い、顔を上げた。

「シャロム夫妻が、何者かにより殺害されました」

「な！？」

「まさか……」

フェイトがを見張り、クレアも信じられないといった風に首を振る。

「お二人は早急に現場に赴き、ネイビス様と協力して調査に当たれとのことです。例の件は一旦ネル様、ルージュ様に任せよ、と」

「あ、ああ」

「ヴァン、あなたは？」

クレアが問うと、ヴァンは俯く。月光のような金糸が彼の端整な顔に暗い影を作りだした。

「私はクレセントを探してきます」

「……そう、よね。お願いね、ヴァン」

「は」

ヴァンは頭を下げ、そのまま会議室を後にした。

クレアもフェイトも、どうしようもない気持ちが胸の中で渦巻いていた。

やっと母国に帰ってこれた途端にこの事件。クレセントは一体どう思うだろう。

クレセントは両親を好いていない、またその逆もあることは軍内部にとって周知の事実であり、フェイトも先刻クレアから聞かされていた。シャロム夫妻は実の娘であるはずのクレセントを、まるでそこに存在しないかのように扱っている、と。

しかし、だからと言ってクレセントはこの事実を喜ぶだろうか。否、そんなはずがない。どんなにいがみ合おうとも、家族なのだ。

「こんな時なんて言ってあげたらいいのか、分からないわ」

クレアが声のトーンを落として言う。

「ネルの時もそうだったの。何もしてあげられなかった」

「そんなことないよ」

「え？」

フェイトの穏やかな声にクレアは顔を上げた。微かに潤んだ褐色の瞳がフェイトを映す。

「ネル言ってたよ。クレアが居てくれたから乗り切れたって。ずっとネルの傍に居たんだろう？　ネルが一人にしてって言ったのも聞かずに」

「う、うん」

「一緒になって泣いてくれて、すごく救われた。あの子にはいくら感謝しても足りない。そう言ってたよ」

「ネルが……」

「でも、このことは恥ずかしいから内緒にしててくれ、って言われ

たんだ。だから内緒だぞ？」

フェイトは人差し指を口に当てて片目を瞑った。

そして、クレアの頭をさらりと撫でると、真剣な表情を浮かべた。

「行こう。こんなことをした犯人、なにがなんでも見つけ出して裁きを受けさせてやる」

「そうね、絶対に」

眉を吊り上げ、怒気の含んだフェイトの声。クレアも同意するように頷く。

蒼と銀の風が、ペターニへ向けて疾走した。

※

「ちょっと、いつまで笑ってんのよ」

ペターニの外れにある第三修練施設。ベンチに腰を下ろし、くすくすと笑い続けるクレセントに、いい加減怒り疲れたマリアはげんなりと言った。

「ご、ごめんなさい」

と、クレセントは言うものの、まだ口に手を当てて笑いを堪えている。

マリアは盛大な溜息を吐き、手にしていたコーヒーを口に含んだ。

クレセントも笑いを飲み込むようにコーヒーを飲む。

「それにしても、何、この砂糖とミルクの量」
「お口に合いませんでした？」
「甘すぎるわ」

カップの中の液体はコーヒーというよりも、コーヒー風味のミルクではないかと思うほど甘かった。
クレセントに頼むんじゃなかった、とマリアは後悔し、甘いそれをまた口に含んだ。

「ごめんなさい、普段これで飲んでるので……」
「お子様ねぇ」
「もうそんな年でもないんですけどね」
「そういえば、あなた何歳なの？」

一瞬の迷いの後、クレセントは口を開いた。

「……二十四です」
「へぇ、二十四ね――って二十四！？」

マリアの手からカップが落ちる。それを間一髪のところで受け止めたクレセントは苦笑した。
今朝もこんなことがあったな、と。

「信じられないわ」

クレセントからカップを受け取ったマリアは、奇跡的に零れていなかったコーヒーを覗き込んだ。勿論信じられないとはコーヒーが零れていなかったことに対してではなく、クレセントの年のことであるのだが。
クレセントは横でぶつぶつと何か呟いているマリアをチラリと見

て、空になったコーヒーカップを膝の上に置いた。

「同じ反応をあなたにそっくりな男性からされました」
「私と似てる？　フェイト？」
「はい、お知り合いですか？」
「私の双子の弟」

クレセントが目を丸くしてマリアを見た。

「双、子？」
「そう、そっくりでしょ？」
「とっても。じゃあ、マリアさんもグリ――」
「ストップ」

マリアはクレセントの顔の前に手を突き出して言葉を遮った。
いきなりそんなことをされたクレセントは首を傾げてマリアを見上げる。

マリアは残ったコーヒーを一気に飲み干し、クレセントにカップを突きつけた。
「マリア」
「え？」
「敬語が癖になってるならそれはそのままでもいいわ。でも、さんは止めて。友人にさん付けなんてされたくないの」

クレセントはその言葉に弾かれたように下を向いた。両手で持ったカップをぎゅっと握り締めて、マリアの言葉をゆっくりと噛み砕いていく。凍ってしまった心が、どんどん溶かされていく感覚だった。
束の間の沈黙の後、クレセントは顔を上げ、

「なんだか、擽ったいです……マリア」
嬉しそうに笑うのだった。

「クレセント！」
長身の男が修練施設の門から顔を出した。
クレセントはすっと立ち上がり、その姿を確認する。

「ヴァン様」
「こ、ここに居たのか……やっと」
そこまで言ってヴァンは口を閉ざした。その視線の先に居たのは、マリアだ。
急に口を閉ざしたヴァンに、マリアが不思議そうに声をかけた。

「どうしたの？　何か慌ててたようだけど」
「あ、ああ、そうでした。クレセント、落ち着いて聞いてくれ」
「はい」
「シャロム夫妻が、殺された」

驚いたのはクレセントではなくマリア。
クレセントは表情を変えない。その瞳に“悲しみ”の色はなく、変わらない無表情がそこにあった。
瞳を閉じて、そうですか、と呟くクレセント。その態度に食って掛かったのはマリアだった。

「ちょっと！　自分の親が殺されたっていうのになんでそんな落ち

着いてるのよ！？」
「……悲しく、ないんです。親だとは思ってなかったからでしょうか」
「っ！」

乾いた音が、広い修練施設に響く。
あまりにも突然のことに、クレセントは何が起きたのかをすぐには理解できず、ただ痺れるような痛みを頬に感じていた。
頬に右手を添え、クレセントは呆然とマリアに視線を向け、大きな瞳を瞬かせる。

「マリア？」

泣いていた。マリアは透き通るような碧の瞳一杯に浮かべた涙を零さないよう、必死に堪えていた。
ヴァンもどうしていいのかわからず、その場に立ち尽くしている。
マリアは勢いよくクレセントの胸倉を掴むと、そのまま壁に押し付けた。
クレセントの身体が宙に浮く。

「今の言葉……もう一度言ってみなさいよ……」
「くっ……」
「親だと思ってなかった？　そんなこと二度と口にするんじゃないわよ！」

クレセントはマリアがどうしてここまで怒るのか検討もつかず困惑した。

「どんなに憎い親でもね、死んだら会えないの。あとで後悔したって遅いのよっ！」

「マリア……まさか」

マリアの口振りで、クレセントはマリアが怒る理由に辿り着く。

おそらく、マリアの親は……。

「ごめん、なさい」

クレセントは自分の浅はかさを呪った。

正直、クレセントがシャロム夫妻を親と思っていないのは本当だった。ただ言葉にすることではなかったのだ。自分の胸の内に秘めていればよかった。

今まで、そうしていたように。誰も理解などしてくれないのなら、いっそのこと誰にも見せないほうが楽だった。

少し、ほんの少しだけど、マリアなら理解してくれるかもしれない。そう思ったのは高望みだったのかもしれない。

クレセントはマリアを両目に映す。しかし、俯いているマリアの表情が見えず、それがクレセントを酷く不安にさせた。

「ごめんなさい……」

クレセントはもう一度謝った。

すると、急に胸倉を掴んでいた力が抜け、クレセントの足が地面に着いた。

「ごめん」

「え？」

「あなたにも何か理由があるのよね。理由もなしにそんなこと言う子じゃないってのは分かってる。自分の境遇をあなたに押し付けるなんて、最低ね」

「……っ」

クレセントの身体が揺れる。

「どうして……あなたは」

それはすぐ傍にいるマリアの耳にすら届かないようなか細い声で、クレセントの意思とは関係なしに零れ落ちた囁きだった。

額に手を当てて眉を顰めるマリアを見据えながら、クレセントは自分の中の覚悟が、必死に隠してきたものが崩れそうになるのを必死で押さえた。

そして、俯くマリアの頭に小さな手を乗せ、クレセント特有の、口の端を少し上げただけ微笑みを見せる。

「そんなことないです。ありがとう、マリア」

それが、今クレセントがマリアに伝えることが出来る精一杯の感謝。

マリアは小さく首を振ると、そのままペターニへと駆け出した。

クレセントとヴァンもそれに続く。

決して早くない速度。でも、クレセントは追い抜くことはしなかった。前で靡く蒼の髪を見つめながら、クレセントは口の中で呟いた。

「ごめんなさい」

先程の謝罪の言葉とは違った意味を持つ言葉。

それがなんの意味を持つのか、クレセントのみが知っていた。

※

「よぉ、夫婦揃ってお出ましか？」

急ぎ足でペターニに向かったクレアとフェイトを待ち受けていたのは、変わらない雰囲気のネイビスだった。

日は既に落ちていて、無数の星が空に瞬いている。

クレアとフェイトは頭を下げてくる師団兵達に軽く挨拶をしながらネイビスの元へ歩み寄った。

「どういうことなの？」

「俺もよくわかんねぇよ。ただ、物取りの犯行じゃないと思うぜ。金品は一切盗まれてないみだいだし、使用人は全員無傷だ」

「怨恨の可能性が高いってことかい？」

フェイトが口を挟む。ネイビスは考えるように頭を掻き、肩を竦めた。

「多分な。それにしちゃあっさり殺されてたが」

「あっさりって？」

「なんていうか、普通恨みだったらもっと苦しめてから殺るもんだろ？　それが頚動脈一発」

ネイビスは手で首を切るマネをする。

「まぁ、それはおいておきましょう。それよりも現場を見せてくれるかしら？」

「ああ、こっちだ」

ネイビスが軽く手を振って屋敷の中へ入っていく。フェイトとクレアもネイビスの後に続いて屋敷に足を踏み入れた。

広い屋敷だった。しかし必要最低限の調度品は質素というよりも、一種の高級感を感じさせる。過度に豪勢で派手な内装が目立つ貴族の館では珍しい部類に入るだろう。

玄関から入り、真正面にある階段の右手の廊下の奥から二番目。そこでネイビスは足を止めた。

「遺体はまだあるぜ。大丈夫か？」

ネイビスがクレアを気遣うように言う。勿論クレアの答えはわかりきっていた。

「大丈夫よ」

ネイビスは頷き、ゆっくりと扉を開ける。部屋の中央にはシートを掛けられた遺体が二つ、丁寧に置かれていた。

クレアは現場を荒らさないように遺体に近づき、顔の前で手を合わせた。そして、慎重にシーツをめくり、傷口を確認したクレアは難しい顔で呟く。

「これといって特徴的な傷口じゃないわね」

「こっちも同じ、か」

フェイトもシーツを捲り傷口を確認するが、別段珍しくもない傷口だった。

ざっと室内を確認するが、とくに荒らされた形跡もなければ揉みあった形跡もない。

「この他に不審な場所は？」

「わかんねぇな。今調べさせてるが広すぎんだよ、この屋敷」
「じゃあ、私とフェイトも手分けして探すわ。フェイトは二階をお願い」
「ああ」
「何かあったらすぐ知らせるから」
そう言うと、クレアは急ぎ足で階段を駆け下りた。

クレアは一階の部屋を片っ端から調べた。しかし、調べても調べても、血痕が残っていたり荒らされた形跡がある場所はない。
そして、最後の部屋。

「部屋っていうより、図書館ね」

明かりを点けながら、クレアは感嘆の声を漏らした。
小さな図書館といっても過言ではないくらいの量の本棚。そこにはありふれたタイトルの本から、クレアが知る限り相当な価値がつくほど貴重な本など、様々な種類の本が並べられていた。
クレアは自分の身長を軽く越す本棚の間を歩いていると、ふと違和感をを覚え、立ち止まった。踵を返し、歩き出す。少し歩いて止まる。そしてまた反対を向き、歩く。

「音が……違う？」

そう、ある一箇所だけ音が違うのだ。
クレアはその場に膝をつき、床をくまなく調べた。床に手を滑らせ、なぞっていく。

「これは」

僅かな取っ掛かり。もしやと思って辺りを見渡すと、本棚の脇に先端が曲がっている棒をかけてあった。

クレアはそれを手に取り、取っ掛かりに引っ掛け、力強く引いた。ガコン、という小気味いい音がして、床が持ち上がる。

クレアは頭を空いた穴へ入れ、真っ暗な中を覗き込んだ。暗闇に目が慣れると、徐々に見えてくる。

「ビンゴ、って言うのかしらね。こういう場合」

溜息をつくように笑いながら、クレアは体を起き上がらせた。

※

「なぁ」

「なんだい？」

クレアが一階へ向かった後、フェイトは二階の端の部屋から順々に調べていた。

そして、丁度半分を調べ終えた所で、不意に現れたネイビスにフェイトは本棚を漁っていた手を止めて振り返る。

「アイツ、どうだった？」

「アイツ？」

「クレセントだよ。ショック受けてたなかったか？」

「ごめん、僕達はクレセントと一緒じゃなかったんだ」

「そうか」

ネイビスは爪先で絨毯を蹴った。
何処か遠い所を見るような眼は、一体何を映しているのか。言うまでもない。白銀の髪を持つ女性に他ならないのである。

「ネイビス」

フェイトが声をかけると、ネイビスは大きく息を吐いてその場その場にずるずると座り込んだ。髪をぐしゃぐしゃと掻き乱し、唸っている。

「なぁ、ラインゴッド。俺はアイツに何をしてやったらいい？」
「え？」
「わかんねぇんだ。何て言ってやったらいいのか」

顔を手で覆うネイビスが、一瞬クレアとダブって見えてしまい、フェイトは小さく笑って、ネイビスの横に腰を下ろす。胡坐をかいた上に手を組んで瞳を閉じる。

「一緒に居てあげればいいよ」
「は？」
「もしクレセントが泣きたいのに泣けないなら、君が代わりに泣いてあげるといい。ただ傍に居るだけでもいい」
「……」
「どうしようもなく辛いときは、誰かに傍に居てもらうのが一番だと思う」

静かに思いを馳せれば浮かんでくる、ネルの恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうな顔。
そして、それがゆっくりとぼやけていき、蒼と銀を形作る。

「僕の場合は、乱暴に背中を叩かれて立ち直った。まぁ、その後十分慰めてもらったけどさ」

落ち込む自分の背中を、思いっきり叩いてくれたあの人。
全てが終わって、耐え切れず泣いた自分を優しく抱きしめてくれたあの人。
救われた。人という存在は、こんなにも温かい。そう感じた瞬間だった。

「ネイビスが思ったことをしてあげたらいいよ。きっとクレセントも救われる」
「……そっか。サンキュ」

ネイビスは、顔から手を放し、笑顔を浮かべた。

「借りが出来たな。今度何かあったら言えよ。俺がなんとかしてやる」
「それは頼もしいね。是非お願いするよ」

フェイトは立ち上がり、ぐっと背筋を伸ばした。
ネイビスも同じく立ち上がり、親指を立てる。

「おぅ、女の口説き方でもなんでも教えてやるぜ」
「女の子一人口説けない人が何を教えるのかしら？」
「おわぁっ！」
「あ、クレア」

突然会話に入ってきた第三者の声にネイビスは思わず大声を出した。

フェイトは別段驚く様子もなく、笑顔でその人物――クレアに手を振る。クレアは呆れたように腰に手を当て、ネイビスとフェイトを指差す。

「全く、こんなとこに座りこんで何やってるのよ」

「ら、ラーズバード、いきなり現れんな！　ビックリするだろっ！」

「あら、気配の一つも察知出来ない師団長さんが悪いんじゃない？」

「それは言えてる」

フェイトがうんうんと頷く。

ネイビスは殺気に満ちた目でフェイトを見た。

「おまえは気付いてたってのかよ？」

「うん、だってクレアだし」

「もうフェイトっ！」

いきなり惚気るフェイトにクレアは顔を赤く染める。

余りのバカップルぶりに呆れて物も言えないネイビスは、一つ咳払いをしてクレアに向き直った。

「で、何か見つけたのか？」

クレアの顔が引き締まる。

「ええ。何に使ったのかは知らないけれど、書庫の下に巨大な地下室があったわ」

そんなことを聞いても、一度緩んでしまったフェイトの顔はなかなか直らなかった。

※

慌しく動くペターニとは裏腹にシランドは静かな闇に包まれていた。

シランド城にある白露の庭園。朝はアペリスの導きを浴びて神々しく輝く庭は、薄暗い闇の中で神秘さを醸し出している。

その庭の真ん中、まるで不釣合いな格好をした大柄の老人が腕を組んで佇んでいた。

アドレー・ラーズバード。クレアの父親にして、元クリムゾンブレイドの片割れ。

アドレーは音もなく腰に挿した刀を抜き、正眼に構えた。神経を研ぎ澄まし、手先から刀へ、そして全身へ施力を巡らせる。アドレーなりの精神統一の仕方だった。

時間にしてみればほんの数分のことであるにもかかわらず、再び目を開いたアドレーはもう数時間も経ったような感覚を覚えた。

慣れた手つきで刀を仕舞い、肩越しに背後を見る。

そこに誰か居るのはずっと分かっていた。

「何用だ、リーゼル」

「お気づきでしたか」

静かな月夜に響く、高いソプラノ。

漆黒の長い髪を靡かせた女性が、闇の中から姿を現した。

リーゼルと呼ばれた女性はどこか含みのある笑顔を顔に貼り付けたまま、アドレーに一歩一歩近づく。

カツン、カツン、と大理石を鳴らす靴音はまるで音楽のように月夜に木霊した。

「お久しぶりですね」
「お主は滅多に屋敷から出んからの」
「今流行の引きこもり、というやつです」

流行ってないだろう。そうアドレーは言おうと思ったが止めた。どうせ何を言っても無駄なのを、アドレーは経験で分かっていた。伊達に子供の頃からの付き合いではないのだ。

漆黒の髪の女性――リーゼル・ゼルファーは、言うまでもなくネルの母親である。

そして、アドレーの昔馴染みでもあった。

アドレー、ネーベル、リーゼル。三人は何時も一緒に居た。遊ぶときも、食べるときも、寝るときも。アドレーとネーベルでどちらがリーゼルの婿になるかと、争ったことも数え切れないほどあった。当のリーゼルはそんなこと露知らず、のほほんと微笑んでいたのだけど。

「それで、お主がわしに何の用じゃ？」
「いえ、ただ風が強くなりそうだと思いまして」
「荒れるか」

アドレーの言葉に、リーゼルは答えない。ただ、穏やかな笑みを浮かべているだけ。

「シャロンは、元気ですか？」
「分からん」
「――と言いますと？」
「久々に家に戻ったら『どうぞ食べて下さい、あなた』とハートマーク付きの書置きと飯があってな。意気揚々と食べたまではいいが、気付いたら三日経っておった」

アドレーが自慢の髭を撫でながら言う。

「今回は何の毒だったんでしょうね」

「なんでも少量で鯨を動かなくするやつらしいの。書置きの裏に『やっぱり生きてたか』という愛のメッセージと共に書かれておったわい」

「まぁ、愉快なことですね」

「はっはっは、流石はわしの妻じゃ」

アドレーの豪快な笑い声と、リーゼルの控えめの笑い声が二人以外は誰も居ない白露の庭園に響き渡った。

「やはり、ルリ島に行ったのでしょうか？」

「うむ。おそらくそうじゃろうな」

ひとしきり笑った後、リーゼルがポツリと呟いた。

アドレーも同意するように腕を組んで頷く。

風に靡く髪を片手で軽く押さえながら、リーゼルは空に煌く星を見上げた。

「随分と昔の話ですが、シャロンがルリ島から女の子を連れてきたことがありましたね」

「おお、懐かしい話じゃのう」

「あの子はどうしてますか？」

「立派に成長しておる。やはりあやつの目は正しかったのじゃ」

アドレーは自慢げに顔を綻ばせる。

リーゼルもそんなアドレーを見て口元を緩めるが、すぐに悲しげな色を浮かべた。

「シャロンがこうして各地を飛び回っているのは、まだあの子のことを探しているからなのでしょうか？」
「……あやつなりに負い目を感じておったからのぉ」
「シャロンのせいではのですが、そう言って聞く人ではないですね」
「うむ」

星が一つ、流れた。
まるで月が流した涙のように、星達は夜空に輝いている。寂しい。
そんな月の叫びが今にも聞こえてきそうなほど、空は月の涙で一杯だった。

「アドレー」
「なんじゃ？」

リーゼルの心地よい高さの声が、アドレーの耳に優しく届く。
二人の足元にひっそりと佇む白い花が、フワリと揺れた。

「この先きっと風が強くなる。子どもたちを守ってあげて下さい」
「何、わしら大人が手を出さんでもあやつらは十分脅威に立ち向かえる強さも、仲間も持っておる」
「穏やかな風の中にこそ……いえ。そうですね。信じてあげなくてはいけませんね」

リーゼルが何かを言いかけて、首を振った。
指元で光る銀の指輪に手を添え、そっと瞳を閉じた。

「頑張ってね、ネル、クレアちゃん、皆」
「心配無用じゃ。さ、戻るぞ。風邪をひいてはかなわんからの」
「そう思うなら服を着たらどうですか？　クレアちゃんに嫌われますよ」

「む、痛いとこをつく」

和やかな会話を続けながら、アドレーとリーゼルは城内へと戻った。

庭園に静かなる闇が訪れる。

二人の気配が完全に消えた頃、小さな旋風が巻き起こる。それは白い花を無残に切り裂き、闇の中に溶けていった。

１－０９　地下の秘密

広大な空間だった。おそらくシャロム邸の敷地全体ほどの広さを持っている。

書庫の床から下に降りた先には、一般市民の一軒屋が立てられそうなほどの広さの空間が一つ。そしてその三分の一程度の部屋が十数個。

真っ先に違和感を感じたのは、その白さだ。壁や床、その他の装飾品。構成しているもの全てが白かった。作られている材質そのものの色なのか、後から塗布されたものなのかは分からないが、四方を見渡しても一面の白という空間は、清楚さよりも奇妙なざわめきを覚える不気味さを感じさせた。

辺りをぐるりと見渡しても、特に目立ったものはなかった。まるで引越し前の新居のように、家具や置物などは一切置かれず、ただ何もない平面があるだけだ。

クレア、フェイト、ネイビスは薄暗い部屋を松明の明かりを頼りに進んでいた。

部屋を一つ一つ調べ、また次の部屋へ。ぞれぞれの部屋も書庫から下りた先にあった空間と同じく、目だったものは何もなかった。中には本棚や机などが残っていたものもあるが、それらの中は全て空で、やはり手がかりにはならない。

「ったくなんだってんだよ、この家は」

「こんな広い空間一体何に使っていたのかしら」

「分からない。でもやっぱりシャロム家は何かを隠してたんじゃないかな」

フェイトが空振りだった部屋の扉を閉めながら言う。

クレアとネイビスは顔を歪めた。

「でも、クレセントは関係ねぇよ」
「そう信じたいわね」

誰だって仲間を疑いたくなどない。
フェイトも頷き、次の部屋の扉へと手をかけた。

「ん？」
「どうしたの？」
「いや、鍵がかかってるみたいなんだ」

そう言ってフェイトはノブを回そうとするが、動く気配はない。
今まで鍵のかかっている部屋などは一つとしてなかった。
フェイトとネイビスが顔を見合わせて頷き、

「「はっ！！」」

同時に扉を蹴った。
が、

「びくともしない」
「かてぇ……」

傷一つついていない。
勿論手加減などしていないし、二人とも腕には自身のある男達だ。
普通の扉なら三重構造だろうと蹴破る自信があった。
フェイトとネイビスが呆然と扉を眺めていると、クレアが一歩前に出た。扉を軽く二、三回叩き、人差し指を顎に持っていく。

「ねぇ、フェイト。これって鉄かしら？」

「え、でも白いよ？」
「ま、試してみればいいか」

クレアはふぅ、と息を吐いて、扉に向けて手を翳す。澄んだ詠唱が聞こえ、クレアの手が銀の紋章に包まれる。

「ファイアボルト！」

銀の紋章から次々に炎の弾丸が放たれた。
通常なら一度に出せる火球の数は多くて五から十と言われているが、クレアが繰り出したそれはゆうに三十を超えていた。
もはやフェイトからでは扉を確認することさえできないほどの煙と光を纏った爆発。体の芯まで響くような騒音を轟かせ、炎の弾丸は余すところなく全て扉に命中した。
しかし、煙が晴れたあと、やはり焦げ跡一つついていない扉を前にフェイトは肩を落とした。

「――駄目か」
「まだよ――ディープフリーズ！」

無詠唱。ファイアボルトで熱した扉が冷め切る前に、クレアの施力によって発現した氷雪が扉を凍らせていく。急激な温度差。ファイアボルトによって熱せられ、それが急激に冷やされたことにより、扉は粉々に砕け散った。

「さすがだな、ラーズバード」

ネイビスも感嘆の色を浮かべている。
クレアは優雅に微笑むと、慎重に中を覗き込んだ。
あれだけ頑丈に作られていたからには、きっと何かあるはず。入

り口に何もトラップらしきものがないのを確認すると、クレア、フェイト、ネイビスはゆっくりと足を踏み入れた。
そこは他の部屋とは明らかに違っていた。他の部屋は全くと言っていいほど生活感が感じられなかったのに、この部屋はまるでほんの少し前まで使われていたように見える。
クレアが部屋の中央へと進み、フェイトは辺りを見渡す。ネイビスは入り口の所で外の様子に気を配っていた。
部屋の中にあるのは、空の本棚が数個に机。そして、大の大人でも二人は入れそうなほどの大きさがあり、無数の導線やチューブに繋がれた、透明なカプセルのようなものだった。
クレアはそれを調べようと手を伸ばした。

「これは……」

何かしら、その言葉はフェイトによって遮られた。

「イザーク！」
「おわっ！」

フェイトが急に大きな声を出して部屋の奥へと駆けていく。外の様子に気を配っていたネイビスも釣られて大声をあげてしまう。
部屋の隅にひっそりと佇んでいたもの。それはフェイトがバニラや他のクリエイターと共に復活させたかつての機工兵――イザークだった。

「イザーク！　どうしてこんなところに」

フェイトはイザークに駆け寄る。たが、イザークは何の反応も示さない。フェイトは首を傾げて、どこか故障箇所でもあるのかとイザークの機体を調べ始めた。

「何やってるのかしら」

イザークの存在を知らないクレアはその様子を不思議そうに見つめていたが、

「フェイト！」

急に息を飲んで駆け出し、フェイトを突き飛ばした。
同時に鳴り響く銃声。

「っ！」
「クレアぁ！」

身体が宙に浮く感覚を覚えながら、フェイトは見た。
今までピクリとも動かなかったイザークが急に動き出し、サブマシンガンのような銃火器が火を噴いたのを。
その無数の銃弾がクレアの身体を無残に貫くのを。
自分を突き飛ばしたクレアの唇が微かに動いていたのを。
その表情が困ったように笑っていたのを。
何もかもがゆっくりと感じられた。
体が浮く感覚も、弾丸も、散らばるクレアの銀糸も、全て。
頭が、真っ白になった。

「ラーズバード！　畜生っ！」

クレアの体が地面に倒れる。ネイビスがクレアを庇うようにイザークの前に立ち塞がった。腰に差した長剣を抜き、イザークに向ける。
容赦なく放たれる弾丸をネイビスが驚異的な動体視力で弾き返す。

倒れるクレアに、呆然と座り込むフェイトに当たらないように。
ネイビスは舌打ちをした。
このまま凌ぎ切れるとは思えない。肝心のフェイトは使い物にならない。二人を守ったままでは反撃もできない。
ネイビスの目の前には先の見えない闇が広がっていた。

鳴り響く銃撃の中、フェイトの頭は固まったままだった。
しかしその瞳はしっかりと捕らえていた。倒れ伏したクレアの体の下から広がる、赤い鮮血を。

「あ、あ――あぁ……」

フェイトは頭を両手で覆った。
額が熱くなる。押さえきれない衝動。頭の内から全てを破壊されるような感覚。
蒼い光が目の前を覆った。
他の事は何一つ冷静に考えられなかったのに、これだけは分かった。

――破壊の力が、暴走する。

フェイトがそう確信し、僅かな理性がそれを必死に止めようとした最中だった。

「空破斬ッ！」
「ウインドブレイド！」

地を這う衝撃波と風の刃が、イザークの機体を吹き飛ばす。二刃の衝撃波はイザークを壁に強く打ち付け、機工兵は動かなくなった。
フェイトの額に浮かび上がっていた紋章が消えていく。涙に濡れた顔を衝撃波が放たれた方へ向け、フェイトは崩れ落ちるように膝をつく。

「この阿呆が！」
「マリア、急いでクレア様を！」

冷たい瞳でフェイトを睨み付けるアルベルと、後ろにいるマリアに向かって叫ぶクレセントが、そこに居た。

「アルベル……くれ、せん……と」

フェイトの意識は、そこで途切れた。

※

「お待ちしておりました。ネル・ゼルファー様、ルージュ・ルイーズ様ですね？」
「ああ」
「相変わらずここは寒いわね」

アーリグリフ城門前、外套のフードを取ったネルとルージュは異なる赤髪を雪の混じった風に靡かせた。
両手で自分を抱きしめるようにして震えるルージュに門兵は苦笑を漏らしながら、二人を城内へと招きいれる。

向かうは、アーリグリフ王執務室。

「よく来てくれた。まさか君たちのような人物が二人も来てくれるとはな」

決して広くはない執務室。その奥に置かれたデスクに、アーリグリフ王国の王が腰を下ろしていた。
書類に走らせていたペンを止め、ネルとルージュに視線を向ける。
ネルとルージュは敬礼をし、深く頭を下げた。

「事が事ですから。私たち上層部の者でしか、他にこの話を理解できるものはいません。それで、本当なのですか？」
「うむ。アルベルが確認したのだがな。おそらくそうだろうと言っておった」
「これで、二つ、いえ、三つかしら」

ルージュが呟くように言う。
アーリグリフ王は控えていた部下に指示を出し、布に巻かれた長い物体を持ってこさせる。
兵士はネルにそれを手渡し、部屋から出て行った。
ネルがアーリグリフ王に目配せすると、頷きが返ってくる。
慎重に布を取り払っていくと、白い物体が姿を現した。

「間違いない。本物だ」
「何だってのよ、一体」

ネルの焦りを隠せない声とルージュの悪態が、窓を叩く風の音に掻き消された。

※

セフィラから流れる恵みの水が、木の葉を何処かへと運んでいく。
張り巡らせた桟橋の上から、アゼルは水面下を覗き込んだ。
古代の遺跡。揺れる水面の下には、遥か昔に沈んだ都市、サーフェリオが静かに佇んでいた。
四百年年ほど昔、技術国家グリーテンの従属からの解放を求めたシルヴィア一世はセフィラの力で大洪水を起こし、機工兵をグリーテン大陸に追いやったという。
そして、その時に機工兵と共に沈んだのがサーフェリオ。グリーテンから逃れるため、サーフェリオの文明は水に飲まれたのだ。
一体ここはどのような文明が栄え、人々はどのような生活を送っていたのか。
考えれば考えるほどアゼルの胸は高鳴っていった。

「あのぉ、アゼルさん」

ソフィアは遺跡を食い入るように見つめるアゼルの袖を引っ張る。
アゼルはそれで漸く我に返って、勢いよく立ち上がった。

「あ、ああ、何ですか？」
「何ですか、じゃないですよ！　何しに来たと思ってるんですか！」
「す、すみません。つい……」

アゼルはすまなそうに頬を指で掻き、目の前で仏頂面をするソフィアに頭を下げた。

「もう、古いものが好きなのはいいですけど、時と場合を考えて下

さいねっ」

アゼルの動きがピタリと止まる。

急に視界がぼやけ、別の景色と人物がアゼルの目の前に映った。

『もう、デートの時くらい古いものの事は忘れてよ』

左目がズキリと痛む。

左目から流れる血。目の前で微笑む女性。真っ白に染まる視界。

「――っ」

気付けばアゼルは桟橋に肩膝をついていた。

汗が額から流れ、背中もじっとりと濡れている。

「アゼルさん！　大丈夫ですか！？」

「平気です。ちょっと眩暈がしただけで……」

そう微笑むアゼルの顔は蒼白だった。

ソフィアは小刻みに震えるアゼルの肩にそっと手を置きながら、諭すように言う。

「無理はダメです。村長さんのところへ行きましょう」

「ええ、そうですね」

有無を言わさない態度でアゼルに肩を貸しながら歩き出すソフィアを見て、アゼルの口から乾いた笑いが漏れた。

女性が強いのはこの国だけじゃないのか。そう思い、アゼルはおぼつかない足取りで歩き出すのだった。

「具合はどうだい？」
「だいぶ楽になりました。調査に来たというのに、ご迷惑をおかけして申し訳ありません」
ベットに横になっていたアゼルは、額に乗せられたタオルを取りながら上半身を起こした。
村長夫人はそのタオルを受け取り、気持ちのいい笑顔を見せる。
「いいんだよ。うちの馬鹿息子で慣れてるからね」
「そうそう。あの馬鹿息子ときたらまた飛び出していきやがって。ところでどうだい、兄さん。一つ昔話でも」
「やめな」
水没都市サーフェイリオの村長――アズノール・S・T・ハクスリーが意気揚々と昔話を語りだそうとしたところで、夫人の強烈な肘内が炸裂した。まともにそれを受けたアズノールは、声にならない声をあげてその場に倒れたまま動かなくなる。
そんなアズノールを横目で見ながら、アゼルは顔を引き締めた。
「それで、例のお話なのですが」
「ああ、これのことさ」
夫人は家の奥から持ってきたものをアゼルに手渡す。
アゼルはそれを一通り眺めてから、ソフィアに渡した。
「どうですか？」
「本物……のような気がします。詳しく調べてみないとなんとも言

えませんが」

ソフィアの頬を汗が伝う。

アゼルはベットから起き上がって、上着に袖を通した。

「これを拾った場所に案内してもらえますか？」

「任せときな」

夫人は腕に作った力こぶをぽんと景気よく叩き、大股で歩き出す。

アゼルとソフィアもお互いの顔を見合わせ、それに続いて村長宅を後にした。

※

ペターニに置かれた大型の中央病院。その中心にある中庭で、クレセントは夜明け前の空を眺めていた。薄もやのかかった藍色の空。水平線の向こうから、優しい黄金色の光があふれ出そうとしている。

そんな静けさをもたらす光景とは打って変わり、病院の中は慌しく動いている。

しかし、それも当然の話だった。シーハーツの象徴である女王陛下の名代――クリムゾンブレイドの片翼が負傷したのだから。

あの後、クレアをヴァンが、気を失ったフェイトをネイビスが担ぎペターニへ向かった。

クレアの容態は決して軽くはなかったが、命の危険はなかったことは不幸中の幸いと言えよう。今だ意識は戻らないものの、シーハーツの医療技術を持ってさえすれば、二、三日安静にしていれば退院出来るだろう。

フェイトはまだ目を覚まさなかったが、外傷は一切ないため、お

そらくすぐに目を覚ますだろう、というのが医師の見解だ。
釈然としない気持ちが、クレセントの胸の中を駆け巡っていた。
撃たれる直前、クレアは咄嗟に防護壁を張った。それが不完全ながらも急所へのダメージを避けたのだ、とクレアが撃たれる場面を見ていたネイビスは語った。
その話を聞いたとき、クレセントは不思議でしかたなかった。
どうしてクレアはフェイトの周りに防護壁を張らなかったんだろう、と。その方が庇いつつ不完全な防護壁を張るよりもずっと安全なはずだ。
クレセントがそれをマリアに問うと、マリアは目を細めてクレセントの頭に手をやり、「いつか分かる」と微笑んだのである。

「いつか、か」

徐々に鮮明になっていく黄金色の光へ向けて、クレセントは手を伸ばした。
何かがそこにあるかのように。そこにある何かに縋るように。
しかし、伸ばした手は何も掴むことなく下ろされ、胸の前で強く握られる。
一羽の鳥がクレセントの肩に止まり、一声鳴いた。その鳥に視線を向けてから、クレセントは目を閉じる。
近づいてくる、一つの足音。
聞きなれない足音にクレセントは目を開いて足音の主へ顔を向けた。
シーハーツでは見ない奇抜な服装。黒と金の髪。赤い瞳。抜き身の刀のような佇まい。

「私に、何か？　歪のアルベル」

その言葉を言い終わる前に、風が吹き抜けていく。クレセントの

肩に止まっていた鳥が大きく鳴き、羽を散らしながら飛び立っていった。
暁の空に照らされたクレセントの白銀の髪が数本、はらりと地面に落ちる。

「なぜ避けない」

クレセントの白い喉には、魔剣クリムゾン・ヘイト切っ先がつきつけられている。
しかし、動揺しているのは剣を向けた主のほうだった。
クレセントがこの程度の攻撃を避けられないはずがないということぐらい、アルベルには分かっていた。
だというのに、クレセントは一歩もその場を動かない。視線もアルベルを見据えたまま、瞬き一つせずに、そこに立っていた。
クレセントは一度クリムゾン・ヘイトに目を落としてから、ふたたび剣を突きつけてくるアルベルを見据える。

「止めると分かっている刃を、避ける意味がありますか？」
「クク……なるほど。やはり俺の目に狂いはなかった」

アルベルは刀を鞘に納めると、くつくつと笑った。
確かに、アルベルはこんな場所で殺人を犯すなどという愚かな真似をする気はなかった。
だが、相手はあの歪のアルベルである。万が一ということも考え、避けるのが常人の考えだ。例え避けられずとも、向かってくる刃に対し目を瞑ることさえしないクレセントは、アルベルから見ても異常の域に入る。

「おまえ、名は？」
「クレセント・ラ・シャロム」

「フン、覚えておこう」

そう言ってアルベルはくるりと身を翻すと、肩越しにクレセントを見る。真紅の瞳が、燃えているように輝いていた。

「今度は本気出してやってもらうぜ」

真紅と翡翠が交差した。

束の間の沈黙の後、アルベルその場を去ろうと足を踏み出した瞬間、その一寸先の地面が砕かれた。

アルベルですら足を止めてしまうほどの殺気。アルベルはクレセントを振り返るが、彼女の視線はアルベルに向いてはいなかった。

靴底が石畳の上に転がる砂利を踏みしめる音が聞こえる。

「クレセントに近づくな、アーリグリフが」

冷酷な声だった。

いつものおちゃらけた雰囲気など欠片もない。

クレセントとアルベルが立つ右手側。静かな殺気を纏ったネイビスが、左手に剣をぶら下げてその姿を現した。

1－10　夜明け

「ああ？」

アルベルは自分へと向けられている殺気を感じながら、ネイビスを見返した。

ネイビスは金色の瞳をアルベルに向けたまま、一歩踏み出す。ぶら下げられた刃が石畳を掠る音が、静かな中庭に響き渡った。

「ネイビス、様……」

クレセントは困惑していた。感情の起伏が激しいネイビスであるが、こんなにも殺意を剥き出しにすることはいまだかつて見たことがなかったのだ。クレセントは躊躇いがちにネイビスに近づき、アルベルとの間に立ち塞がった。

「どいてくれ、クレセント」

「なにをなさるおつもりですか？」

聞かなくても分かる。ただの話などでここまでの殺気は出さない。クレセントがその場から動けずにいると、背後で刀を抜く音が聞こえた。

「ふん。なんだか知らんが、俺はいつでも相手になってやるぞ、クソ虫」

「いい度胸じゃねぇか」

アルベルがクリムゾン・ヘイトを構えると、ネイビスも剣を正眼に構える。

「止めてください。今はそんなことしてる場合じゃないでしょう？」
「どけ、阿呆。貴様もついでに相手してやろうか」
「クレセントに対する暴言、殺すぞ」

アルベルとネイビスが臨戦態勢に入る。二人の目にはもうお互いしか映っていない。

「……とにかく、このままでは」

このままこの二人が争えば病院崩壊ではすまない。クレセントがそう判断し、力づくで止めようとした時だった、

「いい加減にしなさい！　この馬鹿！」
「ぐはっ！」
「ぶべっ！！」

蒼い光を伴った強烈な蹴りが、アルベルとネイビスを吹っ飛ばす。日常生活では決して聞くことはないような嫌な音が耳に響き、折れた、とクレセントは反射的に理解した。

本来は静かにしなければならない病院で騒音を発したマリアは、眉間に目一杯皺を寄せながらアルベルとネイビスに近寄る。ズタボロになりながら呻き声をあげる二人に、マリアはもう一度容赦なく蹴りを入れる。クレセントは思わず目を瞑った。

「あなたたちねぇ、なにやってるのよ。ここは病院よ？　病院で怪我しようだなんて馬鹿じゃない？」
「……て、てめぇがそれを言うか、阿呆」
「同感だ……」

よろめきながら起き上がるアルベルとネイビス。これは本当に骨の一本や二本折れているのかもしれない。
クレセントはマリアには逆らうまいと胸の中で誓った。
マリアは大きな溜息を一つ。そしてネイビスに顔を向けた。

「まぁ、問題はアルベルよりもあなたのほうにあるわね。どうしたのよ？」
「……なんでもねぇ」
「なんでもないわけないでしょう」
「いや、俺が悪かった。すまなかったな、つい感情的になった。あんたに恨みがあったわけじゃないんだ」

ネイビスは土だらけになった服を払い、アルベルに頭を下げた。
そうしおらしく頭を下げられては、流石のアルベルも居心地が悪い。無造作に立ち上がると、舌打ちをして病院の中へ入っていった。

「相変わらずガラ悪いわね」
「マリア、歪のアルベルと面識あるんですか？」
「え、ええ……まぁ、そうだったかもしれないわね」

まさか一緒に創造主を倒した仲だ、とは言えず、マリアは適当に笑って誤魔化した。

「さ、そろそろ病院に戻りましょう」
「……わたし、少し家に帰ります」
「クレセント？」
「すぐに戻ります。クレア様をお願いします」
「お、おい！」

クレセントはマリアとネイビスに頭を下げると、足早に病院を去

っていった。
小さな背中はすぐに見えなくなり、沈黙だけが流れる。
それを破ったのは、マリアだった。

「なにやってるのよ」
「はあ？」
「追いかけなさいよ。好きな子をほっとくのがこの国の流儀なの？」
「なあっ！？」

ネイビスの顔がみるみる赤くなる。マリアと話すのはこれが初めてのはずだ。それなのにこの短い間にもう見破られていた。
ネイビスが赤くなった顔を手で覆っていると、マリアがその背中を叩く。

「って！」
「早くしなさい。両親が亡くなった家にあの子を一人行かせるつもり？」
「で、でもあいつだって一人に……」

『傍にいてあげるといいよ』

フェイトの言葉がネイビスの脳裏を掠めた。
ネイビスは両手で頬を叩くと、顔を上げて駆け出した。

「しっかりやんなさいよ」

マリアはその後姿を呆れながら見送ると、落ち着いた足取りで病院の中へ姿を消した。

※

真っ暗な世界だった。右も左も、上下の感覚さえ掴めない。
朦朧とする意識の中、フェイトは暗闇をただ歩き続けていた。
ここが何処かも分からない。どうして歩いているのかも分からない。ただ歩き続けなければならないと、頭が囁きかけてくる。
不意に今まで真っ暗で何もなかった世界に、散らばっているものがあった。

「銀の……糸？」

黒の世界によく映える銀。
フェイトはそれをよく見ようと足を進めた。
一歩、一歩。
足を進めるたびに、胸の動悸が激しくなった。
これ以上進みたくない。進まなければならない。
二つの感情が鬩ぎあって、足元がふらついた。
おぼつかない足取りで辿りついた場所にあったのは、散らばった銀糸だけではなかった。

「嘘……だ、ろ……」

フェイトはそれを震える手で抱き上げた。そして、力強く掻き抱く。
腕の中で青白い顔をしている女性。

「クレアっ！」

フェイトは叫んだ。

喉が壊れるほどに、大きく、強く。
世界の闇が一層濃く深くフェイトを包み、視界を覆った。

「――っは！」

目を開け、真っ先に視界に飛び込んできたのは、見慣れない天井だった。
汗でべっとりと濡れた髪が額につく不快感。乱れる息を整えながら、フェイトは辺りを見渡した。

「良かった。目を覚ましたんだな」
「ヴァン……」
「なかなか起きないから、もう目を覚まさないかと思ったよ」

ベットの傍の椅子に腰掛けていたヴァンは優しい笑みを浮かべて、フェイトに水を手渡す。
フェイトはそれを一気に飲み干し、額にかいた汗を拭った。

「僕は……シャロム邸に行って……そこで」

だんだんと頭が冴えてくる。
そして、弾かれたように飛び起き、ヴァンの肩を掴んだ。

「そうだ！　クレアは！？」
「無事だ。もう目も覚まして――」
「やっとお目覚めかしら？」

フェイトの声でもヴァンの声でもない澄んだ声が、静かな病室に

響く。フェイトも、ヴァンですら驚愕に見開いた目を入り口に向けた。

「そんな真っ青な顔しちゃって。どっちが怪我人なんだか分からないわね」

頭や腕に痛々しい包帯を巻いたクレアが、松葉杖に身を預けて立っていた。

ヴァンは慌ててクレアに駆け寄る。

「クレア！　まだ安静にしてない、と……」

「きゃ！」

ヴァンが目を丸くして、クレアが小さな悲鳴をあげた。

松葉杖が、音を立てて床に転がる。

「クレア……良かった……っ！　本当に――良かった！」

クレアを強く抱きしめたフェイトの口から、嗚咽が漏れた。

クレアは痛みに顔を顰めながらも、フェイトの髪を優しく撫でる。

「大丈夫。私はちゃんとここに居るから」

「ごめん……ごめんっ！」

守れなくてごめん。傷つけてごめん。目を覚ました時、傍に居てあげなくてごめん。

クレアを抱きしめたまま泣き出すフェイトを、クレアは優しい眼差しで見つめる。

その様子を見ていたヴァンは、クレアの肩をぽんと叩き、静かに病室から出て行った。

クレアは泣きじゃくるフェイトに身体を預けながら、その暖かさを感じていた。

「あなたもとんだ道化ね。ネイビスみたいにもっと素直に生きればいいのに」

クレアの病室を出たヴァンが待合室の椅子に腰掛けていると、その横に座る人物が居た。
眼も醒める蒼い髪の女性。
ヴァンは穏やかに微笑んだ。

「本当に貴女は鋭い方ですね」
「クレアは気付いてるの？」
「幸か不幸か、少しも」
「案外鈍いのね」

マリアは眉を下げてヴァンに微笑んだ。
その表情の意味するところをヴァンは図りかねなかったが、敢えて追求はしなかった。

「で、アイツの容態はどうなんだ？」

長い前髪をうっとおしそうに払いながら、アルベルが待合室に姿を現した。
マリアは組んだ足の上で頬杖をつき、不適な笑みを浮かべる。

「あら、あなたが他人の心配なんて珍しいわね？　それとも兄弟は好みも似るのかしら」

「殺すぞ」
「やれるものならやってみなさい」
「病院で乱闘は止めて下さい」

火花を散らすアルベルとマリアをヴァンが止めに入った。
アルベルとマリアはお互いに鼻を鳴らしてそっぽを向く。実はこの二人仲がいいのでは、とヴァンは思ったが口には出さなかった。もし口になど出そうものなら、その瞬間に口が持っていかれそうな雰囲気だったのだ。
ヴァンは一つ咳払いをして、アルベルに視線を向けた。

「それにしても、お久しぶりですね。兄さん」
「止めろ。気持ち悪ぃな。普通に喋りやがれ」

アルベルがあからさまに顔を歪めて手を振ると、ヴァンはやれやれと肩を竦めた。

「アルベルこそ、いい加減に喋り方を変えたらどうだ？　まだクソ虫とか阿呆とか言ってるんじゃないだろうな」
「……」
「言ってるわよ。それはもう口癖のように。貧困な語彙力よね」

答えないアルベルの代わりにマリアがさらりと答える。
アルベルは何か言い返そうと口を開いたが、本当のことなので何も言い返せず、結局口を閉じた。
それがおかしかったのか、ヴァンは控えめに笑った。

「ハハ。でも、変わってなくて安心したと言えば、安心したよ」
「おまえの方は随分と変わったみてぇだがな」

その言葉にヴァンの顔から笑みが消え、眼がすっと細められる。
だが、それも束の間。すぐにまた穏やかな笑顔が戻った。

「そうか？」
「なにがあった？」
「なにも。特に言う事はないさ」

ヴァンの笑顔は穏やかだったが、有無を言わさない威圧感を放っていた。

「さ、じゃあ俺はラッセル様の所に報告に行ってくるよ。クレアの容態も伝えたいし」
「そう」
「では、マリア様、兄さん。失礼します」

笑ってない笑顔をアルベルとマリアに見せ、ヴァンは待合室から出て行った。
開いた扉の向こうが、朝日に染まって明るく輝いている。鳥の鳴き声と教会の鐘の音が、不可解な騒動が起きたペターニに朝を知らせた。

※

同時刻、アーリグリフ城物見の塔。
そこから見える殺風景な雪化粧に彩られた景色をネルとルージュは見下ろしていた。

「ここに落ちてたっていったわよね」

「ああ。でもなんでこんな所に」

ネルは口元をマフラーに埋めて考えを巡らせる。しかし、考えても考えても思考は深みに嵌っていくばかりで、納得した結果は得られない。

ルージュも事情を知っているとはいえ、詳しいわけではない。

やはりマリアかフェイトを連れてくるべきだったとネルは顔を顰めた。

「あら、難しい顔してますね。ネール」

「――っっっ！」

「あだっ！」

手摺に肘をついていたネルの眼前に、突然漆黒の髪の女性が姿を現した。

ネルは驚きの余りにその場を飛びのき、真後ろに居たルージュにぶつかる。ドサリ、と二人は重なるように倒れ込んだ。

「あらあら。どうしたんですか、そんなに驚いて。――よいしょっと」

漆黒の髪の女性は不思議そうな声をあげて、軽い身のこなしで手摺の上に上がった。

ネルは口元を引きつらせながら、女性に向かって叫んだ。

「普通は驚きますよっ！」

「あ、おば様」

ネルがどいたことで解放されたルージュが、女性を見て嬉しそうな笑みを見せる。

女性――リーゼル・ゼルファーはルージュ向けて和やかな笑顔を向けた。

「久しぶりですね、ルージュちゃん」

「お久しぶりでぇすっ」

「お久しぶりじゃない！　母上、出てくるなら出てくるでもう少しまともな登場の仕方をして下さい！」

「ネルは朝から元気ですね。いいことです」

聞いていない。ネルの話など全く聞いていない。

ネルは心底疲れたように肩を落とし、眉間を押さえた。案の定、これでもかと言うほど皺が寄っていた。

「それで、おば様は何しに来たんですか？」

「ネルの顔が見たくなっちゃいまして」

「それはそれは。愛されてるね、ネルっ」

「五月蝿いよ」

頬に手を当てて微笑むリーゼルとビシッと親指を突き立ててウインクするルージュを見て、ネルは盛大な溜息を吐いた。

心なしか頭が痛い。

「それで、何の用なんですか？　わざわざ引きこもりの母上が屋敷から出てくるなんて、余程の理由があるのでしょう？」

「ちょっとネル、引きこもりとか言わないの。傷つくじゃない。私は愛しいネルに」

「会いに来たって言ってるじゃないの」

「ルージュ、母上」

ネルがニッコリと微笑む。ルージュの表情が固まった。

よくネルがクレアの笑顔は怖いと言うが、ネルの笑顔も相当怖い、とルージュは寒さとは別の理由で身を震わせる。
リーゼルも同じように固まっていた。愛娘の笑顔で固まる親。なんか嫌だ、とルージュは唸る。

「それで、何なんですか？」

ネルが腰に手を当てて、リーゼルを見る。
リーゼルは一旦眼を伏せ、すぐに顔をあげた。

「アドレーには放っておけと言われたのですが、一つ忠告を」

さっきまでのリーゼルとは一変した冷然たる態度に、ネルとルージュは息を飲んだ。
紫の瞳が鋭い輝きを放ち、二人を真正面から射抜く。
リーゼルは手摺の上で回転し、ネルとルージュに背を向け、

「赤眼の光に注意しなさい」

とだけ言い残し、そこから姿を消した。

「は、母上！」
「うそ、ここから地上まで何メートルあると――」

ネルとルージュが慌てて下を見下ろすが、リーゼルの姿は何処にもなかった。
雪の混じった風が、ネルの頬を冷たく冷やす。
ネルはルージュをチラリと見て、地面に視線を落とした。

「ルージュ……赤眼の光って……まさか」

「でも、そんなことあるわけ！」
「母上は……意味のないことは言わないよ」
「そ、うだけど……」

ルージュが口篭る。
それは、ネルの言葉が本当なのを知っているから。
いつもリーゼルは突拍子もない事を何気ない言葉で現すが、それは必ずしも何らかの形で現実のものとなった。
まるで、アペリスの予言のように。
ネルは一度軽く首を振ってから、ルージュの肩に手を置いた。

「とにかく、一度クレアに連絡しよう。確かアストールが居たはずだから、彼に伝令を頼むよ」
「そうね」

外套のフードを被り直し、ネルとルージュは物見の塔を下っていった。

その後、クレアへの手紙を書いていた二人の下へ、息を切らせたアストールが『クレア負傷』の伝令を持ってきたのは、それから数十分後のことだった。

1―11　過去

フェイトとクレアは身体を寄せ合うようにして、ベットに腰掛けていた。フェイトの涙はもう止まっていたが、その目は赤く腫れている。

「落ち着いた？」
「うん……」
「ほら、しっかりしなさい。これからやることは山積みなんだから」
「分かってる――クレア」
「何？」

フェイトが赤くなった目を擦りながら、クレアに向き直った。
クレアは腕に巻かれた包帯を見て、大袈裟ね、と呟いてフェイトを見る。
フェイトは少し躊躇って、クレアの手を握った。

「もう、僕を庇うのは止めて欲しいんだ」
「嫌」
「クレア！」

きっぱりと言い切るクレアに、フェイトは詰め寄った。
クレアの頑なな瞳が、フェイトを射抜く。

「じゃあ、フェイトは？　フェイトは同じ状況だったら私と同じことをしたでしょう？」
「それは――」
「ほらね。それで私にはするなって？　あなたの気持ちは分かるわ。私だってあなたが私を庇って傷つくのは嫌」

クレアはでもね、と続ける。

「分かるから……分かるからこそ、止められないのよ。いいえ、止める事が出来ないのが分かってる」

「……」

「だから、私は止めないわ。でも、その代わりに決めたの。全力であなたを守ってみせるって」

「でも、僕はっ」

フェイトは手で顔を覆って蹲った。

さっき見た夢が、頭の中にこびり付いて離れなかった。散らばる銀糸が、青ざめたクレアの顔が。

ロキシ、そしてアミーナやディオンが死んだときのような絶望感と虚無感が、フェイトを襲う。

人の命が失われることに対してフェイトは異常なまでに過敏になっていた。一種のトラウマになっているのだ。

蹲ってカタカタと震えるフェイトの背中に、クレアは手を置いた。

「フェイト？」

「嫌なんだ……これ以上誰かが死ぬのは……」

「……」

「大切な人がいなくなるのは……もう嫌なんだっ！」

フェイトの叫びは、クレアの胸に刃となって突き刺さった。

クレアはその端正な顔を歪ませ、唇を噛んだ。

分かっていた。フェイトが人の死を極端に恐れているのを。

分かっていた。優しい笑顔の裏で、彼はいつも震えていること。

分かっていた。その傷を癒すのがどれほど大変か。

でも、それでも、クレアは引くわけにはいかなかった。フェイトの傷を癒すことが出来なかったクレアの、最後の意地でもあった。

「ごめんなさい。それでも、約束は出来ないわ」

「っ」

「もし、もしあなたを助けられるのに助けなかったら……私は一生後悔する……」

クレアも涙を流していた。

「あなたを庇わないという約束は出来ないわ。でも」

フェイトが顔を上げる。

クレアはそのままフェイトの首に抱きついた。

「私は絶対に死なない。あなたを置いていなくなったりしないって、約束する」

「クレア……」

クレアはフェイトから身を離して、そっと額をくっつける。

至近距離で褐色と碧が交わった。

「大丈夫。私結構しぶといの。なんたってあのお父様の娘ですからね」

「……そうだね、そうだった」

「まだあなたは会ったことないでしょうけど、お母様なんてもっとすごいんだから」

「分かるよ。君を生んだ人なんだから」

クレアの笑顔が固まる。
至近距離でこの笑顔はキツイ。フェイトは慌てて目を逸らそうとしたが、なんの魔力か目が逸らせない。

「それはどういう意味かしら？」
「ごめん、嘘。きっと綺麗で落ち着きがあって気品ある人なんだろうね」
「――顔に嘘って書いてあるわ」
「え、嘘！？」
「嘘」

クレアの瞳が楽しげに揺れる。
フェイトも釣られて笑っていた。
何時の間にか、泣くのも忘れていた。
頭にこびり付いて離れなかったあの光景は、もう消え去っていて。代わりに「絶対に死なない」と言ったクレアの勝気な笑顔が映し出されていた。
何の確証もない口約束だったけど、フェイトにとっては何よりも大事で、どんな誓いよりも意味のある約束だった。

「ありがとう、クレア」

まるで呪縛から解き放たれた証のように、フェイトの瞳から落ちた透明な雫が白い床を鳴らした。

※

シャロム邸を彩る豪勢な庭の植物は、朝露を帯びてまるで宝石の

ように輝いていた。
ネイビスはそんな情緒的な光景に脇見もせず、シャロム邸に入っていく。
玄関から入りその広い屋敷を見渡したところで、足が止まった。
右を見ても部屋。左を見ても部屋。上を見ても部屋。

「ど、どこにいるんだよ……」

昨日初めてシャロム邸に足を踏み入れたネイビスがクレセントの自室など知るわけもない。大きく溜息を吐き、片っ端から調べることを決めたネイビスは、ふと視線を二階へあげた。

「ん？」

二階のシャロム夫婦の遺体があった部屋の丁度反対側にある部屋。そこから微かな物音がネイビスの耳に入った。
地下の事件があってから、一旦師団員は下がらせた。ならば、あの物音の主は一人しか居ない。
ネイビスはぐっと握り拳を作り、豪華な絨毯がひかれた階段を昇った。

ノックをしようと、手を挙げて、また下ろす。
さっきから何度目だろうか。自分の意気地無さに嫌気が差しつつも、またネイビスは手を下ろした。
どうしたものか、とネイビスが頭を掻いていると、絶えず聞こえていた物音が止み、大きな音がした。

「――っ、く」

そして、くぐもった声。

「クレセント！」

ネイビスは考える前に扉を開けていた。

そこには案の定、胸を押さえて床に倒れているクレセントの姿。

その表情は苦しみに満ちていた。ネイビスはすぐにクレセントに駆け寄り、そっと身体を抱き起こす。思っていたよりもずっと小さな身体。

クレセントの青白い手を、ネイビスはきつく握る。

「クレセント！　しっかりしろ！」

「う、ぁ――ネイビス……さま？」

「待ってろ。いま医者に連れて行ってやる！」

クレセントを抱きかかえ、そのまま駆け出そうとするネイビスをクレセントが止める。

「だい、じょうぶ……です」

「そんなわけあるか！　真っ青じゃねぇか！」

「お願い……です……少し休めば……なんとも、ないですから」

「クレセント……」

ネイビスの服を力の無い手で握り締め、クレセントはベットを指差した。その顔は真っ青で、言葉も切れ切れ。病院へ行かなければならないのは一目瞭然だった。

だが、ネイビスはクレセントを優しくベットに横たえた。

「もし、少ししてもよくならなかったらすぐに病院へ連れて行く。文句は言わせねぇ」

「……はい。ありがとうございます」

胸を押さえ、クレセントは苦しさ堪えながら微笑んだ。
ネイビスの切れ長の瞳が点になり、その顔が朱に染まる。

「――ッ！」
「どう、かしましたか？」

クレセントは片手は胸を押さえたまま片手は額の上に当て、その隙間からネイビスを見た。
その視線に気付いたネイビスがばっと後ろを向く。
そして、呟くように一言。

「な、なんでもねぇ」
「顔が……赤いようです、けど」
「なんでもねぇったらっ！　あ、あー、水！　水持ってきてやる！」
「あ、あの」
「大人しくしてろよ！」

ネイビスはクレセントの顔を見ないまま部屋を飛び出した。
残されたクレセントは額から手を離し、天井を仰ぐ。

「水差し、そこにあったんですけど……」

苦笑交じりの声。
クレセントはおもむろに手を顔の前に持ってきた。

「暖かい」

ネイビスに握られたそれは、春の日に包まれたように暖かく感じ

た。

クレセントが居る部屋の外。顔を真っ赤にさせたネイビスが、クレセント同様胸を押さえて扉に寄りかかっていた。

「あー……ちくしょ。クレセントのやつ……」

少し横に移動して、壁に寄りかかるようにして座り込む。

おもむろに自分の手を目の前に掲げる。あの時は必死で考えもしなかったが、確かにクレセントの手を握っていたことを思い出し、ネイビスは更に顔を赤くさせた。

苦しげに微笑んだ瞳が、頭の中でフラッシュバックする。

「初めて見た……笑った顔」

胸の高鳴りは、まだ収まりそうも無い。

※

「おい、そろそろいいか？」

「少しは人目も気にしてくれるかしら？　フェイト、お義姉様」

クレアの病室。呆れ顔のアルベルと半笑いのマリアが入り口の所でフェイトとクレアを凝視していた。

フェイトがぎこちな動作で二人に顔を向ける。

「いつから？」
「安心しなさい。最初からなんてベタなことは言わないわ。っていうか、見てたくないし」

冷めてた。どこまでも冷めていた。
お義姉様と呼ばれたことに顔を赤らめているクレアを尻目に、マリアとアルベルは部屋に入った。扉を閉め、鍵も掛けて。

「クレア、彼があなたに聞きたいことがあるそうよ」
「私に？」
「ああ」

アルベルは手近にあった椅子を引き、クレアの前に腰掛ける。勿論マリアの椅子を用意するなどと気の利いた事はしない。
後ろからフェイズガンを放とうとするマリアを立ち上がったフェイトが抑える。
アルベルの真剣な表情に、クレアはベットから起き上がろうとするが、手で制された。

「怪我人が気を使うな、阿呆」
「お気遣い有難う御座います。ではお言葉に甘えて」

クレアは微笑み、上半身を起こすだけに留めた。
後ろで漸くフェイズガンをしまったマリアが「随分とお優しいことね」と皮肉たっぷりに言うが、アルベルは無視を決め込んだ。
更に怒り狂う姉を、弟は必死に止める。フェイトが繰り出されるマリアの拳を避ける。が、同時に繰り出されていた左の拳がフェイトの顎に入った。
クレアはフェイトに小さくエールを送ると、アルベルの真紅の瞳を見つめた。

「それで、私に話とは？」
「俺の母親についてだ」
クレアの整った眉が動く。
意外な言葉にマリアとフェイトは争う手を止めてアルベルを凝視した。
クレアは包帯に巻かれた手を組み、瞳を向ける。その目は、クレア・ラーズバードのものではなく、シーハーツ軍総司令官のもの。
重苦しいほどの重圧に、フェイトの額から汗が流れた。あのマリアですらも、クレアに気圧されている。
しかしアルベルだけは涼しい顔で、その瞳を見返していた。
「どうしてそれを私に？」
クレアの声が静かな病室に響く。決して大きくはないが、その声も何ともいえぬ重圧を放っている。
アルベルの唇が薄く笑った。
「隠しても無駄なんだよ。聞いてるんだろう、俺の親父から。全てを」
「……」
「話せ。俺には聞く権利があると思うがな」
「知って、どうするおつもりですか？　これはシーハーツの内情にも深く関わること。生半可な気持ちで聞かれては――」
クレアは言葉を止めた。
ずっと見つめていたアルベルの真紅の瞳が、一瞬優しげな光を宿したのだ。

「理由がいるのか？」
「――いいえ、私の失言でした。お詫びします」
クレアは深く頭を下げる。
あのアルベルが親のことを気にするわけが無い。そういう考えが根付いていた。浅はかな、そして愚かな考えだった。
「にしても、おまえ、俺の親父とどういう関係だ？」
「はい？」
アルベルの少々照れを含んだ物言いに、クレアは目を丸くする。どういう関係、とはどういうことだろう。受け取り方によってはあらぬ誤解を招きそうな言葉だ。
実際、クレアは後ろから突き刺さってくるフェイトの視線をひしひしと感じていた。
「これだ」
アルベルが一枚のメモのようなものをクレアに手渡す。随分と年季の入ったものらしく、所々が黄色く変色していた。
クレアはアルベルに目をやってから、メモに視線を落とす。フェイトとマリアも後ろから覗き込んだ。
「……グラオ様」
クレアが手で額を押さえる。
「クレア、どういうことだよ！」
フェイトが叫ぶ。

「まさか――あなた年上趣味？」

マリアが口に手を当て、信じられないといった表情を浮かべる。

「違いますっ！　フェイトも誤解しないで！」

クレアはそれを必死に否定し、グラオを呪った。

八年前、雨降る森の中で一度だけ会った人。

メモには殴り書きしたような汚い字で、こう書かれていた。

『母親について知りたかったらクレア・ラーズバードを尋ねろ。あと駄目もとで口説いとけ。俺が認めるいい女性だぞ』

※

「僕も聞く。絶対に聞く」

「私も。面白そうだもの」

蒼髪の双子はそう断言した。

メモ騒動の後、ようやくフェイトを落ち着けたクレアは、アルベルに全てを話すと約束した。

そして個人に関わることなのでフェイトとマリアには席を外してもらおうと思ったのだが、これである。

フェイトは腕を組んでその場に座り込み、マリアは不適な笑みを浮かべてベットに腰掛けた。造りの良い木のベットは、二人分の体重を受けてもビクともしない。

「あのね、フェイト。これはアルベルさんとヴァンのプライベートに関わることなのよ？　マリアさんも」
「アルベルに人権なんかあるもんか。ヴァンにはあとで謝っておく」
「その通りよ」

酷い言い草である。
普段は紳士なフェイトも、クレアのことになると我を見失いがちな面があるのが玉に瑕だ。
アルベルはフェイトの頭を殴り飛ばした。

「斬るぞ、阿呆。――しかし、別に俺は構わん。ヴァンには口を出させん。そっちの内情とやらは知らんがな」
「いえ、アルベルさんがそう仰るなら構いません。それにフェイトやマリアさんにならお話しても構わないかもしれません。ですが、絶対に他言無用です。何しろこの話は関係者以外は陛下ですら知らないことなのです」
「そんなの許されないんじゃない？」
「はい。本来なら報告すべきことなのでしょう」
「ならどうして？」

マリアが驚きを隠せない様子でクレアに問う。

「理由は二つ。一つはこの件に関して物的証拠がないこと。確証もないことで国を混乱させるわけにはいきません。この事が公に知られれば、国民の大暴動が起こるでしょう」
「もう一つは？」

クレアが瞳を伏せる。

「私自身が、話したくなかった。信じたくなかった。陛下やネル、この国を心から愛している人達に知られたくなかったんです」
「だからといって隠すことが正しいとは思わないけど」
辛辣なマリアの言葉に、クレアは口元だけで笑った。
「その通りです。ですから、いま全てを打ち明けます。そして、この話を聞いたあなた方がどうするのかは、あなた方の自由です」
クレアは深く息を吐くと、手と手をを重ね合わせた。
そして、何か思い出すように天井を見上げる。
「さぁ、そろそろアルベルさんも痺れを切らす頃でしょうし、お話します。何から話せばいいでしょうか。……私がこの事実を知るきっかけから、かな」
そう、笑い混じりに言うクレアの瞼の裏には、幼き日の思い出。
クレアとヴァンが初めて出会ったのは、今から十年ほど前のこと――。

※

第一印象は、その赤い瞳。
その綺麗な力強い輝きに引き込まれそうになったのを、いまでも覚えている。
その日、シランドにある大きな屋敷で、光牙師団に新たに配属さ

れる数名の歓迎会が催されていた。本来ならこのようなことは大袈裟にやる必要など無いのだが、どこかのお偉いさんの息子が入ったらしく、こういった会場が用意された。

光牙師団の軍人に加え、シランドでも名だたる貴族達が自分の事業の話やらに華を咲かせている。歓迎会というより、貴族達の功績の自慢会、といったほうがしっくりくるのかもしれない。

この時若干十四歳にして三級構成員という地位に就いていたクレアの瞳はそのぼんぼんの息子などではなく、ある一点を捉えていた。

落ち着いた金の髪に、赤い瞳。精悍な顔。まだあどけなさの残る少年にクレアの目は一瞬奪われた。

「では、ここに居る七名を光牙の一員として歓迎しよう！」

光牙師団〈光〉の師団長アドレー・ラーズバードが声高らかに言った。

グラスが合わさる音。騒がしい声。沸き立つ人々。新参者に向けられる視線。

クレアが少年について誰かに尋ねようとした時、そのパーティに参加していた貴族達の会話が耳に入った。それは、歓迎の言葉などではなかった。

ひそひそと声を潜めて繰り出される言葉に、クレアは顔を顰める。

「ノックス……あの疾風の団長と同じではないか」
「まさかスパイか」
「でも、ラッセル様の養子らしいわよ」
「……どうしてまた。なんにせよ、奴には注意したほうがいいな」
「アーリグリフ――施力は？」
「それなりにあるらしい」
「しかし、アーリグリフの将の息子など……」

クレアはかぶりを振った。またか、と。
シーハーツの傾向は貴族社会。血筋第一。どんなに無能な者でも血筋さえ良ければ高い地位に就き、有能な者が溺れていく。
そして、そんなシーハーツを構成する貴族達の閉鎖的な考え。シーハーツの民以外は野蛮だと決めつけているのだ。
特に宗教国家のシーハーツから見て、無宗教のアーリグリフはどのように映っているのか。考えるまでも無いことだ。

「クレア、君も注意しなさい」
「はい、分かりました」

不意にかけられた声に、クレアは笑顔で頷く。
内心はその言葉に苛立ちを覚えているが、クレアか被る仮面は厚く、気付かれることはない。気に入らないからといってここで食って掛かるほど、頭も悪くなければ子供でもない。クレアは軽くお辞儀をして、その声の主の下から離れた。
クレアは顔見知りの貴族達に適度な社交辞令を済ませ、適当に会場を回っていると、一人テラスの所で佇む少年を見つけた。
どうしてこの少年がそんなに気になるのかは分からない。でも、クレアはこの少年と話してみたいと思った。
手にジュースを二つ持って少年のもとへ行こうとした時、後ろから伸びてきた手に肩を掴まれた。

「クレア・ラーズバードさんだよね。師団長のご息女の」

クレアが振り返ると、綺麗な藍色の髪の少年が笑顔で立っていた。
その顔はよく知っている。大貴族の息子で、今日の主役だ。確か四級構成員に配属されたはずだが、真新しい軍服を着こなし、手にグラスを持っている姿は軍人と言うよりも貴族そのものだった。
クレアは仮面の笑顔を浮かべて微笑んだ。

「ええ。ジル・S・フランさん」
「あは、僕のこと知ってるんだ。光栄だな」

ラーズバード家もシランドでは有数の大貴族に入るのだが、上には上がいる。フラン家はシーハーツで五指に入る大貴族である。
クレアは決して人を血筋や家柄で判断しない。それはクレアの信念だった。
だが、同時に現実の厳しさや愚かしさを身に染みて分かっていた。
こんなことをアドレーが知ったら怒り狂うだろうが、クレアは父の立場の為、嘘を吐く。ここで下手なことを言えば、責任を取らされるのはアドレーも同じだからだ。
クレアは偽りの笑顔と偽りの敬意を晒した。

「フラン家を知らないほうが失礼というものですから」

クレアがまた微笑むと、ジルも嬉しそうな笑顔を浮かべた。
そしてクレアの顔をじっと見つめる。

「うん。やっぱり可愛いね。見合い写真なんかよりずっと」
「ありがとうございます」

クレアはうんざりとした。またあの父は嫁に出す気もないくせに見合い写真をバラまいたのか、と。
そんなクレアの気も知らず、ジルはふとクレアの手元に目を落とした。

「それ、どうして二つ持ってるんだい？」
「え、ああ。彼にあげようと思って」

クレアは後ろを振り向く。その視線の先に居るのは、テラスで夜風に吹かれている金髪の少年。

「そういうわけなので、失礼します」
「待ってよ」
「何でしょう？」
「僕と踊ってくれないかな？」

ジルがクレアに手を差し出す。
綺麗な手だった。剣を握った形跡すらない手。
きっとこの少年は軍属に入っても戦争に駆り出されることは無く、あったとしても安全な位置から戦況を眺めるだけなのだろう。豪勢な椅子に座り、高みの見物をしているジルがクレアの脳裏にありありと浮かんでくる。
フラン家は代々軍人の家系。しかし、功績をあげたものなどいはしない。
地位と権力のあるものだけが、上に昇ってくる。
クレアはジルに見えないように顔を歪め、その誘いをやんわりと断った。

「申し訳ありませんが、またの機会に」
「どうして？　僕が誘っているのに」
「踊りたい気分じゃないんです」

ジルのしつこさに、だんだんとクレアも苛立ってくる。決して悟られるような真似はしないが、それでも語尾は少し上がった。

「いいじゃない。一回くらいさ」
「ですから――」
「あんまりシツコイと嫌われる」

決して低くは無いが、落ち着いた声がクレアとジルの間に割って入った。
驚き見開かれたクレアの瞳に映る、輝く金と深い赤。
いつの間に移動してきた金髪の少年が、ジルの腕を軽く掴んでいた。

「君は、確かラッセル様のところの――なに、僕の邪魔をするのか？」
「あんた、さっきからこの子が嫌そうにしてるの気付かない？」
「え」

クレアはまたも驚いた。
自信はあった。完璧に感情を隠しているつもりだった。

「いくら大貴族とはいえ、クリムゾンブレイドの娘に対してやりすぎだろ？　それにこの子の父上の性格を知っているなら、そろそろ引いたほうが身のためだと思うけど」

その言葉にジルの動きがピタリと止まる。

「……そうだね、今日の所は諦めるよ」

クレアの父親、現クリムゾンブレイドのアドレー・ラーズバードは娘溺愛で有名なのである。娘の為というなら、国一個潰してしまうというのも過言ではないほどだ。
それに、ジルも貴族の息子。身の振り方くらいは心得ている。ジルは一息吐いて、金髪の少年の腕を振り払った。爽やかな笑顔をクレアに向け、大人の中に姿を消していった。
クレアは暫く呆然としていたが、やがて弾かれるように少年に頭

を下げた。

「ありがとう。どうやり過ごそうか困ってたの」
「いいよ。それより、それくれないか？　喉渇いちゃってさ」

少年は喉に手を宛がってクレアの持つグラスを指差した。
クレアが微笑んでそれを手渡すと、少年の顔が穏やかな笑みを浮かべた。

「なんだ。そんな笑い方も出来るんだ」
「え？」
「ずっと見てた。この子も他の奴らと同じで嘘の笑いしかしないのか、って」

少年はグラスのジュースを煽り、口元を手の甲で拭った。
そして、クレアの瞳を覗き込み、また笑った。

「でも違った。君の笑った顔、すごく綺麗だ」
「っ！」

クレアの顔が少年の瞳に負けないくらい真っ赤に染まる。
可愛いとか綺麗とか、男の子に言われるのが初めてなわけではない。
が、こんな綺麗な表情で笑う男の子は、クレアにとって初めてだった。
「あ、そういえば自己紹介まだだったっけ」
そんなクレアを尻目に、少年は明るい口調で話を進める。

「俺はヴァン。ヴァン・ノックス」
「クレア・ラーズバード、です」

クレアはそう答えるのが精一杯だった。
ヴァン、と名乗った少年は屈託の無い笑顔を見せ、クレアの手を握る。

「よろしく、クレア」

その手は傷だらけで皮の厚い、剣士の手だった。

1―12　光の中に闇

「ちょっとクレア、この馬鹿が過去の出来事に嫉妬してるんだけど――鬱陶しいから蹴っていいかしら？」

そこまで話し終えクレアが一息ついた所で、マリアが呆れたような声で言った。

マリアに促されるままにクレアがフェイトを見る。物凄い仏頂面が目に入り、クレアは思わず顔を逸らした。そして、顔は逸らしたまま、手だけでマリアに合図を送る。やっていい、と。

次の瞬間に耳に入った確実に骨に響いているであろう音と共に聞こえた呻き声を無視し、クレアは一つ咳払いをした。

「それから私とヴァンは何事も無く、順調に任務をこなしていきました」

「……話の端を折るようで悪いんだけど、ちょっといいかしら？」

手を軽くぽんぽんと叩きながら、マリアは再びクレアの横に腰掛ける。

クレアは首を傾げて、手を軽く差し出した。

「なんでしょう？」

一瞬の沈黙。花瓶に飾られたパルミラの花が傾いた。

「フランね――私の記憶が間違ってなければ、〈光〉に居るのは女じゃなかった？」

「ええ、セフィリア・S・フラン。――ジル・S・フランの妹です」

「じゃあ彼は――」

「死にました」

クレアの声ではない。まだ幼さの残る高めの声がクレアの横、マリアの背後から聞こえた。

風がクレアの髪を撫で、パルミラの花を揺らした。突然の風と声にマリアとクレアは目を見張り、クレアのすぐ横にある窓を振り向く。

肩口までである深い藍色の髪と瞳。右の横髪は小さな三つ編み。額に黒いハチマキらしきものを巻いた少女が、室内に足を垂らした格好で窓枠に腰掛けていた。

「セフィリア！」

クレアが声をあげた。

「へぇ、この子が有名な最年少の一級構成員、ね」

マリアは珍しいものでも見るように窓際に腰掛けるセフィリアを眺めた。

セフィリアは冷ややかな笑みをマリアに向け、すぐ視線を窓の外へ移す。

「二年前、アーリグリフとの交戦中に別働隊を指揮していた兄は途中で恐れをなして逃げ出したんです。部下を捨て、一人で。結果、部下は全員死亡しました」

アルベルが頭に手を当て、何か思い出したように顔を上げた。

「思い出しましたか、歪のアルベル。そうです、指揮官を失った烏合の衆は貴方の率いる漆黒の特殊部隊に壊滅させられました」

「ああ、あの歯応えの無かった連中か。あの時は随分と興ざめした

ものだ」

アルベルが高圧的な笑みを作ると、セフィリアは冷笑を浮かべた。

「そう、その結果兄はフランの名に泥を塗り、挙句両親から勘当され――自殺しました」

「自殺！？」

「元より親のスネに齧りきりの人でしたから。一人で生きていくなど出来るはずもありませんね」

やっと起き上がってきたフェイトに一瞥もくれず、セフィリアは言う。まるで他人事のような口振りだった。そして、この話は終わりとばかりに口を閉ざし、軽い身のこなしで室内に足を踏み入れる。

セフィリアはクレアに対し頭を下げ、手に持っていた白い花の束を差し出した。

「申し訳ありません、クレア様。大変なときにあなたのお傍にいることが出来ず」

「そんなことないわ。あなたにはあなたの任務があったんだから。聞いたわよ？　一ヶ月はかかるって言われてた魔物駆除、半月で終わらせたそうじゃない。それも予定の半分の人数で」

クレアは、ありがとう、と言って花束を受け取る。それをフェイトがさり気なく受け取り、新しい花瓶へと生けた。

「〈炎〉がディルナを出してくれましたから、それほどの苦労はありませんでした」

「ディルナって……あのでこぼこ三姉妹の？」

「施力を除けばトップクラスの者です。正直、今回の任務の大半は彼女の功績です」

「そう、なんにしてもお疲れ様。明日は休みを取っていいわ。全然休んでないでしょう？」

クレアが心配そうにセフィリアの顔を覗き込むと、凛とした表情の影にはっきりと疲れが見て取れた。

しかしセフィリアは首を横に振った。

「クレア様が仕事を出来ない以上、ヴァンだけに任せてもおけません。クレア様の仕事は重要案件以外は私がやります。それ以外は三柱にお願いすることに――フェイト様、マリア様、お願いできますか？」

「僕は構わないよ」

「そうね。例の件もネル達が戻るまではお預けでやることないし」

「では、お願いします」

セフィリアはフェイトとマリアに軽く頭を下げ、窓枠に手を掛けた。クレアがセフィリアの服を掴む。

「そういえばセフィリア、あなた何時からそこに？」

「安心してください、何もまずい事は聞いていませんし、見てもいません。フェイト様が吹っ飛んだ所辺りからです」

「よりによってそこか……」

淡々と言うセフィリアの言葉に、フェイトは少し顔を赤くして項垂れた。

セフィリアは口だけに微かな笑みを浮かべ、窓枠から飛び降りる。窓からちょこんと顔を出し、セフィリアは整った眉をやや吊り上げて言った。

「では、私は王都に戻ります。クレア様、くれぐれも無理して早期

退院などなさらないように。医師からは最低でも三日と聞いていますから、それより早く退院なさったら強制的にでも戻っていただきます」

「どうも病院って好きじゃないのよね。落ち着かないっていうか、退屈っていうか」

クレアが肩を竦めると、セフィリアは毅然とした態度でそれを嗜めた。

「子供みたいなこと言わないで下さい。三日程度私とヴァンでなんとかなります」

「仕方ないわね。じゃあお願いするわ。でも私が復帰したらあなたには休みを取らせますからね」

「承知しました。それでは」

クレアの茶目っ気たっぷりの笑みにセフィリアは微笑みを返し、藍色の髪を揺らしながらペターニの雑踏に姿を消した。

※

「さて、三日間の余裕も出来たことですし、ゆっくりお話しましょうか」

セフィリアの姿が完全に見えなくなった頃、クレアが苦笑混じりに言った。

「三日間の余裕があるのはあなただけよ」

「そうでした」

マリアが嫌味たっぷりに言うが、クレアは余裕の笑顔で返す。ここら辺が年の差というものだろうか、とフェイトは思ったが恐ろしくて口には出せない。

「それにしても忠犬みたいな子ね――あなたに対してだけ」

「ええ、あの子にも色々あるんです。あれでも結構苦労してきてるんですよ」

「そうね。例え兄の失敗だったとしても、その妹にバッシングがいかないとも限らないし。この名誉ばかりを気にする貴族社会のトップなら妹に責任を取らせようとしたでしょうしね」

つまらなそうに語るマリアを見て、クレアは小さく拍手を送った。

「……その通りです。本当は、あの子は軍に入るような子じゃないんです。打たれ弱くて、繊細で。でも人一倍責任感が強いから、なんとかフランの名誉を守ろうと努力してきたんです。いまじゃ次期師団長候補だとか言われてますけど、全部努力の結果なんですよ」

「なんかネルに似てるわね」

「そうですね。そうかもしれません」

クレアが困ったように眉を下げた。

「おい、続きをさっさと話せ」

そこにアルベルが痺れを切らしたような口調で入ってきた。

クレアは「そうでした」と手を合わせ、アルベルの瞳を見つめた。

「それから私とヴァンは1年間共に過ごしました。たったの一年ですが、辛い訓練、命がけの任務。これらを一緒に乗り越えてきた私

達は、お互いを心から信頼していました。ですが私達が二級と三級構成員になった時、ある事件が起きました」

クレアの表情が曇った。アルベル、フェイト、マリアも固唾を飲んでクレアの声に耳を傾ける。

たっぷり十秒間の沈黙を置き、クレアは口を開いた。

「――ヴァンが、傷害事件を起こしたのです」

※

その日はバケツをひっくり返したような雨の降る日だった。時折雷が轟き、薄暗い修練施設に一瞬の閃光を降り注いでは消えた。降水量も並みではなく、既にいくつかの河川が氾濫している。土嚢の補強などで手は打っているが、このままの状態が長く続けば、それだけでは危ういだろう。

クレアは手に持った訓練用の刀を振る手を止め、窓の外に目をやった。葉っぱや枯れ枝などが混じった雨が窓を容赦なく叩きつけている。

「嫌な雨ね」

クレアはポツリと言葉を漏らす。

「何か……嫌な予感がする」

クレアはおもむろに自分の胸に手を当てた。何時もと変わらぬ速さの心音。

気のせいだ。
そう思い、クレアが胸元を一度ぎゅっと握り、頭を振って刀を握りなおした時だった、

「クレアは居るか！？」

〈光〉の一級構成員の男性が、血相を変えて入ってきたのだ。
クレアの心臓が一度大きく脈打った。すぐさま刀を鞘にしまい、男性に駆け寄る。男性に一歩近づくたび、胸に渦巻く不安が一層大きなものとなった。

「なにか御用でしょうか？」
「すぐにシランド城に。団長がお呼びだ」
「お父様が？」
「とにかく急いで行くんだ」

そう言って男性はクレアに外套を差し出したきり、何も言おうとはしなかった。
クレアはそれを不審に思いながらも手早く外套を羽織り、修練施設を飛び出した。予想外に強い雨と風。しかし、クレアには立ち止まる余裕など無かった。胸騒ぎがどんどん強くなり、一刻も早くシランド城へ行きたい気持ちで一杯だった。
外套のフードを被り直し、クレアは全速力で駆け出した。

「クレア・ラーズバード、参りました」

シランド城にある光牙師団団長の執務室の扉を開き、クレアは膝を曲げた。ポタリ、と髪についた雫が床に落ち、染みを作る。
自らのデスクの椅子に腰掛けていたアドレーはガタリと音を立て

てて立ち上がると、手に持ったタオルでクレアの髪を拭いた。丁寧さの欠片もない拭き方だったが、それがアドレーらしくてクレアは小さく笑ってしまった。

アドレーもそんな娘の笑顔につられるように笑みを見せ、雨に濡れてしっとりとした銀の髪を撫でる。

「クレア、落ち着いて聞くのだぞ」

「はい」

二人以外誰も居ない部屋に、アドレーの少ししゃがれた声が重く響いた。

「ヴァンが――人を刺した」

「え……？」

クレアは何を言われているのか理解できなかった。

ただアドレーの言葉が頭の中をぐるぐると駆け巡るだけで、何も考えられない。

呆然とするクレアの頬にアドレーは大きな手を当てる。冷えたクレアの肌がじんわりと熱を取り戻す。

アドレーはもう一度繰り返した。

「いつも通り師団兵達が訓練をしている時だった。ずぶ濡れになったヴァンが急に姿を現して目に前に居た師団兵を斬ったのだ。幸い処置が早かったお陰で命に別状はないが……」

「どうして……そんなこと」

「分からん。あやつがこんなことをする奴でないのはわしも皆も重々承知じゃ。だが、あの時のヴァンの目は……まるで死人のようだったそうじゃ」

クレアの頬に当てられたアドレーの手が震えている。
震えたいのはクレアも同じだった。しかし、クレアの頭は本来の冷静さを取り戻しつつあった。

「それで、ヴァンはどこへ？」
「それがわしが止めるのも聞かずに飛び出していきおった。おそらく、シランドにはおるまい」

力無く項垂れるアドレーを見て、クレアは顔色を変えた。
部屋に入ってきたときから感じていた違和感。アドレーが上着を着ているのだ。クレアはそっとアドレーの腹へと手を伸ばすと、アドレーはすぐさまその手を掴んで止めた。

「やっぱり――怪我をなさってるんですね」
「なに、掠り傷じゃ」
「ヴァンですか？」

クレアの瞳が揺れる。
アドレーは平静を装いつつ、口元に笑みを浮かべた。

「情けないものじゃ。皆には言う出ないぞ。わしが刺されたことは誰も知らん」

クレアは頷いた。
師団長を刺したなどとあっては、たとえいかなる理由があろうとも通常の処罰などでは済まされない。
クレアはアドレーに心の中で感謝しながら、意を決したように立ち上がった。

「私がヴァンを探してきます」

「駄目じゃ。この雨で上流に巣食う魔物共がこちらに流れてきておる」

アドレーも同じように立ち上がり、クレアの行く手を遮った。

事実、シランド近辺では見られないはずの魔物の目撃情報は多数入っている。現在はシランド城門前に師団兵達を待機させ、最低限街に入れないようにはしているが、外は分からない。

「ですが、このままではヴァンが襲われる危険性もあります。大丈夫です。必ず戻りますから」

「全く、頑固な所はあいつにそっくりじゃわい」

アドレーは大きく息を吐いた。

「お父様には言われたくないですけどね」

「絶対戻ってくるのじゃぞ――ヴァンと共に」

その言葉にしっかりと頷いたクレアは、まだ湿り気を帯びている外套を身に纏って再びシランドを後にした。

目指すはシランドの西方にある、フォスターの森。別名死神の森と呼ばれ、滅多なことでもない限り軍人でも立ち入らない森である。

どうしてそこを目指すのかは分からない。だが、そこに行けばヴァンに会える気がした。

アドレーから譲り受けた刀を片手にしっかりと握り、クレアを死神の森へひた走る。

粘着性のある土が、足にべっとりと張り付いてくる。すっかり水を吸ってしまった外套は重く、足取りも自然と緩慢になった。

死神の森の異名に相応しいほどに絡まりあい、奇妙な造形を作り

出す木の蔓がクレアの行く手を阻んでいる。クレアはそれらを刀で薙ぎながら、おぼつかぬ足取りで暗い森の中を進んでいた。

「ヴァン……どこに居るの？」

既に喉は枯れてしまった。痛む喉を片手で押さえつつもクレアは足を止めなかった。ここで引き返せば、もう二度とヴァンに会えなくなる。そんな予感がした。

クレアは随分と前に枝で斬った足を引きずりながらも、しっかりと前を見据えていた。もう足の感覚はない。こんなところを魔物に襲われでもしたら一貫の終わりだというのに、やはり引き返す気に離れないのだ。幸いここまで魔物には一度も会っていないが、この先もそうとは限らない。

クレアが顔を顰め、髪から滴り落ちる水滴を拭ったとき、遠くに金が揺らめいた。

「ヴァンっ！」

クレアは叫んでいた。枯れたはずの喉が悲鳴をあげる。

足を引きずりながら必死に走った。見失わないように。見逃さないように。

「ヴァン……！」

徐々に金が鮮明に見え、その端正な横顔もはっきりと見えるようになった。

クレアは力を振り絞って駆けると、今まで視界を覆っていた木々や蔦が無くなり、広い空間に出た。森の中にぽっかりと空いた穴のようなそこは、元々あった空間ではなかった。

明らかに人の手によって破壊されたもの。木は乱暴に薙ぎ倒され、

蔦が細切れになってそこら中に散らばっている。その散らばる木や蔦の中に既に動かなくなった青い小鳥の雛の姿を見た時、クレアの中で何か熱いものがこみ上げてきた。

「ヴァン……」

クレアは薄緑を杖代わりにしてゆっくりと金の髪の少年に近づく。クレアとヴァンの距離が限りなくゼロになった時、ヴァンは漸くクレアに目を向けた。クレアはその冷たい瞳に背筋が震えたが、ぎゅっと手を握り締めて耐えた。

「……どうしてあんなことをしたの？」

「クレア、この国は腐ってると思わないか？」

クレアの質問には答えず、ヴァンは乾いた笑いを漏らした。くつくつと喉の奥で笑っている。

「腐ってる。汚いよ、この国は」

「――ヴァン、一体どうしたの？」

「俺が刺した奴、どうなった？　死んじゃった？　団長は？」

「！！」

クレアは無意識のうちに動いていた。鈍い音がクレアの耳に響き、ヴァンの口内に鉄の味が広がった。

整った眉を吊り上げ、クレアは頬を真っ赤に染めるヴァンを睨む。

「いい加減にしてよ！　こんなのあなたらしくないわ！！」

「……」

「こんな――こんなことして……一体何になるって言うのよ！　あなたは私の知ってるヴァンじゃない！！」

「――おまえに、俺の何が分かるんだよ」

低く、そして冷たい声。

燃えるような真紅の瞳が、クレアを容赦なく貫いた。

と、同時にヴァンが素早く腰の剣を抜きクレアに切りかかる。クレアは咄嗟に薄緑の鞘でそれを受け止めるが、踏ん張りの利かない足でヴァンの重い斬撃に耐えられるはずも無い。クレアの身体は勢いよく吹き飛び、太い木の幹に叩き付けられた。

「か、は……っ」

強く打ち付けられた肺から空気が漏れる。

クレアはそのままずるりと座り込み、その手から刀が落ちた。

ヴァンはふらりとクレアに歩み寄って薄緑を蹴飛ばし、膝をついてクレアの顔を覗き込んだ。苦渋に満ちたクレアの表情を見て、ヴァンの口元が一瞬強く結ばれる。

「知った風な口利かないでくれ」

「な……で……」

「クレアには分かるか？　絶望を味わった奴の気持ちが」

自嘲めいた笑みを漏らし、ヴァンは下を向いた。

クレアの顔を見ているのが辛かった。

シーハーツが憎い。その感情は本物。でも、目の前の少女に対する気持ちも本物。

「頭が――おかしくなりそうだよ。なにもかも壊してやりたい。でも、出来ない」

何もかもを破壊すると言う事は、クレアをも壊すと言う事だから。

ヴァンは顔を上げた。

「――殺してくれ、クレア」

先程の自嘲めいた笑みは消え失せて、変わりになんともいえない表情が姿を現した。

クレアが目を見開いた。

「な、に……言っているの？」

「気が、狂いそうなんだ。この国に、自分の愚かさに反吐が出る。早く解放されたい」

「――ふざけないで」

クレアがヴァンを睨み付ける。滅多に見たことのない、クレアの本気で怒った目だった。クレアは一度咳き込んでから、ヴァンの胸倉を掴んだ。

「あなたがどうしてそんな風になったかなんて知らないわ！　でもね、このまま死ぬなんて許さない！」

「――じゃあどうしろっていうんだよ！？　どうせ俺にはもうなにも残っちゃいないんだ！　母さんも、妹も！　全部シーハーツに奪われたんだ！」

「どういう、こと……？」

クレアの動きがピタリと止まる。ヴァンは荒い呼吸を繰り返しながら、泥水を跳ねさせながらその場に座り込んだ。

「殺してくれ……頼むから」

縋る様な声。クレアは拳を握り締めた。

「なら、私を殺しなさい」

ヴァンが弾かれたように顔を上げる。目に映ったのは、ヴァンが落とした剣の柄を真剣な表情で差し出すクレアの姿。

「私もあなたの憎むシーハーツの人間。それに、私を殺せば法があなたを裁いてくれるわ」

「ば、馬鹿なことを言うな！」

「お父様や他の人は刺せても私は刺せないの？　あなたの憎しみってその程度のものなの？　そんなものでお父様を刺したっていうの！？」

「違う！」

ヴァンは剣を奪い取り、クレアの身体を地面に押し倒した。泥水が跳ね、クレアの銀髪とヴァンの金髪を汚す。

クレアの喉元には、白銀に輝く刃が突きつけられている。そのまま振り下ろせば、その脆い喉は容易く切り裂けるだろう。しかし、クレアは動かなかった。ただ、曇りのない瞳で真っ直ぐにヴァンを見つめている。

束の間の静寂。降りしきる雨は容赦なく二人を濡らしていった。

「違う――俺は……」

ヴァンの剣を持つ手がカタカタと震え出した時、クレアの唇が動いた。

「私はあなたを信じてる」

ヴァンの口が金魚のように開閉するが、音を発することはない。

クレアは酷く穏やかな口調で続けた。

「だってヴァンは何時だって私を守ってくれた。信じてくれた。だから私もあなたを信じてる」

「……」

「私はあなたを救いたい。死しかあなたを救えないなんて信じたくない。だから、話して欲しい」

クレアの手がヴァンの頬に伸びる。ヴァンは身を強張らせるが、決して振り払おうとはしなかった。

「何があったの？」

クレアの優しい瞳がヴァンを真っ直ぐに見つめる。

ヴァンの顔が悲愴な面持ちに変わり、唇がワナワナと震えだした。

「おれ、は……」

ヴァンの手から白銀の剣が零れ落ちる。それはクレアの顔の真横を通り、白い肌に小さな傷をつけて地面に突き刺さった。

クレアは雨で顔に張り付いたヴァンの前髪を軽く払い、その頬を優しく撫でた。

真紅の瞳から透明な雫が零れ、クレアの頬に落ちた。クレアは優しい笑みを浮かべ、泣き崩れるヴァンを抱きしめる。

「だいじょうぶ」

雨の音さえ掻き消すような、澄んだ声。

それはヴァンの知るどんなものよりも優しく、そして暖かな響きだった。

※

クレアは意識を失ったヴァンを抱きしめたまま、呆然とその場に座り込んでいた。正直、足の痛みとヴァンに攻撃された痛みとで意識を保っているのもやっとの状態だ。

相当疲れていたのか、ヴァンが起きる気配はない。結局何があったのかも聞けずじまいなのだが、それはヴァンが起きてから聞けばいいと納得し、とにかくこの状況を打破する方法を見つけようとクレアは頭を働かせていた。

先程から回復術をかけてはいるのだが、弱りきった体力でかける回復術などたかが知れている。とてもじゃないがヴァンを担いでこの森を抜ける体力などない。

加えて、こうしている間にも何時魔物が襲ってくるかわかったものではない。忘れていたが、ここは死神の森なのだから。

「とにかく、このままじゃヴァンが風邪を引いちゃう」

クレアがとりあえず雨の当たらない木の下にでも移動しようと、ふらつく足を立てた時だった、

「俺の倅が迷惑をかけたようだな」

深く被った外套のフードの隙間から、ヴァンと同じ金の髪と翡翠の瞳を垣間見せた男性がクレアの正面に姿を現した。

クレアは小さく首を振った。

「いいえ、とんでもありません――グラオ・ノックス様」

男は声なく笑い、フードを取った。

そこにあったのはアーリグリフ三軍〈疾風〉の軍団長にして、ヴァンとアルベルの父親グラオ・ノックスだった。

「アドレーの娘か。賢そうな顔だ。奴に似てなくて安心したぞ」

クレアは苦笑するしかない。

「どうしてここに？」

「ああ、それは――いや、それよりも風邪を引く。歩けるか？」

クレアが頷くと、グラオは口元に笑みを浮かべて、無理はするな、と告げ、ヴァンを担いで森の外へと歩き出した。

途中何度か魔物に出会いはしたが、全てグラオが剣一閃で薙ぎ払った。その圧倒的な強さは疾風団長の名に恥じないものだった。

クレアの怪我を気遣いながら歩いたのでだいぶ時間はかかったが、漸く森を抜けたグラオとクレアは、近場に廃屋のような家を見つけ、ひとまずそこの腰を下ろした。

比較的綺麗なベットにヴァンを寝かせ、グラオはクレアに座るように言う。クレアもそれに従い、手近な椅子に腰掛けた。

グラオは懐から小さな麻袋のようなものを取り出すと、クレアの足元に膝をつく。

「どれ、ちょっと靴脱いでみてくれないか？」

「は、はい」

言われたとおり、クレアは靴を脱いだ。

グラオはその真っ赤に染まった傷口を見て、顔を顰めた。傷口から黴菌が入り、化膿している。ここに来るまでも、気が遠のくような激痛だったが、クレアはそれを隠していた。

グラオはそれに気付いてやれなったことを悔やみつつ、そっとクレアの足を取った。

「酷いな。辛かっただろう」

「いえ、慣れてますから」

「ったく、シーハーツの女は強いな。だが、女の子がそんなんじゃいけないぞ」

そう言って快活な笑顔を見せるグラオを見て、クレアは吹き出した。

グラオの目が点になる。

「どした？」

「い、いえ。お母様から聞いていた通りの方だったもので……つい」

「シャロンか。アイツはまたろくでもないことを娘に吹き込みやがって」

グラオはまるで子供のように顔を顰め、ぶつくさ言いながらクレアの足を清潔な布で拭いた。

そして、麻袋から塗り薬を取り出すと、それを患部へと塗っていく。ピリッとした刺激にクレアは小さく呻き声を漏らした。

「――っ」

「すまんな。少し痛いが効き目は保障する。君の国の術に負けないくらいのとびきり良い薬だ」

「いつも持ち歩いているんですか？」

「うちのもう一人のワルガキが怪我ばっかりするからな……よし、

これでいい」

思ったよりもずっと綺麗に巻かれた包帯を見て、クレアは舌を巻いた。

以前父に巻いてもらった包帯は包帯の意味をなしていないものだったのだ。ただだからといってそれを巻きなおす気には何故かなれなかったのだが。

「にしても女の子に怪我させるなんて――後で根性叩き直してやる」

「浅いですし、平気ですよ。ほうっておいたら治ります」

「だからそういうころは……いや、やはりアドレーとシャロンの娘ってことか」

髪をくしゃりと手で押さえ、グラオは乾いた笑いを零した。そして新しい布を手に取ると、クレアの泥や雨で汚れた顔と髪を丁寧に拭いていく。クレアは擽ったさを覚えながらも、大人しくしていた。

「折角の美人が台無しだな」

手を動かしながら笑うグラオに、クレアは照れたような笑みを見せて口を開いた。

「グラオ様、一つお伺いをしても宜しいでしょうか？」

他でもない。ヴァンのことである。

グラオもそれを分かっているらしく、最後にクレアの前髪を拭き、タオルを机の上に置いてヴァンを指差した。

「こいつのことか？」

「はい、ヴァンのお母様は一体どういう方なんでしょうか？　ヴァ

ンが暴走した理由はそこにある気がするのですが」

クレアの真摯な眼差しを受けて、グラオは罰が悪そうに頬を掻いた。腕を組んで頭を二、三度捻らせ、真剣な瞳をクレアに向けた。切れ長の翡翠の瞳が更に鋭く細められた。

「この話は君の信仰を壊すかもしれん。それでも聞く覚悟が、君にあるか？」

その言葉に、クレアはなんの迷いもなく答えた。

「嘘偽りの信仰なら、いっそ壊れたほうが清々します。真実を見極め、その上で私は私の道を選びます」

グラオは一瞬呆気に取られていたが、すぐに穏やかに笑い、椅子に腰掛けた。

「シャロンは良い娘を持った」

グラオは静かに瞳を閉じ、暫し言葉を閉ざした。束の間の沈黙の後、開かれた翡翠の瞳は父親の、そして妻を憂う夫のものだった。

「では、話そう。シーハーツの知られざる禁忌を」

1－13　堕とされた王女

「君は、シーハーツの民全てが純粋にアペリス神を崇拝していると思うか？」

グラオの話は、こんな質問から切り出された。

クレアは一呼吸おいて、首を横に振った。即ち、否、である。

「いいえ。そう信じたいとは思いますが」

「そうだろうな。だが現実は違う。それも君の想像していることよりもずっと愚かな過ちをこの国の研究者は犯してしまった」

「過ち？」

グラオは膝の腕組んだ手の指先に光る指輪を見つめ、クレアに向き直った。

「施術を科学で解明しようとした。それも、人体実験という最悪の手段でな」

エレノアの怒りが轟き、驚愕に染まったクレアの顔が一瞬雷光に照らされる。

「そ、んな……」

弱弱しく掠れた声。

異常なまでの喉の渇きを覚え、クレアは自らの喉を片手で押さえた。同時に込みあがってくる吐き気が、胃の奥から不快感を込み上げさせる。

この国は腐っている。

そう言ったヴァンの言葉が突き刺さり、クレアは無意識のうちに顔を両手で覆っていた。予想だにしてなかった現実は、純粋に女王陛下と国を守る為に努力してきた少女には重過ぎるものだったのだ。

グラオはそんなクレアの様子を見て、頭を振った。

「やはりショックが大きいか。しかし、この程度で参られては困る。こんなもの、まだ序の口に過ぎないからな」

「――っ」

「強制はしない。君が辛いというのなら、話はここまでだ。だが、その代わり君にヴァンを支えてやることは出来ない」

クレアの瞳が大きく開かれる。

そして、急に椅子から立ち上がると壁にかけてあった薄緑を手に持ち、足を引き摺りながら家から飛び出した。

グラオは横目でクレアを見送ると小さく息を吐き、いまだ眠り続けるヴァンの顔を見つめた。

「あの子なら……おまえの苦しみを分かってくれると思ったんだが。いや、あんな小さな女の子にこんな重荷を背負わせること事態が、間違っていたのかもしれないな」

薬指で光る紫の指輪を片手で押さえながら、グラオは目を閉じた。

まるで走馬灯のように頭の中を駆け巡る記憶。楽しかった日々。愛しい妻。

「なぁ――レイナ」

白銀の髪に赤い瞳の女性が、穏やかな笑みでこちらを見ている気がした。

動く桜色の唇。

「大丈夫……か」

そう、呟いた時、背後で扉が開かれる音がした。
グラオは、まさかと思い後ろを振り返ると、雨でずぶ濡れになったクレアが真剣な瞳でグラオを見ていた。

「話して下さい、グラオ様。私は、私はヴァンを支えてあげたい」
「君は……」

おそらく、精神を安定させるために外で剣を振っていたのだろうか。
彼の幼馴染であるクレアの母シャロンも不安になると同じように雨の中剣を振るっていたのを思い出し、グラオは顔を綻ばせた。
やはり、この子なら分かってくれる。
そう思い、グラオは新しい布をクレアに放った。

「長くなる。風邪をひかれてはかなわないからな」
「はい」

クレアは布を受け取ると、長い銀糸を拭き、それを羽織って椅子に腰掛けた。
グラオも再び椅子に腰掛け、話を続けた。

「研究者と言っても一部の者だ。それにこれもまた一部の貴族が加わり、研究は行われた」
「女王陛下はご存じないのですか？」
「ああ。勿論現クリムゾンブレイドの二人も知らない。知っているのは本当にごく少数の者たちだけだ」

クレアはほっと安堵の溜息を漏らし、すぐに気持ちを切り替えた。

「研究の目的は、より強い施術士を生み出すため、ですか？」
「その通り。最初は罪を犯した施術士などを使っていたのだがな、そんな者そうそう居るものでもない。だんだんと数が足りなくなってきた」
クレアの眉が顰められる。その先の言葉が予想できたのだ。
「ついに実験体の底がついた時、奴らは考えた。犯罪者がいないというのなら、作ればいい。多少強引な手を使ってでも、施術士を犯罪者として仕立て上げればいい、と。そしてこれに役立ったのが、貴族どもだ。奴らの権力を持ってすれば犯罪者を仕立て上げるなど造作もないことだからな」
クレアは十数年前、まだ自分が生まれる前にシーハーツで施術士が次々と捕まったという事件を思い出した。
既に子供たちの間でも怪談話程度にしか知られていない話だが、その真実は愚かな科学者と貴族の所業だったのである。
「こうして実験体の数が二桁に達した時、研究者たちは行き詰まった。一向に成果が見られなかったのだ。貴族は多額の投資をしているのに成果が出ずに怒鳴り散らし、研究者の仲間内でもアペリス神の怒りを恐れ、実験から手を引こうとする者さえ出てきた」
「それで……どうしたんですか？」
グラオの翡翠の瞳が怒りに揺れた。
その異常なまでの殺気に、クレアは喉の奥で小さな悲鳴を上げる。それに気付いたグラオは申し訳なさそうに「すまん」と謝り、頭を下げて話を続けた。
「このままではまずいと判断した研究者たちは、ある提案を持ちか

けた。それは……」

長い長い、沈黙。

再び開かれたグラオの口から出た言葉に、クレアは鈍器で頭を殴られたような衝撃を覚えた。

「最も強い施力を持った者。――すなわち、王家の血筋を使うことを進言したんだ」

暫くの間、クレアは何も言う事が出来なかった。

人体実験というだけでも神への冒涜だというのに、更にアペリスの聖女にまで手を出した研究者。許されることではない。

クレアは身体の奥から込み上げる怒りを必死に抑え、グラオに続けるように促す。

「でも、王家の人間を実験体になんて――不可能です。王家の人が犯罪者になどなれば大きな騒ぎになり、ます……し」

クレアの声が尻すぼみになる。冷や汗が一滴、クレアの顎を伝い地面に落ちた。

「現女王の子どもは二人だそうだな。生きている者は」

あったのだ。王家の人間を利用できる方法が。そして、それをやってのけたという痕跡が、確かにあった。

グラオは言葉を繋ぐことが出来なくなったクレアのかわりに話を続ける。

「だが、もう一人居ただろう？　三人目の子どもが」
「そんな――そんな……！」

クレアは半ば叫びながら頭を抱えた。耳を塞いだ。
聞きたくなかった、そんな話など。
今まで自分の信じてきたものが音を立てて崩れるような、そんな虚無感をはらんだ感覚が、空から滴り落ちる雨にも冷たさでクレアを襲う。女王やクリムゾンブレイド達は知らない。その言葉だけが唯一クレアが立つぬかるんだな地面を支えていた。
不意に、父の顔と大きな手を思い出した。あの笑顔を向けられれば、あの大きな手で頭を撫でられれば、いくらかこの虚無感を和らげられるかもしれない。
だが、今父はいない。乗り越えるしかないのだ、自分で。
そうクレアが思ったとき、頭に乗せられるものがあった。

「ごめん……クレア」

アドレーには遠く及ばない、小さな手。だがしかし、同じくらい暖かく、頼もしい手。
クレアは緩々と手を頭の上に持っていき、その手を握った。
そして、涙で濡れた顔を正面へと向ける。

「ヴァン――！」

泣きそうな顔をしたヴァンが、そこに居た。

「クレア、もう聞かなくていいよ。こんな話忘れてしまうんだ」

そう言ったところで忘れることなど出来はしないのなど、ヴァン

もよく分かっている。だが他になんと言えばいいのか、ヴァンには見当もつかなかった。

この抱きしめれば折れてしまいそうなほど華奢な少女が、自分などの為にその身を削る思いで話を聞いている。そう考えると、全身が引き裂かれる思いだった。

ヴァンはやんわりとクレアを抱きしめると、その虚ろな眼差しをグラオへと向けた。

「父さん、これ以上は――」

「続けてください」

ヴァンの口の前に手を掲げ、その言葉を遮ったのは他ならぬクレアだった。ヴァンから身体を離し、大きく息を吐く。その顔は未だ蒼白で、立っているのもやっとといった感じだったが、その瞳だけは真っ直ぐに前を見据えていた。

強い少女だ、と、グラオは思った。

ここへ来てクレアは二度辛い事実を知る羽目になった。知らなければ、己の道を迷うこともなく、ただ国をひたすらに思う武人として翳り無き生涯を迎えられたかもしれないというのに、クレアは知ることを望んだ。

今クレアを支えているものは何なのか。クレアの間の前には一体闇以外の何が見えているというのか。

皆目見当もつかない問いにグラオは喉を鳴らせた。

「だ、そうだが？　おまえに彼女の意思を止める権利はないぞ」

「クレア！」

「いいの。私が、知りたいんだから」

クレアの有無を言わさない視線を受けたヴァンは言葉を詰まらせた。

その様子を見ていたグラオが「諦めろ」と小さく口にし、椅子に深く腰掛けた。ヴァンも納得のいかない表情を浮かべながらも、ベットに腰を下ろす。

「さて、続きといこうか。君も気付いている通り、研究者たちは現女王の三番目の子どもを研究対象に選んだ。既に二人生まれていたからな、三人目ならいいと思ったんだろう」

「罰当たりな……」

「全くだ。で、だ。その方法は簡単」

「死産、とみせかけたのですね。確か記録にはそう残されています」

クレアの言葉に、グラオは片目を瞑って応えた。正解、と。

「産婦達も研究者の回し者だった。女王には死産と告げられ、赤子はそのまま研究所送りになった。勿論ダミーの赤子の死体を用意するとこも忘れてはいない。何せバレたら一大事だからな」

「――酷い」

「その三番目の赤子の名前は”レイナ”。勿論女王、母親に付けられた名前ではない。実験番号０１７。だから、”レイナ”」

クレアはグラオがその名を呼ぶとき、酷く優しい表情になるのに気付いた。翡翠の瞳が細められ、口元には微かな微笑み。

「どんな実験が行われていたか、詳しくは知らん。だが、見当はつく」

クレアも頷く。言葉にするのがはばかられるような非道な実験だったのだろう。

「死にたくなるような実験の日々だったそうだ。だが、レイナが十

八になった時、一つの転機が訪れた。レイナを哀れに思った一人の研究者が、隙を見て彼女をアーリグリフへと逃がしたんだ」

「アーリグリフへ？」

「そうだ。シーハーツならどこへ行こうが貴族の情報網からは逃れられない。逃亡するならアーリグリフ以外なかった」

貴族たちは基本軍人を快く思ってはいない。なぜなら、軍人は決して家柄の良い者ばかりではないからである。

勿論ネルやクレアといった大貴族の軍人もいるが、大半は庶民の出のものがほとんどだ。家柄重視の貴族から見たら階級の低い者が出しゃばる、さぞ卑しい集団に見えることだろう。

だから貴族は基本的に軍人を信用しない。それゆえに金で雇った者などを使い、独自の情報網を築き上げているのだ。その情報網は広く、執念深い。シーハー国内のことならば、大抵のことはそれに引っかかるだろう。

しかし、アーリグリフはそうかいかない。あちらも貴族の権力が強く、且つシーハーツを毛嫌いしている傾向にある。そう易々と情報は入ってこないのである。

「レイナがあてもないままアーリグリフで怯えるように暮らし数ヶ月が過ぎた頃だ。彼女は一人の男と知り合った。男はレイナに一目惚れをし、すぐに求婚を申し込んだんだ」

「い、いきなりですね」

「男ってのはそんなもんだ。それで、レイナは男を巻き添えにするのを恐れ断っていたんだが男はしつこかった。断っても断っても諦めなかった」

グラオの口調が徐々に昂ってくる。

「そのうちレイナもあまりのしつこさに根負けし、男に秘密を打ち

明けることを決心した。そうすれば諦めてくれると思って、な」
「その方はなんと？」
クレアの問いに、グラオがにやっと笑う。椅子から立ち上がり、マントを翻らせてクレアの前に跪いた。
「『そのような不肖の輩などに、貴女を渡したりしない。私の天駆ける竜の背に乗せ、彼奴等の手の届かぬ雲の向こうまでお連れしましょう』」
そう、まるで何かの劇のような台詞を言い、グラオはクレアを見上げた。その優しく、しかし強い光を持った瞳にクレアは少したじろいだ。目線を逸らし、手を膝の上で組む。
「その男性が……グラオ様なのですね」
「その通り。なかなかのくどき文句だろう？　これ聞いたレイナも人形のように綺麗な顔が急に崩れてな。大笑いしたんだ」
「それは、そうでしょうね」
「ま、なんにせよだ。こうして俺と彼女は出会った」
グラオがどかっと椅子に腰掛ける。
今まで沈黙を通していたヴァンがクレアに歩み寄り、物憂げに眉を下げて笑った。
「そう。つまり、俺はシーハーツの王女の息子ってことさ。――堕とされた王女のね」
何時の間にかパルミラの涙は止まり、イリスの息吹が風通しの良い家を吹き抜けた。

※

「お話は分かりました。ヴァンが暴走した理由、それはこの事実を知ってしまったから、ということですね？」

束の間の沈黙を置き、クレアは組んだ腕を解きグラオを見つめた。

「ああ。だが、まだ知りたいことがあるんだろう？　なんなりと言ってくれ」

「では、お聞きします。その後レイナ様はどうなったのですか？」

クレアはこの言葉を発した後に後悔した。グラオとヴァンの表情がみるみるうちに暗くなっていったのが分かったからだ。

グラオは大きな手でくせの強い髪を掻くと、長く息を吐いた。

「……死んだ。いや、殺された、のほうが近いかもしれないな」

「殺された！？」

「俺とレイナが誰にも知られないように結婚し、一年が過ぎてアルベルが生まれた。幸せだったよ。レイナもよく笑うようになった」

長い前髪がグラオの顔に影を落とす。

言葉とは裏腹にその表情は重く、暗い。

「そしてレイナが二人目の子どもを身ごもった頃、シーハーツの研究者に事が露見してしまったんだ。レイナはシーハーツに連れ戻された。よりによって俺がいない時にな」

顔を手で覆うグラオが酷く小さく見えた。逞しいと思えた両肩は情けなく震え、彼の心境を物語っている。

「幸か不幸か、突き止められたのはレイナがアーリグリフに逃げたということだけで、俺とアルベルのことは知られていなかった。シーハーツの連中も探りを入れようとしていたみたいだが、まさか疾風団長の元でかくまわれていたとは思わなかったのだろう。結局分からずじまいだった」

「それで……グラオ様は？」

「探したさ。必死になって。だが、見つけられなかった。愛した妻も、生まれてきてすらいない赤ん坊も、俺は助けることが出来なかった。奴らは嘲笑うかのように、俺から大切なものを奪っていった」

グラオの拳が強く、白くなるほどに握り締められる。

「そればかりか、連中はレイナを取り戻すだけに留まらなかった。レイナが身篭っていると知ると、生まれてくる子供までも利用することを決めたんだ」

豪雨が去った後の完璧なまでの静けさが、辺りに漂った。先程まで五月蝿く窓を叩いていた風の音も、息遣いも何も聞こえない。ただ混沌とした重圧だけが、今クレアが感じる全てだった。

一時の間、音を失ったのは世界ではなく自分のほうだとクレアは理解した。

完全なる沈黙の世界に突如響いたグラオの声と共に、クレアは音を取り戻した。

「だが、ここで連中に誤算が生じた。一つはこの非道な研究に反対するものが居たということ。もう一つは――生まれてきた子どもが双子だったということ」

「双、子？」

「そうだ。そこで研究に反対していた研究者の一人が、その双子の

片割れを逃がすことを決めたんだ。レイナもその研究者も苦渋の決断だっただろう。女の赤子を残し、男の赤子を逃がした。勿論連中は双子だったということなんて知らないからな。全く気付かずじまいだった」

一人を助けるためとはいえ、一人を犠牲にした。

それが正しいのか正しくないのなど、一体誰が決められようか。

クレアは込み上げる何かに耐えるように強く目を瞑った。

時に人はどちらかを選択しなければならない時が必ず来るものだ、と誰かは言った。

それを聞いたとき幼馴染は言った。誰よりも強くなってどちらも助けてみせる、と。

例え話として誰と誰を比較に使ったかは覚えていない。しかし、例えそれが誰であろうと、あの優しすぎる幼馴染はそう言ったのだろう。

だがクレアは違った。どちらかがこの国のために有益か。無意識のうちにそれを考えてしまっていた自分に、クレアは嫌悪感を覚えた。軍人としてはそれは正しいのかもしれない。でも人としてどうか。答えはいつもクレアに優しくはなかった。

「グラオ様、は……その決断をどう思われますか？」

「難しい質問だな。だが、俺は感謝している。でなければこうしてヴァンに会えることはなかったんだからな」

「父さん……」

「レイナももう一人の子も俺にとっては掛け替えのないものだ。だからその二人が命を賭してまで守った命を、俺は絶対に守ってみせる。無論アルベルも」

そう言って微笑むグラオの顔に迷いなどなかった。ただ愛しきものを想い見る一人の男の表情。

グラオは話を続けた。

「逃がされたこいつは知ってのとおりその研究者が信頼をおける人物に預けられた。それがラッセルだ。すぐに俺の元へ送り返しては怪しまれる危険があったからな」

「ではラッセル様はこの事をご存知なのですね」

「うむ。ただ奴はこのことを一切口外する気はないらしい。神にに対しての冒涜。国民が知ればどうなることか」

「暴動が起きて、多数の死者が出ることになるでしょう」

クレアの応えに満足したようにグラオは頷く。

「あれで国のことを大事に思っているからな。話を戻すが、ヴァンは養子という形でラッセルに預けられた。ヴァンにも施力があったからな。アーリグリフよりシーハーツのほうが暮らしやすいと思った」

施力を持つものはシーハーツ国内でも数少ない。つまり、施力が行使出来るというだけで様々な特権が与えられるのだ。

力あるものは力無いもののためにその力を行使すべきだ。そうグラオに言われたヴァンは、この生まれ持った力を最大限に発揮できる地、シーハーツを選んだのである。

「そんな中、ヴァンがシーハーツに居つくと決めてすぐのことだった。ヴァンを逃がした研究者からレイナと女の子供が死んだと聞かされたのは」

「っ」

クレアが息を飲む。

「ヴァンには母親のことは一切話していなかった。当時ヴァンは五歳。こんな酷なこと、言えるはずも無い。いずれは話さなければならないと覚悟していた」

だが、とグラオは俯く。

「どうしても告げる気になれなくてな。特に君と出会ってからのヴァンは楽しそうで、幸せそうだった」

「俺は……」

「しかし、運命というのは残酷だな。ヴァンは自ら答えを出した。ラッセルの部屋に忍び込み研究者とのやり取りの手紙でも読んだのだろう？」

グラオが首だけをヴァンのほうへ向けると、ヴァンはすぐに顔を逸らした。

「前から父さんとラッセル様が俺に何か隠してるのは分かってた。だから、気になって……」

「それで事実を知って我を失ったってわけか」

「許せなかったんだ！　人の命を道具のように使うやつらが！　たかが知的欲求の為に母さんや妹が殺されたと思うと、俺は――」

クレアは兄弟を持っていないし、母親も健在だ。無論父親も。だからヴァンの苦しみを理解することはきっと出来ない。

そう心の中で思っていた。

だが、

「クレア？」

「どうした？　足が痛むのか？」

「え、あ……」

頬に手を持っていく。濡れていた。一筋の涙が、クレアの頬を濡らしていたのだ。
クレアはすぐに手の甲でそれを拭い、笑顔を作った。
「ご、ごめんなさい。なんでもないの……なんでもないんだけ、ど……」
涙が止まらなかった。拭っても拭っても、それはまるで枯れることを知らないかのように次々と溢れ出す。
ただただ、その真実を知ったヴァンの気持ちを思うと、悲しくて仕方なかった。
パルミラの嘆きとエレノアの怒りは去り、残されたのはイリスの抱擁。暖かい風がクレアを、ヴァンを、グラオを包み込んだ。

※

「クレア、俺はもっと上に行く。偉くなって、この国を変えるんだ。もう二度と母さん達のような人を出さないためにも」
「うん。私も協力する」
「ありがとう。きっとそうするほうが、俺が復讐に生きることよりも母さん達は喜んでくれる気がするから」
夜空に満点の星達が煌く中、ヴァンとクレアは小高い丘の上に並んで腰を下ろしていた。
二人の間には僅かな距離。この近すぎず、遠すぎずな距離感が妙に心地よかった。
クレアが泣き止んだ後、クレアとヴァンはこの話は胸の内にしま

っておくことを決めた。そしてヴァンは自らの考えを改め、復讐を止めることを誓った。それが真正面から向き合ってくれたクレアへのせめてもの恩返しだった。

ヴァンは自らシーハーツに戻り、アドレーとヴァンが傷つけた師団兵に謝罪をした。無論処罰無しというわけではないが、精神が不安定だったことが考慮され、半年の謹慎と四級への降格という、クレアが予想したよりも遥かに軽い処罰で済んだ。

無論、アドレーがヴァンに刺されたことを黙っていたことが大きいのではあるが。

むしろ、ヴァンにとってはラッセルとグラオからのお怒りのほうがよっぽど堪えたことだろう。本当の父親ではないとはいえ、十数年もの間ヴァンの面倒を見てきたラッセルは、ヴァンを本当の息子のように思っていたに違いない。

二人の父親に愛されるヴァンをクレアは少し羨ましく思ったが、アドレーが二人居ることを想像し、すぐにその考えを改めた。

「皆には黙ってるって言ったけど、アルベルさんには話すつもりなのよね？」

「もう少ししたら話すよ。すごい勢いで修行に打ち込んでるらしくてね、いま話すと支障をきたすだろうからって」

「次期疾風団長候補でしょ？　すごいじゃない」

「ああ。俺も負けてられないな」

ヴァンがまるで幼い子供のように笑う。

そしておもむろに立ち上がると、クレアに訓練用の刃を欠いた模擬刀を投げた。

「というわけで、一回手合わせ頼むよ」

「私、足の怪我完治してないんですけどね」

そう言いつつもクレアは刀を手に取り、正眼に構える。

「ま、いいわ。それくらいのハンデあげるわよ」

「後悔するなよ」

夜の空にひとつの流れ星が駆ける。

それを合図にしたように、二つの影が同時に地面を蹴る。打ち鳴らされる、刃と刃が交わる音。静かな平野に、その迷いない音はどこまでも広く冴え渡った。

刃を交える二人の表情は、この上なく希望に満ちていたのだった。

1－14　月夜の訪問者

「これが、私の知る全容です。その後は何事もなく、数年後には研究は打ち切られたそうです。真実は定かではありません。しかし、少なくとも施術士や国民が犯罪を犯し姿を消す、ということはなくなりました」

クレアは息を吐いた。長い話をしたのだ、疲れるのも当然だろう。フェイトは窓際の机に置いてあった水差しを手に取ると、コップに注いでクレアに渡した。

クレアがフェイトに礼を言って水を飲む。相当喉が渇いていたのだろうか、水分を摂ったクレアの表情が和らいだようだった。

誰も何も言葉を発しなかった。アルベルもマリアも、考え込むように視線を伏せている。

俄かには信じられない話。この信仰厚い都の下で、外道とも言える研究が繰り返されてきていた。

進歩には犠牲がつき物だ。フェイト自身もそれは分かっていたことだし、地球で学生をしていた頃は気にも留めなかった。認めたくはないが、所詮は他人事と思っていたのかもしれない。

しかし人事ではなかった。他ならぬ自分が実験体として使われていたのだから。

一度は父を恨みもした。全てが終わったとき、一体自分はどうすればいいのかと嘆き、悲愴にくれた日もあった。体の中に凶器を仕込んだ自分に居場所などない――そう思っていた。

だが、受け入れてくれる人がいた。支えてくれる人がいた。背中を押してくれる人がいた。

そして、それはヴァンも同じこと。事情が違うとはいえ、並大抵の衝撃ではなかったはずだ。悪い言い方をすれば、彼は母と妹の犠牲があってこそ、今日まで生きていたのだから。

だからこそ、クレアの存在はヴァンにとって大きなものなのだろう。

フェイトは、ヴァンがクレアを大事にしている気持ちが本当の意味で理解できたような気がした。

そこまで考え、ふと向けた視線の先でフェイトは目を留めた。

「あれ？　アルベル、そんな腕輪してたっけ？」

「ああ。メモと一緒に親父の机の中に入ってた」

アルベルの右手首に輝くのは、紫水晶のような腕輪。細い輪が三つ腕に通されているようだが、一つ一つはきちんと繋がっている。

クレアもその腕輪を見つめ、思い出したように声を上げた。

「確か、ヴァンも同じような腕輪してました」

「母親の形見らしいからな。あいつが持ってても不思議じゃない」

「そうなんだ」

フェイトの声が揺らぐ。あんな話を聞いた後では、どんな言葉をアルベルにかけていいのか分からなかった。

しかし当人のアルベルは気にする様子もなく、音を立てて椅子から立ち上がった。

「話はこれで終わりだろう？　俺は行く」

「アーリグリフに帰るのか？」

「いや、王に届け物を頼まれてるからな。その準備に二、三日かかるらしいから、その間はシランド城に居るつもりだ」

心底嫌そうに吐き捨て、アルベルはドアに手を掛けた。

「悪かったな、時間取らせて」

短く言い切り、アルベルは病室から姿を消した。
それを見届けたマリアも大きく背伸びをして立ち上がり、クレアに礼を言って出て行った。フェイトはその後姿がどこか焦っているように見えたのだが、気のせいだと振り払った。

「なんかさ、アルベルとマリアって似てないか？」
「私も同じこと思ったわ」
「似たもの同士なのかな。素直じゃないところとか」
「そんなこと言って、怒られるわよ？」
「どっちに？」
「さあ？」

そんな他愛ない会話を続けていたところで、病室の扉が控えめにノックされた。
そして、一人の医師が控えめに顔を出した。

「クレア様、そろそろ面会終了のお時間です」
「あ、もうそんな時間？」

話を始めた頃は太陽がさんさんと輝いていたはずの空は、今はもう紅く染まっていた。白い病室も、窓際に飾られたパルミラの花も、すべてが美しい紅色へと染め上げられている。
太陽が一日で一番輝く時間。最後の最後にありったけの光を放ち、それは山際に消えていくのだ。

「明日は晴れかな」
「え？」
「昔さ、夕焼けが綺麗な日の次の日は晴れって聞いたことがあるんだ」

「そうなの」
「うん。だからきっと明日は晴れるんじゃないかな。あ、じゃあ僕は行くよ。明日またお見舞いにくるから。――おやすみ」
「ええ、おやすみなさい」

フェイトは扉を閉める間際、医師と楽しそうに談笑するクレアの顔を一度見て、ゆっくりと扉を閉めた。

※

既に日は落ち、女神達が夜の闇に浮かんでいた。沢山の星の涙は、今日も変わることなく瞬いている。
そんな中、フェイトは頭を捻らせながら歩いていた。考え事をしながらふらふらと歩いていれば、行き着いたのは光の架け橋。シランドとイリスの野を繋ぐその橋は二重構造になっていて、どうしてそのように作られたのかなどは一切わかっていない。
シランドを満たす聖水の流れる音が、風に乗って夜に響く。絶えず流れる聖水は月明かりに照らされ、昼とはまた違った雰囲気を醸し出している。
神秘的とも言えるその情景に、フェイトは暗幕がかかっていたような頭の中が晴れていくのを感じた。

「落ち着いて考えなきゃな」

フェイトは一度深呼吸をして、橋に凭れ掛かった。そして考えを巡らせる。
ついさっき入った通信で、アーリグリフそしてサーフェリオで発見されたものは本物のエリミネートライフルだったと報告された。

ソフィアは落ち着いた様子で話していたが、ネルのほうはクレアの怪我を聞いた後だからか、不安を隠せないでいた。しかしフェイトが元気だと伝えてやると彼女らしい冷静さを取り戻したようだった。

「これで三――いや四、か」

クレセントの話を信じるならば、エリミネートライフルはもう一つある。それも使用可能な状態で、だ。

幸い新たに見つかった二つは本人認証が作動していたらしく使用できない状態だったが、そもそもこうも立て続けに発見されること事態がおかしいのだ。

「さっきのクレアの話も気になるけど、まずはこっちが優先だ」

目下の問題はエリミネートライフルの件とシャロム家の件。下手をすればまた死人が出る。それだけは避けなくてはならない。

多数のエリミネートライフルの発見。シャロム夫妻殺害事件。一見何の関係もない事件。しかし、何か関係がある。ただ、何かそれを繋ぐものが欠けているだけ。フェイトはそう思えて仕方なかった。

「いや、勘だけで先入観を持つのは良くないよな」

フェイトはぶんぶんと頭を振った。

「そうだね。でも思弁なしでは進まないこともある」

「え？」

突然の声に、フェイトは思わず辺りを見渡した。それらしい人影は無い。ただ黒く染まった木々がさわさわと揺れているだけ。

しかしその声は幻聴などではなく、ごく自然とフェイトの耳に溶

けた。

「君は何を悩んでいるの？」

「誰だ？　どこにいる？」

フェイトは辺りに気を巡らせつつ、声に問う。声からは全くもって敵意は感じられない。むしろ楽しそうな声色だった。

「分からないことは勝手に想像すればいい。それが正しかったとしても、間違っていたとしても、ここで足踏みするよりはマシでしょ？」

「確証のないことを推し進め、犠牲が出たらどうするんだ」

「でも、このままにしておいても犠牲は出る」

「詭弁だ」

声が笑った。決して高くもなく、低くもない声だが、その笑い方はまるで少女のようだった。

「面白いね。噂通りの生真面目くん」

「笑ってないでいい加減姿を現したらどうなんだ？」

「そうだね。ここじゃ話しづらい」

フェイトの背後でガサリと音が聞こえ、何かが地面に降り立つ音。ムーンリットの端、シランド側に立つ木の根元に一つの人影があった。影がゆっくりとフェイトに近づいた。月明かりに照らされ、その姿が露になる。

「初めまして、フェイト・ラインゴッド君」

月が一層強く輝いた。まるで彼女を祝福するように。

しかし、月が輝けば輝くほど、星の涙は増えていく。涙が一つ流れ、何所へともなく姿を消した。
悲しい情景のもと、フェイトは目の前に佇む黒髪の女性から目を逸らせずにいた。月が地上に落とした涙のように、どこか寂しげな、彼女の姿から。

※

シランド城の謁見の間に不穏な空気が流れていた。
そこに居る二人の人物は声を潜めるようにして、会話を続けている。

「それは真なのですか、陛下」
「はい、間違いありません」

額に脂汗を浮かべながら問いかけるのは、この国の執政官であり、女王の右腕でもあるラッセル。そして、それにこれもまた神妙な面持ちで答えるのが、聖王国シーハーツの女王、ロメリア・ジン・エミュリールである。

「とすれば、あやつは一体……」
「――わかりません」
「ともかく、正体が分からぬ以上野放しには出来ませぬ。――誰か」

ラッセルが大きく手を叩く。

「何用で御座いましょうか？」

一人の師団兵が謁見の間に現れ、女王とラッセルの前に跪いた。

「現在、シランドに師団長はいるか？」

「は。現在は〈風〉のシレーネ・リシャス様が居られます」

「すぐに呼んで来い。ああ、それとセフィリアもだ。念のためシレーネのサポートにつかせる」

「は！」

師団兵は大きく頭を下げると足早に謁見の間を後にした。

ラッセルはさり気なく女王の表情を伺う。暗く重い影が落ちていた。

「シレーネには、辛い任務になりますね」

「止むを得ないでしょう」

そう言うラッセルの顔もまた、歪んでいた。

静かな空間に、暫しの沈黙が訪れた。

※

「君は……だれだい？」

フェイトがそう問いかけると、目の前の女性はにっこりと微笑んだ。どこか違和感を感じる笑顔に、フェイトは少し戸惑う。

毛先がところどころはねた、短い黒髪に紫水晶の瞳。身長はすらりと高く、ネルと同じかそれ以上はあるようだった。そして、何よりフェイトの目を引いたのは、その服装。黒い上下の上に、地球でいう白衣のようなものを羽織っている。

「――それで、君は一体何を悩んでいるの？」

女性はフェイトの質問には答えず、橋の手摺に腰をかけ、足を宙に投げ出した。

フェイトは大きな溜息を吐き、手摺に両肘をつける。どうやらこちらの質問に答える気はないらしいということが分かったからだ。

「さぁね。強いて言うなら何をすればいいのか分からないってのが、悩みかな」

シャロム家の事件も、エリミネートライフルの件も。誰が何のためにこんなことをしたのか。皆目検討がつかなかった。

シャロム家については理由がありすぎて困りものなのだ。シャロム夫人の反乱疑惑は有名なことであるし、恨みを持っている人間が居ても不思議ではない。下手な話、国内の過激派が密かに暗殺を目論んだという話もなくはないのだ。

疑わしきは罰せよ、と。

ただそうなるとシャロム家の領主まで殺す必要があったのかは疑問だ。領主は立派な人物として有名であるし、彼がいなくなったことで早くもペターニの商取引が滞っているという情報も入っている。

夫人が反乱を企てていたのだから夫もまた関係していると思われたのだろうが、決定的な証拠もないままに国の貴重な収入源を減らすようではリスクが大きすぎる。――となると、やはり内部の犯行ではないと考えるもが妥当だが、そうなるとまた振り出しに戻るだけなのだ。

フェイトは溜息を吐いて項垂れた。本日何度目か分からない大きな溜息。

女性はすっと手を伸ばしてフェイトの蒼髪に触れた。フェイトが驚いて顔を上げても、その手が止まることはない。

ただただ楽しげな表情でフェイトの髪を撫で続けている。

「似てるね」
「なにが？」
「その悩んだ時の顔。もうだめだー、みたいな顔でさ」
「誰に似てるっていうんだよ」
「君も良く知ってる人。そっくりだよ。頭良いくせに深みに嵌ると抜け出せないとことかそっくり」

女性が手摺から飛び降りる。

「正攻法だけじゃ駄目だよ。世の中には理解できないことが沢山在る。理解できない考えを持った人もいる」
「それはどういう――」
「それに、思いもよらないことが繋がってる場合もあるかもしれない」

フェイトは目を見開く。まるで自分が思っていた事を読んでいるかのような言葉だった。

「……君は、誰なんだ？　シーハーツ人か？」
「さぁ、どうだろう」

女性は笑った。
聞くな。――その笑顔は暗にそう語りかけているような感じがして、フェイトはそれ以上追及出来なかった。
まるで子供のような無邪気さの中に垣間見える深い悲しみが、絶えることなく闇に溶けていく。

「寒くなってきたね、そろそろ帰らなくちゃ」

「ちょ、ちょっと待って！」
「またね、フェイト」
その言葉が全て言い終わる前に、女性はフェイトの前から姿を消した。
残ったのは悲しみの欠片、ただそれだけ。フェイトは目には見えないそれを手に取るように宙をつかみ強く握り締めた。
それから小一時間。フェイトは呆然と空を眺め続けていた。
月が、酷く輝く夜だった。

※

シャロム邸の広間にある長い机の一端に腰掛けたクレセントは、湯気の立つスープを掬い口に運んだ。
「美味しい」
「ほんとか！？」
クレセントの真向かいに座ったネイビスが喜びを前面に出した表情で身を乗り出す。クレセントは頷いて、ふたたびスプーンに口をつける。
「はい。とても美味しいです」
何時も通りの淡々とした表情と口調だったが、ネイビスはほっと胸を撫で下ろした。

「そ、そうか」
「ネイビス様が料理出来たなんて、少し驚きました」
この手のタイプは料理などしたこともないというのが定番なのだが、意外にもネイビスの作ったスープは本格的だった。
ネイビスは赤くなった顔を隠すようにクレセントから顔を逸らし、頬杖をついた。

「俺とアゼルが幼馴染だってのは知ってるよな。でさ、俺ら二人とも親忙しくてどっちかが作るしかなかったんだが、アゼルがまるで料理駄目でよ」
「アゼル様が料理苦手なんですか？」
「意外だろ？　ああやってなんでもやってのけそうなタイプほど料理とか苦手だったりするんだぜ」
「そういえば、マリアも料理が苦手でした」

苦々しげに料理について語るマリアの顔を思い出し、クレセントは僅かに顔を綻ばせた。

「驚くくらい、知識はあるのに、どこか変なところがあって失敗しているんです」
「……」
「おかしいですよね」
「好きなんだな、あいつのこと」

頬杖をついたままのネイビスがクレセントに笑顔を向ける。クレセントは戸惑いつつも、首を縦に振った。
ネイビスは頬杖を解き、癖の強い髪を掻く。

「たった二日でおまえが心許しちまうなんてな。一体どんな魔法を

使ったのやら」
「――そうですね。わたしも不思議です」
「ハハ。まぁ、あいつは並みの奴じゃなねぇとは思ってたけどな」

クレセントはその言葉に同意するように頷きながら、また食事を再開する。トマトの味と共に広がる優しい味に胸が満たされるのを感じながら、ゆっくりとスプーンを口に運んでいく。
徐々になくなっていく赤いスープとクレセントの顔を、嬉しそうに眺めながらネイビスは黙って座っていた。
幸せだ、と心の中で呟き、ネイビスが小さくガッツポーズを取った時、

「あなたって本当単純よね」

妙な威圧感を持った声が、ネイビスとクレセントの視線を入り口の方へと向けさせた。

「マリア」
「おまえ……居るなら声かけろよ」

青い髪を一つに束ね、入り口の壁に凭れ掛かったマリアが、呆れたような笑みを浮かべてネイビスを見ていた。
クレセントはスプーンを置いて席を立ち、マリアに駆け寄る。

「どうしたんですか？」
「あのね、あなたがなかなか帰ってこないからでしょ」
「あ……」
「まったく、何がすぐ戻るよ。丸一日帰ってこないで」

そう言って、マリアがクレセントの頭をこつんと叩く。

困ったように下を向くクレセントと、呆れたような表情を浮かべるマリアの間に入ってきたのは、ネイビスだった。

「そう言うなよ。こいつ今朝方ぶっ倒れちまって今の今までベットの上だったんだからよ」

「倒れた？」

マリアがハッとした様にクレセントを見た。その顔色がみるみるうちに変わっていく。

クレセントは慌てて手を振った。

「だ、大丈夫です。ちょっと疲れが溜まってだけですから」

「そう――そうよね。帰ってきたばかりであんなことがあったんですものね」

「心配かけてごめんなさい。もう遅いですし、今夜はマリアもネイビス様も泊まって行って下さい。すぐに夕食の準備をします」

腕まくりをしてキッチンへ行こうとするクレセントをネイビスとマリアが止める。

「あのな、病み上がりなんだからちっとは休んでろよ。俺が作るから」

「そうよ。私も手伝うわ」

「おまえはいい」

「なんでよ？」

「いや、へたくそなんだろ？」

マリアの容赦ない蹴りが炸裂する。が、ネイビスはそれをひらりとかわし、急ぎ足でキッチンへと駆けて行った。なかなかの身のこなしである。

行き場の失った足を下ろし、マリアは苛立たしげに椅子に腰掛けた。クレセントも手近な椅子に座り、捲くった袖を下ろす。
マリアは暫くつまらなそうにしていたが、やがて怒りも収まってきたのだろう、組んでいた腕を解いてクレセントに向き直った。

「……本当に大丈夫なの？」
「――え？」

突然の言葉にクレセントは間抜けな返事を返してしまう。
マリアの言葉の意味するところを理解出来ないでいると、マリアが付け足すように言った。

「体。疲れてるなら休んだほうがいいんじゃない？」
「いえ、大丈夫です。この通り、今はなんともないですから」

胸に手を当てて微笑むクレセントが、どこか無理をしているように見えて仕方なかった。しかしクレセントがそう言う以上、マリアはどうすることも出来ず、そう、と呟いてクレセントから視線を逸らすしかなかった。
マリアを横目で見るクレセントの表情は重く、翡翠の瞳には影が落ちていた。
それ以降ネイビスが妙に気合の入った料理をカートに乗せて姿を現すまで、二人は沈黙を保っていた。

※

「そうか。まさかあの部屋を開けられることになろうとはな」
「いかがなされますか？」

「放っておいても構わんだろう。どうせ大した資料は残っていないのだし、あれをこの国の者が見ても見当がつくまい」

暗い室内の中、大きな椅子に堂々と腰掛けた男の持ったグラスの中の氷が、カラリと軽快な音をたてた。

傍に立つ若い男が不満そうな声で言った。

「しかし、エレナ女史を始めとし、シーハーツには侮れない人物が多々おります。油断は大敵かと」

「ふむ」

「三柱個々の能力や知識もシーハーツ六師団の師団長以上かと思われます」

「壱と弐は分かるが……参の少女もか？」

男の顔色が妖しく光った。

若い男は頷き、手元の資料に目を落とした。

「まだ政治的な能力やカリスマ性に欠けるため表舞台には出ていませんが、その施力は計り知れません」

「それは、面白い」

「加えて体に施紋を刻まなくても施術を行使できることも確認されています。特に施紋を刻んだ武具を装備しているわけでもないようです」

「ほう。……だが、まぁいい。とにかくあそこは放っておいて構わん。君は暫くは大人しくしていてくれ。――計画は少し先延ばしになる」

男がグラスに酒を注ぎ足して煽る。

「良くない知らせだ。シーハーツの神童が帰国した」

「それは本当ですか？　あの者は六年前からサンマイトに行ったきり、音信不通となっていたはずでは」
「目撃情報が入った。間違いない。早急に奴を出し抜く策を用意しなくてはならない。君はその間できる限りの情報を集めてくれ。――何、奴の体は欠陥だらけ。いざとなれば殺してしまえばいい」
若い男の表情が動く。それを横目で読み取った男が、制するように右手をあげた。
「分かってるさ。私とて奴ほどの頭脳を失うのは乗り気ではない」
「……」
「慎重に事を進める必要があるな」
男は立ち上がり、星が瞬く空を見上げた。
頭の中は既にいくつもの作戦が形を成している。これを如何に工夫し、成功確率を上げるか。
シーハーツの天才と謳われた頭脳。それをどう崩すのか。男は得も言えぬ感覚に満たされていた。

※

食事を終え、クレセントに好きな部屋を使っていいと言われたマリアは、クレセントの部屋から一つ離れた部屋を選び、テラスでぼんやりと月を眺めていた。
ネイビスは一階で、クレセントは自室に入り、既に寝ていることだろう。
一介の客室とは思えないほどの広い部屋のベランダから、マリアは整然と整えられた庭を見下ろした。どうしてだか、急に月を見る

のが嫌になったのだ。
真冬の深夜ともなれば、いくらシランドとはいえ相当冷え込む。淹れたばかりのホットコーヒーを一口飲み、マリアは息をついた。
頭に浮かぶのは、シランドで起こった数々の問題ではなく、白銀の髪の女性。ときおり見せる、今にも消えてしまいそうな瞳が、黒い水面に映った。それはすぐに波紋に飲み込まれてしまったが、マリアの脳裏には消えることなく残っている。
きっと、クレセントは何か重大なことを隠している。そんな予感がマリアの心中を支配していた。長年クォークの上に立ち培ってきた人を見る能力がそう告げているのだ。
しかし、それが何であるのかはおよそ見当もつかないし、今やらねければならないことは沢山ある。明日はクレアの仕事を片付け、その後はラッセルと共に政界の貴族達との会談があるのだ。夜更かしなどしていては明日に支障が出てしまうだろう。
マリアが空になったコーヒーカップを持ち、ベランダの窓を閉めたとき、扉の向こうから足音が聞こえた。
足音というには小さすぎる音。だが、確かに人の気配はある。気配はマリアの居る部屋の前で一度止まり、すぐに立ち去った。
ゆっくりと扉を開けるが、そこにはやはり誰も居なかった。そのまま寝てしまう事も出来たが、マリアは上着を手にとって部屋を飛び出していた。
階段を駆け下り、豪勢な作りの扉を開ける。左右を確認すると、丁度白銀の髪が家の角に入ったところだった。マリアは上着をぎゅっと掴み、足を踏み出した。
緑が生い茂る広い庭。その片隅。誰も近寄らないような、ひっそりとした場所。そんな所に、クレセントは居た。
クレセントは手に持った一輪の花を目の前の十字架を象った石の前に置き、胸の前で十字をきった。その石が墓だと分かるのに、さほどの時間はかからなかった。
マリアは極力音を立てないようにクレセントの隣に立ち、膝を折

って墓の前に跪き十字をきった。

「起こしてしまいましたか？」

「いえ。起きてたわ」

マリアの方を見ることなく、クレセントの口が動いた。マリアもクレセントを見ない。

「誰のお墓？」

「……猫です」

「嘘つくならもっと上手くつくことね」

月が雲に隠れ、黒い靄が辺りを覆った。急激な気温の低下を感じた途端、空から白銀の結晶がはらはらと降り注ぐ。

吐く息は白く、目の前の視界は黒い。

「雪が降ってきましたね。早く中に入らないと風をひきます」

すっと立ち上がり屋敷へと足を進めるクレセントの背中を見ながら、マリアは独り言のように呟いた。

「一人で抱え込んだって……良い事なんか何もないわ」

クレセントの足が止まる。

「クレセント……」

「あなたと」

震えた声。今にも消え入りそうなほど小さな声。まるで雪が鳴いているようだった。

「――もっと早く……あなたと会いたかった」

マリアの予感は、確信へと変わった。

しかし、やはり何も出来ないのだ。己の無力さを突きつけられた気がして、マリアは唇を噛み締めた。

白が世界を埋めていく。街も、人も、木々も。全てを白く埋め尽くしてしまえる雪も、しかし二人の間に空いている距離は埋められない。

人との関係は時間ではないというが、それは本当に正しいのだろうか。

もっと早く会いたかった。

そう言ったクレセントの声は、マリアの鼓膜に何時までも残っている。

白が世界を埋めていく。ほんの少し先を行くクレセントの姿は、もうマリアの瞳には映らなかった。

1－15　二度目の雪

深夜に降り出した雪は止むことなく、夜が明けた今も滾々と降り続いている。緑一色だった庭は白一色となり、朝日に反射してまるで宝石のような輝きを放っていた。

雪の少ないシランドで今冬二度目の大雪だった。一度目は事の発端とも言える事件があった日。ソフィアの元にエリミネートライフルが持ち込まれた日。

そして、彼女が二年の時を経て帰国した日。

雪と共に現れ、雪のような儚さを持つ女性。いつか、この雪が溶ける頃に一緒にいなくなってしまう気がして、マリアはその考えを振り払うように彼女の名を呼んだ。

「クレセント」

寝間着からふだんの服装に着替えたマリアは、音と匂いにつられ、辿りついた厨房でクレセントを見つけた。

何処か影の落ちた表情で鍋をかき混ぜるクレセントはまるでマリアに気付いていないようだった。

昨夜のことが尾を引いているのだろうか、マリアは一瞬声をかけるのを躊躇った。が、大きく深呼吸をしてクレセントに声をかける。

「クレセント」

「あ、マリ――熱っ！」

「ちょ、ちょっと！」

マリアに気付いたクレセントが振り向いた時、その手が鍋に触れたのだ。

すぐさま手を離したがその手は赤く染まっていた。

マリアは手を押さえたまま呆然と立ち竦むクレセントの手を取り、すぐに蛇口を捻って冷水に当てた。真冬の冷水の切られるような痛みにクレセントの顔が強張る。

数秒冷やしたところでマリアは蛇口を止め、袋に氷水を入れてクレセントに押し付けた。

「馬鹿。何やってるのよ」

「す、すみません」

冷えた袋を赤くなった手の甲に当て、クレセントは項垂れた。

マリアは手で額を軽く押さえると「いいわ」と言い、クレセントの背中を押してキッチンから外へ出した。

「ま、マリア？」

「その手じゃ料理なんて出来ないでしょ？　あなたは大人しく待ってて」

「で、でも」

「疲れなんて吹き飛ぶような料理、作ってあげるから」

ビシリと指を眼前に突きつけられ、クレセントは一歩後ろに下がる。そのままキッチンの扉は閉められ、締め出される形になるクレセント。

中から聞こえる騒音紛いの音に、クレセントはその場から立ち去ることも出来ずにただ立ち尽くすしかなかった。

しかしその口元には、僅かな微笑。

不安と期待。クレセントにとって、それは新たな感情だった。

「おい。なんだこの炭は？」

「ステーキよ」

「このどろどろした液体は？」
「野菜スープ」
「まさかとは思うが、これは卵焼きか？」
「ええ。なかなか独創的な形でしょ？」

若干黄色が残る程度であとは全て黒い物体。一体どうしたら卵がこんなことになるのかネイビスには見当がつかなかった。
痛む頭を抱えて蹲るネイビスの前の席で、クレセントは苦笑を浮かべて座っていた。手に持ったスプーンの上には、青紫色の物体。これを食べるには、相当の勇気と心の準備が必要そうである。
作った本人のマリアはと言えば、自らの作った料理を一切見ずにネイビスの質問に答えている。手元には小麦のパン。机の上の料理に手をつける気はないらしい。

「さ、さぁ、とりあえず食べてみなさいよ」
「おまえが食え」
「死んでも嫌」

即答である。
ネイビスがマリアに食って掛かろうとした時、カチャリという食器と食器がぶつかる音が聞こえ、ネイビスとマリアは揃って同じ方を見た。
二人の目が点になる。

「く、クレセント！？　おまえなんつーもの食ってんだ！？」
「ムカつくわ――じゃなくてあなた……」

野菜スープと言われたモノを、クレセントが飲んでいたのだ。液体の中に浮かぶ何かをスプーンで掬い、不思議そうに首を傾げて口に含む。

その表情は決して美味しいものを食べたときのものではなかったが、どことなく嬉しそうだった。
マリアもネイビスもその様子を唖然としながら見つめていたが、やがて思い出したように動き出し、マリアがクレセントの手からスプーンを取り上げた。

「あ……」
「な、何してるのよ!?」
「何って」

クレセントが困ったような笑みを浮かべる。

「クレセント平気か!?　どっか具合悪くねぇか!?　吐きたきゃ吐いていいんだぞ!」
「死にたいのかしら?　今、ここで」

マリアがホルスターから銃を抜き、ネイビスへつきつける。勿論安全装置は外している。
ネイビスの顔から血の気が引き、顔の前で両手を大きく振る。マリアは一度ネイビスの額へ銃口を当ててからホルスターに仕舞い、クレセントの隣に腰掛ける。

「水……いる?」

マリアなりの精一杯の気遣いだろう。料理が下手だとは認めたくないが、自分の料理が決して褒められたものでないことをマリアは理解しているのだ。
しかしクレセントはそれを断った。マリアの手からスプーンを取り、またスープを飲む。ナイフとフォークを器用に使い、肉であった黒い塊を切り分けていく。それを口に運んだとき、クレセントは

苦笑しつつマリアを見つめた。

「焼きすぎですよ、マリア」

「し、仕方ないでしょ。生だったら困るし。美味しくないなら食べなくて良いわよ」

「いえ、いただきます。せっかくマリアが作ってくれたものですから」

そう微笑ってクレセントはもくもくと料理を口に運んだ。

マリアがどうしていいのか分からずにいると、今まで黙って様子を見ていたネイビスがフォークを手に取った。

「しゃーねぇから俺も食ってやる」

豪快に肉にかぶりつき、飲み込む。

「あー、苦ぇ」

「不思議な味」

その言葉とは裏腹に、二人の手は休むことなく料理を口に運んでいく。

次々と空になっていく皿を見て、マリアは鼻をならしてそっぽを向いた。

青い髪の隙間から見える赤くなった耳を見て、ネイビスとクレセントは顔を見合わせて小さく笑うのだった。

※

書類の山に手を伸ばし、報告書を一枚取り目を通す。問題がなければ判を押し、あれば再提出用の箱に入れる。単調な作業ではあるが、手を抜くわけにもいかない。

無論それは自分の仕事でもいえることだが、人の仕事なら尚更である。

フェイトは積まれていた書類の丁度半分ほどを終えたところで一息ついた。眼鏡を外し、目を二、三度瞬かせる。数時間とはいえ、ずっと文字と睨めっこだったのだ。少しだが頭がくらくらした。

自分で淹れた紅茶を一口飲み、フェイトは顔を顰めた。既に熱を失い、味も半減している。それに加えフェイトは紅茶を淹れるのが下手だった。いつだったかその話でソフィアに延々と説教を食らった記憶がある。温度大事だとか淹れ方が雑すぎるとか、聞いてて頭が痛くなるような細かさだった。

しかし今この現状を見ると話半分ではなくキチンと聞いておけばよかったと、フェイトは少し後悔した。クレアの淹れてくれる美味しい紅茶を思い浮かべながら、冷たい紅茶を飲む。だがやっぱり不味いものは不味かった。

「今度、ソフィアに教えてもらおう」

そう独り言のように呟き、フェイトが眼鏡をかけ直したところで、部屋の外がやけに騒がしいことに気付いた。

ばたばたと数人が忙しなく大理石を鳴らす音。焦ったような話し声。会話は聞き取れなかったが、フェイトはその聞き覚えのある声に興味を引かれ、自室の扉を開けた。

部屋から顔を出して声のするほうを見ると、緑の長い髪の女性と、藍の髪の女性が並んで歩いているところだった。歩いているといっても歩調は速い。

「シレーネさんと……セフィリア？」

後姿だけだったので確証はないが、あの声といい、髪色といい間違いはないだろう。それでもフェイトが迷ったのは、シレーネが纏う雰囲気が彼女のそれからはかけ離れたものだったからである。

いつもの和やかなものではない。焦りと不安、疑心に満ちたものだった。反対に横を歩くセフィリアは平常そのものであったが、そのアンバランスさにフェイトは一抹の不安を覚えた。

すぐにでも後を追って何があったのかを確かめたかったが、このまま仕事を放り出すわけにもいかず、フェイトは躊躇いがちに扉を閉めた。

まだ半分は残っている。フェイトは「よし」と一声あげて気合を入れ、椅子に腰掛けた。

※

「そう。リーゼルおば様がそんなことを……」

「ああ、だからクレア」

画面に映るのはネルの不安そうな顔。

ギルドに登録していないクレアは、テレグラフの代わりにフェイトお手製の通信機を携帯している。昨日フェイトがやっと完成したからといってクレアに渡したものだ。

一通りの使い方をフェイト教えてもらったクレアは、アーリグリフで調査中のネルに繋いでいた。

そこでネルの母、リーゼルの言動について聞かされたクレアは、意志の強い瞳でネルを見返した。

「おば様とネルには悪いけど、私は彼を信用しているの」

「私だってそうさ。あいつを疑いたくなんてない。でも――」
「ネル。それは有り得ないの。絶対に」

クレアの剣幕にネルが黙る。そこに入ってきたのは、朱色の髪を揺らした女性だった。

「クレア」
「ルージュ。あなたもなの？」
「そりゃね。私だって信じたいよ。でもさ、この世界に絶対なんてないの。ましてや私達は身内ですら疑わなきゃいけない位置に居る」

クレアの口が一文字に結ばれる。ルージュの言う事は、最もだった。

信じることから全ては始まる。
そう言う陛下の言葉は正しい。しかしルージュの言葉もまた正論なのだ。
こちらが相手を信じなければ、相手が信用してくれるわけがない。だが、全てを信じていては、きっと国は瓦解してしまう。だからクレアやネル、ルージュ達はまず疑ってかからねばならない。
それは心苦しいことではあるが、仕方のないことでもある。
そう割り切っていたつもりだった。だが、心のどこかではそれを認めていなかったのかもしれない。クレアには、リーゼル、ルージュの言葉を受け入れることが出来なかった。

「でも……私は」
「クレア。あんたは全国民の上に立つ存在なの。それを忘れないで」

ルージュの言葉は、クレアの胸に深く刻まれた。
押し黙ったクレアを見て、ルージュは長く息を吐いた。そして、画面一杯に顔を映してクレアを見つめる。

「それと、あんたは私達の大事な親友。それも忘れないで」
「ルージュ」
「一人で抱え込むな。相談しろ。もっと友達を頼れ。あんたが馬鹿やってない限り、私達はどんな状況だってあんたを助ける。馬鹿やってたら一発殴りに行く」

険しかったルージュの表情がふわりと和らいだ。画面の端に映るネルも、大きく頷いている。
クレアは目尻を拭って、微笑んだ。

「ありがとう。ルージュ、ネル」
「今度ケーキ奢ってね」
「とびきり美味しいケーキ、用意してあげる」

ルージュの笑みにウインクを返すと、ルージュは「楽しみ」と言って画面から消えた。
入れ替わりにネルが正面に映る。

「ルージュに教えられちゃったわ」
「ルージュも考えてないようで考えてるのさ。クレア」
「なに？」
「あいつについてやっぱり一度調べてみるんだ」

ネルの言葉にクレアの表情が歪む。
そんなクレアにネルは茶目っ気たっぷりな目を向け、人差し指を立てて続けた。

「クレア、視点を切り替えてみなよ。疑いをかけるんじゃなく、潔白を証明するために調べるっていうのはどうだい？」

「潔白を、証明？」
「ああ。あいつは何も隠してなんかいない。それを証明するために調べるんだ」
「なんか……上手く言いくるめられた感じだけど」
「まぁ、たまにはそういうのもいいんじゃなかい？」
軽快に笑うネルにつられ、クレアもふっと笑みを零した。
頭に巻かれた包帯を一気に取り、顔を上げる。
「それもそうね。いいわ、私が彼の潔白を証明する」
画面の向こうから、ルージュの「頑張れ！」という声が聞こえた。

※

シランド城に一室を用意されたアルベルだったが、その清浄な空気が肌に合わずシランドの街中をぐるぐると徘徊していた。
特に用事があるわけでもない。しかし城内には居たくない。いくら慣れているとはいえ、大雪の中歩き回るのも面倒くさいと、シランドの傍にある修練施設で体を動かすことも考えたが、今は『土』の訓練が行われている最中で混雑していると聞き、仕方なくこうして歩き回っているのである。
だが刀をぶら下げて城下をうろうろしていると、どうしても視線が付き纏う。
そうした視線を鬱陶しく思い、それから逃れるように彷徨したアルベルは、人気の少ない川辺に着いていた。普段ならカップルや家族やらが数人居るこの場所も、この雪では誰も立ち寄らない。
民家を横に抜けた先にある小川は、まるで時がゆっくり進んでい

るように、ゆったりとした時間が流れていた。
川辺に腰を下ろし、手を水に浸す。雪が溶けた水は肌を刺すような冷たさだったが、心を洗われるような水だった。アルベルはそれを不快に思い、手を水から引き抜く。
丁度雲間から顔を出した太陽に手を掲げる。太陽越しに見る手は赤く、それは己の手にこびり付いた血のようだった。
そんな幻覚をアルベルに見せ、太陽はすぐ灰色の雲の間に隠れてしまった。世界が、薄暗くなる。
自嘲気味に笑い、手を地面につける。一度血に濡れた手は、一生綺麗になることはない。
だがアルベルはそれを苦に思ったことも、後悔したこともない。最初に手を汚したその日から、後悔することは止めた。
自らが選んだ道を、自ら突き進んでいく。誰にも邪魔はさせない。邪魔をする奴は容赦なく切り捨てる、そう誓った。その先にあるものがなんであれ、引き返すことはしない。それが自分が奪った命へのせめてもの手向けであり、アルベル自信の信念でもあった。
アルベルは拳を強く握り、立ち上がった。無性に刀を振りたくなったからだ。

「ふん、適当に狩るか」
「たまにはのんびりくつろぐのも、悪くはないと思うがな」
「ヴァンか」

アルベルが振り返りながらそう言うと、微笑を浮かべたヴァンが木に寄りかかった格好でアルベルを見ていた。
「ご名答」と手を叩き、寄りかかっていた身を起こす。腕に着けた紫の腕輪がシャラリと涼やかな音をたてた。

「クレアから聞いたらしいな」
「ああ」

「黙っていたことはすまない。だが――」
「いい。別に気にしちゃいねぇよ」

それはアルベルの真意だった。クレアから話を聞いた後も、ヴァンやクレアに対して特別な感情は抱かなかった。
どうして自分に知らされなかったのか。
そんなことは微塵も思わなかった。

「おまえにはおまえの考えがある。俺がとやかく言う事じゃねぇ」
「助かるよ」

そう微笑ってヴァンが踵を返したところで、ヴァンの動きがピタリと止まる。

「一つ、聞いていいか？」
「何だ？」
「おまえは、どう思った？」

ヴァンらしくもない、不安気な声だった。
アルベルは聞かれた意味が分からず、聞き返す。

「なにをだ？」
「クレアの話を……俺たちの母親について」

アルベルは納得した様に「ああ」と頷いて、顎に手を当てた。
正直なところ別段何かを思ったわけではなかった。母親の話だって、たまたまあの手紙を見つけて興味を持っただけだったし、話を聞いたからといってアルベルの心境にはなんの変化もなかった。
ただ、一つ。たった一つだけ思ったことといえば、

「そいつの息子で、悪い気はしねぇ。それだけだ」
「そうか。おまえはやっぱり変わらないんだな」
「は？」
「俺は、おまえのようにはなれなかった」

ヴァンはどことなく悲しそうに言い、また足を進める。今度は一度も足を止めることはなかった。

「意味がわからん」

アルベルの呟きは、曇天から降る雪と、緩やかな川のせせらぎに飲み込まれていった。

※

「し、死ぬかと思った……」

そう言って机の上に顔を乗せるネイビスは顔面が蒼白で、額には汗が浮かび、その言葉は決して嘘ではないことを物語っていた。

マリアは罰が悪そうに顔を逸らし、机の上に頬杖をつく。

「だったら食べるんじゃないわよ」
「食材に罪はねぇ……うぇ」

ネイビスが口を押さえる。マリアが神業ともいえる速さで椅子から飛びのいた。

「ちょっと吐くんじゃないわよ。汚いわね」

「うるせぇ。黙ってろ……」
「クレセント、桶……って今は洗い物してるんだったわ」

ネイビスと違い、マリアの料理を食べても平然としていたクレセントは、具合の悪いネイビスの代わりに食器を洗いにキッチンへ移動した。

この広い屋敷は今マリア達の居る食堂からキッチンまでの距離もそれなりにあり、尚且つ水を使っているクレセントを呼んでも気付かないだろう。マリアは溜息をつき、どこかに手頃の桶か何かがないか探そうと一番近くにあった棚を漁り始めた。

「なぁ……」
「何よ。まだ吐くんじゃないわよ」
「誰が吐くか。おまえさ、どうやってクレセントの殻壊したんだ？」

マリアの手が止まる。

振り返ったときに見えたマリアの碧の瞳に、ネイビスは息を飲んだ。冷たい、それでいて辛そうな、そんな目だった。

「そう見えるなら、あなたの目は節穴でしょうね」
「な……」
「殻が壊れた？　馬鹿言わないで。一体この国の誰があの子以上に殻に閉じこもってるっていうのよ」

マリアは自分の腕をぎゅっと掴む。

「私は、あの子を知れば知るだけ、あの子が分からなくなる」
「おまえ……」
「でもね、だからと言って私は諦めない。いつかあの硬い殻ぶち破って、引き摺り出してやるわ」

マリアの瞳が強い光を帯びた。不敵な笑みを浮かべ、やってやると言わんばかりにその顔は生気に溢れていた。
ネイビスはその意気込みに圧倒されていたが、やがてストッパーが崩れたように笑い出した。

「く、はっはっはっは！　そりゃいい！　俺も見てみてぇよ。アイツが腹の底から笑うとこ」

もう吐き気も、気持ち悪さも忘れていた。ただ目の前に大きな目標が出来た。
長い間諦めていた。クレセントを笑顔にすることを。だから、ただ傍に居られればいいと思っていた。
だが、今は違う。もう一度試してみようと、ネイビスは拳に力を込めた。
もう一度や二度の失敗で諦めたりなんかしない。今度こそやれることはやりつくしておきたかった。諦めるのは、何よりも簡単だ。

「おーっし！　なんかやる気出てきた！」
「本当、単純ね」

意気込むネイビスをマリアが呆れ半分嬉しさ半分で見たとき、

「失礼します」

食堂の扉が、音をたてて開かれた。
マリアとネイビスが扉のほうへ顔を向けると、そこには見知った顔。

「セフィリアか？」

「どうしてここに？」
「任務です」
セフィリアは短く言い切る。
「それは一体何の任務かしら？」
大方マリアかネイビスへの伝言の類だろうと思っていたマリアだったが、それは大きな間違いだった。
気付くべきだったのだ。たかが伝令で、一級構成員が狩り出されることなど滅多に有り得ないことだと。
セフィリアの瞳が鋭くなっていたことを。
彼女の後ろに、もう一つの気配があったことを。
落ち着いた口調で発せられたセフィリアの言葉に、マリアとネイビスは言葉を失った。
「クレセント・ラ・シャロムの身柄を拘束することです」
この日は、雪の少ないシランドで今冬二度目の大雪だった。

1－16　表と裏

「いま、なんつった？」

ネイビスの震える声が静かな部屋に響いた。その震えがどこからくるものなのかは、ネイビス自身にも分からない。恐れか、怒りか、もしくはそれ以外の何かからか。

セフィリアは冷えた藍の瞳でネイビスを見つめる。絶対零度の視線。軽視でも侮蔑でも同情でもない。まるで感情を無くした機械のような、そんな目で、彼女は整然と言い放つ。

「虚空師団〈風〉の二級構成員。クレセント・ラ・シャロムの拘束。それが私たちの任務です」

「私……たちですって？」

そのとき、マリアはようやく気付いた。セフィリアの背後に居る気配に。

緑の髪を一つに束ねた長身の女性がマリアとネイビスの前に姿を現した瞬間、ネイビスは身の毛がよだつ感覚を覚えた。頭に血が上り、思わず掴みかかりそうになるのを寸でのところでマリアに制される。

しかし、ネイビスを止めたマリア自身も動揺を隠せない様子だった。

彼の目に映っているのは、居るはずがない、居てはいけない人物だったのだから。

「――なんでだよ。なんであんたが居てこんなことになってんだよ！　おい！」

女性は答えない。ただ険しい顔でネイビスとマリアを真正面から見つめている。
ネイビスは怒りを露にし、女性を睨みつけた。

「答えろ！　リシャス！」

そこに居るのは紛れもなく虚空師団〈風〉の師団長シレーネ・リシャスだった。
誰よりもクレセントを信じ、誰よりもクレセントを大切に思っていたはずだ。だからこそ、ネイビスとマリアの怒りは最もだった。
シレーネがこんな命令を黙って黙認したのが信じられなかった。ネイビスの知るシレーネなら、本人に直接確かめもしないでクレセントを拘束するようなことは絶対に有り得ない。本人が罪を認めでもしない限りは、シレーネは誰の命令であろうと何者からもクレセントを守るだろう。その確信がネイビスにはあった。だが、目の前の現実は違っていた。
今にもとってかかりそうなネイビスからマリアへ視線を移したシレーネは、感情を押し殺した声で言った。

「クレセントはどこ？」
「答える前にどうしてクレセントが捕まるのかを教えて欲しいものね」
「クレセントを確保したら、必ず」
「理由が先よ」

マリアも、シレーネも譲らなかった。
このままでは埒が明かないと考え、セフィリアが自ら探し出そうとした所で、シレーネ達が入ってきた扉とは別の扉から、クレセントが姿を現した。

「わたしならここにいます」
「クレセント!?」
「馬鹿！　なんで出てきたのよ！」

ネイビスとマリアの言葉には一切答えず、クレセントはシレーネとセフィリアのほうへ向かっていく。
その手を、マリアとネイビスが同時に掴んだ。
が、

「「！！」」

掴んだと思った手は、いとも簡単にすり抜けていった。
呆然と空を掴む手を見つめるマリアとネイビスを尻目に、セフィリアはクレセントを拘束しようとするが、

「拘束の必要はないわ」

シレーネがそれを止めた。予想外の言葉に、セフィリアは戸惑う。

「しかし」
「いいの。――クレセント」
「はい、シレーネ様」

シレーネの視線にクレセントは目で答え、セフィリアについて食堂から出て行った。その時、シレーネの瞳が大きく見開かれていたのには、誰も気付かなかった。
扉が閉まる音で漸く我に返ったマリアとネイビスが後を追おうとするが、シレーネがそれを止めた。

「駄目よ」

「どけよっ！」

ネイビスが手を横に払う。その手はシレーネの顔すれすれを通ったが、シレーネは目を瞑ることさえしなかった。

「理由を……教えてくれるのよね？」

マリアも怒りと動揺で揺らぐ頭を必死で抑えながら言う。

シレーネは頷いてマリアとネイビスに座るように促した。マリアはネイビスの背中を押し、椅子に座らせ、その横に自分も腰を下ろした。

「さぁ、話して。どうしてクレセントが捕まったの？　まさかシャロム夫人の反乱に彼女が加担してたなんて言い出さないわよね？一年以上も前からこの国にいなかった子に」

「ええ。それはないわ」

「じゃあなんでだ！」

ネイビスが床を思い切り鳴らす。体中から滲み出る底知れぬ憤怒に、横に居るマリアですら冷や汗を流した。しかし、シレーネは怖気づくことなく、真っ直ぐにネイビスを見ている。

「クレセントの罪は、詐称罪」

マリアもネイビスも、一瞬反応が出来なかった。あまりにも予想外の所からの攻撃に、頭が反応できなかったのだ。

マリアとネイビスがシレーネの言葉をゆっくりと反復していた時、シレーネの口が再び開いた。

「――つまり、あのクレセントは本物のクレセントの名を騙った偽

者らしいの」

※

あれだけ勢いよく振っていた雪が、急に止んだ。それでもその名残はちゃんと残っていて、足首までの深さの雪に足をとられないように、クレセントとセフィリアは歩いていた。

吐いた息が白くたなびき、足元からはサクサクと音が聞こえる。やけに静かな白の世界に、響く音はそれだけだった。

会話はない。シレーネも命令通り、クレセントに一切の拘束はなく、セフィリアの一歩前を歩く形になっている。

セフィリアは目の前の白銀の髪を眺めながら、理解出来ない感覚に溺れていた。

ラッセルにシレーネと共に呼び出され、クレセントの拘束を命じられた時、セフィリアは驚かなかった。前から疑いのあった母親の娘。驚く要素はない。横に立つシレーネは今にも倒れそうなほど顔を青くしていたが。

ラッセルに食って掛かるシレーネに反して、セフィリアは冷静に事を整理していた。

そして、少し同情した。一年ぶりに帰国して、両親が殺されて、自身も犯罪者となる。身内の愚行により、己の人生を狂わされる辛さと虚しさを、セフィリアはよく分かっているつもりだ。

だが、ラッセルの言葉はセフィリアの予想とは異なった。反乱に加担するなどという、見え透いたものではなかったのだ。

成りすましによる、グリーテン王国からのスパイ容疑。流石のセフィリアでも一瞬頭がついていかなかった。スパイ行動ではよくあることではある。だが、今回は別だ。クレセント達が帰国した時に身体検査は行われた。変装は見破られるはずである。

となれば、顔はそのスパイ自身のもの。しかし、そんな偶然があるだろうか。シーハーツが送り込んだスパイと、たまたま同じ顔の密偵がグリーテンにも居るなどという偶然。

有り得ない。顔も性格も、ここまで瓜二つな人間など、そうそう居る者ではないのだから。

それに僅かとはいえ施力をもっていると言う事はシーハーツ関係の人間。だからこそ、摘発した女王自身も内密に事を進めようとしている。この件について知らされているのは現段階では女王とラッセルを除けばシレーネとセフィリアのみである。

今後は三柱、各師団長と各師団の一級構成員にのみ伝え、秘密裏に事を進める方針だ。

そして、セフィリアがいまだに納得出来ていないことがある。

それはクレセントを偽者だと疑った理由。

セフィリアは前を歩くクレセントから目線をずらさずに言った。

「あなたは、誰？」

「その質問に意味があるとは思えませんが」

淡々とした口調のクレセント。勤めて冷静を装うとするセフィリアだったが、『無音の風』の異名は伊達ではない。

深い翡翠の瞳は沈黙を通すばかりで、何も語りはしなかった。

※

「血統限界値？」

クレセントの逮捕について詳しい説明を要求したマリアとネイビスに投げかけられたのは、そんな言葉だった。

血統限界値とは、端的に言えば個々人の施力を数値化したものである。その数値が高ければ高いほど強い施力を有していることとなり、シーハーツでは特に重要視されているステータスだった。

しかし、どうして今、そんな言葉が出てくるのか。理解できずに片眉を上げるネイビスに、マリアは肩を竦めた。

「あなた、シーハーツ国民のくせに知らないわけ？」

マリアが「呆れた」とぼやきつつ、ネイビスを見る。

「んなわけねぇだろ！　クレセントと血統限界値の何が関係あんのかってことだよ」

「ネイビス。クレセントの血統限界値覚えてる？」

「――十六、だったか？」

頭を掻きながら答えるネイビスに、マリアが信じられないといった視線を向ける。

「いくら好きだからってそんなとこまで調べてあるの？」

「あほ！　自分の師団じゃなくても2級以上の師団員の情報は把握してんだよ」

「へぇ。まぁ、ネイビスのストーカーについてはいいわ。それで、血統限界値が何だっていうのよ」

ネイビスは黙った。マリアには何を言っても無駄だと気付いたかたである。

「マリアちゃんは陛下が施力の流れを視ることが出来るのは知ってるわよね？」

「ええ。陛下じゃなくても多少は視えると聞いているけど」

「そう。でも陛下の瞳は私達とは比べ物にならない。それこそ、検査なしでも個々の施力の値がどれほどか分かるぐらいに」

マリアの眉が動く。シレーネの言わんとしていることが、やっと理解できたのだ。

「で、今のクレセントの血統値限界はいくらなのかしら？」

「あって三％。とてもじゃないけど、十六％なんて施力を有してないわ」

長い、長い沈黙。勢いよく食って掛かるかと思ったネイビスも、まるで言葉を忘れてしまったかのように黙っている。

全く予想通りの答えに、マリアは深い溜息を吐いた。これが聞き間違いなら、どれほどよかっただろう。

つまりは、クレセントが帰国した時に、女王は自然と視えてしまったのだろう。クレセントの中に流れる施力の流れを。

そして、それが極端に少ないことに気付き、ラッセルに相談した。ラッセルとしても偽者の疑いの在る者を野放しには出来ない。万が一にも備え、拘束しておくのが吉と踏んだのだろう。相手がグリーテンなら尚のこと。

下手をすれば、クレセントはシャロムの事件も疑われているかもしれない。クレセント帰国後すぐに起きた事件だ。もしクレセントがスパイなら、気付かれる可能性の高い肉親を殺しておく、という考えも捨てきれない。当然スパイはクレセントとその両親が疎遠にあるということなど知りはしないのだから。

しかし、この事実をすんなりと納得できるほど、マリアは単純ではない。

仮にクレセントと似た顔を持つ人物が居たとしても、性格まで同じとはいかない。首尾よくクレセントを捕らえ、替え玉と入れ替えたとしても僅かな動きを見破る〈風〉の精鋭部隊に気付かれないわ

けがない。仕草、雰囲気などは一朝一夕で身につくものではないのだ。

かといってそう何日もクレセントが行方不明になっては師団員たちも不審に思うだろう。

未だ不明解な点が、多すぎる。

「それで……このままだとクレセントはどうなるの？」

マリアが一番に聞きたいことだった。

もしもスパイ容疑であるというのなら、国家反逆罪として極刑である。

クレセントが死罪。そう考えるだけで、マリアは体の芯が冷えていくような感覚に陥った。

ネイビスやシレーネ、クレア達は以前からクレセントを知っている。だからこのクレセントは偽者。そう割り切れるかもしれない。

だが、マリアは……。

「答えて。どうなるの？」

「安心して。まだクレセントが偽者と決まったわけじゃないもの。軟禁状態にはなると思うけど、待遇は保障しているわ」

「随分と譲歩してるのね」

そうは言ったものの、マリアの顔は和らいでいた。

だが、すぐにそれは引き締まる。もしこの件がマリアかフェイトに回されるようならば、時間は少ないのである。

「貴女なら分かるでしょう？　スパイだとしたら、おかしな点が多すぎるってことを」

マリアは無言で頷いた。

しかし、それでも国はクレセントを拘束した。そして、シレーネもそれに殉じた。それほどまでに、聖王国シーハーツにおいて主神アペリスから授かった御力は大きいということだろう。

「……おかしな点が多いってのに……クレセントを捕まえたのかよ」

今まで険悪な表情を浮かべて黙っていたネイビスが口を開いた。問いかける、というよりも独り言のような呟きだった。

シレーネは膝の上で合わせた手を力強く握る。

「クレセントが……抵抗しなかった、から」

「は？」

「見ていたでしょう？　私はクレセントをなんで捕まえたのか一切説明しなかった。でも、あの子は従ったのよ」

白くなった手は、わなわなと震えている。

ネイビスはそれから視線を逸らし、ぐっと拳を握る。

「私はあの子が――クレセントが少しでも抵抗したり、状況を理解できていないようだったら、捕まえるつもりはなかった。たとえ陛下のご命令でも。――でも……あの子は」

シレーネの瞳が堅く閉じられた。

「あの子の目は……違った。まるでこうなることを分かっているようだった！」

「分かった。もういい……悪かった」

ネイビスは自分を呪い、それと同時に少しの安堵感を覚えた。

「なんで……あんな目を……信じたい、のに……」

閉じられた瞳から、透明な雫が数滴落ちた。

「シレーネ。一つ、いいかしら？」

「……っなに？」

シレーネは目尻に溜まった涙を指で拭いながら答える。

「後天的に、施力が下がるということはないの？」

「あったらそう易々とクレセントに容疑なんてかけてないわ」

「それに似た事例は？」

シレーネは一旦考えてから、小さく声を上げた。

「後天的に下がる、というのじゃないけれど、高い血統値を持った者の子の施力が著しく下がる現象はあるわ」

この後、シレーネの言葉を聞いたマリアは、妙に難しい表情を浮かべてシャロム邸から飛び出したのだった。

※

ヴァンは早足で病院の廊下を歩いていた。普段穏やかな笑みを浮かべているヴァンらしくもなく、どこか余裕のない表情だった。真冬だというのに、額に汗すら浮かんでいる。

目当ての病室の前で立ち止まり、軽くノックをして室内に入る。

そこに居た仲良さ気な恋人たちは、険しい表情のヴァンを見て不思

議そうに顔を傾げた。

「どうしたの、ヴァン？　そんな怖い顔して」

「なにかあったのかい？」

クレアとフェイトの質問にヴァンは一呼吸置いてから答えた。

「……クレセントが、スパイ容疑で捕まりました」

フェイトが手にしていた林檎を落とし、クレアの目が開かれる。ごろり、と鈍い音を立てて落ちた林檎は、ヴァンの足元まで転がっていった。

ヴァンはそれを拾い上げ、視線を伏せる。

「シランド城の一室で取調べを受けています。現在はセフィリアが事にあたっていますが、後はフェイト様が引き継ぐようにと」

その言葉を聞き、フェイトは眉間に皺が寄るのを感じた。そして思った。来たか、と。

〈星海〉が発足して間もない頃、マリアと共にラッセルに呼び出された記憶が脳裏に浮かんだ。

「ヴァン――もしかして上は」

「恐らく」

あの日のラッセルは眉間の皺がいつもの倍だった。フェイトとマリアは〈星海〉として呼び出されたのに、なぜソフィアがいないのかを尋ねた。

『まだ早い』

それが、ラッセルの答えだった。

「時間は？」

「残念ながら、悠長に考えている暇はないかと」

ラッセルから話されたのは、〈星海〉のもう一つの仕事。

単純にそれぞれの管轄の総纏めのためだけに作られたのではない。

別に仕事があったのだ。決して表には出せない、裏の仕事。

「フェイト。どういうこと？」

いまいち事情を飲み込めていないクレアが、疑問の声を上げる。

クレアは〈星海〉の裏の仕事を知らないのだから無理もない。

そこでフェイトは漸く気付いた。

なら、どうしてヴァンは知っている、と。

今まで普通に会話していたから気付けなかったが、ヴァンの口振りは確実にその情報を得ている者の返答だった。

「ヴァン、君はどうして」

「ラッセル様から。私はいざという時はフェイト様を影からサポートするよう仰せつかっています。三柱自ら動けば確実に上の目に留まります。ですから、私は無関係のふりをして強力致します」

「どうして言ってくれなかったんだ？」

「ラッセル様個人の頼みだからです。事が来るまでは黙っているつもりでした」

フェイトは納得したように頷き、クレアに視線を移し、次にヴァンに目配せする。

「別にあの事を黙っていろ、なんてのは規約になかったよな」
「なるべく漏らさないのが良いと思われますが、クレア様になら問題ないでしょう」
「だ、だからなんのこと？」

置いてけぼりを食らったクレアがフェイトとヴァンを交互に見る。
フェイトはクレアに向き直り、その細い肩に手を置いた。
そして、小さく、しかしクレアにだけはハッキリと聞こえる大きさで言った。

「上層部は、クレセントを抹殺するつもりだ」
「どういう……こと？」

クレアの肩は震えていた。意味が分からない。そう訴えかけてくる瞳が、フェイトを射抜いた。
フェイトはクレアを落ち着かせるように軽く抱きしめ、体を離した。手は、肩に置いたまま。

「いいかい、クレア。僕たち〈星海〉には君たちクリムゾンブレイドの補佐と総纏め役の他に、もう一つ仕事があるんだ」
「もう一つ？」
「――国内にいる造反者の始末」

フェイトの耳元で、クレアが小さな声を上げた。

「上は僕にクレセントを任せた。それはつまり、この期に乗じてクレセントを始末しろ、ということなんだ」
「それはなぜ？」
「クレセントは反乱疑惑のあったシャロムの娘だからね。不穏分子として始末する機会を狙っていたんだと」

フェイトの言葉は最後まで続けられなかった。
静かな怒りを秘めた褐色の瞳が、目の前にあったから。

「違うわ！　私が聞きたいのはどうしてあなたがそんな事に協力してるのかってことよ！」
「クレア……」

怒りを露にしたクレアの言葉を、フェイトは噛み締めた。
この話をを聞いたとき、フェイトとマリアは即座に〈星海〉を辞退することを考えたのだ。
しかし、ラッセルの言葉がそれを踏み留めた。
それを知るからこそ、食い止めることが出来るだろう、と。

「クレア。僕はね、止めたいんだ。今のクレセントのように裏で小細工をされて社会から消されようとしている人を助けたい」

今がまさにその時だ。上の考えがフェイトには分かっている。だからそう易々と思い通りにはさせてやらない。

「クレア、もしフェイト君やマリア様が断っていたら、上層部は別の部隊を作ることを考えていた。だからフェイト君たちは自らがその役を買うことで食い止めようとしてるんだ」

ヴァンがクレアを宥めるような口調で言う。
クレアは我に返ったように静かになり、その顔がみるみるうちに歪んでいった。

「ご、ごめんなさい。私……」
「いいんだ。むしろクレアが怒ってくれて安心したよ。僕の大好き

なクレアは、そういう子だって分かってるから」
「フェイト……」
クレアの頬に手を当て、フェイトは柔らかく微笑む。クレアはフェイトの手に自分の手を重ね、もう一度「ごめんなさい」と呟いた。
「うん。もう一つ付け足すとね、〈星海〉を考えたエレナさんや陛下、ラッセル様はこんなことさせるつもりじゃなかったんだよ」
「頭の中がお金と欲とちっぽけな誇りしかない愚かな人たちの仕業でしょう」
「……そうだけど、クレア、それ本人の前では言わないでくれよ」
全くその通りなのだが、酷い言いようである。フェイトは冷や汗を垂らしながら苦笑し、更に付け加えた。
「戦争が終わって国内の反乱分子が増えてきたのを理由に、彼らが言い出したんだ。最初は陛下もラッセル様も反対した。けどここで反対したところで彼らは独自の部隊を作る。だから陛下達はせめて自分達の信頼の置ける人に託そうって考えた」
「それが、あなたたち」
「ああ。だがクレアたちにはこれ以上の負担はかけられない。それに、ネルは何が何でも反対しただろうからな。結局実力もあって信頼の置けるフェイト君たちに任せたのさ。陛下たちも辛いご決断だったんだが、フェイト君たちは引き受けてくれた」
ヴァンが机の上に林檎を置きながら微笑む。
「助けられる命があるなら、僕等は全力で努力します、ってね。クレア、君の旦那様は大したものだよ」
「止めてくれよ。それに、最初にやるって決めたのはマリアなんだ

し」
「マリアさんが？」
「ああ。馬鹿な貴族の思い通りなんかにはさせない。全員真っ当な方法で裁いてやる、って闘志燃やしてたよ」
その時のマリアの表情を思い出し、フェイトは吹き出した。
動機は半ば普段ストレスを溜めさせられている貴族への復讐もあるのだが、やるとなったら全力で望むのがマリアだ。そうなればこれほど心強い存在はない。
「でも、今回は僕の出る幕はないのかもしれないな」
「どうして？」
クレアが首を傾げる。フェイトは肩を竦めて、息をつく。
「マリア、最近クレセントにつきっきりなんだ。昨日もクレセントの家に行ったきり帰って来なかったし」
「あら、寂しいの？」
「クレアが居てくれるから平気だよ」
「ふふ、なら早く退院しなくっちゃ」
くすりと笑うクレアに、フェイトはビシリと言い放つ。
「明日までは入院。セフィリアに怒られるぞ」
「ふぅん。フェイトは私と一緒に居たくないのかしら？」
「う……それはずるくないか？」
フェイトが押し黙ると、クレアは「冗談よ」と微笑む。
こうして繰り広げられる会話の外で、完全に存在を忘れられたヴァンは小さく溜息を吐くのだった。

※

真昼間だというのに、部屋中のカーテンを閉め切った暗い部屋で1人の女性がベットに寝転がっていた。
唯一の明かりは蝋燭に灯された小さな橙の光のみ。
黒に溶けてしまいそうな漆黒の髪が、白いシーツに散らばっている。
ふいに、部屋がノックされる音。女性は体を入り口の死角へとずらし、「いいよ」と答えた。
慎重過ぎる、といっても過言ではないくらいにゆっくりと開かれた扉から、食事を載せたトレーを持った小さな少女が顔を出した。
淡いピンクの髪を赤いリボンで縛った少女は素早く扉を閉め、女性に駆け寄った。

「ご飯、持ってきた」
「ありがと、ユティ。うわぁ、美味しそう」

トレーに乗せられていたのは色鮮やかな料理の数々。どれも、シーハーツには珍しい食材で作られていた。
女性は「いただきます」と両手を合わせてからフォークとナイフを取り、口へ運んでいく。

「美味しい。ユティ、料理上手くなったね」
「お姉ちゃんが、作らないから」

ユティ、と呼ばれた少女がやんわりとした笑みを見せる。
女性はユティの頭を優しく撫で、にっこりと微笑んだ。

「今度とびっきり美味しいの作ってあげる。ユティの好きなものみーんなね」
「うん、楽しみ」
「さぁってと。ご飯食べたら何しようか？　約束の日は明後日だし」
「だから、もっとゆっくり出れば良かったのに……」

女性に持ってきたものとは別に作られた料理に口をつけながら、ユティは不満そうに述べる。女性はたどたどしい笑みを零し、水分をたっぷり含んだ野菜を飲み込む。

「待ちきれなくって、さ」
「そんなに、楽しみ？　あの人に、会うの」
「うん、すごく。どうしてるかな。元気にしてるといいなぁ」

女性の顔はこの上なく嬉しそうで、ユティは思わず顔が綻んだ。年の差は歴然なのに、まるで女性のほうが年下に見えてしまう。そんな不思議な二人組み。
女性は温かいスープを一飲みして、カーテンの敷かれた窓を見つめた。

「もうすぐだよ、クレア」

1－17　四人目

クレセント・ラ・シャロムが捕まったという事実はすぐさま各師団長、一級構成員に伝えられ、サンマイト、アーリグリフへ散らばった者達にはフェイトが通信で伝えた。しかし公には知らされることはなく、クレセントはグリーテンから帰国した疲れによる一時休暇、という体裁が取り繕われた。

クレセント拘束から一夜明け、仕事を終えたマリアはシランド城の一室を目指して足を進めていた。

嫌な予感が当たってしまったのだ。フェイトからの連絡があった。クレセントは自分に回された、と。

予想はしていた。クレセントは軍部の人間。回されるなら軍部管轄のフェイトが妥当だろう。だが、そんなことはどうでも良かった。とにかく時間が少ない。

〈星海〉の裏の任務としてはこれが始めてである。少しくらいは遅れても大目に見てくれるかもしれない。

だが、それにも限度はある。

「もって……一ヶ月、かしらね」

短すぎる。

クレセントが本物であると言う事を証明しなければクレセントは刑を免れないだろう。一応手は打ってあるが、見つからなければ意味がない。そもそも見つかる可能性のほうが圧倒的に低いのだ。

リミットは一ヶ月。その間に見つからなければアウトだ。

今回の場合はクレセントが偽者かもしれないという証拠は出ているが、スパイだという証拠はない。フェイトに与えられた任務は、そこを上手くやりくりして有罪にしろ、ということだ。

つまりは証拠さえ出なければクレセントの有罪は見送られる。

「まぁ、そんなことをしていたら奴らはさっさと偽の証拠でも作り出すでしょうね」

国とはそういうものである。綺麗なところばかりではない。必ず影が巣食うものだ。そしてこのシーハーツも例外ではない。

女王や執政官、クリムゾンブレイドの高潔さはマリアも良く分かっているが、政界、貴族界の腐りようは目に見えている。

とにかくクレセントのスパイ容疑だけでも解かなければならないが……。

「あの子が何か隠してるのは事実だし……馬鹿な考えしなければいいんだけど」

目当ての部屋の前につき、見張りの兵に目配せをすると、兵は敬礼をしてマリアを中に通した。

何時もと全くと言っていいほど変わらないクレセントが、窓際の椅子に腰掛けて外を眺めていた。特に拘束されている様子もなく、どうやら待遇はそれほど酷いものではないようで、ひとまずマリアは胸を撫で下ろした。

ただ一つ変化があるとすればその白い頬に、一筋の跡があったことだけ。

「相変わらずね。何陰気な顔してんのよ」

あえて、マリアはその泣き顔には触れなかった。

「明るい顔してたら変じゃないですか」

「それもそうね」

流れる沈黙。
マリアは内心焦っていた。言いたい事や聞きたい事は山ほどあった。なのに、一言も出てこないのだ。

「マリアは――」

沈黙を破ったのは、クレセント。窓の外を眺めていた翡翠の瞳は、今マリアを映している。
その色が不安気に揺れていると思ったのは、マリアの気のせいだろうか。

「マリアは……わたしを責めないんですか？」
「どうして？」
「聞いたんですよね？　わたしが、偽者……かもしれないと」

クレセントにしては珍しい、歯切れの悪い言い方だった。
俯くクレセントを見て、マリアは盛大に溜息を吐いた。言いたかった事など、全て吹っ飛んでしまった。

「はぁ……じゃあ聞くけど、あなたは偽者なの？」
「……答えられません」

長い前髪に隠れて表情は見えない。
マリアは入り口に凭れかかっていた背を離すと、クレセントの傍まで歩み寄る。足音に気付いたクレセントが顔を上げると、困ったような笑みを浮かべるマリアが居た。
てっきり険しい表情のマリアが居ると思っていたクレセントの目が丸くなる。

「マリア？」

「別に責めちゃいないわよ」
「え？」
「だって、あなたまだ何もしてないじゃない。まぁ、あなたが偽者で本物のクレセントをどうにかしたっていうのなら穏やかじゃないでしょうけど、その証拠もないし。それにあなたが別人だったとしても構わないから」
マリアはクレセントの髪を乱暴に撫でる。
「ど、どうしてですか？」
「だってそうでしょ？　私があなたと会ったのは、ほんの少し前。だから――」
クレセントの髪から手をどかすと、ぐしゃぐしゃの髪のままマリアを見上げるクレセントを目が合う。
クレセントは見た。白銀の隙間から、マリアの碧の瞳が優しげに笑ったのを。
「私にとってのクレセントは、あなただけ」
翡翠から自然にこぼれ落ちる、透明な雫。
きっとクレセントは泣いていることに気付いてすらいないのだろう。呆然とした表情で、マリアを見上げていた。
「またそうやって泣く」
「え、あ……」
「泣き虫」
「そうかも、しれません」
手の甲で目尻を拭い、クレセントは困ったように笑う。

「クレセント」
「はい、なんでしょう？」
「すぐに、疑いを晴らしてあげるから」

よく聞き取れなかったのか、クレセントが首を傾げてマリアを見る。

「ごめん、なんでもない。じゃあ私はそろそろ行くわ。ああ、こんなとこに閉じ込められてちゃ暇でしょう？　何か欲しいものがあったら言いなさいよ」
「また、来てください」
「それは来るつもりだけど、それだけでいいの？」
「それで十分です」

そう言ってクレセントはかすかに笑う。
マリアは「分かった」と返事をして部屋を後にした。クレセントは閉じられた扉を一度だけ見ると、また窓の外へ視線を戻す。
それから数分も経たないうちに、一人になったクレセントの居る部屋がノックされた。クレセントが「どうぞ」と声をかけると、扉は静かに開き訪問者が姿を現す。

「元気そうだな」
「そう見えますか」
「ああ。随分といれこんでるみたいじゃないか」

訪問者は口元に笑みを浮かべ、扉から離れた。
決して大きくない声で、会話は交わされる。

「……それより、どうするんですか？」

「――その前に、お前の血統限界値が低くなってる理由を説明してもらおうか。お前が偽者なら……」
「あなたに起きた現象がわたしに後発的に起きた、と聞いています。わたし自身下がっていたことに気付きませんでした」
クレセントは窓際の花瓶に生けられた花を一輪取り、手の中でくるくると回す。
訪問者は大きく息を吐き、クレセントに背を向けた。
「まぁ、今更疑う余地もないさ。お前が偽者であるほうがおかしな話だからな」
「ありがとうございます」
「必ず助けてやる。だから、もう少しだけ頑張れ」
くるりとクレセントに振り返り、その肩に軽く手を置く。
「三日後……迎えに来る」
そう短く言い切り、訪問者は姿を消した。
そうしてまた独りになった部屋に、夕日が差し込む。まるで血のように真っ赤な夕日が、狭い室内を染めあげた。
「紅い……」
クレセントの長い袖の中、しゃらりとした涼しげな音が、赤に吸い込まれていった。
そして、全てを隠す夜が来る。
※

「本当!?　ネル！」
『ああ。ばっちりさ。資料は明日の朝にでもそっちに届くと思うよ』
「そう。良かった……」
『ふふっ』
「何よ」
『いや、あんたのそんな顔、なかなか見れるもんじゃないからね』
「べ、別にいいじゃない」
『それにしても意外だね。あんたがあの子に入れ込むとは思わなかったよ』
「自分でも不思議よ。それも会ってたったの数日なのに」
『時間じゃないんだね。こういうのはさ』
「……そうね。その通りだわ」
『一つ、聞いていいかい？』
「何？」
『あんたがそこまでする理由は何？』
「友達を助けたい。それじゃ駄目かしら？」
『……いや、十分だよ。野暮なことを聞いたね』
「気にしてない」
『私が言えた義理じゃないけどさ。あの子を、頼んだよ』
「ええ、任せておいて。――ネル」
『なんだい？』
「ありがとう」
『どういたしまして』

※

「それで、報告したいこととは何だ？」

クレセントが拘束されてから二日目。ラッセルの執務室にマリアとフェイトは真剣な面持ちで立っていた。

マリアが持っていた数枚の紙をラッセルに手渡し、見るように促す。

ラッセルは上から下へ目を通すように見ると、軽く目を開いて顔を上げた。

「これは真実か？」

「ええ。間違いないわ」

「本人とも確認が取れました。これで、クレセントが偽者、という疑いは晴れたかと思います。そうすればスパイ容疑も晴れるはずです。そちらに関しては具体的な証拠もないのですから」

マリアの言葉にフェイトが付け加える。

ラッセルは二、三度首を捻ると、眉間の皺を深くした。

「しかしシーハーツ人とアーリグリフ人との混血の子供の施力が後天的に下がることなど……」

マリアがラッセルに渡した紙に書かれていたこと。それは、シーハーツ人とアーリグリフ人との間に生まれた混血の子供は、例え親が高い施力を持っていたとしても著しく施力が下がる傾向にある。そして、その現象が生まれて何年後かに、つまり後発的に起きた事例がある、という内容だった。

混血の子の施力が親に比べて圧倒的に低いという事例は、シーハーツでも周知の事実だ。しかし、稀に下がらない子供もいる。その最たる例は、クレアである。アドレーはシーハーツ人であるが、彼女の母シャロン・ラーズバードは生粋のアーリグリフ人。だが、クレアの血統限界値は三十六％と高い数値を差している。

ラッセルは内容を食い入るように眺めてから、目頭を押さえて顔を上げた。

「このような事例、見たことも聞いたこともないぞ」

「それはそうでしょうね。シーハーツ人とアーリグリフ人の混血は基本的にアーリグリフに流れる傾向にあるから」

戦争が始まる前は友好関係だった国同士、シーハーツ人とアーリグリフ人との混血が生まれることもそう珍しいものではなかった。

しかし、そうした者達は決まってアーリグリフへと流れる。

何故か。シーハーツの過激なまでの差別に耐えられないのだ。無論アーリグリフでも差別は存在するのだが、シーハーツよりいくらかはマシなのである。

言うまでもなく、シーハーツでは当たり前となっている血統限界値の検査はアーリグリフでは行われていない。それゆえ、混血の子供の施力が後天的に下がる、という現象が今まで発見されないでいたのだ。

そもそも何故アーリグリフ人との混血の子供の施力が下がるのかは、いまだ不明である。遥か昔、グリーテンの侵攻に恐れをなし、国を捨てたエーデグリフにまだアペリスが怒っているから等様々な見解はあるが、どれも確証はないものばかりだ。

アーリグリフで施術が発達していないのも、それを行使する術がないのに加えこの妙な現象のせいであると言われていた。現段階で判明している混血の子の施力は一世代で親の約三分の一にまで下がる。そして、それが二世代にもなると限りなくゼロに近くなってしまうのだ。

「混血の子の血統限界値が下がるというのを聞いて思ったのよ。偶発的にこれが生まれた後に発現する可能性もあるんじゃないかって」

「実際に下がったという事例が、現段階で二件」

フェイトが手元の資料をラッセルに渡す。

「極めて稀なケースである事に変わりはありませんが、皆無ではないということです」

そこには、実際に下がったとされる人物の出生、経歴、元の血統限界値などが事細かに記されていた。

「そう。そしてクレセントの母親、シャロム夫人は」

マリアの人差し指が立てられる。

ラッセルはに引き出しを開け、クレセントの資料を取り出した。

今回の件の資料として、師団員の記録帳から取り出してきたものだ。

ページを捲り、あるページで手を止める。

「父親フローレンス・リ・シャロム。シランド出身。母親ファレス・ラ・シャロム。――カルサア出身、か」

大きく息を吐き、資料を机の上に置く。

「どうですか？　少なくとも、これでクレセントに釈明の余地はあると思うのですが」

「まぁ、証拠としては悪くない。だが、奴らを説得するのには少々時間がかかる。クレセントにはもう二、三日大人しくしていてもらわねばならぬ」

「じゃあこれでクレセントの疑いは晴れるわけね」

「ああ。この事例とクレセントのスパイ疑惑についての不明解な点をぶつければ奴らも大人しくなろう。良くやってくれたな。それもたったの二日で」

これでクレセントは助かる。フェイトが横目でマリアを見ると、心底安心したような笑みを浮かべていた。
その目の下にくっきりと浮かんだ隈を見て、フェイトはやれやれと肩を竦めた。

一昨日シレーネから話を聞いたマリアは、アーリグリフに居るネルに連絡を取り、前から懇意にしてもらっていたアーリグリフの情報通に連絡を取ってもらった。そして駄目もとで当てはまる人物を探してもらったところ、意外なことに返事は朗報であった。それもたった一日で二件。
すぐに件の人物にコンタクトを取ってもらい、同意の下に資料を作成したのだ。
その資料が届いたのが今日の明け方。それからすぐにマリアは報告書の作成に取り掛かり、それを終わらせた頃には夜が明けていた。
つまり、一昨日から丸二日マリアは働き詰めであった。
一方、フェイトはと言えば、

「なにもしなかったわけ、ね」
「め、面目ない……」

ラッセルの執務室から退室したフェイトとマリアは、その足でクレアの病室へ来ていた。
事のあらましを説明すると、クレアはほっと安堵の笑みを浮かべ、すぐにその端正な顔を呆れ顔に変えた。

「……もう、情けないわね。全部マリアさんに任せっきりで」

フェイトの剥いた林檎を一口食べ、クレアはベットの上に目を移

した。
いま、クレアは椅子に座っていて、本来クレアが寝るべきベッドにはマリアが静かな寝息をたてて横になっている。
丸二日寝ていなかったのが余程堪えたのだろう、話の途中で舟を漕いでしまったマリアを、クレアがベッドへと寝かせたのだ。普段のマリアなら断るところなのだろうが、その時は半ば寝ぼけていたのだろう、大人しくクレアに従いベットに入った。その様子がまるで姉妹のように見えて、フェイトは思わず顔を綻ばせた。
そしてフェイトが説明を引き継ぎ、今に到るわけである。
クレアはマリアの蒼髪を起こさないようそっと撫でると、ふわりと微笑んだ。

「私、出会った頃はマリアさんがこんな子だなんて思ってもみなかった」
「僕もだよ。強くて、情に流されない人かと思ってた」

だが、それは違った。
一緒に旅をする中で、フェイトは色んなマリアを見た。

「マリアは人一倍優しいんだ。多分、僕等の中の誰よりも」

父を助けた修練場で、本音を曝け出して叫ぶ姿。
思えばあれがマリアの認識を改める最初のきっかけだったのかもしれない。

「でも素直じゃないから、一人でなんでもやろうとする」

ディプロの中で、独り後悔し続けていた姿。
弱い姿は見せたくないと、人を遠ざけていた。フェイトと入れ違いに部屋に入っていったリーベルに、フェイトは小さく「頼むよ」

と言ったのを今でも覚えている。

「ほんとは皆と居るのが好きな、寂しがりやなくせにね」

クォークのメンバーの中で笑顔を見せる姿。
まるで家族のような集団だった。クリフが居て、ミラージュが居て、マリエッタが居て、リーベルやスティング、ランカー達が居た。
その中心にいるマリアはとても生き生きして、輝いていた。

「クレセントは似てるんだと思う。マリアに」

誰も寄せ付けない、孤高の存在に見えた姿。
しかしその影には、いつも涙があった。

「一人でなんでも抱え込んで、誰にも弱音を見せない」

戦闘の時、何時も周囲を気にして、仲間が危険なときは自らを省みずに飛び出す姿。
幾度、助けられただろう。大怪我を負って、目を覚ましたマリアの第一声が「無事で良かった」だったのは、きっと一生忘れない。

「だから、助けたいんじゃないかな」

ルシファーによって存在を消されそうになった時、隣で微笑んでくれた姿。
あの微笑みに、言葉に、どれほど勇気付けられたことだろう。マリアの声が、いつも覚悟の後押しをした。

「だから、こんなに必死になるんじゃないかな」

そう、まるで独り言のように喋るフェイトの表情は、とても穏やかだった。眠る、マリアの表情も。

クレアはそんな蒼髪の双子を優しい瞳に映しながら、窓の外を見つめた。

夕焼けに染まる空に、二羽の鳥が羽ばたいている。紅く燃える太陽に真っ直ぐに飛んでいく姿は、やがて太陽と共に見えなくなった。

それからお馴染みの医師がクレアの退院を告げるまで、フェイトとクレアは心地よい沈黙に身を委ねていたのだった。

※

「ねぇ、ネル」

調査の間の宿泊先として用意されたアーリグリフ城の一室で、ネルとルージュは熱い紅茶を囲んで何気ない話をしながら連日の調査で溜まった疲れを癒していた。

その最中投げかけられたルージュの言葉。

ネルが紅茶を口元へ運ぶ手を止めてルージュを見る。

「なんだい？」

「一つ、気になってることがあるのよね」

「私たちがいつまでここにいるのかってことかい？　それならあと数日だって」

「ううん、そうじゃなくってさ。こういう時1番騒ぎそうな人が静かだなぁって思って」

「……」

「ネル？」

「忘れてたほうが……幸せだと思うよ」

口に含んだ紅茶は、驚くほどに苦かった。

※

サーフェリオで見つかったエリミネートライフルがあった場所の調査を終えたソフィアとアゼルは、地平線の向こうに目を向けたまま静止していた。
その目はどこか遠い。

「アゼルさん」
「なんですか、ソフィアさん」
「アレ……なんですかねぇ」

遥か遠くで一直線に巻き起こっている土煙。その先頭には、小さな黒点が見える。

「幻でしょう」

いっそ清清しいくらいに言い切るアゼル。
アゼルがそのまま足を進め、さっさとサーフェリオへ戻ろうとした矢先、

「アゼルさん」

いまだ地平線の向こうを眺めているソフィアに呼び止められた。
そして、ボソリと一言。

「こっちに来ます」
「逃げますよ」

その瞬間アゼルはソフィアの手を取り全速力で駆け出した。
その細身の体からは信じられないほどの力強さで走るアゼルと半ば引っ張られる形で走るソフィアの横を、一陣の風が奔った。
塊のような巨躯と細身の体はアゼル達を追い越し、数メートル先で急ブレーキをかける。それを見てアゼルも諦めたように止まり、がっくりと肩を落とした。
そして、額に手を当てて、目の前の人間離れをした2人に視線を向けた。

「なにか御用でしょうか、アドレー様、リーゼル様？」
「うむ。妻を捜して少々席を外しておってな。その間の出来事を教えてもらいたいのじゃ」
「結局見つけられなかったんですけどね」

豪快に笑うアドレーの横で、上品に微笑むリーゼルは場違い極まりないのだが、どこか自然に見えてしまい、アゼルは右目を擦った。
ソフィアはあのアドレーと共に走っていた女性を唖然とした表情で見つめている。

「あ、アゼルさん。この方は？」
「あれ、ソフィアさんはご存知ないですか？　ネルさんの母上ですよ」
「初めまして。ソフィアちゃん。いつもネルがお世話になってます」

リーゼルが柔らかな物腰でソフィアの手を取り、軽く頭を下げる。
ソフィアは弾かれたように首を振り、腰を九十度曲げて頭を下げた。

「い、いえ！　ネルさんには私のほうが助けられてます！」
「いえいえ。ネルから聞いてますよ。常識人がいてくれて助かるって」
ソフィアの顔が引きつる。そんなに苦労させていたのか、と心の中でネルに懺悔した。
アゼルも苦笑を浮かべつつ、リーゼルに軽くお辞儀をし、アドレーに向き直った。
「僕たち調査組の方には目立った動きはありません。ですが、シランド、ペターニの方で立て続けに問題が起こっている模様です」
「ほう」
「クレセント・ラ・シャロムの帰国したのはご存知ですね？　彼女がグリーテンのスパイ容疑で身柄を拘束されました」
「なに？　何故じゃ？」
アドレーが顎鬚を撫でていた手を止め、片目をアゼルへと向ける。
「どうやら彼女の血統限界値がデータと一致しなかったようです」
アドレーとリーゼルの瞳が丸くなる。
アゼル一泊置いて、ですが、と付け加えた。
「先程入った新情報です。その件に関しては冤罪だったようです」
「冤罪……とは？」
「クレセントさんを疑った最初の理由である血統限界値が後発的に下がる現象があったらしいんです」
ソフィアが答える。

「リーゼル」

アドレーが横で静かに会話に耳を傾けていたリーゼルへと振り向く。

リーゼルは顎に手を持っていき、眉間に皺を寄せた。

「私も……初耳ですね」

「お主もか。それは真の話なのであろうな？」

「僕はそれほど関与していないので一概には答えかねますが……。――あのマリアさんが納得してると考えると、信憑性はそれなりにあるのだと思います」

「ふむ。まぁ、グリーテンなどが関与してくるなど考えられんからのぉ」

アドレーはうんうんと頷き、再び顎鬚を撫でる。

アゼルが一息つくように息を吐き、腰に手を当てて微笑んだ。

「納得して頂けたようですね。それで、御二方はこれからどうするのですか？　クレアさんのお見舞いですか？　まだなんでしょう？」

「それなら心配には及ばん。クレアには一足さきに会ってきたわい」

「消灯時間過ぎた頃に行ったのですごい剣幕で追い返されちゃったんですけどね」

真夜中に窓ガラスを叩く音で目を覚ましたクレアが、窓にへばりつくアドレーを見て容赦ない蹴りを食らわす様子がアゼルとソフィアの脳裏に浮かんでくる。

きっとクレアは夜中の病院ということも忘れ怒鳴り散らしたことだろう。アドレーもクレアのことになると周りが見えなくなるが、クレアもクレアで見えなくなるのだ。

アゼルは引きつる顔を隠そうともせずに、乾いた笑いを零す。

「では、我々と一緒にサンマイトの調査にあたって貰えませんか？何分調査範囲が広くて、ダグラスの森を探すだけで相当の日数がかかりますから。どうせシランドへ帰っても追い返されるのがオチでしょう？」

何気に酷い。爽やかな笑顔でサラリと傷つくようなことを言ってのけるアゼルと幼馴染が重なった。

しかし、当のアドレーはそんなことを少しも気にする様子はなく、豪快に笑い、二つ返事で了承した。念のためリーゼルにも確認を取ったが、同じく色よい返事が返ってくる。

「では、今日のところはサーフェリオに戻りましょうか。あ、ベットが少ないのでアドレー様は外で寝てください」

「む、致し方あるまい」

仕方ないのか。という突っ込みをソフィアはぎりぎりのところで抑えた。

ここに来てから一段とアゼルの言葉が辛辣だ。何かアドレーに恨みでもあるのだろうか、と思いつつソフィアはリーゼルと並んで足を進めるのであった。

※

「お呼びでしょうか？」

太陽がとうに沈んだ時刻、蝋燭の灯りだけが灯る謁見の間に三人

の男女が跪いていた。
女王は三人に頭を上げるよう言い、ラッセルに小さく告げた。ラッセルは頷くと、白露の庭園へと姿を消す。

「クレア、フェイト殿、マリア殿。此度はそなたらに紹介したい人物がおります」

クレア、フェイト、マリアが顔を見合わせる。紹介だけならこんな夜遅くにしなくてもいいのではないか。そう思ったからだ。
女王はクレアに一度微笑むと、ラッセルの名を呼んだ。それに答えるようにして開かれる扉。ラッセルの後ろについて現れた人物を見て、フェイトとクレアが同時に立ち上がった。

「君は！」
「嘘……」

短い黒髪が開け放たれた扉から吹く夜風に揺らされ、差し込む月明かりでその顔が露になる。
そこに立つ長身の女性はクレアに柔らかい笑みを向ける。

「久しぶり、クレア」
「……っ」

クレアはその場から駆け出したい衝動を必死に堪え、女性を見つめる。
女性はゆっくりとした足取りで階段を下ると、フェイトに軽く手を振り、クレアの前に立った。クレアは今にも泣きそうな瞳を女性に向けている。

「六年ぶり、かな。でも全然変わってない」

「あなただって……」
「そう？　これでも変わったつもりなんだけど」
「それより無事ならそうと連絡くらいしてよ。六年間も音沙汰なしで……死んじゃったかと思ったわよ」
ついに零れた涙を手の甲で拭いながら、クレアは咎めるような口調で言う。
「酷いな。ちゃんと二本足で立ってるでしょ」
「体は？」
クレアの問いに、女性は首を横に振った。クレアの表情が一瞬にして曇る。それを見た女性は焦ったように手を振り、クレアの肩に手を置いた。
「あ、でも大分いいんだ。前みたいにすぐに倒れたりはしなくなったから」
「……」
「そ、それにほら。病気の進行も抑えられてるし……ね」
ぽんぽん、と沈む肩を叩くと、クレアが困ったように笑った。
「ごめんなさい。心配されるのはあなたのほうなのに、私が逆に心配されるなんて」
「いまさらだよ」
「それもそうね」
二人の笑い声が静かな謁見の間に響く。ゆらゆらと揺れる蝋燭の灯りが、優しくそこにいる人々を照らした。

「――ところで」

凛とした声がクレアと女性の間に割り込む。クレアがはっとしたように口元に手をあて、女性がぽかんと声の主を見る。

声の主であるマリアは腕を組んだ格好でクレア達に近づき、女王を振り向く。

「彼女は誰なんですか？」

「セレン・ウォン。病気の療養のために六年前からサンマイトに渡っていたものです」

「それで、彼女を私達に紹介した理由は？」

「おまえ達の同僚になるんだ。顔ぐらい知っておいてもいいだろう」

ラッセルの一言にマリアの、フェイトの、クレアの動きが一斉に止まる。

「同僚って――〈星海〉に？」

「ああ。セレンは〈星海〉の一員となることが決まった。担当管轄は技術開発だ。だが、暫くの間はディオンの代わりを務めてもらう」

「本来なら元鞘に収まり〈炎〉の師団長になるべきなのでしょうが、現在その地位にはルージュが就いていますから」

「師団長！？」

マリアの声が上ずる。

「六年前までサンマイトに行ってたんじゃないの？」

「ええ。ですから六年前まで〈炎〉の師団長に就いていたのです」

マリアがセレンに振り返り、訝しげな目を向ける。

「あなた……何歳？」
「二十一、だったと思うけど――あの、目が怖いよ」
「十五で師団長に？」

いくら年齢を気にしないシーハーツと言えども若すぎるのではないか。ネルやクレアですら、その年齢では一級構成員にすらなっていなかったはずである。
信じられないと頭を振るマリアに、クレアが苦笑しながら言う。

「シーハーツの神童と呼ばれた子ですから。私やネル以上の実力の持ち主です」
「いまはただの食客になりそうなのが悲しいところだね」

喉を鳴らせて笑うセレンに、ラッセルの咳払いが響く。

「相変わらずだな、おまえは。だいたい食客の意味が違っている」
「まぁ、そう言わないでください。変わらないって、いいことでしょう」

そう言ってセレンが紫の瞳を細めたところで、今まで口を開けたまま硬直していたフェイトが動き出した。
セレンはその視線に気付くと、あの夜と同じにっこりとした笑みをフェイトへと向けた。

「やぁ、フェイト。また会ったね」
「ああ。まさかこんな再開をするなんて思ってもみなかったけどね」
「運命みたいだね」
「いや、全然」

茶目っ気たっぷりに言い放つセレンの言葉を、フェイトは笑顔で

一刀両断する。
クレアが目を丸くしてフェイトとセレンを交互に見た。

「あなたたち知り合いなの？」
「知り合いというか……」

知り合いと言っていいものかわからず言葉を濁すフェイト。
実際話したのはあの夜の短い間だけであるし、知り合いというよりも顔見知りといったほうが相応しいのかもしれない。

「数日前にちょっと話を、ね」
「そうなの。――ってセレン。来てたならすぐに会いに来てくれればよかったのに！」
「あ、あはは……そっ、それよりも。ほら、さっきからフェイトが何か言いたそう」
「え、いや、僕は別に……」

言う事はない。そう言おうとしたが、ふと思い当たることがあり、一つ頷いて女王とラッセルに向き直った。

「陛下」
「なんですか？」
「僕たちの同僚、ということですが、三柱と称している以上四人になると……」
「ソフィアを抜かす？」
「おい」

マリアの爆弾発言にフェイトが思わず突っ込む。
女王がその様子を見て柔らかく微笑む。

「それは心配要りません。エレナの話では元は五人が正式な人数だったそうです」
「軍部、政界、施術、技術、交易。元は一度に五人を選ぶつもりだったのだが、適任な奴がいなくてな」
「なので名称も五柱に改めれば問題ないと」
「そうすると一人足りないんですけど……」
「それは近いうちに選ぶことになるだろう。――何せ、今現在国内の交易は停滞の一途だからな」

原因は他でもない。シャロム家が機能していないことである。
商家の取締役を務めながらシャロム家自体が交易の中心となっているのだ。その党首、夫人ともいない今、本来なら娘であるクレセントが継ぐべきなのだろうが、如何せんこの状況である。
それにもしクレセントが無事な状態であったとしても、家を嫌い軍属になった彼女に商才が備わっているかは甚だ疑問ではあるが。

「そういうわけだ。こいつには技術開発を中心に動いてもらう。ああ、くれぐれも戦闘はさせるなよ。以上だ」

「戦闘はさせるなってどういうことだい？」

謁見の間から退室し、会議室へと場所を移したフェイト達は各々の好きな場所に腰掛けていた。
そんな中、フェイトが口に出した質問である。それにマリアも同意する。

「そうね。あなたやネル以上の実力というのならかなりの戦力になりそうだけど」

クレアはセレンと顔を見合わせると、一度頷いてからフェイトとマリアの顔を見た。

「彼女が病気の療養でサンマイトへ行っている、という話は聞きましたね？」

「ああ」

フェイトも頷く。

「その病気というのが厄介でして、治療法が一切ないのです。六年前、任務中に魔物から受けた傷が原因とされてはいるのですが」

「そう。それから数ヶ月はシーハーツで治療してたんだけどね、一向に良くならなくて。シーハーツにはない医療技術があるっていうサンマイトへ行ってたってこと。結局、進行を遅らせることしか出来なかったんだけどさ」

「彼女は激しく体を動かすと強い動悸に襲われてしまうんです。場合によっては命を落とします」

「そんな……」

「師団長を辞めたのは、それが原因なの？」

言葉を失ったフェイトとは対照的に、マリアは話を進める。

「うん。師団長って言っても一ヶ月くらいだったよ。なってすぐにこんな体になっちゃったから」

セレンがどこか悲しそうに笑い、己の手を見つめたとき、会議室の扉が静かに開いた。

淡いピンクの髪を持った少女が顔を出し、一瞬嬉しそうな顔をするが、フェイトとマリアを見るとすぐに扉の外へ引っ込んでしまっ

た。
セレンは苦笑して肩を竦めると、扉を全開にして少女を招きいれた。
「ほら、ユティ。恥ずかしがらなくてもいいよ、クレアだ」
少女の瞳がおずおずとクレアへと向けられる。クレアも不思議そうに少女を見つめていたが、ユティという名前を聞いてにっこりと笑顔を浮かべた。
「ユティ？　ユティなの？」
「クレア……お姉ちゃん？」
「ユティ！　久しぶり！」
クレアが両手を広げると、少女は満面の笑顔を浮かべてクレアに抱きついた。
「すっかり大きくなったね。顔つきも大人っぽくなったし……やっぱりセレンの世話は大変？」
「……結構」
「どういう意味かな？」
セレンが笑っていない笑顔で抱き合う2人を見る。
「その子は？」
そこにフェイトがやや控えめに口を挟むと、セレンがユティの頭に手を乗せた。
「この子はユティ。ユティ・ウォン。六年前私がサンマイトに行く

時に一緒についていってくれた子だよ」
「ウォンってことは、あなたの妹？」
「うん。血は繋がってないんだけどね。この子、身寄りがなくってさ」
「へぇ」
「ユティは病院に配属になったんだっけ？」

セレンがユティの頭から手を離して問うと、その首が小さく動いた。おそらく、頷いたつもりなのだろう。
そして、名残惜しげにクレアから離れると、セレンの手を取って歩き出す。

「早く……時間」
「はいはい。じゃあ、また後でねクレア。フェイトとマリアさんも」
「マリアでいいわ。その代わり私もセレンって呼ばせてもらうけど」
「もちろん。じゃあね、マリア」

マリアに手を振り、セレンはユティと共に扉の向こうに姿を消した。
が、

「あ、そうそう、クレア」

すぐに顔だけをひょっこりと開け放たれた扉から出した。

「なにかしら？」

いままで柔らかい笑みを浮かべていたセレンの顔が、初めて曇る。
それは些細な変化だったが、その場にいる全員が見て取れるものでもあった。

「見つかった？」

マリアもフェイトもユティもその言葉の意味は理解できなかった。だが、たった1人。言葉を向けられたクレアだけはその意味を知っていた。

セレンと同じように表情を曇らせ、首を横に振る。

「そっか。ゴメン、諦め悪いよね」

「ううん。私だって……諦めたくないもの」

「うん」

短く返事をし、セレンは顔を引っ込めた。今度は、もうその顔を覗かせることはなかった。

急に静まり返った会議室で、暗い表情を浮かべて俯くクレアに、フェイトとマリアはどうすることも出来ずにただ立ち尽くすのだった。

1－18　彩られた写真

フェイトとクレアは、現在この国に起こっている様々な事象を伝えるために、シランドに用意されたセレンの住まいに来ていた。

ベルを鳴らすとすぐに玄関から顔を出したユティは、カーテンを締め切り、やたら多くの蝋燭が灯された部屋にフェイト達を案内した。そして、湯気の立つ紅茶を2人分並べると、手でソファに座るように促す。

「すぐ、来ると思います」

たどたどしい敬語を使っているのはきっと自分がいるからだろうと、フェイトは苦笑した。

クレアの話では、セレンが師団長を辞めるきっかけになった傷を負ったのに、ユティが関連しているのだという。

六年前、アリアスの北東にある一つの小さな村落が魔物に襲撃されていると報告されたセレンは、すぐに部隊を編成して討伐に向かった。

しかし、到着したときには時既に遅く、村落は壊滅状態だった。

惨劇を目にしたセレンが生存者の確認を命令した時、村を襲ったと思われる魔物が姿を現したのだ。

一瞬の出来事だった。セレンが反応するよりも早く横をすり抜けた魔物は、たちまち二人の部下の命を奪っていった。セレンはすぐに撤退命令を出し、一人その場に残った。連れてきた師団員では手に負えない。しかし、このまま放置すれば、魔物は血を求めアリアスに辿り着く。そう判断したのだ。

その後、シランドからアドレーとクレアを含む応援部隊が駆けつけた時、既に動かなくなった魔物と血の海の中で倒れるセレン、そしてその傍に佇む少女の姿があったという。

その少女こそが、ユティなのだ。
保護されたユティは自分の名前以外何も覚えていなかった。家族のことも、村のことも。後々分かったことだが、その村落はシランドの情報には一切の記録がない村だった。
そして一命を取り留めたセレンは、ユティを引き取り、姉となった。ユティも最初のうちはセレンを受け入れなかったが、暫く一緒に生活するうちにだんだんとセレンに懐いていった。
それ以来ユティはセレンにつきっきりで身の回りの世話を手伝っている、とうことだった。身寄りのない自分を引き取ってくれた恩義なのか、それとも違う理由なのかは当人が語らない限り知る由もない。
そこまでフェイトが考えたときだった。蝋燭を灯した台をを持ったセレンが、姿を現した。

「ごめんね。ちょっと調べものがあって」
「構わないわ。それで、何から話せばいいかしらね」
「そうだね。とりあえず、フェイトが誰なのかを教えてもらえるっていうのはどうかな？」

クレアとフェイトがギクリと身を強張らせる。

「ふ、フェイトはグリーテンの技術者なのよ。色々な事情でアーリグリフとの戦争に協力してもらって……」
「ふぅん。なるほどね。じゃあ、次はシャロム家について」

驚くほどあっさりと引き下がったセレンに、クレアとフェイトはほっとする。
そして気を取り直してフェイトが自分達がエリクールに来てから、ここに居つくと決めたことまでを、クレアがここ数日の間に起こった事を話した。もちろん、先進惑星の技術や創造主については上手

く誤魔化している。

「そう。クレセントが」

「クレセントと知り合いなんですか？」

「七年前かな。丁度バッタリ会ってね。その時に少し話をしたぐらいだよ。ちょっと興味もあったし」

「そうなの。それで、いきなりでなんだけど、あなたの意見を聞かせてほしい」

クレアが身を乗り出す。セレンは紅茶を一口飲むと、足を組んだ。

「それは、何について？」

「未知の武器の発見。クレセントの帰国。グリーテンの過剰なまでの鎖国。シャロム夫妻殺害事件。広大な地下空間。そして、今回の血統限界値の相違。繋がりはあると思う？」

「そうだね」

セレンはほんの数秒だけ顎に手を当てて考えると、組んだ足の上で指を絡めた。

「全部が全部ってわけじゃないけど、あると思う。少なくとも、クレセントの帰国、シャロム夫妻殺人、広大な地下空間は関係があると考えたほうが自然じゃないかな。クレセントの帰国から僅か数日で事件は起きた。あまりに短すぎる。彼女がやったんじゃなくても、何かしら関係はあると思ったほうがいいね」

「そうよね。フェイトは？」

「ああ、僕も同じ意見だ。加えるなら未知の武器については、一つだけ考えがある。ああやって一見意味もないようなことには、必ず裏があると思うんだ。例えるなら、もっと重大な何かから目を逸らすためとか」

「重大な何か、か。それが起きてくれれば行動しやすいんだけどな」
「あなたね、そういう不謹慎なこと言わないの」
クレアがセレンを軽く睨む。セレンは「はいはい」と両手を上げた。
そうして一旦会話が切れたところで、フェイトは何気なく思ったことを口にした。
「クレアとセレンは、どういう関係なんだい？　随分長い付き合いのようだけど」
「どういうって……幼馴染」
「そうなんだ。じゃあネルやルージュやヴァンともかい？」
「いや、ルージュは同じ師団だったからそれなりに知ってるけど、ネル様やヴァン君は知り合い程度だよ」
意外な返答にフェイトは目を丸くする。そこに、クレアの助け舟が入った。
「セレンは気に入った人しか寄せ付けないのよ。それ以外は必ず一線引いて接するの。だから友人も私とルージュくらいしかいないわ」
「一線引く、ね」
フェイトの脳裏にセレンと初めて会った夜の記憶が蘇る。いきなり話しかけられたかと思えば、頭を撫でられた。
あれが一線引いた態度だというなら、どんなに歩み寄った一線だろう。
紅茶を啜るフェイトを見て、クレアは小さく笑う。
「でも、フェイトは気に入られたみたいね」
「へ？」

「でしょ？　セレン」

クレアがセレンに微笑むと、セレンはそれに笑顔を返した。

「うん、そうだね。あ、マリアも気に入ったよ。グリーテンの人は面白いね。この分だとソフィアちゃんって子も興味あるかな」

「ふふ。これから大変ね、フェイトもマリアさんもソフィアさんも」

「どういう意味だい？」

あまり触れてはいけない話題のような気もしたが、怖いもの見たさと同じ心理だろうか、つい聞いてしまう。

内心穏やかでないフェイトに返ってきたは、悪戯っぽい笑みと不吉を匂わせる言葉だった。

「そのうち分かるわよ。セレンに気に入られるってのがどういうことか。手っ取り早いのはルージュに聞くことね。あの子が話せば、だけど」

「そ、そう」

今度それとなく聞いてみようと決め、フェイトは残りの紅茶を一気に飲み干した。

そしておもむろに立ち上がると、締め切られた窓のほうへ歩み寄った。

「それよりどうしてこんなに締め切ってるんだい？　今日はそんなに寒くないし天気だって……」

そう言ってカーテンに手をかけたフェイトを見て、今まで大人しく席についていたユティが血相を変えて立ち上がる。

「あっ！」
「ほら、こんなに――え？」

慌ててフェイトの手を止めようとするユティだが一足遅く、薄暗い部屋に煌々とした太陽の光が降り注いだ。
光が、室内を余すところなく照らした。それと何かが割れる音がしたのは、ほぼ同時だった。
ユティはすぐさまセレンに駆け寄ると、その小さな体で太陽光から庇うようにセレンの体を抱きしめる。
そして、フェイトを振り返り、

「光はだめっ！　早く閉めてっ！」

そう叫んだ。

「え……あ、ああ！」

言われるがままにフェイトはカーテンを引く。また薄暗い闇が訪れ、それと共に荒い呼吸が聞こえてくる。

「――っう」
「セレン、セレン！　大丈夫？　大丈夫？」

ユティの涙声とくぐもった声。
フェイトが闇に慣れた目を向けると、床に散らばった紅茶と胸を押さえて床に肩膝をついたセレンが視界に入った。
そのすぐ傍で、クレアが呆然と立ち尽くしている。
そして、長い沈黙の後、

「もう……大丈夫……ありがとう、ユティ」

セレンが、微かな笑みを見せた。だが、その顔は蒼白だ。
セレンはユティの瞳に溜まった涙を指で拭ってやると、ゆっくりと立ち上がった。ふらつく体をクレアが支える。
フェイトは幻覚でも見ているかのようにその様子を眺めていたが、やがて目が覚めたようにセレンへ頭を下げた。

「ご、ごめん！　僕っ……」

何度も、何度も。
セレンは緩々と頭を降ると、クレアに支えられながらフェイトの元へ行った。

「いいよ。君は知らなかったんだ。私の過失だよ」
「でも……」

しかし、フェイトは一向に頭をあげようとしない。セレンは苦笑を浮かべると、フェイトの頭を軽く叩いた。
両手でフェイトの顔を持ち上げ、涙に濡れたフェイトの目と目を合わせてにっこりと微笑む。

「これで、おあいこ」
「……ごめん」

フェイトの顔から手を離す。

「気にしすぎ。でも、優しいんだね、フェイトは」

それは、クレアに向けられた言葉。クレアは柔らかな笑みを浮かべると、大きく頷いた。

「ええ。私の自慢の人よ」

それを聞いたセレンも満面の笑顔をクレアに向けた。

セレンは泣き続けるユティの頭を撫でながらソファに座りなおした。フェイトとクレアも元の位置に戻る。

「セレン。いまのはどういうこと？　昔はそんなことなかったわよね？」

「うん。三年前くらいに、急にね。多分結構無理な治療を続けてたからだと思う。太陽光を浴びると息が、ね」

「……光、アレルギー？」

「フェイト、知ってるの？」

ぼそりと口にしたフェイトの言葉に、セレンが興味を示す。

だが、フェイトはすぐに首を振った。

「いや、でも僕の知る光アレルギーは太陽光を浴びると皮膚に異常をきたすものだった気が……ごめん、よく分からないんだ。ただ太陽光でって聞いたから」

「そうなの」

「今度ミラージュさんに聞いてみるよ。あの人ならそういうの詳しそうだし」

「お願いね。あ、そういえばフェイトこの後マリアさんと用事あるんじゃなかった？」

「うん。そうだけど……」

煮え切らない様子を見せるフェイト。理由が思い当たるセレンは、手近にあったクッションをフェイトに思いっきり投げつけた。

柔らかいクッションでも、覚悟もなしにいきなり顔面に当てられ

ればそれなりに痛い。声にならない声をあげたフェイトは、手元に落ちたクッションを取り、セレンに軽く投げ返した。

「ひ、酷いじゃないか……いきなり」

「君がいつまでも気にしてるからでしょ？　私はもう大丈夫だよ」

「……でも」

「まったくもう……わかった、わかったよ。じゃあ今度、なにか一つ頼みを聞いてもらう。それで許してあげる。いい？」

それを聞いたフェイトの顔が少し明るくなり、二度大きく頷いた。

「あ、ああ！　僕に出来ることならなんでも言ってくれ」

そう言ってフェイトは立ち上がり、床に散らばったカップと空になった自分のカップを片付けてから部屋を後にした。

セレンは暫くフェイトが出て行った後を眺め、それから呆れ顔を浮かべてクレアに視線を戻す。

「旦那さんがアレじゃ、君も苦労するね」

「本当よ……」

クレアが盛大に溜息を吐く。セレンはそんなクレアを面白そうに見ると、ぼそりと呟いた。

「私も狙おうかな」

「セレン？」

眼前に投げられた銀製のスプーンをギリギリにところで指で挟んで受け止めたセレンは、目の前の銀髪の幼馴染の目が本気な笑顔を見て、

「冗談だって」

と、冷や汗を流すのだった。

※

セレンの家を後にしたフェイトは、ルムを駆ってペターニへと向かっていた。本来なら走って向かうはずだったが、こうでもしないと予定の時間に間に合いそうにないのだ。

あの時間に五月蝿いマリアのことだ。遅刻などしようものなら、マリアお気に入りのスイーツ店のメニュー全品を奢らされる位は覚悟しなければならなくなる。

フェイトは深く溜息を吐くと、ルムの手綱を強く握り、スピードを速めるのだった。

「一分遅刻よ」

「い、一分くらい勘弁してくれよ」

待ち合わせ場所であるシャロム邸の正門前、わざわざスキャナーで時間を見ていたらしいマリアに、フェイトはがっくりと肩を落とした。

マリアは無慈悲に「却下」と言い捨てると、無言で邸内へと入っていった。これは後で何か奢るしかないとフェイトは観念し、重い足取りでマリアに続く。

階段を上り、シャロム夫妻の遺体があった部屋に入ると、既に到着していたマリアと、

「よぉ」

軽く手を上げるネイビスが居た。クレセントの容疑が晴れそうということを聞き、ネイビスの機嫌は上々のようである。

フェイトも同じように片手をあげて答える。

「結局地下空間にあれ以上の情報はなかったんだって？」

「ああ。で、トレイターがここ調べたいっていうから俺が付き合ってんのさ。一応この事件俺の管轄になったし」

「そうなんだ。――あ、そうだ。マリア、やっぱりあの装置は旧型の生命維持装置だったよ」

フェイトがスキャナーに映るデータを見ながら言う。フェイトのスキャナーに映るのは、かつてフェイト達の時代よりも遥か昔に使われていたカプセル式の生命維持装置の画像。それは地下空間にあったものと酷似していた。

ネイビスは宙に浮かぶ映像を興味深々に見つめていたが、やがて飽きたように本棚を漁り始めた。

「やっぱりね」

「でも、どうしてこんな未開惑星に……」

「さぁね。でも、調べてみる価値はあるわ」

そう言ってマリアがそのデータを自分のスキャナーへと移したところで、

「おい、見てみろよ！」

ネイビスの喧しい声が耳を貫いた。

「なによ？」

マリアが若干苛立った声でネイビスを振り向く。

「これ、アルバムじゃねぇ？」

ネイビスが手に持っていたのは、厚手の緑色の本。確かに表紙にはアルバムと表記されている。

マリアはそれをネイビスから取りあげる。

「開けてみましょ」

「賛成」

意気揚々としながらその場に座り込む2人にフェイトが注意しようとするが、

「ちょ、ちょっとプライバシーが……って聞いてないし」

既にアルバムの一ページ目は開かれていた。

フェイトは仕方ないと肩を竦め、ネイビスの後ろから覗き込む。

いくつもの白黒写真。均等に並べられたのもあれば、ばらばらに貼られたものもある。きっと、貼った人が違うのだろう。

写真の多くは、仲良さげな夫婦の写真。間違いない、シャロム夫妻である。

フェイトが見た彼らの顔は既に青白く、息絶えた姿であったが、こうしてみるとなんとも人が良さそうな夫婦である。シャロム家の党首であるフローレンス・ラ・シャロムはいかにも誠実そうな男性であるし、その夫人ファリス・ラ・シャロムも柔らかな笑みが似合う女性だった。

とてもじゃないが、この女性が反乱を企てていたなど信じられなかった。

そうして、数ページ捲ったところで、マリアがふと手を止めた。

「この子……」

五歳ほどの幼い少女が満面の笑みを浮かべて鳥と戯れていた。

フェイトたちは、その少女に見覚えがあった。小さいながらも、確かに面影がある。

「クレセント、か」

「そのようね。下にも書いてあるし」

マリアの視線を追うと、確かに写真の下に『クレセント、四歳。庭園で』と書かれていた。マリアは更にページを捲る。

そうすると、だんだんと今のクレセントに近くなり、十三歳の頃にはすっかりそのままになっていた。ただ、今以上に随分と痩せている。

「やっぱりあの子が二十四って嘘じゃないの？」

確かにここまで変わっていなければそうも思いたくなる。

違うところといえば、髪の長さぐらいだ。今は肩より少し下ぐらいまでしかない髪は、この写真では腰の辺りにまで伸びている。

「髪、長かったんだ」

「……可愛い」

口の中で呟かれたような言葉に、フェイトは思わず反応する。

「何か言ったかい？」
「い、いや。なんでもねぇ！」
なぜか顔を真っ赤にして声を荒げるネイビスを、フェイトが訝しげな目で見ていたとき、
「変ね」
マリアが神妙な面持ちで呟いた。逸早く反応したのは、ネイビスだ。
「あ？　クレセントの何が変だって言うんだよ」
「まだクレセントだなんて言ってないだろ」
マリアに食って掛かるネイビスをフェイトが宥める。
「顔」
「ちょっと、マリア？」
流石のフェイトもこれには驚く。当のマリアは真剣そのものだから余計にタチが悪い。
静かな殺気を放つネイビスが親指で外を指す。
「表出ろ」
「黙りなさい。表情よ、表情」
マリアが一枚の写真を指差す。それは庭を笑顔で遊びまわるクレセントの写真。
フェイトが首を傾げて、聞き返す。

「何が変なんだい？」
「この子、私に言ったのよ。『笑ったのなんて生まれて初めてです』って」
フェイトとネイビスの表情が凍る。
「じゃあ……」
「あのクレセントは……やっぱり」
マリアも唇を噛んで黙る。あの時のクレセントの言葉に嘘偽りがあったとは到底思えない。
しかし、そうなると、やはり……。
「畜生……もうワケわかんねぇ……」
ネイビスが力任せに床を殴る。フェイトは写真のクレセントを見つめたまま、項垂れた。
「もし、あのクレセントが偽者だとしたら……本物は……」
「十中八九、殺されてるか……良くても監禁されてるでしょうね」
マリアの言葉が重く、重くフェイト達にのしかかった。
いきなり黙り込んだフェイト達を尻目に、マリアはページを捲っていく。
唐突に、マリアの手が止まる。フェイトが首を傾げてアルバムを覗き込んだ。今マリアが見ているページは、白紙だ。
「ここで終わりみたいだね」
「変よ」
「なにがだよ」

ネイビスもアルバムを見ずに反応する。マリアは白紙のページから一枚戻り、最後の写真の下を指差す。

「これ、クレセントが十四歳までしかないの」
「あ、本当だ。ずっと変わらないから気付かなかった」
「いいえ。これだけじゃない。そうよ、最初から気付くべきだった……！」

一人で納得するマリアに、フェイトとネイビスはワケが分からず顔を見合わせる。

「おい、どうしたんだよ？」
「なにが変なんだ？」
「どうして、クレセントの写真があるの？」
「は？」

ネイビスの口から間抜けな声がもれる。
マリアはアルバムから顔を上げてネイビスとフェイトを見た。その顔から、一筋の汗が流れる。

「だから……どうしてクレセントを嫌っていたシャロム夫妻が、こんなにクレセントの写真を撮っているのかってことよ」

※

そよ風が白銀の髪を揺らし、パルミラの花の香りが鼻孔をくすぐる。

鉄格子のかかった窓からぼんやりと外を眺めながら、クレセントは手に持ったパルミラの花をくるくると回していた。
強い風が部屋を吹きぬけたかと思うと、部屋の扉が開く聞こえた。クレセントは思わずふり返った。そこに蒼髪の女性が居るのを期待して。
しかし、

「行くぞ」

幻の蒼は消え、代わりに一つの影が姿を現した。顔をフードで隠した影が、クレセントに手を伸ばす。

「とりあえず暫くの間はあそこに身を隠せ」
「……」
「すまない。辛いだろうが、我慢してくれ」

申し訳なさそうな声に、クレセントは首をふって答え、用意していた浅緑色の外套を身に纏う。
フードを深く被り、差し出された手を取る。悲鳴も上げることなく一瞬で気絶させられた見張りを一瞥して、クレセントは影と共に部屋の外へと飛び出した。

胸の中を、冷たい風が吹き抜けたような感覚。自分の周りにだけ、雪が降っているような冷たさが全身を襲った。
だが、クレセントは振り返らない。もう覚悟は出来ている。
ただ少し、ほんの少しだけ、寂しく思った。小さな後悔の氷が心の中を凍らせていく。
しかし、それを不安に思う反面、安堵している自分もいることにクレセントは気付いた。

（……これで、いい。わたしが望むものは……ここでは手に入らない）

小さな器に収まりきらなかったモノ達が、静かに流れる涙と共に零れ落ちていく。

それを掬い取る術を知らない悲しい風は、ただそれを見送るだけ。

住人無き部屋の中、一輪のパルミラの花が冷たい床に横たわっていた。

※

薄暗い部屋の中、一人の男が不気味な笑みを浮かべていた。

「ハハハ、情に目が眩み判断を鈍らせたか。あのような偽情報に踊らされるとは」

ガラスのグラスに入った赤い液体が揺れる。

男はそれを一口飲むと、口元を吊り上げた。

「ふん、あの中では一番骨があるとは思っていたがな。所詮は若造か。――それに、シーハーツの神童も思ったほどではない」

男の視線の先にある鉄製のボードには、数枚の写真。

その中の一枚。黒髪の女性の写真へ向け、男は小さな短刀を放る。

それは狙いを外すことなく写真の中央に刺さり、大きな傷を作った。

「あとは……そうだな。あの現ラーズバードの最高峰をどうやって手に入れるかだが……」

視線が黒髪の女性の写真から少し上にズレる。

「奴を使うか。どうせ、この件が済んだら用無しだ」

そう邪悪に染め上げた笑みを浮かべると、男はもう一振りの短刀を投げる。

やはりそれは、的のど真ん中へと突き刺さった。

1－19　空白の四年

「なにかが……おかしいわ」

マリアは呟くように言った。

血統限界値の不一致。新たに発見された現象。有り得ない写真。不自然な記録。どれかが上手く合致すれば、またそれが崩れ去る。まるで永遠に解けないパズルをやっているようだった。

「ねぇ、ネイビス」

「なんだ？」

「シャロム夫妻は、本当にクレセントを嫌っていたの？」

「ああ、間違いねぇよ。シャロム夫妻がクレセントに話しかけるところも、笑いかけるところだって誰も見たことねぇんだ。そればかりか、まるで自分達に娘はいません、って振る舞いまでしやがる」

ネイビスは即答した。

「なら、この写真はなに？」

「……わからん」

「どう見ても、愛娘の思い出としかとれないよな」

フェイトも思案顔で首をひねる。

写真に写るクレセントの姿。決して家族一緒の写真は無いが、その中のクレセントは楽しそうである。

マリアは再びアルバムに目を走らせ、あるページで手を止めた。

「ネイビス、クレセントに友達はいないのよね？」

「商家のパーティーにはよく顔出してたみたいだから知ってる奴は

いると思うが、ああいうとこは大人ばっかりだしな。友人ってのは……聞いたことねぇ。こっちがそう思ってもアイツが思ってないことがほとんどだけどよ」

「じゃあ、この子は？」

それは唯一クレセントが一人ではなく、誰かと写っている写真。

クレセントの見た目が見た目なので確かな年は分からないが、表記された年齢と比べるならクレセントよりすこし年下、といった感じの少女だった。クレセントの横で、眩いばかりの笑顔を浮かべている。これを友達と言わずになんと言うのか。

ネイビスはその写真をじっと見つめると、思い出したように手を叩いた。

「こいつは……確か」

「抗魔師団〈炎〉の師団員、ディルナ・シュテンノ」

ネイビスでも、マリアでも、フェイトでもない声が響く。

三人が揃って後ろを振り向くと、腰に長剣を差し、真っ直ぐに背筋を伸ばした女性が立っていた。

女性が一歩前に出ると、肩の辺りで一つに結った長い黒髪がふわりと揺れる。

「私がその写真に写っている者です」

「末っ子。お前どうしてこんなところに」

「ディルナです、ネイビス様。いい加減その呼び方はおやめください」

「いや、だっておまえら苗字同じだからよ」

「だからディルナと呼んでくださいと……ああ、もういいです。それより報告が」

ディルナが姿勢を正す。切れ長の目が更に細められ、マリアとフェイト、ネイビスを射抜いた。
マリアはアルバムを一度床に置くと、薄く笑った。

「面白い話……ってわけじゃなさそうね？」
「はい。残念ながら」
「何があったって言うんだい？」

フェイトが問う。
ディルナはたっぷり五秒間の間を置き、はっきりとした声音で告げた。

「――クレセント・ラ・シャロムが脱走しました」

※

「どう思う？」
「どう、とは？」

クレアと別れたセレンは、ラッセル執政官の執務室に呼び出されていた。足を組んで椅子に座り、温かい紅茶の水面を眺めるセレンは、曖昧な笑みを浮かべた。
ラッセルは大きな溜息を吐くと、セレンの目の前の机に一つの資料を放った。
セレンはそれを片手で持ち上げ、

「クレセント・ラ・シャロムですね。確か脱走したとか？」

楽しげに喉を鳴らした。
ラッセルは眉を顰め、机に手を組み、その上に顎を乗せた。

「やはり、偽者ということか」
「なぜです？」
「容疑は晴れそうだったのだ。本物なら堂々としてれば良い」
「偽者だって、容疑が晴れそうなら堂々としてますよ」

セレンは資料を無造作に置き、紅茶を啜る。

「そんな話はいい。私が聞いているのは」
「クレセントが偽者かそうでない、か。私の考えでよければ、お答えします」
「そのために呼んだ」

セレンはもう一度資料を手に取ると、ラッセルに向けてはっきりと言った。

「結論から申し上げますと、別人でしょう」
「やはり……そう思うのか」
「ですが」

セレンは続ける。

「グリーテンで入れ替わった、という説は間違いです」
「どういう意味だ？」

ラッセルの眉が更に吊り上がる。
セレンは貼り付けられたクレセントの写真を見つめ、それを軽く指で弾く。

「証言を取ってきました。幼少のクレセントを知る数少ない人物から」

セレンの手から、資料が落ちる。
紅茶に映る顔は、笑みを浮かべていた。

「クレセントは十四歳を過ぎた頃から師団に入るまでの四年間、一切姿を見せなかったそうです」
「……なに？」
「そして、彼女はこうも言いました」

ラッセルとセレンの目が真っ向からぶつかる。
セレンは束の間目を閉じ、口を開いた。

「再び姿を現したクレセントは性格が急変していた、と」

※

「マリア！」

ぐらりとよろけるマリアを、フェイトが受け止める。その顔は蒼白で、唇はわなわなと触れている。
フェイトが唇を噛み締めた。

「クレセント……これが君の答えだというのか……」

クレセントのためにマリアがどれだけ必死に動いてきたかを、フ

ェイトは一番よく分かっているつもりだ。だからこそ、クレセントが理解できなかった。

例えクレセントが偽者だったとしても、ここで逃げ出してはマリアの想いも行動も、全てが水泡に帰すことになるのだ。

マリアがクレセントを助けるために頑張っていたことを、分からなかったはずはない。

「あ……むす……」

ボソリと、マリアが腕の中で呟いた。よほど、ショックだったのだろうか。

「マリア……元気を」

フェイトが顔を歪ませて、マリアの髪に触れようとするが、

「あんの馬鹿娘！　何考えてるのよ！　わけわかんないわよ！」

「出し……て……って――はい？」

「もう我慢ならないわ！　あの子がなに隠してようが話してくれるまで待つつもりだったけど、止めよ止め！　こうなったら否が応でも吐いてもらうわ！」

マリアがフェイトの手を振り払い、床を踏みつけながら数歩歩く。

フェイトも、ネイビスも、ディルナもその剣幕に圧倒され、言葉が出なかった。

マリアは乱暴に椅子に腰掛けると、足を組んでフェイトとネイビスを見た。

「ネイビス！」

「な、なんだ？」

心なしか、ネイビスの背筋がいまだかつて見たこともないほど真っ直ぐになっている。

「あなたはいますぐペターニ及びその付近一帯を捜索させなさい！シランドから逃げたって言うならここを通る可能性が高いわ」

「わ、分かった！」

ネイビスが部屋から逃げるように駆け出していく。

「フェイト！」

「は、はい！」

フェイトの声が恐怖で上ずる。

「あなたは一度シランドへ行きなさい。シレーネとクレアに事態を報告した後、シランドは彼女達に任せてあなたはアリアスへ」

「無理です」

フェイトが返事をしようと口を開けたと同時に、ディルナが一歩前へ出た。

マリアが理由を聞き出すより早く、ディルナが手早く説明する。

「現在シレーネ様はグリーテン方面の調査に、クレア様は一連の事件について独自に調査を進めるとお二人ともシランドを出てゆかれました」

「こんな時に……いいわ、フェイトはシランドへ行った後ヴァンをアリアスへ向かわせなさい」

「残念ですが、それも不可能です」

「まさかヴァンも任務？」

「はい。クレア様の命令だと仰っていました」

マリアは小さく舌打ちをする。

そして、束の間目を閉じて考えを巡らせると、ディルナへと視線を向けた。

「セフィリアは？」

「いらっしゃいます」

「じゃあ彼女をアリアスへ向かわせて」

フェイトは大きく頷く。

「分かった。マリア、君はどうするんだい？」

「私はちょっと調べ物。あ、ディルナ……だったわよね？　あなたも残ってくれる？」

「分かりました」

ディルナも頷く。

フェイトは短くマリアとディルナに別れを告げると、早足でシランドへ向けて疾走した。幸いここへ来るのにルムを駆って来たため、さほど時間はかからずにシランドへはつけるだろう。

ペターニの石畳を駆け抜けながら、フェイトはテレグラフを取り出すと画面を操作する。

「――あ、ソフィアかい？　実はちょっと大変なことになって……」

「あなた、クレセントを昔から知っているんですってね？」

「はい」

「話してもらえるかしら？」

ディルナは大きく頷く。そして、足元へと目を落とす。

「クレセントは……私の初めての友達でした」

顔を上げたディルナの瞳は、まるで過去の思い出を映しているかのように、虚ろな光を放っている。

ゆっくりと足を進めると、屈みこんでさきほどのアルバムを手に取る。

「私の実家――シュテンノ家はシャロム家までとはいきませんが、それなりに名の知れた商家です。私には二人の姉がいますが、彼女たちは全くと言っていいほど交易など商取引には興味を示しませんでした」

「……」

「ですから、必然的に私が商家のパーティーに連れて行かれたんです。両親も一人くらいは跡取りを、と思ったのでしょうね」

「でもいまは軍人になってるじゃない？」

「軍人になって、この国を少しでも良くすることが私とクレセントの夢だったんです。両親をなんとか説得し、商家の跡取りとしての知識を学びながら、ということを条件に、軍人であることを許されました」

ディルナの長い前髪の隙間から見える右目が、伏せられる。

「私が六歳くらい、でしょうか。私が参加するようになってから数えて四回目のパーティーで、私はクレセントに会いました」

アルバムを開き、クレセントとディルナが写る写真のページで手

を止めた。

「商家のパーティーなどに出ていた子供は私くらいでしたので、初めて出会った子どもであるクレセントとはすぐに親しくなりました」

思い出を掘り返すように、写真を指でなぞる。

「その時クレセントは九歳。それまで一切家から出てこなかったクレセントを、子どもたちの間では悪魔付きだとか色々言われてましたが、優しくて明るい子でした」

「……」

「それから事あるごとに私たちは一緒に遊びました。クレセントの両親は私の存在を嫌っていたようなので、私たちはいつも隠れて会っていました」

ディルナの手かページを捲り、その表情が険しくなる。

「でも」

白紙のページを見下ろしたディルナは、アルバムを閉じ、それを床へ落とした。

「今から十年前、クレセントが十四歳になったとき、彼女は忽然と姿を消してしまった」

「十四歳って……」

丁度アルバムからもクレセントが消えた時期だ。

「それから四年間……私は一度もクレセントに会っていません」

「……」

「そして、私が彼女に再会した時、クレセントは私の知るクレセントではなくなっていた」

ディルナの瞳が、悲しみに彩られる。

マリアとそう変わらないはずのディルナが酷く小さく見えた。

「どういうこと？」

「どう言葉に表せばいいのかわかりませんが、あえていうのなら……そう、人形みたいなんです。私と話すときも、どこかぎこちなくて……」

ディルナの声が、震え出す。

それほどまでに、クレセントのことが大事だったのだろう。

ここまで話を聞いたところで、マリアの頭の隅に一つの考えが浮かんでいた。様々な問題点も解決し、クレセントの急変の理由も納得がいく。

しかし、頭はそれを否定し続けている。

「ラッセル様は……入れ替わりはグリーテンと仰っていますが、私はもし入れ替わりが起きたというなら、その空白の四年間としか思えないのです」

「そうね。私もそう思うわ」

マリアはすぐにでも部屋を飛び出していきたい衝動を堪え、ディルナに微笑む。

「ありがとう。少しだけど、見えてきたわ」

「……あのクレセントは偽者なんですね」

今更隠しても無駄だろう。それにこれはマリアの推論だ。話した

ところで問題はない。

「おそらく、ね。でないと説明がつかないことが多すぎるわ」

「……じゃあ、やっぱりクレセントはあの偽者に……だから、あの時動揺したのか……！」

もう一度地下空間を調べようと、その場を去ろうとしたマリアの目が、大きく見開かれる。

反射的にマリアはディルナの胸倉を掴みあげていた。ディルナの瞳が驚愕に揺れる。

「マリア様？」

「あなた……クレセントに何を言ったの？」

「は？」

「クレセントに何を言ったのかって聞いてるの」

マリアの剣幕に、ディルナがビクリと体を強張らせる。だが、マリアは決して力を緩めようとはしない。

ディルナは搾り出したような声で言った。

「く、クレセントを返せ、と。ここ、はクレセントのいばし……」

ディルナはそれ以上言えなかった。

手を離されたかと思うと、今度は腕を強い力で引っ張られていた。シャロム夫妻の書斎から出て、一直線に地下空間へと向かう。

「ちょ、ちょっと！」

「来なさい！　私の予想が当たっていれば、あなたは……！」

マリアの真剣な表情と言葉に、ディルナはただ黙ってついていく

ことしか出来なかった。

「ここは……例の機工兵がいた場所、ですか？」
「そうよ。あなたも手伝いなさい。もしかしたらまだ何か隠されているかもしれない……」

マリアは手当たり次第に棚に並べられた書類や本に手を伸ばす。だが、そのどれもが別段珍しいものでもなく、ジャンルもまちまちだった。育児に関する本もあれば、生態に関する資料もある。およそなんの関連もないものばかりだ。

本の間に何か隠されてはいないかと全てを調べたが、徒労に終わった。

マリアが壁や本棚を調べるが、やはり何もない。

焦りを感じ始めたマリアが、苛立たしげに壁を殴った時、ディルナが声を上げた。

「マリア様、これは調べましたか？」
「え、これって」
「はい、機工兵です」

ディルナが指差すもの。それはアルベルとクレセントによって破壊された、機工兵だった。

「これを調べるって……どうして？」
「知人が言っていた話で、機工兵とまでは行きませんが、一般人には理解し難い機械の中に帳簿や重要書類を隠した商人が居る、というのを聞いたことがあります。もう随分と昔の話ですが」
「……まさか」

マリアは機工兵のボディの鉄板を引っ張る。幸いアルベルとクレセントの攻撃のお陰で接合が脆くなったのか、簡単にそれは外れた。
構造はやはり旧式のロボットと同じだったが、マリアはある一点で目を留めた。小さなスイッチを押すと、細い隙間から厚さ数センチほどの薄い引き出しが飛び出す。
その中に入っていたのは、十数枚の紙の束。機械の中は保存状態が良かったのか、それほど痛んでは居なかったが、それでも古いものだと分かるほどに端々が黄ばんでいた。
マリアはその紙束の一枚目、所々に書かれた文字を発見し、戦慄した。

「どうしてこんな技術が、中世の未開惑星なんかにあるのよ！」
「なにが、書かれているんですか？」

マリアは紙束をディルナに渡す。
ディルナはそれを理解しようと真剣に読んでいるようだが、やはり理解できないのか首を傾げた。

「いまいち、要領を得ません……」
「ええ。あなたたちには全く未知の技術でしょうね。簡単に説明するわ」

「ば、かな……そんなこと神への冒涜……」

ディルナが力なく後ずさり、背が壁に当たる。マリアは目は手元の紙束に向けたまま、怒りを隠そうともせずにディルナに言った。

「そうね。冒涜よ。でも、いま、私が許せないのはあなたの方」

「え……」
「クレセントになにを言ったか思い出してみなさい」
マリアの冷徹な言葉に、ディルナの脳裏に先程の自分の言動が蘇る。
そして、ゆっくりと目を見開いたディルナの手が小さく震え出し、彼女は壁に手をついた。マリアは奥歯を噛み締めて、前髪を掴む。
「あの子がなんの目的を持っているのかは知らない。でも、少なくともあの子自信が望んだわけじゃないでしょうね」
「っ」
「どこぞの馬鹿のせいで勝手に望んでもない生を受け、利用されて……あげく、存在を否定された」
「わたし、は……」
「知らなかったんだから仕方ないわ。誰もあなたたちを責めることなんて出来ない。でも……」
手が白くなるほどに紙束を握り締めたマリアが、ディルナを睨む。
「悪いわね……私はあなたを恨むわ」
瞼の裏には、あの時のクレセントの顔。涙の跡の理由が、やっと分かった。
ディルナはおもむろに天井を見上げ、煌々と光るシャンデリアを見つめる。黄白色の柔らかい光が、酷くぼやけている。
言葉を失い、呆然と天を見上げるだけのディルナの横で、マリアは悔しそうに呟いた。
「確かに……強力な施術士を大量に作り上げようとして行き着く先は、ここかもしれないわね」

マリアの怒りに同調するかのように、ディルナの虚ろな瞳からは一筋の涙が流れた。

※

シレーネを含む数人の〈風〉で編成された部隊は、グリーテン方面へと繋がる森を散策していた。凡そ数時間前、この森の中へ不審な武器を持った人影が入っていったという報告が届けられたのだ。

クレセント捜索部隊を編成していたシレーネは、自分も同行することでクレセント捜索と不審人物の拘束を一挙に引き受けることにした。

しかし、途中魔物の大集団に襲われてしまい、気付けば部隊は散り散りになってしまっていた。この広い森の中で合流するのは困難。こうなった場合は速やかにペターニ東門へと帰ることになっている。

だが、シレーネは帰りのルートを見つけることもせずに歩き回っていた。頭の中には、不審人物のことなど一欠片もない。

「クレセント……」

あるのはただ一人の部下。

後悔の念が、今でもシレーネを苛んでいる。女王陛下に勅命を受けたとき、クレセントの反応など関係なしに一緒に逃げれば良かったのかもしれない。

どうして本人の言葉を聞かなかったんだろう。気が動転していたなど、言い訳にならない。

まずクレセントを信じるべきだった。

どうして、クレセントの言葉を聞こうとしなかった？

怖かったのかもしれない。真実を知るのが。
暫くの間答えの出ない自問自答を重ねていたシレーネは、ふと歩みを止めた。
そして、
「止ぁめた」
考えたってどうせ分かりっこないのだ。
「そうね、私らしくもなかった」
何時だってクレセントのことになると、頭で考えるよりも体が動いていた。
そう、今回もそれに従えばいいだけのこと。その先に何があるかなど知ったことではない。
とりあえず、信じてみよう。この命を繋ぎとめてくれた存在を。
たとえ、それが偽りの存在だったとしても。
「なんとかなる。きっと」
そう呟き、シレーネは風の吹くほうへと足を踏み出した。

※

（ヴァン、何処へ行こうというの？）
同刻、グリーテンへと続く森。シレーネの居る場所とは随分と離れた場所にクレアは居た。

比較的綺麗に舗装されている道を逸れた場所で息を潜め、気配を絶ち、木の陰に身を潜めつつ道を歩くヴァンを見る。

かなりの距離を空けている為、まだ気づかれはいないようだが、油断は出来ない。クレアは深く深呼吸をすると、またヴァンへと注意を向けた。

怪我が完治したクレアは、ネルとルージュとの約束の通り、ヴァンを調べることを決意した。

ラッセルに独自調査の許可を取り、ヴァンを張った。

慎重なヴァンのことだ。何かあったとしてもなかなか尻尾は出さないと踏んでいたのだが、意外にも動きは早かった。何の理由もなしに、ヴァンがペターニ東門の奥へと姿を消したのである。それも、一目を憚って正規のルートを使わずにだ。

不審に思ったクレアはそのまま後を付けることにし、同じように森の中へと入った。

森の中に入ってから、ヴァンの行動はますます不審だった。ここの調査のため派遣されている『風』の師団員と、接触しないよう気を配り、グリーテンのほうへと真っ直ぐに進んでいった。

クレアも誰かに見つけられないよう周囲に気を配りつつ、ヴァンを追う。が、クレアは不意にその足を止めた。冷や汗がクレアの頬を伝い、地面に落ちる。

付けられていることに、漸く気付いた。

迂闊だった。前方を意識しすぎて、後ろに気を配っていなかったのだ。

クレアはくるりと体を回転させると、腰の刀に手を添えた。

「……姿を現したらどうですか？」

一瞬の沈黙。笑い声が響いた。

「やっと気付いてくれましたか。いやいや、このまま気付いてくれ

なかったらどうしようかと危惧していたところです」
「姿を見せて下さい」
「おっと、失礼」

草を掻き分ける音がクレアの右から聞こえる。そこに立つのは、顔の右半分を覆う仮面を付けた、妙齢の男だった。
見慣れぬ服装。クレセントやシレーネが着用しているような服の上に、白を基調に金の刺繍が入り、紫の輝く飾りをつけたマントを身に纏っている。クレアは一歩後ろへ下がると、平静を装って男を見返した。

「その服装……グリーテン人、ですね」
「ご名答」

男は白い手袋をはめた手を二回叩き、口元を吊り上げる。

「では、自己紹介といきましょうか。私はヴァレリア。グリーテンを束ねる五大ドールマスターが一人、ヴァレリアの蠍と申す者」
「初めまして、ヴァレリアの蠍卿。聖王国シーハーツのクリムゾンブレイド、クレア・ラーズバードです。以後、お見知りおきを」

クレアは優雅に微笑み、手を胸に当てて頭を下げる。
ヴァレリアの蠍は愉快そうに笑い、また手を叩いた。

「ハハハ、情報通り聡明な女性のようです。この状況に少しも動じないとは」
「どうでしょうか。内心は穏やかじゃないのかもしれません」

ヴァレリアの笑いが、ピタリと止む。

「食えない方だ。それゆえ、有望です」
「っ！」
頭上から迫る気配に、クレアは素早く横に呼び退いく。
次の瞬間、クレアの居た場所には、黒光りする大きな塊が鎮座していた。
「ほう、避けましたか」
ヴァレリアが感心したように呟き、その塊の傍へと寄った。
その塊をひと撫ですると、塊は四本の足を伸ばし、立ち上がった。
四本の足に、長い鼻、大きな耳。まるで狼のような形をした鉄の塊が、クレアの前に堂々と立ち塞がった。
高さだけでもクレアの二倍はあるそれを、驚愕に満ちた瞳で見上げるクレアは、異常なまでに乾いた唇から言葉を搾り出した。
「これは……機工兵？」
「その通り。だが、貴女たちが我々を嗅ぎ回るスパイから入手した外敵駆除型や警備型の機工兵とはわけが違う」
ヴァレリアは狼型の機工兵に手をやり笑った。
「教えて差し上げましょう。我らドールマスターは必ず一体、専用の機工兵を所持しております。そして、その性能は――」
ヴァレリアが手を上げる。
「他と比ぶべくもない！」
「くっ！」

機工兵が天に向かって咆哮し、クレアに向けて一直線に襲い掛かった。クレアは高く跳躍して回避し、そのまま木の枝に飛び乗った。
そして木の根元に食らいつき、木を倒さんとする機工兵を、クレアは苦笑して見下ろす。刀を持つ手は、僅かに震えていた。

「……参ったわね。犬とか狼は苦手なんだけど」

機械なだけマシか、と息を吐くと、クレアはぐっと歯を食いしばってヴァレリアに視線を下ろす。
ヴァレリアはそれを下から見上げると、歪な孤を口元に描いた。

「そして私も……」

だんっ、と地面が蹴られる音が響いたと思うと、ヴァレリアはクレアの目の前にいた。
驚く間も無く、まるで鈍器で殴られたような衝撃がクレアの右腕に走った。体がぐらりと揺れ、地面に落ちる。

「つぅ！」

なんとか受身を取り地面に叩きつけられることはなかったが、落ちた衝撃が右腕を走り、頭の芯にまで響く。下手をすれば折れているのかもしれない。
クレアが右腕を押さえながら立ち上がると、ヴァレリアは軽い動作で地面に着地した。

「機工兵を操るだけが、脳ではないのですよ」
「……そのようですね。私も、本気を出さなければいけないということですか」

気休め程度にしかならない治癒施術をかけ、刀を握る。なんとか持てるが、痺れて上手く力は入らない。

クレアは後ろ髪を纏めたリボンを解くと、それを右手に巻きつけて刀と腕を固定した。銀糸が風に舞い、褐色の瞳がヴァレリアを強く睨んだ。

「楽しませて下さい。貴女には期待しているのですからね……ラーズバードの血を引く者」

機工兵が一気にクレアへと襲い掛かる。クレアは機工兵の爪を避け、走り出す。

「逃げる気ですか？」

クレアは答えない。時に機工兵の攻撃を避け、時には刀で受け止める。

ヴァレリアはその様子を傍観し、やや高揚した口調でクレアに声をかけた。

「ただ避けるだけとは……シーハーツが誇る施術とやらを見せていただきたいものです。我々にはない神秘の力を！！」

クレアの動きが止まり、左手が真っ直ぐに機工兵へと向けられる。

「お答えしましょう……ディープフリーズ！」

絶対零度の雪の結晶が機工兵の頭上から舞い散り、その機体を凍らせていく。

足が地面に縫い付けられ、徐々に固まっていく。ものの数秒で、黒光りする巨体は氷の彫像と化した。

ヴァレリアは機工兵を一度仰ぎ見ると、クレアに向けて拍手を送る。

「無詠唱とは、素晴らしい。しかし、その程度では我が機工兵は止められない」

それを合図にしたかのように、機工兵を覆う氷が水蒸気を撒き散らせながら解けていく。

クレアはその様子を平然と見ていると、小さく微笑んで手を上に掲げた。眩いまでの銀の紋章が、クレアの手をから放たれる。

「では、これはいかがでしょう？」

白い雷鳴が、機工兵を貫いた。目も開けられぬほどの閃光が森を切り裂き、轟音が地を揺るがした。

水に濡れた機工兵から、白い煙が上がり、その巨体が崩れ落ちる。

「こ、れは……」

「風系統の中でも最高級の威力を誇る施術です。ご自慢の機工兵もこれは堪えたようですね」

「馬鹿な……このような高等施術を無詠唱で、だと……」

ヴァレリアが信じられないといった目をクレアに向ける。クレアは何も言わず、刃の切っ先をヴァレリアへと向けた。

だが、ヴァレリアは刀を向けられていることなど露ほどにも気にせず、口元に手を当てて考え込んでいる。

そしておもむろに顔を上げると、声を上げて笑い出した。

「ククク、そうか、そういうことですか！」

仮面に覆われていない方の顔を手で押さえ、仮面に空いた穴からクレアを見る。
見開かれた金の瞳に、クレアは一種の恐怖を覚えた。

「遅延呪文。先に詠唱を済ませておいた施術を遅らせて発動させる術。まさかこんなものまで使えるとは……本当に素晴らしい！　私の知る数多くの施術士の中でも、その若さでこの術を使えるのはあなたで三人目だ」
「褒め言葉として、受け取っておきます」

クレアは動かなくなった機工兵を横目で見ると、ヴァレリアの喉に刃を突きつけた。

「大人しく投降していただけませんか？」
「残念だ」
「そうですか」

クレアは一瞬の躊躇いもなくヴァレリアの腹部に刀を突き刺す。
殺してしまっては、意味がないからだ。
だが、

「っ！」

剣先は何か堅いものに当たったように、一向に進まなかった。

「これは！？」
「ドールマスターの力、なめないでいただきたい」

ヴァレリアは刀を素手で握ると、刀ごとクレアを投げ飛ばした。
数回回転をして、クレアが着地する。

クレアがヴァレリアの手を見ると、今の今までヒューマンのそれとなんら変わりなかった手が、岩のように色と形を変えていった。その人間離れした変形に、クレアは背筋を伝う汗を感じた。それでも、表情は笑みを崩さない。

「そういえば、アンフロックは岩石から進化した亜人でしたね」

「そういうことです」

先程クレアの刀を弾いたのも、あの服の中で体を硬質かさせていたということだろう。

ヴァレリアは余裕の表情を崩さぬまま、クレアに一歩歩み寄る。

「クレア・ラーズバード。私がわざわざあなたの前に出てきたのにはそれなりに理由があるのですよ」

「お聞きしましょうか？」

「私の実験に協力して頂きたい。ご同行願えませんか？」

「私がそれを飲むとでも？」

クレアが凛然と言い切る。ヴァレリアが顔を伏せた。

「残念です、とても」

その口元が、凶悪なまでに吊上がっていることに気付いたときには、首に強い衝撃を感じた後だった。

抵抗する暇もなく、力が抜け、体が崩れ落ちるところを小さな体に受け止められる。

「よくやったな」

ヴァレリアの声が聞こえる。

クレアは朦朧とする意識の中、顔を上げた。そこには、見知った顔。

「申し訳ありません、クレア様」

「――く、くれせん……と」

翡翠の瞳が見守る中、クレアの意識はそこで途絶えた。

1－20　Ｒｅｍｅｍｂｅｒ

「連れて行け。場所は第二実験室だ」

気を失ったクレアを抱える顔を全て仮面で覆った男に、ヴァレリアはマントを翻しながら言った。仮面の男は頷き、クレアを抱えたまま姿を消した。

「クレセント、おまえは手筈通りに」

「はい」

クレセントも頷き、フードを深く被りなおしてその場から去る。

残されたヴァレリアは停止した機工兵を見上げ、息を吐いた。

「ふむ、シーハーツの施術はやはり侮れんな。一時的とはいえ、私の機工兵を停止させるとは」

軽く手を振ると、今まで固まっていた機工兵が奇妙な音を立てて動き出す。だが、その動きはどことなくぎこちない。

「どこかの回路をやられたか……万が一のために直しておく必要があるな」

ヴァレリアがそう呟くと、機工兵はやや遅いスピードで森の奥へと走り去っていった。

「――まさか、クレアがっ……」

ヴァレリアの立つ場所からかなり離れた茂みの陰。シレーネは今にも飛び出そうとする足を必死に押さえて、しゃがみ込んでいた。

ここで飛び出すのは簡単だ。だが、クレアが叶わなかった相手に、自分が勝てる確率などないに等しい。

シレーネは歯を食い縛って耐えた。

森の中を散策していたとき、シレーネは遠くで白い稲妻を発見し、その場所へ急行した。念の為離れた地点からその様子を観察したところ、クレアと見知らぬ男が対峙していた。

そして、その背後に忍び寄るクレセントを視認したと同時に、クレセントの手刀がクレアの首を突いたのだ。

「クレセント、どういうつもり？」

男が誰なのは確認できなかったが、先程走り去っていった塊。始めてみる形状だったが、間違いなく機工兵だと、シレーネは確信した。

つまり、それを操るあの男はドールマスター。

「どうしてグリーテンのドールマスターが……いえ、考えていても仕方ないわね。とにかく報告を」

「それは、困りますね」

シレーネは頭で考えるよりも早く足元にあった長槍を手に取り、声のするほうを突いた。まるで岩石を突いているかのような手応えに、シレーネの顔から血の気が引く。

「……いきなりご挨拶ですね。虚空師団〈風〉の師団長シレーネ・リシャス殿」

先程までギリギリ目で視認できるほどの位置に居た男が、いま、シレーネの前にいた。

「グリーテンのドールマスターが、なぜこのような場所にいるの？　クレアをどうするつもり！？」

「ヴァレリアと申します。まぁ、私にも色々な事情があるのですよ。クレア・ラーズバード殿には、少々お手伝いしてもらいたいことがありましてね」

ヴァレリアが口元だけに笑みを作る。

「それで、まだ私の存在を知られては困るのですよ。――それに、クレセントのことも」

シレーネの表情が変わる。

「クレセント！？　あなたクレセントになにを――」

「それは、本人にお聞きください。――あの世で」

「……あ……？」

鈍い鈍痛が腹部に走ったかと思うと、口から唾液の混じった血が吐き出される。

緩々と下を見下ろすと、ヴァレリアの鋭く尖った手が腹部を貫いていた。

「あ、か……」

手が引き抜かれ、生暖かい血が溢れ出す。腹部に手を当てると、そこからまた大量の血液が零れ落ちる。

足がふらついた。そのまま二、三歩後ろに下がると、体が崩れ落

ちる。

「さようなら」

体が宙に舞う。己の手についた血を舐め取るヴァレリアが目に入り、どうしようもない怒りが込み上げてきた。

紅い血を舞わせながら落ちていく。すぐ後ろは、切り立った崖だったのだ。

「こ、んな……終わり方、か」

元居た場所がどんどん遠くなっていくのを見ながら、シレーネは血の混じった笑いを漏らした。ヴァレリアは、もういない。

もう痛みすら感じない。感覚が麻痺したのだろう。

「そ、いえば……前にも、こんなことあった、け」

それは軍に入りたての頃、出生のことで毎日のように苛められ、ついに耐え切れなくなり、崖から身を投げたときの記憶。

これで、楽になれるそう思っていた。

だが、

『生きてください』

助けてくれた人がいた。

とても綺麗な、陽の光で輝く白銀の髪が印象的だった。

『あなたが死んだら、悲しむ人がいるでしょう』

憂いを帯びた翡翠の瞳は、どこまでも澄んでいた。

『なら、わたしが悲しみます。一つの命が消えることは、悲しいことだと思うから……』

淡々とした顔は無表情だったが、どこか不思議な優しさを感じられた。

『居場所……わたしにはとても遠い言葉だけれど、それはきっとなくてはならないものです』

無言で立ち去っていく背中は、とても小さかった。

あの時は名前も知らなかった少女。けど、今は違う。

「……ちゃんと……知ってる」

翡翠の風に全身が包まれた。ふわりと体が宙に浮く感覚。

知ってる。

あの時も、助けてくれたのはこの風だった。

冷たくて、でも温かい。そんな不思議な風。

背中が地面につく感覚で、シレーネはゆっくりと目を開ける。

そこにあったのは、あの時と同じ無表情な顔ではなく、今にも泣きそうな顔。

「やっぱり……いつ、も……助けてくれるのは、あなただった……クレセント」

「シレーネ、さま……」

クレセントの頬に手を伸ばす。その手に、クレセントは躊躇いがちに手を重ねた。

シレーネは少し驚いて、それから微笑んだ。

「ごめ、んね……信じてあげられ……なくて……わたし、あなたの上司、なのにね」

「違う。あなたは信じてくれた。いつだって……いつだって、あなたはわたしを気にしてっ……ずっと、ずっと！」

クレセントの瞳から流れる涙が、シレーネの手を伝って頬に落ちる。

シレーネは上手く動かない指を僅かに動かし、涙を拭って目を閉じた。

「でも、いまは……信じてる……クレセント。やっぱ、り……あなたは、私の大切、な……」

シレーネの手が、クレセントの手から滑り落ちた。クレセントの瞳が大きく見開かれ、涙が零れる。

手の甲で涙を拭い、シレーネの髪をそっと撫でたとき、

「こんなところにいたのか、クレセント。――なにがあった？」

近くの木の陰から、フードで顔を隠した影が現れた。クレセントに近寄る足を止め、血だらけのシレーネとクレセントを見比べる。

クレセントは何も言わずに立ち上がると、影の横に立った。

「シレーネ様の傷をお願いします。応急処置後、ペターニの病院まで運んであげてもらえますか？」

「構わないが、どうしてペターニに？　シランドのほうが設備は整っているだろう」

「シランドでは万が一にも巻き込まれる可能性があります。出来れば、この人にはこれ以上……」

「……分かった。後で会おう」
「お願いします」

深く被られたフードの中、優しく微笑んだ影はクレセントの頭を撫で、走り去っていった。
その姿が見えなくなるまで見送ったクレセントは、何処までも蒼く澄み渡る空を見上げて呟いた。

「ありがとう、シレーネ……さようなら」

※

「ルージュ！」
「まっかせといてよ！」

王都アーリグリフの南東に位置する岩場に、赤と朱が舞う。そして、それらから必死に逃げ惑う人影。
ルージュは高く高く舞い上がると、手を真上に掲げた。空に朱の紋章が広がり、背筋に寒気が走るような力が集結していく。

「散々引っ掻き回した罰！　しっかり受けなさいよ！！」

ルージュの全身が炎を纏い、人影へ向けて急降下する。地を轟かす様なをたて、ルージュの降り立った場所を中心に爆発が起きる。
飛び散る岩の破片を避けつつ、ネルが慌てたように叫ぶ。

「ばっ！　殺したら意味ないじゃないか！！」

ネルは爆発地点へと向かうが、土煙が酷く場所が特定できない。
漸く土煙が晴れた頃、そこには、

「やりすぎちゃった」

口から泡を吹いて倒れる男の上に座り込み、舌を出すルージュの姿。
ネルはにっこりと笑うと、ルージュの頭に拳を振り下ろす。

「やりすぎちゃった、じゃないよ！」
「いったぁ！　ネル本気でぶったでしょ！　ひどいひどい！」
「う、る、さ、い、よ。――はぁ、あんたに任せた私が馬鹿だった」

大袈裟に溜息を吐き、ネルはルージュに男の上からどけるように言うと、手に持っているエリミネートライフルを取り上げる。

「最近現れた謎の武器を持って徘徊する男って、こいつでいいんだよね？　事件解決？」
「ああ。多分ね。でも、呆気なさすぎる」

フェイトからクレセント脱走の連絡が入り、ここ数日、特に目新しいものも見つからず、特に被害もなかったのでネルとルージュは予定より早くアーリグリフでも調査を切り上げることを決めた。
だが、そんな矢先、アーリグリフの近くで、謎の武器を持った男が時たま街に現れては姿を消す、という情報が入ってきたのだ。
幸い見せびらかすだけ見せびらかし、あとは何もせずに去っていくので被害はないが、それでも放っておくわけにはいかない。
ネルとルージュは帰国を先延ばしし、まずこの犯人を捕らえることに決めたのだ。

「そだね。むしろなんか上手いこと足止め食らっちゃった気分」

ルージュが頭の上で手を組み、足元の小石を蹴る。

ネルは顎に手を当てたまま考え込んでいると、急に立ち上がった。

「……そうか。そうだよ、ルージュ！」

「わわっ！　い、いきなり大きな声出さないでよ！」

「ちょっと、起きな！」

「うわっ、ネル、えげつない……」

ネルは足元に倒れる男を思い切り蹴飛ばし、首元を掴んで数回揺すった。

男は呻くような声をあげて重たい瞼を開き、目の前にいるネルの鬼のような形相に短い悲鳴をあげた。

「いいかい？　これから私が質問することに素直に答えな。黙秘は許さない」

ダガーを男の前でチラつかせながら言うネルに、男は何度も頷く。

「あんた、この銃をどこで手に入れた？」

「も、もらった……」

「誰に？」

「し、知らない。仮面をつけた男が突然現れて、金を渡すからこの銃を持って噂になるように……」

「なーる。一本取られちゃったってわけだ」

ルージュの口調は軽かったが、口元は引きつっている。ネルは小さく舌打ちをすると、男を殴って気絶させた。

「くそっ」
「こっちがそうってことは……サンマイトも？」
「ああ、その可能性は高いだろうね」

そう言ってネルが苦虫を噛み潰したような顔を浮かべたとき、テレグラフが鳴った。
ネルは腰のポケットからテレグラフを取り出し、スイッチを入れた。

『ネルさん！』

画面に映っているのは、茶髪の少女。心なしか、焦っているように見える。

「ビンゴ、みたいだね」

ルージュが横で腕を組んで、嘆息した。
ネルは「ああ」と頷くと、画面に向き直る。

「ソフィア。もしかしてあんたの所にも現れたのかい？　謎の武器を持った徘徊者」
『はい。も、ってことは、やっぱりアーリグリフにも』
「ああ。いま捕まえたけどね。そっちは？」
『アドレー様とリーゼル様が追っているので、数分もしないうちに捕まえられると思いますよ』
「アゼル……って、いま何て？」

ソフィアの代わりに画面に映ったアゼルの言葉に、ネルは引きつった笑みを浮かべる。

『はぁい。ネル、元気ですか？』

アゼルが答えるより早く、黒髪の女性が映った。画面の端には、なにやら雑巾のように伸びた人を持ったアドレーが意気揚々と走り回っている。

ネルは、深い溜息を吐き、頭を抱えた。

「なんで母上とアドレー様がアゼル達といるんですか？」
『アゼル君に頼まれちゃって。暇なら手伝って下さいって』
「暇だったんですか？」
『暇だったんです』

笑顔で言い切るリーゼルに、ネルの溜息は益々深まった。

『ネルさん』
「ああ、アゼル」

いつの間に入れ替わったのか、画面にはアゼルは神妙な面持ちで映っている。

『ネルさんなら気付いていると思いますが、嵌められました』
「そうだろうね。目的は私たちの足止め、ってことかい？」
『ええ。おそらくは』
「ただ、目的が分からないね。一体私たちを足止めして何のメリットが……」

ネルの表情が凍る。画面のアゼルも頷いた。

『いますぐシランドへ戻りましょう。必ず、何かが起こります。……いえ、下手をすればもう』

その言葉を最後に、画面は真っ黒く染まった。

※

「なぁ、アルベル」

シランド城にある客室。今は滞在するアルベルのために宛がわれた部屋に、フェイトは居た。

セフィリアをアリアスへ向かわせたフェイトは、すぐに『光』から数人を選抜し、シランドの街とその付近の調査に当たらせた。

それで、折角だからアルベルにも協力を頼もうと尋ねたのだが、

「面倒くさい」の一点張りだった。

椅子の背もたれを前にして座り、肘を上に置く。

「なんだ？　人探しに協力するつもりはねぇぞ」

対するアルベルはベットにどっかりと腰を下ろし、刀の手入れをしている。銀色に輝くそれは、使い込まれた上によく手入れされていた。

フェイトは小さく溜息を吐き、足元に視線を落とした。

「……おまえさ、どう思った？」

「なにがだ？」

アルベルが刀から顔を上げる。フェイトも足元から視線をアルベルへと移した。

「いや、ほら……母親についてだよ」
「別になんとも思わねぇ」
「そうか」

フェイトが曖昧に笑う。アルベルは罰が悪そうに顔を背けると、ただ、と呟く。

「ただ、なんだい？」
「……すげぇ奴だったってのが分かった。それだけだ」

腕に光る紫のリングが柔らかい光を放つ。

「……アルベルらしいよ」

フェイトは声を押し殺して笑うと、アルベルは鼻を鳴らせて刀の手入れに取り掛かった。

「ところで、さ」

暫くの沈黙の後、フェイトはアルベルに声をかけた。アルベルは目線だけフェイトに送り、先を言うよう促す。

「アルベルも知ってるよな？　エリミネートライフルの件」
「ああ」
「あれ、誰がどんな目的でやってるんだと思う？　いや、そもそも何処で手に入れた？　やっぱりバンデーンの仕業なのか……」

いきなりの質問攻め、アルベルは一瞬唖然として手を止めたが、

「……俺が知るか」

面倒くさそうに吐き捨てた。

フェイトは、そうだよな、と呟き、頭を掻く。

また訪れる沈黙。しかし、今度はそう長くはなかった。

「あいつら、一度ここで派手にやらかしたよな。そん時じゃねぇか」

フェイトが目を瞬かせ、それからガタリと椅子から立ち上がる。

勢いよく立ち上がったせいで、椅子は派手に転倒した。

「そうか。それで手に入れたはいいが、本人認証装置のせいで使えなかった」

「だから捨てたってのか？」

「違う。何か、何かあるはずだ。アーリグリフ……サーフェリオ……シーハーツ……グリーテン……」

フェイトはぶつぶつと呟いて、部屋の中を右往左往する。

そして、はたと立ち止まる。

アルベルは見た。フェイトの目が揺れ、顔がまるで自身の髪のように青褪めていくフェイトの姿を。

「そう、か……そういうことか」

「なんなんだよ」

「アルベル、いまこのシランドに僕らを除いて戦闘に秀でた人間がいるかい？」

「俺が知るわけねぇだろうが。――いないのか？」

取って付けられたようなアルベルの問いに、フェイトは頷く。

「ネルとルージュはアーリグリフ。ソフィアとアゼルはサーフェリオ。シレーネさんはグリーテン。セフィリアはアリアス。クレセントは行方不明。各師団の上位構成員はそれぞれの任地に出払っている。クレアとヴァンもいない」
「がらがらじゃねぇか」
アルベルは呆れたように言い、刀を鞘にしまった。
「戦力の分散。これが狙いなのかもしれない。未知の武器が発見されたとなればそれを調べに行くはずだ。そして、調べに行かされるのは上層部だと踏んだんだ」
「つまり、ここでなにかが起こるってことだろ？　面白ぇ」
「目的はなんだ……？」
フェイトが頭に手を当て、考えを巡らせたとき、扉がけたたましく叩かれた。
そして返事も待たずに一人の兵士が室内へ飛び込み、その場に跪く。
「フェイト様！　ご報告が！」
「どうした？」
「封印洞の……」
兵士は床に視線を落としたまま、拳を地方強く握った。
「封印洞の封印が解かれ……聖殿カナンへ賊が入りました！」
「嘘だろ！？　封印を解く方法を知っているのは陛下と執政官以外にはネルとクレアしか……」
「信じられませんが、事実です。フェイト様は直ちに部隊を指揮して賊を捕らえよと」

「……そうか、目的はセフィラだったのか」

フェイトが悔しそうに顔を歪める。

「分かった。相手は何人だ？」

「現状は二人と報告されています」

「警備兵はどうしたんだ？」

封印洞を使わなくても、カナンには地上からの入り口がある。そこから入ってくる賊対策のため、カナンには数十人の警備が付けられているはずである。

最も、聖殿に侵入し、カナンを奪おうとする大それた者など早々いるものではないのだが。

「それが……全く歯が立たないと。相当の手練のようです」

「ふん、そうでなくっちゃな。フェイト、俺も手を貸そう」

「助かるよ」

刀を握り、口元を吊り上げるアルベルを見ると、フェイトは兵士に向き直った。

「封印洞を通る許可は？」

「下りています」

「分かった。僕とアルベルは今すぐ向かう。君は〈光〉の小隊を集めた後、援護に向かわせてくれ」

「は！」

兵士は深く頭を下げると、早足に退室していった。

フェイトは立てかけてあった剣を腰に差す。

「行こう、アルベル」
「ああ、久々に楽しめそうだ」
アルベルは愉快そうに喉を鳴らし、大聖堂へ向けて走り出した。

※

眩しい……。
まるで真夏の太陽のような強い光が、薄目を開いたクレアを射抜いた。
クレアは虚ろな頭で手足を動かそうとするが、動く気配はない。
どこか寝台のようなものに寝かされ、手足を拘束されているらしかった。
「目を……のか？」
「いや……ないだ……」
人影に似た黒いものが、ゆらゆらと光の中に揺らめいていた。目は、まだぼやけている。
「ど……しそうか？」
「……思ったよりも……が不安定……」
「リー……と同じ……でも駄目か」
「待て……目を覚ましかけ……麻酔を」
ようやく頭が回りは始めたところで、腕に僅かな痛みが走る。
そして、クレアはまた深い闇へと沈んでいった。

1－21　光と風の真意

二つの影は、真っ直ぐにカナンの最奥へと向けて疾走していた。
その進攻を阻むべく、立ち塞がった兵士は一瞬にして気絶させられ、冷たい大理石へ次々と倒れ伏していった。

「急げ。おそらくすぐに動くだろう」
「はい」

会話を繰り広げつつも、二人の体は合理的に動いていた。
前後に立つ六人の施術士。待ち伏せしていたのか、既に詠唱は完了し、四方から放たれ施術が侵入者二人へ襲い掛かる。
だが、そのどれもが、長身の侵入者が張った光の壁の前に掻き消されていった。
慌てた施術士達が次の詠唱に入ろうとしたとき、もう一人、小柄な侵入者は、すでに施術士の背後へと移っていた。

「ごめんなさい」

背後をつかれた三人の施術士達がその澄んだ声を耳にしたと同時に、施術士達は意識は途絶えた。
倒れる施術士達を見下ろしてから前を向くと、立っているのは一人の施術士だけだった。

「……」

小柄な侵入者が施術士に向かい攻撃をしかけようと懐に手を入れ、短剣の柄を掴んだたとき、

「あ、う……」

施術士が、呻き声をあげて崩れ落ちた。
その後ろには、剣を構えた侵入者が立っている。

「行くぞ」

長身の侵入者が短く言い、小柄な侵入者は短剣から手を離して走り出した。
深く被られたフードの中で、白銀の髪が揺れた。

※

「陛下！」
「ルージュか。随分と早い帰国だな」

女王と執政官のみが佇む謁見の間に、朱色の髪を揺らしたルージュが入ってくる。
ルージュはその場に跪くと、胸に手を当てて女王を仰ぎ見た。

「ルージュ・ルイーズ。アーリグリフでの調査を終え、只今帰国致しました」
「ご苦労でしたね、ルージュ。して、ネルはどこです？」
「ネルはまだアーリグリフに。事故処理を任せてあります。私は陛下に報告があり、一足先にエアードラゴンを借りて帰国致しました」

女王の表情が険しくなり、ラッセルに目配せする。ラッセルが頷く。

「おまえが言おうとしていることは、ここシランドで何か厄介ごとが起きる、ということか？」
「どうしてそれを……まさか！」

ルージュの目が大きく開かれる。
ラッセルは大きな溜息を吐き、頭を抱えた。

「その通りだ。もう既に起きている」
「くっ！　一体何事ですか？」
「カナンに賊が入った。――封印洞を使ってな」
「馬鹿な！　封印洞が開けられるなんて……」

ルージュが信じられないと頭を振る。

「そうだ。私と陛下、そしてネルとクレアしか知らぬ。だがネルとクレアではない」
「なら誰が――」
「……おまえたちには黙っていたがな。もう一人いるのだ。いざという時の為に、な。――奴が裏切るなどとは微塵にも思っていなかったんだが」

ラッセルの苦渋に満ちた顔を見たルージュは、すぐにある人物を思い浮かべた。
だが、ルージュにはそれを信じることが出来なかった。

「まさか、あいつがセフィラを奪うなんてこと……」
「いや、この際誰かはどうでもいい。問題はセフィラを守ること。それだけを考えろ。既にフェイトとアルベル・ノックスが先行している。おまえは〈光〉の小隊を率いて急ぎカナンへ向かえ」

「は！」
「それ、私も行っていいかな？」

ルージュの、ラッセルの、女王の動きが止まる。
緊迫した場の雰囲気には似つかわしくない楽しげな声が響き渡った。
ルージュが首を後ろへと回すと、真っ黒な外套に身を包み、フードを深く被ったセレンが笑顔で立っていた。

「やぁ、ルージュ。久しぶりだね」
「あ、あ、あああんた……」

極限まで声を震わせたルージュが、セレンに飛び掛った。胸元を掴み、顔を凝視する。
そして束の間天を仰ぐと、耳が裂けんばかりの絶叫を放った。

「あ、悪夢だあああああああっ！！」
「……ちょっと、感動の再会にそれはないでしょ。まったく相変わらずなんだから」
「相変わらずなのはあんたのほうでしょ！？　なに！？　なんなの！？　何であんたがここに居るのよ！？」
「あれ？　フェイトから聞いてない？　ちょっと前に帰ってきたの、サンマイトからここに」

セレンが人差し指で下を指差す。
ルージュがその場にへたり込む。何やらぶつぶつと呪文のように繰り返し呟くルージュを、セレンは困ったように見下ろし、

「じゃあ、陛下、ラッセル様。封印洞、通らせていただきますよ」

朱と黒のマフラーを引っ張って踵を返した。当然ながら首が絞まったルージュは蛙が潰されたような声をあげ、動かなくなった。
そのまま気にせずに出て行こうとするセレンをラッセルが呼び止める。

「待たんか！　おまえ、今は真昼間だぞ！」
「直接の太陽光じゃなければ平気ですよ。きちんとフードもかぶっていきますからご心配なく」
「万が一戦闘になったらどうする？」
「大丈夫です。なんの為のルージュですか」

セレンは笑顔で全く役にたたなそうなルージュを指差す。

「しかしだな」
「ただ、待っているのは性に合わないんです」
「ラッセル。行かせてあげなさい」

女王が目を閉じてラッセルに言う。
ラッセルは納得が出来ないといった表情を浮かべ、セレンと女王を見比べた。

「どうせ止めても無駄でしょう」
「はい」

フードの隙間から笑みを見せ、セレンは即答した。同時に、女王の横から聞こえる盛大な溜息。

「おまえが死んだら悲しむ奴がいるんだぞ」
「分かっています。ユティを一人にはしません。クレアにも……二度も同じ悲しみを味合わせることんんてしない」

そう言い切る瞳は、力強く優しい。ラッセルはすぅっと息を吸い込み、ゆっくりと吐いた。

「――頼んだぞ」

セレンはフードを取り、胸に手を当てて深く頭を下げた。

「御意」

そしてすぐに被りなおし、再びルージュを引っ張って謁見の間から姿を消した。

「セレンめ……一体何をしようとしておる」

「……私たちの知らないところで、何かが動いているようですね」

騒々しい二人組みが去った後の空間は、寒気がするほど静まり返っていた。

※

ペターニに設けられた病院の一室、静かに開けられた扉にネイビスは立ち上がった。

そこから顔を出したのはペターニでは見慣れた女医。

ネイビスを手招きをして室内へと迎え入れ、女医は部屋から出て行った。

去り際に、

「応急処置が早かったおかげで命に別状はないですが、安静に」

と、言い残して。

ネイビスは清潔なベットに横たわるシレーネを見下ろし、困ったように眉を下げた。

「……ったく。こんな大怪我してんのになんて顔してんだよ。おまえはさ」

シレーネの寝顔は、まるで良い夢でもみているかのように安らかなものだった。

口元には微かな笑み、寝息も健やかだ。

ネイビスはシレーネの強く握られた拳をそっと開き、苦笑した。

「会ったんなら連れて帰ってこいよな」

一本の白銀の髪を再びシレーネに握らせたネイビスは、軽く手をあげて病室から立ち去った。

扉を閉め、壁際に据え付けられた椅子に腰掛ける。

〈土〉の四級構成員でありながらネイビスお気に入りの師団員であるアイーダから、シレーネが大怪我をして病院に担ぎ込まれたという報告を受けたネイビスは急ぎ病院へ向かった。

そこに居た医師に話を聞くと、シレーネを運んできた人物はフードを深く被って顔は見えなかったが、どこか聞き覚えのある声の男性だったという。

そして、医師がシレーネの治療に忙しなく動いている合間に、男は姿を消していた。

「フードを被った男、ねぇ」

両手を椅子について、天井を仰ぐ。
正直な話、ネイビスは頭を使うのは苦手である。だから報告書の類も全部アイーダにやらせてきたし、デスクワークをしたことはほとんどない。
そんなネイビスが何故文武両道を目指す師団員になれたのは、いまだに本人すら疑問に思うが、それを考えても仕方のないことだ。
ネイビスは腰を上げると、ぐっと全身の筋肉を伸ばした。

「あーあ……俺もおまえくらい頭良ければ良かったのになぁ」

視線を横に向ける。
そこに佇む空色の髪の青年は、柔らかい笑みを浮かべた。

「そんなネイビスは見たくないな。気持ちが悪くてかなわないよ」
「そうだな。腹黒くないおまえくらい気持ち悪いな……アゼル」

久方ぶりに会う親友に、ネイビスはにかっと笑みを浮かべる。
アゼルは苦笑混じりに溜息を吐き、肩を竦めた。

「シレーネさんがこんなことになって、愛しのクレセントは行方不明だっていうのにえらく余裕だね」
「ん、ああ。悩み事が一つ減ったからな」
「悩み事？　ネイビスが？」
「クレセントは、偽者なんかじゃない。俺はそう信じることにした」

シレーネのあの顔が、そうだとネイビスに語りかけてくるのだ。

「根拠は……あるわけないよね」

ネイビスは頷く。

そしてアゼルに向き直って手を顔の横で小さく振った。

「なんにせよ、お疲れさん。早速で悪いがシランドへ行くぞ。賊二名、何が何でも捕らえろとさ」

「やれやれ、人員不足も深刻だね。大変だけど今年の入団試験も去年のようになるのを祈るしかないか」

「……それだけは御免だ」

※

「ここ、は」

目を開けて一番に目に入ったのは、見慣れぬ天幕。だが、どこか懐かしい天幕だった。

クレアは僅かに痛む頭を抑えつつ、上体を起こして辺りを見渡す。天幕付のベットに豪勢なシャンデリア、調度品も質の良い物ばかりの、まさに貴族の屋敷であった。

ただ、違和感を感じたのは、窓に付けられた鉄格子と、ドアの外の気配。見張りが居る。だが、生物の気配ではない。

（機工兵……かしらね）

だんだんと冴えてきた頭が弾き出す記憶。

ヴァンを追って入り込んだ森の中でヴァレリアの蠍と名乗る仮面の男に襲撃を受け、そして……。

（――クレセント）

あの状況から判断すれば、クレセントはドールマスター側の、グリーテンの人間なのだろう。

（やっぱりスパイだったってことかしらね）

だが、そうなるとまたいくつも疑問点が浮かび上がる。それを全て解決する道は、今のクレアには一つしか思いつかない。

（クレセント本人が、自分の意思で裏切った……そう考えるしかないのだけど）

頭に浮かぶのは、意識を失う間際に見た悲痛な表情と、懺悔の言葉。

元々の仲間を裏切ったことに対するせめてもの謝罪だろうか。しかし、クレアは違うと感じていた。

（考えてても仕方ないわ。とりあえずここから逃げないと）

クレアはドアにピタリと張り付き、外の気配を窺う。確かに機工兵らしき気配はあるが、数は多くない。

ここまで軟い見張りだと逆に拍子抜けするが、かといってこれ以上厳重になられても面倒である。

一つ大きく深呼吸をすると、クレアは木製の扉へ手を翳した。

「炎よ……」

強い光を放つ銀の紋章が浮かぶ。その力を感知したのだろうか、扉の向こうからガチャリと機構兵が動く音が耳に入る。

だが、もう遅い。

「扉ごと吹き飛びなさい。イラプション！」

直後、クレアは後ろへと飛びのく。ボコリと小さな音を立てて現れた火の泡は瞬く間に扉を中心とする一帯を飲み込んだ。

溶岩によって溶かされた扉の向こうでは、人型の機工兵と犬型の機工兵がその鉄の塊を無残な形に変えながら溶岩に飲み込まれている。

クレアはそれを見て、背筋が冷えていくのを覚えた。

「……アレが何体もいるんじゃないでしょうね……」

アレとはもちろん犬型の機工兵である。

クレアはがっくりと肩を落とすと、今だ煮えたぎる溶岩を凍らせて部屋の外に飛び出した。

部屋を出て最初の曲がり角に張り付き、壁越しに左右を確認する。敵らしい気配はない。窓から見た景色で、現在地は二階であることが分かっている。飛び降りるくらいはわけないが、下に機工兵が待ち構えているとも限らない。慎重を期さねばならなかった。

そして、可能ならば出来るだけ多くの情報を手に入れておきたい。ヴァレリアの蠍と名乗る男が何をしようとしているのかは検討もつかないが、少なくともクレアの勘はそれを良い事だとは思わなかった。

「……そういえば、ここって」

クレアは漸く気がついた。目を覚ましたときから感じていた違和感。見覚えのある調度品やシャンデリア。この蒼い絨毯の敷き詰められた廊下。

「どうりで、見覚えがあるはずね……」

クレアはほんの一瞬悲しそうな表情を見せると、すぐに顔を引き締めた。

この洋館の場所と見取りは理解した。脱出するのは簡単である。おそらくヴァレリアも知らない秘密の抜け道があるのだ。

となれば、そこに向かいつつ情報を集められるだけ集めて退散するのが好ましい。長居は無用。何も得られるものがなくとも、後々直接ヴァレリアの蠍を捕らえて吐かせればいい。

クレアは慎重かつ迅速に進んだ。

途中何対か人型や犬型、壁に据え付けられた機械を発見したが、そのどの視界にも入らないように進んだ。

不思議なことにここに居ると踏んだヴァレリアの蠍やクレセントに気配はせず、特に障害もなかった。若干拍子抜けをしていると、ふと通り過ぎた部屋から人の声が聞こえた。呼ばれている。そう、感じた。

クレアは部屋を出る直前に見つけた、無用心にも部屋の隅に丁寧に置かれていた愛刀を握り締めると、ゆっくりと扉を開ける。

背中は壁に貼り付けたまま、首だけを動かして解き放たれた部屋を中を覗き見る。

真っ暗だった。見渡す限りの黒。これは部屋の明かりがないだけでなく、壁自体も黒く塗りつぶされているからだろう。なかなか闇に目が慣れることはなかった。

クレアが辺りを警戒しつつも中に入ると、入り口からは死角になった場所で、ぼんやりと光る薄緑の物体があった。

慎重に、音を立てずに、闇に紛れて近づく。まるでネルのようだ、とクレアは内心苦笑した。

漸く緑の光の正体が分かったと同時に、クレアは息を呑んだ。

光の正体は透明なカプセル。シャロム邸の地下空間で見たのと全く同じタイプのものである。

違ったのは、それに微かに泡立つ水らしきものが入っていたこと。

奇妙な音をたてていたこと。
そして……。
『こんにちは、可愛いお嬢さん』

※

「これが――セフィラ」
「そうだ。おまえは見るのは初めてか？」
小柄な影は頷く。それほど大きくない台座の中央で、ゆらゆらと水に浮かぶ銀色の球体。
聖王国シーハーツが誇る至宝、聖珠セフィラ。
セフィラから流れる無限の聖水がシランドを満たし魔物を避せつけることのない神聖な地にし、周辺の土地は緑に溢れた肥沃な土地になっている。
それほどまでの力を秘めたセフィラは、歴史上幾度となく奪取されそうになったという。その最たるは三百年前の起きたグリーテンの進攻であるとされている。
そして、今も。
小柄な影がセフィラへと手を伸ばす。
が、
「そこまでだ！」
音を立てて開け放たれた扉と、聞こえてきた声に、小柄な影は小さく笑みを浮かべてセフィラから手を引いた。
くるりと振り向き、声の主を確認する。

そこに構えるは、巫女の国の蒼き騎士と竜の国の漆黒の騎士。

「意外と、早かったですね」
「まさか、その声！？」

小柄な影が、フードを取る。
さらりと白銀の髪が流れ、虚ろな光を放つ翡翠の瞳が薄く開かれる。
口元に浮かんだ笑みはとうに消え、浮かぶ表情は冷淡。
フェイトは思わず手に持った剣を落としそうになるのを、寸でのところで堪えた。
顔が露になった女性は、その虚ろな瞳をフェイトに向けた。

「そのまさか、です。フェイト様」

見紛うことはない。普段と何ら変わらない、出会った頃と全く同じ瞳をしたクレセントが、そこにいたのだ。

「クレセント……どうして君が！？」
「その質問には、私が答えよう」

今までクレセントの後ろで沈黙を保ってきた長身の陰が、一歩前へ進み出た。
フェイトも、そしてアルベルも、その耳を疑う。それはあまりにも聞きなれた声だった。そして、今聞こえていいはずがない声だった。

「少し、久しぶりな感じがするな。フェイト君、アルベル」

長身の影が深く被られたフードを取り払う。

金の隙間から見える深い紅が、優しく微笑んだ。
アルベルは思わず金髪の男に掴みかかっていた。体が抑えられなかった。頭が信じようとしなかった。
そしてそれは、フェイトも同じ。
今度こそ手にした剣は大理石を鳴らし、それが奏でた虚しい音がその場にいる全員の耳へと響く。

「ヴァン……君まで？」
「どういうつもりだ？」

フェイトの呻きにも似た声とアルベルの低い唸りが、静かな大理石に飲み込まれていく。アルベルの眼光を真っ直ぐに受け止めたヴァンは、優しい瞳を一転させて冷笑した。

「我等が願いはただ一つ」

低い、まるで海の底から這い上がってきたような声。
ヴァンはアルベルの手を振り払うと、後ろに下がってクレセントと並んだ。

「全てを……この手に取り戻すためだ」

1－22　偽りの傀儡

「全てを……取り戻す？」

ヴァンは冷徹な表情を崩さないまま頷く。

「フェイト君、アルベル。君たちは聞いたのだろう？　シーハーツの犯した禁忌を」

「強い施術士を造り出す為に、沢山の施術士や王家の血筋を使ったこと。そしてその人こそが、君とアルベルの母親だということか」

「そうだ。そんなくだらない研究のために母さんや罪のない人たちまでもが犠牲になった。そして、こんなことをした愚か者共は、今も裁かれることもなくのうのうと生きている！」

ヴァンは拳を握り締める。

アルベルは鼻を鳴らして失笑した。

「ハ、だからなんだ？　いまてめぇがやっていることとなんの関係がある？」

「その通りだ、ヴァン。セフィラを奪って一体何になるというんだ？　それに、どうしてクレセントまで」

フェイトはヴァンからクレセントに視線を移す。クレセントは何も語らない。フェイトの視線も、まるでないもののように無表情だった。

ヴァンは吐き捨てるように笑うと、左手の袖を捲くった。涼しげな音と共に、紫の腕輪が姿を現す。

「フェイト君、君の質問に答えよう。クレセント」

クレセントもヴァンと同じように袖を捲くる。

「それは……」

「そうだ。アルベル」

クレセントの腕で光っていたもの。それは、アルベルやヴァンが持つものと全く変わらない、紫の腕輪だった。

「分かるだろう？　この意味が」

誰も答えない。

フェイトも、アルベルも、まるで自分の影が縫いつけられてしまったかのように、その場から動けない。

静まり返ったカナンの奥地で、ヴァンの声だけが虚しく響いた。

「――このクレセントこそ、母と共に研究者の手に落ち、死んだとされていた俺たちの妹だ」

三本の輪が連なった三つの腕輪が、セフィラから聖水の音と共に涼しげな音を響かせた。

※

「あんたさ、体治ってないんでしょ？　大丈夫なの？」

「相変わらずルージュは優しいね。心配してくれるなんて嬉しいな」

首にくっきりとマフラーの後を残したルージュと、黒い外套を羽

織ったセレンはややゆっくりとした速さでカナンの奥地、セフィラの安置所を目指していた。
元々運動能力が高いセレンとしてはもう少し早く走っても体に負担はかからないのだが、ルージュの気遣いを無下にしたくはなかった。

「そのおちゃらけた性格は変わんないのね。で、なにがしたいのよ？」
「なにがって？」
「とぼけないで。ぶっちゃけこのまま行っても役に立たないあんたが行くっていうんだからなにかあるんでしょ？　足手纏いになってでも行きたい何かが」

ルージュの真剣な表情に、セレンは目を丸くしてから声を立てて笑った。

「君は昔から変なところで鋭いね。――そういうところ、嫌いじゃないけど」
「あ、あんたねぇ……」
「別に深い意味はないよ。ただ、確かめたいだけ」

それ以上は何も言わない。ルージュも聞かない。
セレンの顔が、笑っていたから。

「――はいはい。何も聞かないわよ」

この笑顔を見せたセレンには、なにを言っても無駄なのだ。
ルージュは一つ溜息を吐き、顔を前に向けた。まだカナンの半分も来ていない。所々に倒れる兵士や施術士達を無視し、前へ進んでいく。

「助けなくていいの？」
「平気よ。全員気絶してるだけ。分かってるくせに聞かないで」
「恐れ入るね」
「でも、傷つけてないってことは――」
「ダメだよ、ルージュ」

言葉を途中で遮られたルージュはセレンを振り向く。
そして、思わず息を飲んだ。セレンは今まで浮かべていた微笑を一切感じさせない表情で、ルージュを見ていた。

「もちろん、その可能性も捨てきれなくはない。けどね、彼はセフィラを奪うつもりなんだ。迷いなんか持っちゃいけない。戦わなくちゃならないかもしれないんだから。いくら君の大切な幼馴染でもね」
「セレン、気付いて……」
「分かるよ。ラッセル様の口振りと君の焦り方を見れば」

ルージュは歯を食い縛った。
セレンの言う通り、確かに少しでもこの事実を否定するものが欲しかった。違うと信じたかった。クレアには厳しいことを言ったくせに、まだ諦め切れていない自分に嫌気が差した。
「私たちは……身内ですら疑わなきゃいけない所にいる」
自分に言い聞かせるように、呟く。
セレンは何も言わず、ただルージュの後を追う。

「大丈夫……私は、いざとなったら迷わない。でも――」
「……」
「信じてる……あいつを。クレアが信じたんだもん。私が信じてやんなくてどうするのよ」

そう言って、無意識のうちに速度を速めて走り出したルージュの後ろで、セレンは困ったように笑うのだった。

※

「クレセントが……君――君たちの妹？」

やっと喉から搾り出した声。フェイトは口元が引きつるのを感じた。

頭を抱え、手を出す。少しだけ考える時間が欲しかった。頭の中がぐちゃぐちゃに掻きまわされたように、何もかもが噛み合わない。

横目でアルベルを見ると、流石に何を言っていいのか分からない表情を浮かべていた。

こんな状況でさえ、クレセントは顔色一つ崩さない。フェイトは、それを不気味に思ってしまった。

「後々その存在が知られても構わないように、クレセントは計画の中枢にいたシャロム夫妻の子供として育てられた。そして、研究が打ち切られたとき、クレセントはそのままシャロム家に引き取られた」

「そして六年前。わたしはヴァンと会いました。その時のヴァンはわたしが妹など知る由もありません。私も、今更自分が妹だと名乗る気はありませんでした」

クレセントが、初めて口を開いた。

全く同じ声のはずなのに、まるで別人の声のように聞こえてしまい、フェイトは手を頭から手を離した。

「だが、俺は一人の男と出会い、全てを知った。絶望したよ。死んだと思っていた妹は生きていて、あの忌々しい研究者共の手の中いると思うと、いてもたってもいられなかった」

ヴァンの顔が痛苦に歪められる。

「俺は最初、クレセントさえ解放できればよかった。だが、そうもいかなくなった」

「……」

「俺たちにとって掛け替えのないものが、あちらの手に落ちていた。それと研究者達が犯した実験の物的証拠を渡す代わりに、奴等が要求したのは――セフィラ」

ヴァンが後ろを振り返り、セフィラを見つめる。変わらない輝きを放つ銀の至宝は、ただ揺らめいているだけ。

フェイトは落とした剣を取った。ヴァンと、そしてクレセントが臨戦態勢に入ったのが感じ取れたからだ。

「つまり、セフィラを手に入れ、奴に渡すことで、初めて俺の望んだもの全てが手に入る」

剣の柄に手をかけ、ヴァンが姿勢を低くした。クレセントも腰から長さの異なる二本の剣を抜き、正眼に構える。

「そこを通してくれないか、アルベル？」

「あ？」

「クレセントはおまえにとっても妹になるんだ」

相手が普通の人間だったのなら、迷いも会っただろう。

だが、

「関係ねぇよ。俺はここに戦いにきたんだ」

アルベルはスラリと刀を抜き、ヴァンの真正面に突きつけた。

ヴァンは笑う。効果があるとは期待していなかったのだろう。

「一応聞くが……」

「僕も黙って通すわけにはいかない。今の話を聞いたのなら尚の事」

「そうか。だが、セフィラは渡してもらう」

ヴァンの体から、いまだかつて向けられたことのないほど強烈な殺気が放たれる。

並ぶクレセントは、殺気はおろか戦意すら感じられないが、フェイトはクレセントの二つ名を思い出し、身構えた。

『音無しの風』。殺気も、気配すら感じさせない彼女は、一体何を思い戦っているのか。

復讐のため？

フェイトはそうは思えなかった。

「おい、フェイト。俺はヴァンをやる。おまえはあの女だ」

「……おまえ、やっぱり気にしてるんじゃないか。まぁ、そりゃ妹とはやりづらいよな。わかるわか――」

「黙れ、クソ虫」

眉間にピッタリと向けられた刃と殺気に、フェイトは両手を上げて頷く。

アルベルは舌打ちをして刀を下げると、小さく、耳を済ませていないと聞こえないような声で呟いた。

「殺すんじゃねぇぞ」
「当たり前だろ。おまえこそ殺さないでくれよ」
「そんな余裕こいてられる奴じゃねぇけどな」

刀を一度軽く振り、アルベルはヴァンを見る。
真紅の瞳が交差した瞬間、刃の打ち鳴らされる音がフェイトの鼓膜を叩いた。
そして、フェイトも一つ溜息を吐いて剣を上に構える。同時に、刃と刃がぶつかる感触。フェイトは小さく笑った。

「甘いよ、クレセント」

フェイトの頭上で剣を振り下ろしたクレセントが、僅かに口元を上げた。

「あの研究を公に晒した所で、国が暴走するだけだぞ！」

フェイトが渾身の力で剣を振り下ろす。

「では、あの所業を見逃せと？」

クレセントはそれを半身になって避け、剣を振った。
それをバックステップでかわしたフェイトは、そのまま距離をとる。

「違う！　罪は必ず償わせる！　だが、君たちは手順を踏まずにやろうとしている！」
「手順とは？」

「証拠を手に入れたところで、国家反逆罪の罪を被った君たちはどうやってこの事実を明らかにする？　手当たり次第にばら撒くしかないだろう？」
「……そうですね。その方法もあります」
クレセントの手元から、数本のダガーが飛ぶ。だが、フェイトには当たらず、後ろの壁に突き刺さるだけだった。
「国内で暴動なんかが起こったら、それこそ他国に付け入る隙を与えるだけじゃないか！」
「その通りです」
「クレセント！」
フェイトは叫んだ。クレセントは一瞬悲しそうに眉を下げ、顔を伏せた。
「ですが、わたしにはどうしようもないのです」
「それはどういう――っ！？」
今度こそフェイトの眼前に投げられたダガーをフェイトは寸でのところで避けた。
目の前にあるのは、いつものクレセント。無表情な翡翠の瞳が、フェイトを見つめていた。
「これ以上話すことはありません。いくらフェイト様といえど、わたしを傷つけないようになどと甘いことをお考えのようでは――死にますよ」
クレセントの手がフェイトに向く。
施術が来る。

そう感じ取ったフェイトが詠唱を済ませる前に駆け出そうとした時、

「ぐっ！」

背中に鋭い痛みが走った。手を伸ばせば、手にべったりとこびり付く赤。

鋭い刃で切り裂かれたような痛みが、背中に走った。

後ろを振り向く。最初にフェイトに当たらずに投げられたダガーが、淡い緑の光を放っている。

「そうか……武器に、施紋を」

施術は直接体に施紋を刻まなくても、行使することはできる。だが、術者との距離に威力が反比例するため、一般的には用いられていない。

実際にあの至近距離で放たれたというのに、傷はそこまで深くはないようだった。

しかし、この傷は大きい。

フェイトは顔を顰め、背中に力を入れて立ち上がった。

「参ったね……」

「やるじゃねぇか！　ヴァン！」

「伊達に訓練してきたわけではないさ」

フェイトとクレセントが居るところとは少し離れた場所。ガチガチと音を立てて刀と剣がぶつかり合っていた。

クレセントとフェイトが小技の出し合いだったの比べ、こちらは真っ向勝負。剣と刀の切り合いだった。
無論、セフィラを気遣って派手な技が出せないのが一番の理由ではあるが。

「なぁ、アルベル。おまえは……分かってくれないのか？」

鍔迫り合いをしながら、ヴァンが言う。ヴァンは両手を使っているというのに、アルベルは片手だ。だが、それでもアルベルは一向に引かない。左手の義手でヴァンを刺す事も出来るというのに、それをしようともしなかった。

「ハ！　生憎だが俺は興味ないからな！　楽しけりゃそれでいいんだ、よ！」

刀を振って、ヴァンの剣を振り払う。

「てめぇもてめぇだぜ、ヴァン。大事なもんがあるなら自分で奪い返せ。言いたい事があるなら、てめぇの口で言え！」
「……」
「なに得体の知れない奴の言いなりになってんだよ？　てめぇはそんな腑抜けた奴じゃねぇだろ！」

そうアルベルが叫んだのとまさに同時だった。
セフィラ安置所の扉が開かれ、二つの人影が姿を現す。

「人質を取られているんだろう？　君達の母親、実験番号０１７を」

コツコツと大理石を鳴らす靴音。

どこか悲しい表情を浮かべたシーハーツの天才と、朱色の髪を靡かせた女性が、そこにいた。

※

クレアはゆっくりと瞬きをした。
目をごしごしと擦り、もう一度それを見て、再び目を逸らす。

『あらあら、そんなに信じられない光景かしら？』

水が入ったカプセルの中から楽しげな声が漏れる。
信じられないも何もない。そこに居たのは、紛れもなくヒューマンの女性だ。水の中で生きていることはおろか、喋るなど到底不可能なはずである。
緑がかった銀の髪が水の中をゆらゆらと泳いでいる。緑がかって見えるのはこの光のせいであるから、本当の色は白に近い銀だろう。

「白に近い……銀？」

クレアははっとして女性を見つめた。
瞳こそ真紅だったが、白銀の髪にこの顔。そう、そっくりだったのだ。彼女に。

「あなたは……まさか」
『もしかして私を知ってるの？　まさかねぇ』

女性が笑う。水泡がぼこりと生まれ、消えていった。
クレアは背筋をぴんと伸ばして、女性を見つめた。

「失礼ですが、あなたは聖王国シーハーツがご出身ですか？」
『あら、正解』
「そして、王家の血を引く第三の王女」
『……どうやら、あなたは事情に詳しそうね』

女性の顔からふざけたものが一切消える。すっと細められた真紅の瞳は、畏怖さえ覚えるほどの深い紅。

同時に放たれる鋭い殺気にクレアはゴクリと喉を鳴らせると、今にも逃げ出しそうな震える足に鞭を打ってその場に縫いとめた。

暫くの沈黙。女性は急に笑い出した。

『ふ、あはははは！』
「え、あ……はい？」
『ふふふ。殺すつもりで睨んだのに逃げないなんて、大した子ね。あのグラオですらアルベルを盾にして逃げたというのに』

酷い話だ。

だが、これでクレアは確信した。

「お初お目にかかります。レイナ様。聖王国シーハーツがクリムゾンブレイドの片翼、クレア・ラーズバードと申します」
『ラーズバード……あの豪腕アドレーの娘、でいいのかしら？　それとも分家の方？』
「いえ、相違ありません」

クレアは首を横に振る。レイナは満足そうに頷いた。

『なるほど、あの方の血をよく受け継いでいるみたいね。あの方の噂と同じ、芯の強い瞳をしているわ』

「あ、ありがとうございます」

喜ぶべきか迷うところではあるがとりあえず素直に礼をいうクレア。

『それで、そのシーハーツの重鎮が何故こんな場所に？　ヴァレリアを捕らえに来たのかしら？』

「……」

『あ、逆に捕まっちゃったんだ』

ぐ、とクレアは押し黙る。本当のことを言われているので言い返すことも出来ない。

一つ咳払いをすると、レイナを見上げた。

「無礼を承知でお尋ねします。グラオ・ノックス卿から、あなたは亡くなったと聞かされたのですが」

『そうでしょうね。ヴァレリアが研究者達にそう流したのだから』

「何があったのか……お聞かせ願いたいと思います。それと、ご存知でしたらクレセントについても」

『……いいわ。何処から話せばいいかしらね……あなたは研究のことを知ってるみたいだから。その後からかしら』

「はい」

『ああ、その前にあなたの疑問に一つ答えましょうか。クレセントは誰か、これはすぐに答えられるわ。あの子は……』

※

「セレンにルージュ？　どういうことだ？　ヴァンたちの母親は死

んだんじゃ……」

フードを取り払ったセレンは、フェイトの質問には答えずに一度微笑むと、ヴァンとクレセントを交互に見た。

「ヴァン君、お姫様。やっと分かったよ。君たちがどうしてグリーテンに協力しているのか」

「グリーテン!?」

フェイトとルージュが目を丸くし、ヴァンとクレセントが険しい表情を浮かべる。

フェイトは一瞬セレンの言う『お姫様』に頭を悩ませたが、クレセントのことだろうと理解した。

「セレン・ウォン。あなたは一体どこまで掴んでいるのですか?」

「そうだね。君たちの過去、君たちの取引相手。そして」

セレンがクレセントに微笑む。

「――君の正体」

クレセントが息を飲む。

「それをどこで知った? 俺たちの母親が生きていることもクレセントが俺たちの妹であることも、誰にも知られてないはずだ」

いつの間にかアルベルとの交戦を止めていたヴァンが、クレセントを庇うようにセレンの前に立ち塞がった。

ヴァンの後ろでは、クレセントが驚きを隠せない様子でセレンを見ていた。

「君たちの過去、お姫様の正体についてはきちんと調べたよ。母親と取引相手は勘だったけど……ビンゴだったみたいだね。クレアを裏切ってまで君が動く理由なんて、それくらいしか思いつかない」

セレンはゆっくりとヴァンに近づく。

フェイトはそれを止めようとしたが、ルージュに手で制された。

「グリーテンのほうは結構確信があったよ。セフィラを手にして尚且つ国内に混乱を招く。アーリグリフと平和条約を結んだ今、得をするとすればグリーテンくらい、なものだよね？」

セレンはにっこりとした笑みをヴァンに向ける。

ヴァンは、流石はシーハーツの神童、と両手を上げた。

「その洞察力……感服する」

「セフィラという力を手にしたら、グリーテンはシーハーツに攻め込むつもりかもしれない。それでも君はいいの？」

冷たい瞳でセレンを見下ろしていたヴァンは、漸くその重たい口を開いた。

「心配ない。奴にセフィラを渡すつもりなど、毛頭ない」

「ヴァン？」

クレセントがヴァンを見上げる。ヴァンはクレセントの頭を撫でると、微かに笑った。

「奴は俺が殺す。大丈夫。おまえも母さんも、俺が守るから」

ヴァンはクレセントの頭から手を離すと、セレンに向き直った。
このとき、クレセントの瞳が鋭く細められたのには、ヴァンは気付かない。

「その為にも、セフィラが必要なんだ。これを渡して油断したところを殺す」

束の間の沈黙。それを破ったのは、驚くほど穏やかな声だった。
ヴァンが、クレセントが、セレンが、ルージュが、アルベルが自らの耳を疑った。このような緊迫した空気の中、その声だけは、優しかった。

「陛下に申し出よう」

セレンとヴァンがフェイトに振り向く。
そこには、剣を鞘に納めたフェイトが、やはり穏やかな笑顔で立っていた。

「僕も協力するよ。だが、約束してくれ。セフィラを持ち出すのは陛下の許しを得てからということ。それと、その取引相手は殺さずに捕らえること。研究の証拠を無闇にばら撒くようなことはしないこと」
「ちょっと、フェイト本気!?」

ルージュがフェイトを振り返る。

「本気だよ、ルージュ。確かにヴァンたちのやったことは犯罪だ。でも、今僕等の敵は誰だい？　そこにいるヴァンとクレセントか？　違うだろう？」

その言葉は、驚くほどアッサリとルージュの中に浸透していった。
そう、これが、ルージュの望んだことでもある。

「……そうね、違うわ」

ルージュも言い切る。その顔には、僅かな笑みすら浮かんでいた。
やはり、クレアは正しかった。ヴァンは堕ちてはいなかったのだ。

「ヴァン、君の取った方法は間違ってる。でも、一つ確かなことがある」

フェイトがセレンの横に立ち、ヴァンに手を差し出す。

「僕らは協力出来る。そうだろう？」
「……だが、俺は」
「あー、もうイチイチ細かい男ね！　いいって言ってんだからいいじゃないの！　ま、後でクレアからとびきりきつーいお仕置きが待ってるけどね」

ルージュがヴァンの肩に手を回して、こめかみに拳を押し付ける。

「ルージュ……そうだな、クレアにも謝らないといけない」

ヴァンがフェイトの手をしっかりと握り、離す。

「よし。じゃあすぐにでも陛下の所に戻ろう」
「わっ、ちょっとフェイト」

フェイトがセレンの背中を押して歩き出す、ルージュ、アルベルもそれに倣った。

ヴァンはフェイトの背中に「ありがとう」と呟き、クレセントを振り返る。
が、
「さぁ、俺たちも行こう。クレセン……」
脇腹に何かが深く食い込み、ヴァンはその場に膝をついた。
「やっぱり、裏切るつもりだったのですね。ヴァン」
冷徹な口調。ヴァンを見下ろす瞳もまた、冷え切っていた。
時間が経つにつれて焼けるように熱くなる傷口。ついに体を支えきれなくなったヴァンはその場に倒れこんだ。
その音に反応した面々が振り向き、表情を固まらせる。
「ヴァン！？」
「てめぇ、どういうつもりだ！」
「……ち」
フェイトがヴァンに駆け寄り、アルベルが刀を抜き、セレンが悔しそうに顔を歪めた。
クレセントは剣についた血を払うと、セレンにその剣を向けた。
「セレン・ウォン。あなたも迂闊でしたね。わたしの“正体”を知っているのなら、こうなることも予想出来たでしょう？」
「懐柔されているとは思っていなかったよ。君は君の意思で動いていると思っていた」
「いいえ。わたしの意志です。ただ、ヴァンとは目的が違っただけで」

坦々と進められる会話に、溜まりかねたルージュが食い込む。

「ちょ、ちょっとどういうことよ!?　クレセントの正体って、ヴァンやアルベルの妹ってことじゃないの!?」

「……このまま事が済むなら黙っていようと思っていた。出来るなら君の口から話して欲しかったからね。でも、そうもいかないみたいだ」

セレンの口調が厳しくなる。

真正面に剣を突きつけられているというのに、セレンは表情一つ崩さない。たじろいだのは、むしろクレセントのほうだった。

だが、それを決して表に出すようなことはしない。ここで焦ったら負けだ。

「いいかい、みんな。ここにいる彼女は、クレセント・ラ・シャロム――いや、第三の王女の娘本人じゃないんだ」

「やっぱりグリーテンのスパイってことか?」

フェイトはヴァンの横腹を彼の巻いていたマフラーで縛りながら言う。

「違う。本人じゃないけど本人。そう言ったほうが正しいのかもしれない」

「ちょ、ちょっとセレン。意味わかんないわよ」

ルージュが頭の上にハテナマークを浮かべて言う。

クレセントの剣を持つ手に力が入り、セレンの額を傷つけた。だが、セレンは一歩も引かない。額から流れ、顎にまで伝わった血を拭き取る事もせずに口を開いた。

「フェイト、君なら分かるんじゃないのかな？　こんな技術シーハーツには存在しない。あるとすればグリーテンだ」

フェイトは体の芯が急激に冷えていくのが分かった。頭の隅に、何かが点滅している。

本人だけど、本人じゃない。瓜二つの姿。シーハーツでは確立されていない“技術”。

フェイトの時代ではとっくに確立されているが、それは非人道的とされ人に用いることは今では禁止されている技術。

一人の人間から、同じ遺伝子を持つ新しい個体を造り出す、生命への冒涜。神への反逆。

それは……。

「――クローンか……っ」

1－23　Message

クローン。そういってしまえば一言で片付けられるが、その種類は大きく二つに分けられる。

一つは植物クローン。これは遥か昔から生まれていた技術で、おそらくシーハーツでも技術としてあるだろう。挿し木と呼ばれるクローン技術がポピュラーな例である。

その植物のクローンに関しては、特に規制というものはない。問題はもう一つ。

動物のクローン。その中でも取り分けヒトクローンである。

発表当初問題になっていた、ヒトクローンは寿命が極端に短いという欠点も解決されながらも、人道的理由で禁止されている。

クローンというと自分とまるっきりそっくりな固体が出来ると思われがちであるが、実際はそうではない。

仮に自分のクローンを作ろうとした場合、核移植した細胞を仮親の子宮へと着床させ、通常の子供と同じように出産させるため、年齢に違いが出る。外見上は確かに一卵性双生児のように似てはいるが、指紋など細かいところは後天的な影響が出るものとされ、やはり全く同じということはない。

そして、クローン技術が最も反対されている理由。

それは、誰かの代わりとして、クローンを生み出すものがいるということ。

遺伝子が同じというだけで、クローンはその人ではない。性格も違えば、考えも違う。

だが、クローンを望んだ人は、そうは思っていないのだ。死んだ人の代わり、恋人の代わり。優秀な人間だから、それを量産する。

クローンを一生命体として認識せず、まるで代わりのきく人形のように扱うことがしばしばだ。

それゆえ、銀河連邦法ではヒトクローンを禁止している。とはい

え、その技術が確立されている以上、完全になくなるということではない。
組織の重鎮のクローンが作られ、影武者として立てられる。暗殺者が確かに殺したはずなのに、次の日には堂々とテレビに出ていたという話は少なからずあった。
まるで使い捨ての道具である。誰かの遺伝子かた生まれたというだけで、一つの生命体として認められない。
人の業で生み出された悲しい生命体。それこそが、クローンなのである。

「馬鹿な……クローン技術がこんな未開惑星にあるはずが……」
困惑したフェイトの言葉に、セレンは鋭く目を細める。
フェイトが思わず口にした単語をしっかりと頭に入れ、フェイトを目だけで見た。

「クローン、っていうんだ。同一人物を作るなんてね。最初に研究資料を見たときは理解するのに時間がかかったよ」
「……」
「なにか、申し開きはあるかい？　クレセントの複製人間さん」

セレンの威圧的な瞳を、クレセントは悲しげな瞳で見つめ、それからすぐに自嘲めいた笑みで彩った。
初めてみる表情。クレセントはセレンから剣を引くと、軽く跳躍して後ろへ下がった。
浅緑色の外套をバサリと脱ぎ捨て、剣を鞘に仕舞う。
そして、おもむろに肩の所で切り目が入った服の袖を、その切り目から一気に破り捨てた。布が千切れる音。誰もが、クレセントの

行動を理解できなかった。
パサリと袖だった布が大理石に落ち、白く細い腕が露になる。
手首にはめられた紫の腕輪。肩の丁度服の切れ目からは見えない場所に刻まれた『??』と描かれた刺青。
クレセントは目にかかった長い前髪を払うと、紫の腕輪をヴァンの上へ投げ捨てた。

「あなたの仰る通りです、セレン・ウォン。わたしはクレセント・ラ・シャロムの、十三番目の複製人間です」

※

「クレセントが……複製人間？」
クレアは顔は首を傾げた。言葉の意味が理解できなかったのだ。
『そう。元々私を使う前から研究は行き詰っていてね。クレセントが生まれたときには、最早何の意味もないことは分かりきっていたの』
「……」
『そこに突如現れたのが、ヴァレリアの蠍。当時、まだ研究に携わっていたのは、僅か数人。その中にはシャロム夫妻も含まれていたけど、彼らは場所を提供しているというだけで、実験には非協力的だった。そしてヴァレリアは研究者たちにある技術を提供したわ』
「それが……その複製人間なのですか？」
『そう。複製人間っていうのは姿形が同じな固体。まぁ、双子みたいなものね。ただし、人工的に生み出された生命体だけど』

人工的に生み出された生命体。クレアは必死で理解しようと頭を働かせるが、やはり常識を超えた技術。

そういった分野にはまるで知識のない素人には、到底理解できる問題ではなかった。

だからこそ、レイナも全てを伝えようとは思っていない。彼女自身、理解しきれていないのだから。

『そんなに難しく考えないで。簡単に言えば、一人の人間の体組織の一部を取って、それを人工的に女性に埋め込む。あとは普通に妊娠出産。そうすると、その組織を取った人と瓜二つの人が生まれる。私もよくは分からないの。研究者たちが話しているのを聞いていたくらいだから』

「――つまりは普通の人と変わらないのでは？」

レイナは一瞬目を丸くし、すぐに穏やかな笑みを浮かべた。

『貴女のような人ばかりなら……あの子も苦しまないですんだのかもしれないわ』

「はぁ」

『いいこと、クレアちゃん。例えば貴女の大切な人が亡くなってしまったとするわね。そしたら、貴女はどうする？』

「どうって……悲しみます。それから――」

クレアが途中で口を噤む。レイナの言わんとしていることが理解できたからだ。

「その人の代わりとして……複製人間が作られる。そういうことですか」

そう言うクレアの肩は、震えていた。レイナは悲しそうに笑った。

『本当に、貴女は賢い子ね。それに、人の痛みを理解出来る子だわ。アドレー殿……直接お会いすることは出来なかったけれど、きっと素敵な方なのでしょうね。貴女のお母様も』

「え、ええ……人道とか仁義にかけては、人一倍……強くて」

尻すぼみになっていく言葉に、クレアは情けないと自分を責めた。頭の端のちらつく両親の笑い声に、はっきりと言い切ることが出来なかったのだ。

大きく溜息を吐き、頭をぶんぶんと振る。

「すみません。お話の続きを」

『ええ。その技術を知った研究者たちは沸き立ったわ。何せ全く同じ人間が作れる。つまり施力の高い者の複製を大量に作り出せば、それだけで最強の軍隊が完成する』

「シーハーツ最大の欠点である、施術士の少なさ……これも解決します」

『そう。そして、最初の実験体に選ばれたのが、王家の血筋を引き、高い施力を持った――クレセント』

クレアは首を捻った。額に手を当て、以前自らが作成した血統限界値の資料を思い出す。

「でも、クレセントの血統限界値は確か十六％じゃ……」

『生まれた当初、あの子の血統限界値は六十九％だったわ』

「ろ、ろくじゅ……」

クレアは思わず仰け反りそうになった。王家の血筋を引く者なら決して有り得ない数字ではないが、それでも驚くには十分な数字である。

現女王であり、アペリスの聖女でもあるロメリアですら、血統限界値は五十六％。

近年六十％を超えた施術士はお目にかかれて居ない。王家や貴族の中では。

『勿論、実際には存在しないはずの子、公にはされていないわ』

「確かに……王家の血を引く者なら有り得ない数字ではありません。ですが……」

『過去のデータから見れば、シーハーツ人とアーリグリフ人との混血は著しく施力が下がる傾向にある。ヴァンやアルベルがいい例ね。貴女が言いたいのはそれ？』

クレアは頷いた。そして、次にレイナの口から出るであろうことも予想がついた。

『血統限界値がある程度成長した後に後天的に下がる現象があるそうよ。最も、シーハーツじゃ全くと言っていいほど知られてないけど』

「ええ、知っています。以前クレセントが偽者の疑いをかけられた時、とある女性が調べました」

言うまでもない。マリアのことである。レイナは感心したように水の中で手を叩いた。

『へぇ。そんな事考え付く子がいたのね』

「クレセントの事を、とても大切思っていました」

カプセルの中のレイナは唖然とし、それから嬉しそうに笑った。

『そう』

クレアはその穏やかな笑みを見つめながら、頭の隅では着々と整理がついていた。

今、全てのピースは揃い、パズルは完成したのだ。

クレセントの血統限界値が下がった理由。それはやはりマリアの予測通りだった。

そして、ヴァンを尾行する直前にセレンから伝えられたクレセントの空白の四年と急変の理由。やはり入れ替わりは行われていた。しかし、それはグリーテンではなく、クレセントが師団入りする前の空白の四年。

クレセントの入れ替わり、血統限界値の相違。どちらかが間違い、どちらかが正しいと思い込んでいたのが失敗だった。

どっちも、正しかった。

そして、シャロム夫妻が殺害された理由も合点がいった。研究の中枢をなしていたシャロム家。

クレセントとヴァンにとっては、さぞや恨むべき相手だったことだろう。

そして……。

「クレセントやヴァンがグリーテンに協力する理由は……あなたの存在ですか？」

そうだとしたら、納得がいく。母を人質に取られ、仕方なしに協力している。

これは半ば確認のような質問。クレアの予想した答えは勿論、肯定。――そのはずだった。

『違うわ』

クレアは二の句が告げなかった。まさか違うと言われるとは思っ

ても見なかったからだ。
　困惑するクレアに、レイナは凛然とした口調で言った。
『ヴァンはおそらくそうでしょうね。でも、クレセントはきっと違うわ』
「それは……どういうことですか？」
　クレアがやっと搾り出した声で言うと、レイナは後ろを向いた。つられる様に、クレアもそちらに目を向ける。
『あれ、見えるかしら？』
「な――ッ」
　暗闇の中、ぼんやりと見えたもの。クレアは思わず駆け出していた。
“それ”の傍により、呆然と見つめる。
「これは！」
『ヴァンもここまでは知らないわ。教えてあげたかったけど、私はヴァンと話をしたことすらないのよ。そればかりか、クレセントとも殆ど』
「どういうこと、ですか？」
『ヴァンには一度だけ会ったことがある。ヴァレリアが私を生きていることを確認させるためにね。でも、会話は許されなかった。本物のクレセントは四歳くらいまでは一緒に居られらのだけど、それからすぐにあの子はシャロムに引き取られ、私はこの中へ入れられたわ』
「なぜ、このような場所に？」
　クレアはゆっくりと“それ”から目を離すと、レイナの元へと戻

る。レイナは内側から無機質なカプセルを撫でる。

『貴女は知らないと思うけど、これ生命維持装置って言ってね。無理な研究で既にぼろぼろだった私は、これに入ることで生き永らえた。水の中でもちゃんと息できるし、何も食べなくても平気』

「えっと……」

『分からないわよね。私も驚いたもの。でも、受け入れるしかなかった。この冷たい容器の中に入れられ、暗いシャロムの地下に閉じ込められても、私は生き続けなきゃならなかった』

クレアの脳裏に、シャロム邸の地下空間にあったカプセルが過ぎった。

レイナが静かに瞳を閉じる。

『クレセントが、ヴァンが、アルベルが生きていたから。グラオも、きっと私には生きろと言うと思ったから』

「……」

『シャロムに引き取られてから、“クレセント”とは一切会わなかったわ。きっと、私は死んだことにされていたのでしょうね。幼かったもの、素直に受け入れたと思うわ』

うっすらと開く瞳。

『それからあの暗い世界で、私は生き続けた。いつか、成長したあの子たちに会える気がしたから』

真紅が滲んで見えるのは、彼女が水の中にいるからだろうか。

そう思ったクレアはすぐに気付いた。滲んでいたのは、自分の視界ほうだと。

『そして年月が過ぎて、私の元に訪れたのはクレセントだった』

言うまでもなく、クローンクレセントのほうである。

『彼女は言ったわ。“クレセント”は死んだ、と。研究の無理が祟ったのかしらね。十四歳だったらしいわ』

「そんな……」

『けど、ヴァレリアはこの事実を隠蔽した。新たなクレセントを送り込むことで』

「それが――今私達の前に居るクレセントなのですね」

『ええ。確か“クレセント”が四歳の時に生まれたと聞いたから、今年で二十歳のはずよ』

道理で、年齢の割りに幼い外見だ、とクレアは思った。――それでもまだ幼すぎるが。

『クレセントは苦しんだでしょうね。何せ、居場所は“クレセント”のもので、彼女のものではなかった。――悲しい存在よ、複製人間というのは』

レイナは後ろを振り向く。

『そして、そんな彼女だからこそ、あれを憎み、それでも救おうとするのでしょうね。――たとえ救う道が、苦しみからの解放しかないのだと知っていても』

「……クレセントは……こんなものを一人で背負ってきたというのですか」

クレアの瞳から、一筋の涙が落ちる。胸が悲鳴をあげるほど痛かった。

『そう。ヴァンもクレセントが複製人間ということは知らない。私は彼女と話をすることは許されなかった。クレセントは……あの子はこの世に生を受けて二十年間、ずっと一人だったのよ』

「……そんな、ことって……」

『その上、あの子は“クレセント”が生きていた頃、ずっとグリーテン本国でヴァレリアによる英才教育を受けさせられてきたわ。愛情など一切ない。見知らぬ土地で、一人傷ついてきた。それが、あの子から感情を奪うきっかけとなったのよ』

レイナの表情は、今にも泣きそうだった。クレアは顔を手で覆った。

『“クレセント”が死んだとき、ヴァレリアはクレセントを替え玉にすることを決めたわ』

「じゃあ、クレセントが人前に姿を現さなかった四年は……」

『“クレセント”という人格を植えつけられていた期間、でしょうね。ただ、感情の欠落だけは直せなかったみたいだけれど』

そんなの当たり前のことだけど、とレイナは吐き捨てる。

クレアも同意した。感情を奪った者が、再び感情を与えることなど出来はしないのだ。

『そして、四年の月日を経て再びクレセント・ラ・シャロムとして完成したあの子は、シーハーツ六師団へ送り込まれた。軍の動向を探るためにね』

「クレセントが特科に入りながら〈風〉を希望したのは、いざとなればグリーテンに入り込み、ヴァレリアと接触するためですか」

入団試験の際、クレセントがその期の試験生の中でトップの成績

を取りエリートコースである特科へ入りながら、各師団への入団試験で〈光〉や〈闇〉を選ばずに〈風〉を選んだのは有名な話だった。

『そのようね。一時起きたグリーテンの異常なまでの鎖国は、クレセントを戦争で死なせない為だったようだし。そんなこと、〈風〉に入っていなければ不可能だったでしょうから』

レイナは目を閉じ、水の中に力なく体を預けた。身長を軽く越す長い白銀の髪が、水の中で踊っていた。

クレアは瞳に浮かんだ涙を拭った。

そして、胸に手を当てた。自分は、何をすべきなのだろう、と。

クレセントを逃がしたのはヴァンだ。

ヴァンは、何を思ったのだろうか。――死んだと知らされていた母と妹が生きていたと知った時。

クレセントは、何を思っているのだろうか。――一つの命として生まれたのに、彼女に与えられた居場所はなかった。

母と兄を持ちながら、それを呼ぶことは許されない。“クレセント”の影に囚われ、どれほど苦しんだのか。

誰も、ヴァンやクレセントを責めることなど出来はしない。少なくともクレアには、彼らを咎める言葉などありはしなかった。

暫くの沈黙を破ったのは、レイナの驚くほど低い声だった。

『――と、こう言えば満足なのかしら？　ヴァレリア？』

「え？」

クレアは思わず顔を上に向ける。レイナの顔が真っ直ぐに上を向いていたからだ。

暗闇の中、目を凝らせば見えてくる。小さな黒い塊。蜘蛛のような外見をしたそれはまるで生き物のように蠢き、光る両の目でクレアとレイナを映した。

『全く、悪趣味よね。この子が脱走したの知っててわざわざ真実を知らせる時間を作るなんて』

『……そう言わないで頂たい。そちらのお嬢さんにとっては良い勉強となったでしょう』

何処からともなく響く、人の声。おそらくヴァレリアの蠍だろう。つまりはあの蜘蛛は機工兵。ずっと見張られていたのだ。

『そうね。でも、これからが本番よ。私はまだこの子に真実を話していないんだから』

『……真実、とは？』

ヴァレリアの声から冗談が消える。

レイナはくるりとクレアに向き直ると、

『……』

「その言葉……！」

『ふふ、やっぱり頭は良い子みたいね。クレアちゃん、心して聞いて。今までの話はクレセントとヴァレリアの話を総合的に纏めたもの。でも、真実は少し違うのよ』

『何を言っている！？』

ヴァレリアの声が焦りを含む。レイナの離した言語はヴァレリアには通じていないのだろう。

それも無理はない。とうの昔に滅んだ、古代シーフォート言語なのだから。

その言語は施術を行使する際の施紋にも深く関係してくるので、クレアも多少なりと理解している。それが、いま幸いした。

『……』

「……？」

『……』

「！！」

レイナが打ち明けた真実。クレアの目が大きく見開かれ、褐色の瞳が悲しみに歪んだ。

『ち――クレア嬢、お遊びはここまでだ。貴女には一度部屋にお戻り願おう』

ヴァレリアの余裕のない声が響いたと同時に、部屋の扉が粉々に砕けた。

そこから顔を出すのは、人型の機工兵。手には鈍器や火器を持ち、出口を塞ぐように後から数体の機工兵が現れる。

『残念ね、ヴァレリア。お遊び気分でクレアちゃんをこの部屋に招いた貴方の失態よ』

『黙れ。死に底ないが』

『クレアちゃん』

「ええ。必ず伝えます。――そして、あなたも必ず助けに来ます」

最後にレイナに深く頭を下げると、クレアは部屋の壁に立て掛けてあった一枚の絵を取り払った。

「さようなら、ヴァレリアの蠍卿。また、近いうちに会いましょう」

『なに！？』

そこから現れたのは、ぽっかりと空いた黒い穴。秘密の抜け道だった。

クレアは最後に一度だけレイナを振り返り、穴へ飛び込む。滑り台のようなそれは、ものの数秒でクレアを洋館の外へと送り出した。

「……良かった。思ってたより少ないわ」

洋館の外には予想通り機工兵は居たが、犬型機工兵が四体と、予想よりも遥かに少ない数だった。まさか抜け出されるとは思っていなかったのだろう。完全なヴァレリアの失態である。

クレアは腰に差した刀を抜くと、かたまっている三体の機工兵に向けて雷撃を放った。

二体が完全にショートし、一体の足がもげる。すかさず残りの一体にもダガーを投げつけると、クレアは走り出した。

肩越しに洋館を見る。懐かしい風景。

それは、小さな頃セレンとよく遊んだ秘密の洋館だった。

※

「クレセント、どうして君はグリーテンに従うんだ！　ヴァンがどんな想いで君を助けようとしていたか、君が分からないはずがないだろう！？」

フェイトの叫びが響く。

クレセントは、刻まれた刺青を強く握り、苦しそうに微笑んだ。

「……」

細い、弱い声だった。きっとその場の誰も聞こえては居ない。その苦しげな表情も。――一番近くに居たフェイト以外は。

「クレセン、ト……」

ヴァンがクレセントを見上げる。苦痛に歪むヴァンの顔。クレセントはすぐに視線を逸らした。

そして、また冷淡な表情を顔に貼り付け、また一歩下がる。

「ヴァン……色々と役に立ってくれました。これでわたしの目的を果たせそうです」

「あんた、自分の目的の為にヴァンを利用したって言うの!?　あんたを必死で助けようとしたヴァンを!」

「その通りです。ヴァンはただの駒。わたしたちの計画の為に利用していたに過ぎません。ですが、可哀想な事はしました。本物のクレセントは――とうの昔に死んでいるというのに」

その一言に、ルージュの怒りが頂点に達する。激昂を露にしてダガーを構え、そのまま斬りかかろうとする。

が、

「セレン!　止めるんじゃないわよ!　こいつだけは許せない!　あいつは……ヴァンはクレアを裏切ってまで!」

セレンが、静かにルージュのダガーを奪い上げた。

ルージュは怒っていて気付かないが、アルベルは眉間に皺を寄せてその様子を凝視していた。

怒りに身を任せたルージュはさぞ力を篭めてダガーを握っていたことだろう。それをセレンはあっさりと奪い取ったのだ。

セレンはルージュを目で諭すと、ぽんと肩を押した。ルージュはそのままアルベルへと倒れこむ。無造作にそれを受け止めるアルベルがセレンを訝しげに見つめた。

「おい」

「抑えててもらえる？」

「セレン！　なんのつもりよ！」

ルージュは暴れる。その頭には、クレセントに対する憎しみしかないだろう。

セレンが、ルージュに振り向く。

「うるさいよ、ルージュ。怒りで我を見失うなんて、馬鹿のすることだ」

「……っ」

紫の瞳に、冷酷な蒼い光が宿った。ルージュも、アルベルですら言葉を失った。

セレンがクレセントの方を向くと、クレセントは頭を振った。

「あのままかかってきて頂ければ、脱出するのは容易だったのですが」

おそらく怒りで剣の鈍ったルージュを人質に取り、脱出する算段だったのだろう。セレンは軽い笑みを浮かべた。

「残念でした。さ、大人しく投降する？　それとも――」

その言葉が終わる前に、クレセントはセフィラを手に取った。セレンは苦笑いを浮かべて肩を竦めた。

「それが答え、ね。でも」

フェイトがクレセントの前に立ちはだかる。
セレンの言葉になんとか落ち着きを取り戻したルージュ、そしてアルベルも各々の武器を構えた。
両の手を広げて、セレンは言う。

「この状況……まさか君一人で突破できるなんて思ってないよね？」
「はい。わたし一人では無理そうです」

言って、クレセントはおもむろにダガーを四方に投げつける。

「気をつけろ！　施術がくる！」

予想通り、四方から風の刃がフェイト達に降りそそいだ。
フェイトは咄嗟にセレンとヴァンを抱き上げ、風の刃を避ける。
だが、それが致命的だった。
その隙にクレセントはフェイトの横をすり抜け、セフィラの安置所から飛び出した。そして、そのまま距離を取ろうと走り出すが、

「クレセント！」

息を切らせたネイビスとアゼルが、クレセントの前に立っていた。
その後ろには、ルージュが引き連れてきた十数人の師団兵。
ネイビスはクレセントとその手の中にあるセフィラを交互に見つめ、表情を曇らせた。

「クレセント……おまえ、どうして」

クレセントは硬直するネイビスに袖の中に仕込んだ小刀を投げつけようと手を振り上げるが、

「ぐっ！」

胸に激しい痛みを感じ、その場に倒れこんだ。

「クレセント！」

「ネイビス！」

アゼルの静止の声もきかず、ネイビスはクレセントに駆け寄った。心臓を押さえて苦悶するクレセントの体を抱き起こそうとするが、

「！！」

長い袖から手の甲を這う様にして飛び出した短刀が、ネイビスの眼前に突きつけらた。息を乱したクレセントと、ネイビスの目が合う。

クレセントはどうすることも出来ずに困惑するネイビスを突き飛ばし、セフィラを拾った。

肩越しに後ろを見れば、フェイト達が武器を構えていた。

「観念するんだ」

「クレセントさん」

フェイトが近づく。アゼルも警戒しつつ足を進めた。

クレセントは両方から逃れるように横の壁へと下がり、背をつけた。

「クレセント、出来るなら君を傷つけたくはない。だから」

大人しくしてくれ。
そうフェイトが言おうとした正にそのときだった。

「ぐあああああっ！」

フェイトの左手、セフィラ安置所とは反対の位置から誰かの悲鳴が聞こえた。
なにが起こったのか、確かめるまでもない。
漆黒の機体を持つ巨大な狼が、その口に一人の師団兵を咥えていたのである。数本の牙らしきものが刺さっているのだろうか、紅い鮮血がボタボタと大理石を汚した。

「き、機工兵！？」
「まさか――こんなにも堂々と……」

セレンが信じられないと頭を振った。
フェイトは初めて見るその禍々しさに、思わず後ずさる。

「た、助けてくれ！」

鋭い牙に挟まれた師団兵が叫ぶ。だが、助けにいこうとした兵士はいとも簡単にその大きな前足で薙ぎ払われてしまった。
フェイトが、ネイビスが巨大な機工兵に斬りかかろうとするが、

「――やめて」

澄んだ声が響き、フェイトとネイビスはその足を止めた。
振り返れば、いまだ苦しそうに胸を押さえるクレセントが、ふらつく足で機工兵を見ている。

目元は白銀の髪に隠され、見えない。

「離して」

その一言で、機工兵は口を下に向けた。力なく師団兵の身体が床に落下する。数人の施術士が駆け寄り、治癒術を唱えた。

誰もがその光景を信じられない思いで見つめていた。

だからこそ、判断が遅れたのだろう。

クレセントは高く跳躍し、機工兵の背に飛び乗った。無論、片手にはセフィラを抱えて。

「しまった！」

「申し訳ありません……わたしには、為さねばならないことがあります」

機工兵が駆ける。ネイビスが追おうとするが、とても追いつける速さではなかった。

「くそっ！」

ネイビスが力任せに大理石を蹴る。その肩をアゼルが掴んだ。

「あれは人の足では追けつけない。一時撤退するんだ。怪我人を病院へ運ばないと……」

「ああ。分かってるよ……」

無事な者が怪我人に肩を貸し、ゆっくりと歩いていく。ヴァンはネイビスが担ぎ、急ぎ足に走り去っていった。

一人、また一人と去っていく中で、フェイトはなかなか動けずに居た。ただただ、クレセントの言葉と時折見せた苦しげな表情が、

頭の中を駆け巡る。

「どうしたの？」

セレンが不思議そうにフェイトを見た。

フェイトはセレンを見ることはせず、開けっ放しの扉の向こうに目をやった。

「フェイト様は、残酷です」

「は？」

「あの時、僕がクレセントを問い詰めた時……確かにそう言ったんだ」

一瞬垣間見せた、クレセントの寂しげな表情。

「セレン」

「なに？」

「クレセントは、本当はヴァンを助けたんじゃないのかな」

ずっと引っかかっていたのだ。あの口振り。クレセントらしくもなかった。

フェイトはクレセントが投げ捨てた腕輪を拾い、強く握り締めた。

「まるで、ヴァンは騙されていただけだから悪くない。――そう言ってるみたいに聞こえたんだ」

「……」

「僕の思い過ごしかな……」

「……信じるのは、自由だよ」

「うん、ありがとう」

開け放たれた扉の向こう、主無き台座がぽつんと佇んでいた。

1―24　光が照らす道

深い、深い海の中から、徐々に水面へとあがっていくような浮遊感。

心地よくて、でも少し寂しい。

薄っすらと目を開くと、翡翠の瞳が覗き込んでいるように見えた。

触れようとして手を伸ばすが、それは虚しく空を切るだけだった。

ぼんやりとする頭は放っておいて、目だけを左右に動かす。清潔感のある白い部屋。開かれた窓からは、暖かな光と穏やかな風が吹き込む。

ここは病院。――その事を理解するまでに、随分と時間がかかった。

そして、理解すると同時に、無意識に腹部を触っていた。包帯が巻かれているようだったが、痛みは僅かに走るのみだった。

上体を起こし、何気なく手を見つめる。しっかりと握られていた。開いてみると、一本の白銀の髪がきらきらと輝いていた。不意に涙が出そうになる。

手の上で光るそれが、酷く物悲しく思えた。

どうして彼女はここにいない？

どうしてこの手は彼女を掴んでいない？

「――クレセント」

顔を手で押さえてそう呟いた時、病室の扉が開かれた。そこから顔を出したのは、可愛らしい顔立ちをした少女。

見舞いの客かと思ったが、少女が着ていたものは、医師の服装だった。

少女は目を覚ました患者に小さく頭を下げ、ベットに歩み寄った。

「良かった。目を覚まされたのですね――シレーネ様」

※

カナンから戻ったフェイトたちは、怪我人をネイビスとアゼルに任せ、フェイト、ルージュ、セレン、アルベルの四人で女王へ報告を行った。

セフィラが奪われたことにラッセルは激怒していたが、セレンが機工兵が現れたことと話すと、急に静かになって事の説明を要求してきた。

フェイトは長い話になるので、話すなら各師団長を集めて一度に話したいと申し出た後、ラッセルの口から出た言葉に、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

「――クレアが行方不明ってどういうことですか!?」

クレアが行方不明になった。確かにそうラッセルは言った。

驚いたのはフェイトだけではなく、セレンも、ルージュも例外ではなかった。ただ一人、アルベルを除いては。

「クレアから願い出があってな。ヴァンを独自調査させて欲しいと。あやつが意味もなく言うとは思えん。だから私は許可を下した」

「しかし……ヴァンは」

「そうだ。何故かまえたちと共に帰ってきた」

「――グリーテンの手に、落ちたのでしょう」

跪いた状態で、セレンが苦々しげに言う。

「ヴァンの尾行をしていたクレアは、おそらくクレセントたちの取引相手であるグリーテン人に捕らえられた。シレーネ・リシャスを襲ったのも同一人物かと思われます。そして、この二人が敗れたとなると相手は相当の実力者」

セレンが立ち上がる。

ラッセルと女王と交互に見つめ、再び口を開いた。

「加えて、我々の前に現れた見たこともない機工兵。それから推察するに、相手はグリーテン王国のドールマスターである可能性が高いと思われます」

「グリーテンが再び我等に害をなそうと言うのですか」

「いえ。それにしてはやり口が回りくど過ぎます。国単位で動いているとは考えにくい」

「では、そのドールマスターの独断行動だと言うのか？」

「あくまでその可能性が高いというだけです」

言って、セレンはラッセルと女王を交互に見つめた。

「セフィラを奪ったことから考えられる可能性は二つ。一つはシーハーツへの進攻の足がかりとすること。セフィラさえ奪ってしまえば、彼らに怖いものなどないでしょうから」

知識の源泉のような脳は、休むことなくありとあらゆる可能性を湧き出す。この底を知らぬ頭脳と、絶対の自信こそが、神童と謳われる所以なのである。

「そしてもう一つ。これはドールマスターが独断で行動していると仮定した場合ですが、おそらくシーハーツに進攻する気はないかと思われます」

「なぜだ？」
「もし私が独断で動いていて、シーハーツを乗っ取るつもりなら、すぐに機工兵を送り込むなりしています。相手に警戒する時間を与えれば与えるほど鎮圧は難しくなる。自らの兵力が少ないなら尚のこと」
「そうか。――フェイト」
「は、はい」

フェイトの声は震えている。顔は真っ青に青褪め、何時倒れいても不思議ではないほどだった。
それでもフェイトが駆け出さないのは、フェイトの後ろに立つマリアがしっかりとその腕を掴んでいるからである。

「辛いだろうが、待て。クレアとて軍人。場数から言えばおまえより上だ。何、奴は何度も危険に晒されながら生還しているのだ」
「……はい」
「クレアを信じてあげて下さい」

女王とラッセルの言葉が身に染みる。
フェイトは泣きそうになるのを堪え、深々と頭を下げるのだった。

※

白い吐息が真横に靡き、冷たい空気に消えていく。
時には地面を、時には木の上を走り抜け、必死に歯を食い縛り、クレアは出来うる限りの速さで走った。
もう足の感覚は無い。覚えのない痺れが、三十分ほど前からクレ

アを襲っていた。
体が上手く動かない。それればかりか、僅かに心臓が痛んだ。
クレアは目だけを後ろに向け、顔を顰めた。距離が近くなっている。
十数メートル後ろには、人型の機工兵が数体、列をなして追いかけてきていた。
生い茂る草や蔦が邪魔で思うように速度が出せない。額から零れた汗が顎を伝い、風に乗って後ろへ飛んだ。
機工兵の奏でる無機質な金属音が、着実に近づいてくるのが分かった。もうすぐ背後まできている。
それらが飛び道具をもっていなかったのが不幸中の幸いではあるが、このままでは追いつかれるのは時間の問題である。
ペターニまではまだかなりの距離がある。倒れてしまう前に、手を打っておくべきだろう。
クレアは心を落ち着かせて詠唱を開始した。
が、

「――ッ！」

先ほどまでは小さな痛みだったものが、突如大きな波のような痛みになって押し寄せた。耐え切れず、クレアはその場に方膝をつく。
早く詠唱をしなければ。
そう思ったクレアの視界には、二体の機工兵がいままさに襲いかからんとする様が映し出されていた。

クレアは死を覚悟していた。が、いつになっても体を引き裂かれる痛みを感じない。
麻痺が全身に回ったのか、そう思い、クレアがゆっくりと目を開

くと、そこには先程まで奇妙な音を立てて迫ってきていた機工兵が、無残な形で横たわっていた。
思ったより機工兵の数は多かったらしい。向こう数メートル、機工兵の残骸で埋め尽くされていた。
そんな黒い塊の中に、一つだけ立っているものがあった。

「……っ」

見間違うはずもない。
小さな頃から、何時だって見てきた。その大きな背中をずっと追いかけて、目標にしてきたのだ。

「お父、様……っ」
「クレア！　無事か！？」

息を切らせたアドレーが、不安を隠せない様子でクレアに駆け寄る。
片膝をついたまま固まるクレアを抱き起こす。クレアもその太い首に抱きついた。

「――っ――！」

涙が零れる。
これまで必死に殺してきた恐怖が、今になって押し寄せてきた。
クレアはアドレーの首にしがみついたまま、声を押し殺して泣いた。アドレーはそんなクレアの頭を撫でると、柔らかい口調で言う。

「泣くでない。泣くでない。無事でなによりじゃ」

アドレーの優しさが、クレアを包んだ。

クレアは小さく頷いて、また涙を流すのだった。

※

重苦しい空気が漂うシランド城の会議室でには、女王とラッセル、クレアとシレーネを除いた各師団長とアルベル。そして五柱――実際には四人だが――の面々が一様に険しい表情を浮かべて椅子に座っていた。

謁見の間で報告を終えたあと、シランドに集結したメンバーにフェイトは事のあらましを余すところ無く説明した。

ヴァンの過去。ヴァンのそしてクレセントの目的。クレセントの秘密。

「これが、ヴァンが国を変えようとした理由。クレセントは、どうやら違う理由で動いているようです」

「まさか……クレセントが」

「……複製人間。空恐ろしい技術ですね」

ネイビスとアゼルが揃って口を開く。

ルージュが机を強く叩く。振動が、広がった。

「クレセントはヴァンを利用していたのよ。妹に成りすまして……良いように操って！」

「……本当に、そうでしょうか」

「ソフィアちゃん？」

やや控えめにそう言ったソフィアの目は真剣で、ルージュは目を見張った。

ソフィアは膝の上で手を握り、真っ直ぐに顔を上げた。

「私は……クレセントさんのことは知りません。お話したことも無いです。でも……」

ソフィアは集まった面々を見渡しながら、はっきりとした声音で言った。

「本当に悪い人が……機工兵に殺されそうになった人を庇いますか？　部下が死んだのを自分のせいだと悔いて涙を流しますか？」

「それは……」

「僕もそう思うよ。クレセントがヴァンを刺した理由は、きっとヴァンを庇う為だったんじゃないかな」

フェイトがソフィアの肩に手を置く。

「医師の話だと、ヴァンが刺された場所、急所から大きく外れていたんだろう？　本当に駒だと考えていたのなら、急所を狙う。ヴァンがなにをしゃべらないとも限らないんだから」

沈黙が広がる。それを破ったのは、女王だった。

「私は……無知だったのですね。この国を統べる者でありながら、水面下で蠢く闇に気付くことができなかった」

ラッセルが顔を歪め、女王に深く頭を下げる。

「報告を怠ったこと……真に申し訳ありませぬ、陛下」

「いえ、そなたもクレアも皆を案じての事。それを責めることなど、一体誰ができましょうか」

顔を上げたラッセルはもう一度深く、深く頭を下げた。
女王はふわりと微笑むと、マリアを見つめる。

「マリア殿は、この事実を独自で調べたそうですが、どのように？」
「シャロム邸の地下空間、旧型の機工兵の内部にとある実験資料が隠されていました」
「機工兵の内部？」

疑問の声をあげたのはネルだった。小首を傾げてマリアを見つめる。マリアは頷いて一つの紙束を女王の前に差し出した。

「おそらく研究者の一人が機密裏に作ったのでしょう。内容は複製人間の実験データ。内容にはこう書かれていました。複製人間――クローン体とさせて頂きますが、クローン体は長くても二十歳前後までしか上手く機能できず、その後は施力の低下と共に臓器が衰えてくるそうです。クレセントが時々訴える痛み。それは必ずしも施術を使った後に現れたことからして、彼女の血統値限界の低下はその所為かと思われます」
「……シャロム家の造反疑惑は、これを隠す囮だった、ということでしょうか」
「ええ。木を隠すなら森の中。一つ別の疑いをかけさせておけば、他に目は行きません」
「証拠を探そうとしてもただの噂。武器の密輸、転売の調査では何も出てくるはずはありませんね」

女王は資料を机の上に置き、信頼の置ける家臣達を見る。

「私たちの目的がはっきりしました。第三王女の保護、グリーテンのドールマスター――並びにクレセント・ラ・シャロムの討伐」

「陛下」

ネイビスが珍しく畏まった表情で背筋を伸ばす。

所在なさげに左右する目は、不安で一杯だった。数秒迷ったあと、ネイビスは覚悟を決めたように言った。

「クレセントは……クレセント・ラ・シャロムは、どうなるのでしょうか？」

「クレセントの罪は決して軽くない」

答えたのはラッセルだ。

「国を売り、セフィラにまで手を出した。死罪は免れんだろう」

「そんな……」

ネイビスの血の気が一瞬で引く。

「――ですが」

凛とした、女王の美声が響く。

「罪を犯したのは、シーハーツも同じこと。彼女、そしてヴァンや第三王女に対する行為……決して許されるものではありません」

「陛下……」

「この任を無事そなたらが成し遂げてくれた暁は、私はこの事実を国民に発表しようと思っています」

その場に居る全員が、驚きのあまり同時に席を立った。口々に何かを言っては女王の微笑みの前に消えていく。

ただ一人、席についたままのセレンは小さく微笑んで窓の外を見

ていた。

「へ、陛下！　国民が暴動を起こすかもしれませぬぞ！？」

ラッセルが焦りを隠そうともせずに、女王に詰め寄る。

女王はそれを首を振って返し、ラッセルを含む全員を見渡した。

「心配要りません。私には信頼できる者達が、こんなにもいるのですから」

「……」

「それに、この事実を隠してどうしますか？　隠したままで、私たちはクレセントやヴァン、第三王女に何と詫びれば良いのですか？」

「仰せのままに。陛下」

困惑する一同の中、真っ先に跪いたのはマリアだった。

そしてそれに触発されるように、次々と膝を着いていく。

「礼を言います」

女王は手で顔をあげるように指示すると、顔を少し俯かせた。

「……問題は場所ですね。行き先が分からなければ、どうしようもありません」

「それならご心配には及びませんよ、陛下」

セレンが微笑む。会議室の扉に視線を向け、そこを指差す。

「もうすぐ現れます。私たちの暗く翳った道を照らしてくれる光が」

そうセレンが言ったのと、正に同時だった。会議室の扉が勢いよ

く開かれ、巨漢に支えられた女性が姿を現した。
フェイトはその姿を見るなりすぐに駆け出した。巨漢から手を離した女性を力一杯抱きしめ、その銀の髪を掻き抱く。
陛下の前だとか、会議中だとか、そんなものは頭から消え去っていた。――ただただ、腕の中の女性が愛しくて。
もう何年も会っていないような気持ちで、いっそう強く女性を抱きしめた。
女性も微笑んでフェイトの背中に手を伸ばし、透き通るような声で言った。

「ただいま、フェイト」
「お帰り……クレア」

一番星が遠くの空にふわりと輝き、一対の男女の再会を優しく祝福した。

※

「クレア……それは、本当なのか？」

クレアから話を聞いたフェイト達は、暫く誰一人としてまともに喋ることは出来なかった。
ヴァンの尾行中にヴァレリアに会い、捕まって、クレセント達の母親であるレイナと話をしたところまではよかった。
だが、その後聞いた、クレセントが戦う理由。――そして、新たに明かされた真実。
それは、全てを覆すものだった。
フェイトの驚きに染まった疑問に、クレアは頷く。

「証拠はないわ。でも、一人の母親がそう言っている。私は信じる」
「……じゃあ、クレセントは」
「ずっと、隠し通してきたのよ。ヴァレリアもおそらくは気付いてないわ」

しん、と会議室が静まり返る。
次々と明かされていく事実に、頭がついていけていないのだ。今まで余裕の表情で構えていたセレンすらも、クレアが齎した情報に驚きを隠せていないようだった。

「ですが、当初と目的は変わりません」
「その通りだ。この任はマリア。おまえが指揮しろ」
「はい。では、この場で私の案を提案させて宜しいでしょうか？」

マリアが手を胸に当てて言うと、ラッセルは頷いた。

「話せ」
「まず、作戦実行は明日。グリーテン本国にセフィラを持ち込まれては手の出しようがありません」
「ええ。その通りです」

女王も同意の意を示す。

「そして、実行メンバーは少数人数。クレアの情報で、ヴァレリアはそれほど戦力を有していないことが分かりました。これはつまり、ヴァレリアが単独で動いているというセレンの予想を裏付ける要素になります」
「つまりやっかいな相手はヴァレリアの蠍、その機工兵。そして姫様くらいだね」

セレンが机に肘をついて頷く。
ルージュが小首を傾げた。
「気になってたんだけどなんでクレセントが姫様なのよ。あの子もうそんな年じゃないでしょ」
「いや、見た目高貴なお姫様っぽいでしょ？　それに少なくともルージュやマリアに比べると格段に若いと」
「死ぬ？」
「今、ここで」
「やだな。冗談だって冗談。ほらほら、そんなに怒ると皺増えるよ」
凶器のごとく突きつけられるマリアとルージュの視線を軽い笑顔で交わし、セレンは手を振る。
マリアは大きく溜息を吐くと、気を取り直して続けた。
「とにかく……大人数で行っても感づかれる危険を増やすだけ。少数精鋭部隊で討伐に向かいます。そして、万が一にも備えて国内にも戦力を残す」
「陛下の御前だ。弁えろ、ルージュ。メンバーは決めているのかい？」
いまだセレンを睨みつけるルージュを叩きながら、ネルがマリアを見る。
「ええ、フェイトとクレア。そして、ヴァンにアルベル。あとは私が。――それとあと一人、大勢を相手に出来る子をお願いしたいのだけど」
最大の戦力としてフェイト。場所を特定するためにクレア。ヴァ

ンとアルベルは言わずもがなである。怪我を負ったヴァンを連れて行くのはマリアも迷ったが、きっと行くと言って聞かないだろうと思い、決断した。

残りの一人。それは万が一にも機工兵が予想を上回る数で配備されていた場合、追加の戦力が欲しいからである。

「それはセフィリアを連れて行きましょう。おそらく師団長を除けば最高の戦力です」

その言葉を聞き、マリアが「決定ね」と頷いたときだった、

「待てよ！　なんで俺が入っていないんだ！？」

ネイビスが立ち上がった。完全に頭に血が上っているらしい。誰もが気付くことに、気付いていない。

マリアは深く溜息をつくと、腕を組んでネイビスを見つめた。

「あなたはペターニ防衛部隊の隊長でしょう？　ペターニにはいまだに不穏分子が腐るほどいるのよ？　そんな中あなたが持ち場を離れてみなさい。何をしでかすか分かったものじゃないわ」

ネイビスは黙る。それが正論であることを、分かっているのだ。それと同時に理解している。優先すべきは個人の感情ではなく国だということを。

ネイビスが席に座りなおしたのを確認し、マリアはそれぞれに指示を出していく。

「ソフィアはシレーネをお願い。抜け出さないとも限らないわ。いざとなったら気絶させてでも止めなさい」

「わ、わかりました」

マリアの物言いと、あのシレーネを止められる自信がないソフィアの顔は引きつり気味だ。

「ネルはシランドを。アゼルとルージュはその補佐をお願い」
「ああ」
「任せてください」
「了解よ」
「作戦開始は明朝六時。集合場所はムーンリットよ。各々準備を怠らないで。――それじゃあ、解散」

その言葉を最後に、会議室には再び凍るような静けさが戻ってくる。
星たちは輝き、初めに輝いた星の煌きは多くの光に飲み込まれていった。

※

「マリア」

会議室を出たフェイトは、マリアの後姿へ声をかけた。振り向いたマリアは、いつもと変わらない。

「なに？」
「不安なら、弱音を吐いたっていいんだからな」

マリアが軽く目を開く。フェイトは照れ臭そうに頭を掻き、マリアの肩に手を置いた。

「姉弟……だろ？」
「……」
「僕じゃ、頼りないかもしれないけどさ」

マリアが俯く。見られたくなかった、今の顔を。
俯いたまま、マリアは軽くフェイトの胸を叩き、距離を取った。

「いいえ、あなたはもう十分立派な人よ」
「マリア」
「ありがとう、フェイト。私は大丈夫だから、あなたはクレアのところに行ってあげなさい。無事だったとはいえ、敵の手中にいたんだから」
「あ、ああ」
「じゃあ、明日。おやすみなさい、フェイト」

マリアは歩き出す。フェイトとは反対の方に。
フェイトも歩き出す。マリアとは反対の方へ。
最後に一言だけ、呟いて。

「クレセント、絶対助けような」

マリアは答えない。
フェイトは聞かない。
答えなど、分かりきっているのだから。
今はただ、信じる道を進むだけ。
きっと、光はその道を照らしてくれるはずのなのだから。

※

「ご苦労、クレセント」

ヴァレリアは手の中で光る銀色の球体を眺め、満足そうに喉を鳴らした。

書斎の窓から漏れる月明かりが、ヴァレリアの金の瞳を妖しく輝かせる。クレセントは、何も言わずに顔を伏せた。

「おそらく明朝にでも奴らはこれを取り戻しに来るだろう。私も実験体を取り戻したい。好都合だ」

セフィラをひと撫でし、クレセントを金の瞳が射抜く。その狂気に満ちた視線に思わずクレセントは一歩後ろに下がった。

ヴァレリアは椅子から立ち上がると、デスクに身を乗り出してクレセントの顎を掴み、上を向かせる。

クレセントは目を逸らそうとするが、ヴァレリアの視線がそれを許さない。

「最後の仕事だ。この館に来るものは皆殺しにしろ。私の機工兵の命令権限を与えてやる。――ただし、クレア・ラーズバードだけは生かしておけ」

「は、い……」

耐え切れなくなったクレセントは、目だけを横に逸らした。

ヴァレリアはそれを愉快そうに眺め、そのままクレセントを引き寄せる。前のめりに机の上に倒れこんだクレセントの耳元でヴァレリアはそっと囁いた。

「成功すれば、おまえは晴れて自由の身だ。あの女も解放し、あれ

らも安息の眠りにつかせてやる。勿論、この研究も終わりだ」
「……」
「裏切るなよ。その瞬間、貴様だけでなく、あれらにも死よりも辛い苦しみがあると知れ」
ヴァレリアの残酷な言葉が、月明かりと共に降り注ぐ。
それを黙って受け止めるしかないクレセントは、
「分かって……います」
静かに唇を噛み締めた。

1―25　星の歌（前編）

「私は、いつも無力よ」

マリアと別れた後、すぐに向かったクレアの自室で、フェイトは彼女の言葉に首を傾げた。

クレアの言葉の意味が理解できず、かといって下手な詮索も出来ず、ただ黙って待つしかない。顔を俯かせたクレアは、まるで懺悔を繰り返すように呟いた。

「私は何時だってなにも出来なかった。ヴァンの時もセレンの時も。――それに十一年前の……」

「十一年前？」

フェイトが聞き返したことで、クレアは慌てて口を噤んだが、やがて小さく息を吐いて肩の力を抜いた。座っていたベットに横になり、白いシーツを手で撫でる。

「……フェイトは不思議に思わなかった？　私とネルは幼馴染。私とセレンも幼馴染。……でも、ネルはセレンを知らない。ううん、ネルだけじゃないわ、ヴァンも」

「そういえば、そうだね」

「私とセレンにはね、もう一人幼馴染が居たの。私とセレンはよくその子の所に行っては遊んでいた。楽しかったわ。事情でね、堂々とは遊べなかったんだけど、それでも楽しかった。でも――」

言い差して、クレアはシーツを強く握り締める。端正な顔は歪み、そこは悲壮に彩られた。

「私は――守れなかった。その小さな幸せを。大切な友達を」
「クレア……」
「怖いの。ヴァンやセレンが……私を恨んでるんじゃないかって思えて……どうしようもなく怖いのよ」
クレアの瞳から涙が零れシーツに染みを作る。
前髪に隠れて目元は見えない。フェイトはクレアをそっと抱き起こして震える肩を抱きしめた。
「怖がることはないよ。君は彼等に恨まれるようなことはしてないじゃないか」
「恵まれてるのよ、私は。ヴァンもセレンも大切なものを失ってきている。けれど、私はなにも――」
「それで君を恨むのは筋違いだ。――君は二人がそんな人間だと思うのかい？」
クレアは暫く黙り込み、それから緩々と首を振った。きっと、抱きしめていなければ感じられないほど、小さな動き。
にっこりと笑ったフェイトは、クレアから体を離して目元を隠す前髪を払った。涙に濡れた褐色の瞳がフェイトの前に姿を見せる。
「だろう？　それでも不安なら教えてあげるよ。ヴァンが最後の最後まで迷っていたのは、君が居たからだ」
え、とクレアが小さく零す。
「家族のために全てを投げ打つ覚悟で臨んだヴァンの唯一の負い目は、君の存在だ。君を裏切ることが、ヴァは何より心苦しかったんだ」
「ヴァンが……」

フェイトは頷くと、もう一度クレアを抱きしめた。柔らかい銀髪を手で梳きながら、目を閉じる。

「それに、セレンもだ。感謝して止まない二人のうちの一人が君なんだってさ」

もう一人は言うまでもない。クレアとセレンの大切な幼馴染だろう。クレアの口振りからおそらくもう亡くなったのだ、とフェイトは考えていた。

クレアは自分は恵まれていると言った。だが、果たしてそうだろうか？

これほど悩み苦しむほどの過去を背負った女性が本当に恵まれているのだろうか？

フェイトは無意識のうちにクレアを抱きしめる手に力を込めた。

「いつも、どんなときも闇に生きる人を光の下に連れ出してくれる。――救いの光」

「救い……のひか、り？」

「セレンが君の事をそう言っていた。君に救われたって。私には眩しくて仕方ないけれど、それでも傍にいたいと願うんだ。――そうね、言ってた」

「随分と大袈裟ね」

クレアは笑っていた。

フェイトはクレアを抱く手から力を抜き、そっと囁いた。

「でも、その通りだと思う。僕も、君に救われたうちの一人だからね」

「フェイト」

二人は身を離し、それから背中を合わせてベットに座り直した。
顔は見えない。けれど、見えずともいま、彼女がどんな表情をしているかは手に取るようにわかった。きっと、とても穏やかな顔をしているはずだ。

「――それにしても、僕は敵が多いな」
「どういうこと？」
「アドレーにシャロンさん。ヴァンにネルにセレン、それに光牙の皆。一体何人に認められればいいんだろう」
「ふふ、そんなこと言ったら私だって大変よ」

フェイトは苦笑する。

「そっとしておいてって言うのは……ダメかな。やっぱり」
「ええ。覚悟を決めないと駄目ね。けれど、いまはこうしてあなたと一緒にいたい」

月が、静かに佇む。蝋燭の灯りが消えた部屋に、二人の男女の影が、黒く映し出された。

※

自室に戻ったマリアは扉を閉め、それを背にしたままずるずると座り込んだ。膝に顔を埋め、大きな溜息を吐く。
頭が混乱している。色んな事が一度に押し寄せ、上手く纏まらないのだ。
一体クレセントはいくつ隠し事をしてきたのだろうか。母を奪わ

れ、兄を裏切り、仲間を拒んだ。その先に広がるのが闇だとしても、成し遂げたいもの。

クレアの話を聞いたソフィアは一言呟いた。悲しい、と。

あの白銀の風は一体何処まで悲しみを広げるのだろうか。一体どれほど傷つけば心から笑えるのだろうか。一体誰が、クレセントを救ってやれるのだろうか。

マリアは自嘲めいた笑みを浮かべ、立ち上がった。明日は決戦だ。やるべきことは、一つ残らずやり遂げておきたい。

少しでも、ほんの少しでいいから闇を払ってくれるものが欲しかった。

そう思い、掛けてある外套へと手を伸ばしたとき、

「――紙？」

窓に貼り付けられた白い紙が目に入った。

手に取ると、どうやら手紙のようだった。さっと目を通したマリアの柳眉が曇った。

「……本当に自分勝手ね」

マリアは手紙を握り締め、外套を羽織って夜のシランドへと駆け出した。

シランドの街を抜け、イリスの野に出る。城門から少し離れたところにある石垣へ向けて、マリアはゆっくりと歩き出した。

石垣の前に立ち、輝く月を見上げる。頬に当たる冷たい風に顔を顰め、流れる髪を押さえた。昼間は陽の光に照らされている綺麗な緑も、夜の闇のなかでは暗く沈んでいる。真冬の草原。虫の音すらも聞こえなかった。

木々が夜風で揺れる音だけが、耳を打つ。

突然、突き刺すような冷たい風が吹き、マリアが身を縮ませた時

だった、

「マリア」

夜の闇に溶けてしまいそうな声が、風に乗ってマリアに届いた。

「クレセント」

マリアは答える。だが、姿は見えない。辺りを見渡すが、何もなかった。

ただ、声のみが流れる風と共に広い草原に木霊した。

「明日、来るのですね」

「ええ、首洗って待ってなさいよ。人がせっかく晴らしてあげた疑い棒に振って」

「それは――申し訳ないとは思っています。ですが、事実だったのだから仕方がありません」

「開き直ってんじゃないわよ。――それで、用件は何？」

「マリア。明日、来ないで下さい。ヴァレリアはシーハーツに攻め入る気はありません」

なるほど、とマリアは息をつく。セレンの予想は見事的中していたというわけだ。

「あなたたちにこられては……困るんです」

マリアは答えない。クレセントの声が焦りを帯びていく。

黒い雲が月を隠し、辺りが暗くなる。

「マリア……お願いです。わたしにあなたを、殺させないでくださ

い」
「話をしたいなら、姿を見せることね。常識よ」
風が吹く。黒い雲を、月から遠ざける冷たい風。
暫しの無音。再び月が姿を現したとき、
「――これで、よろしいですか？」
翼をもがれた音無き風が、マリアの前に佇んでいた。

※

シランドにある中央病院の中庭。空に浮かぶ月と同じ輝きを持つ髪が、風に揺れた。ぼんやりと佇むヴァンに、一つの影が近寄る。
「アルベルか」
「明日、行けるのか？」
照れ隠しなのか、アルベルがヴァンの顔を見ずに言うと、ヴァンは束の間目を瞬かせ、笑った。
「心配してくれるなんて珍しいじゃないか」
「違ぇよ、阿呆。役立たずを守る気はないって言ってんだ」
「平気さ。俺が行ってやらないと。あいつに、おまえは俺の妹だ、と言ってやりたいんだ。たとえ届かなくても、余計にクレセントを傷つけるかもしれなくても、俺は……それでもクレセントの兄だと思っているから」

アルベルが黙る。
ヴァンはおもむろにアルベルを見上げると、声を和らげて言った。
「アルベル。おまえはどう思うんだ？　クレセントを」
頭を乱暴に掻くアルベル。
ヴァンに視線から逃れるように背を向けたアルベルは、大きくない声で呟いた。
「――嫌いじゃねぇな。強いやつは」
「最高の言葉だ。クレセントに言ってやってくれ」
ヴァンが立ち上がると、アルベルは鼻を鳴らして歩き出した。
「ふん。どのみち奴とは一度戦ってみたかったんだ。ゆっくり戦るにはまず連れ戻す」
「クレセントは強いぞ」
アルベルは足を止める。
そして肩越しに振り返ると、
「面白ぇ」
深い紅を輝かせ、再び歩き出した。
ヴァンはアルベルが去るまでずっとその背を見つめていたが、やがて小さく微笑んで病院の中へ姿を消した。
※

「クレアは強いね」
「どして？」
白露の庭園のベンチに座るルージュは、白い手摺に腰掛けるネルの言葉に首を傾げた。
ネルは足元に咲く白い花に視線を落とすと、首を振った。
「あれほどの秘密を背負ってきたんだ。国のため、私たちのために」
「……少しくらい相談してくれても良かったのに」
ルージュが不満そうな声を出し、ベンチの上で足を抱える。ネルは今更行儀が悪いと言う気にもならず、苦笑して見ぬふりをした。
「私やあんたなら相談してただろうね。でもクレアは怖がりだから……出来なかったんだと思う」
「怖がり？　クレアが？」
ルージュが首を捻らせる。
クレアが怖がりなど、想像もつかなかった。あの容姿で男であるヴァン、男勝りなネルやルージュよりもよほど肝が座っているのだ。
――でなければ、あの若さで軍の総司令官など務まるはずもない。
いつだっていざという時助けてくれたのはクレアだった。己の危険を顧みず、どんなときも。
――ただ、それはネルに言わせれば恐怖心故だと言う。
「クレアが最も恐れているもの……なんだと思う？」
この期に及んで「両親」とか「犬」と茶化す気には、流石のルージュもなれなかった。腕を組んで頭を悩ませ、降参のポーズを取る。

ネルは手摺の向こう側へと視線をやり、静かに言った。

「失うことさ」

「失う、こと？」

「そう。自分の周りのものが欠けることを、クレアは酷く怖がるんだよ」

それは、クレアが過去多くのものを失ってきたから。

「だからクレアは自分の命を犠牲にしてでも私たちを守ろうとする」

そんな失うことを恐れるクレアが、あの戦争でどれほど苦しんだかは想像するに難くない。

図面を眺めながら、その上で消えていく命をどんな瞳で映していたのだろうか。

ネルはルージュを見ると、困ったように微笑んだ。

「なんか、情けないね。分かっているのに、何も出来ないなんてさ」

「……私さ、ときどきあんたたちの幼馴染でいいのかって思うんだ」

「なんでだい？」

「ネルとクレアは、お互いのことよく分かってる。ヴァンとクレアもそう。でも、ヴァンより前からあんたたちを知ってるはずなのに、私は――」

言って、顔を膝の間に埋めるルージュ。

ネルは苦笑して、手摺から離れた。ルージュの傍により、その頭をくしゃくしゃと撫でる。

頭の上で結った二つのおだんごが梳け、長い朱が夜に舞った。

「ね、ネル？」

「馬鹿。あんただって私たちの大切な幼馴染さ。時間なんて関係ない。ただそこに居てくれるだけでいい。そう思える存在は、そう多くはないよ」
「ううぅ……でもぉ」
ルージュはごねる。
ネルは更に困ったように笑い、ルージュの隣に腰を下ろした。

「私だって、クレアの全てが分かるわけじゃないよ」
「ネル」
その悲しそうな口調と、翳った表情に、ルージュは胸のうちが沈んでいく感覚を覚えた。ネルはそんなルージュの様子に気付いたのか、軽快に笑って見せた。

「ごめん。なんでもないよ。それより明日はなにがあるか分からない。気合入れな」
「うん、そうだね」

いまだ蟠りは残っているが、問題は明日である。
ルージュは小さな棘をそっと胸の内に隠すと、大きくネルと手を打ち鳴らせた。
何処までも響いて行きそうな乾いた音は、木々のせせらぎの中に吸い込まれていった。

※

「こんな所にいたんだ」

「アゼルか。んだよ？」

シランドの端に広がる緑豊かな場所。憩いの場として市民に人気のあるそこも、真夜中はしん、と静まり返っていた。

嵐の前の静けさ。そんな言葉がぴったりくる静寂だった。小川の水の音だけが、唯一無音を避ける音としてネイビスの鼓膜に囁く。

アゼルは小川の傍に座り込むネイビスの近くに立ち、微笑を浮かべて彼を見下ろした。

「いや、拗ねてるんじゃないかと思ってね。面白そうだから見物に」

「性格悪ぃんだよ」

罰が悪そうに髪を掻くのは、それが図星だからだろう。アゼルは声をたてて笑い、腰を下ろした。

「これが素なんだ。仕方ないよ」

「――なあ」

「なに？」

「おまえは、どう思った？」

唐突な質問にも動じず、アゼルは落ち着いた口調で言った。

「それは研究についてか？　それともクレセントさんについて？」

「両方だ」

「そうだね。研究については……僕は一概に否定することは出来ないよ」

ネイビスが勢いよくアゼルを見る。

その顔には僅かな動揺。だが、アゼルの顔は至極穏やかだった。

「知りたいと思うのは人の性だ」
「アゼル、おまえ――」
「でも、おかしいよね。そう思っているのに、腹が立って仕方ない」
思わずアゼルに掴みかかろうとしていたネイビスの手が止まる。
困ったように、本当に困ったように笑うアゼルを見て、ネイビスはそっとその手を下ろした。

「クレセントさんについては、僕からは言う事はないよ」
「そうか」
「ああ。でも一つ忠告だ」
思い立ったように手を叩くアゼルを見て、ネイビスが首を傾げる。
アゼルは胸元から紐に通された小さな紅い指輪を取り出すと、強く握った。

「一度惚れた女性は、死んでも守れ。出来なかったら、後に残るのはどうしようもない虚しさだけだ」
「……分かってるよ。心配すんな」
アゼルから視線を逸らし、ネイビスは言う。
アゼルは指輪をまた胸元に仕舞うと、軽くネイビスの肩を叩いた。

「じゃあ、帰ってきたら早速クレセントさんに告白だね」
「はあ！？」
ネイビスの顔が一気に朱に染まる。この程度で耳まで真っ赤にする親友を見て、アゼルは小さく苦笑した。
アゼルはわざとらしく視線を泳がせると、独り言のように呟いた。

「ぼやっとしてていいのかな？　クレセントさん、人気あるんだよ」
「マジ？」

確かに容姿は街を歩けば人目を引くほどのものではあるが、いかんせんあの性格である。これまで仕事以外でクレセントが異性と一緒にいる姿など、ネイビスの知る限り一度としてない。が、よく考えればそれは異性に限ったことではなく、単に彼女が一人でいることが多かっただけの話だった。
硬直するネイビスを尻目に、アゼルの攻撃は続いていく。

「当たり前じゃないか。男からしたら守ってあげたくなるような容姿だよ？　〈水〉にも何人かいたっけな」
「教えろ。そいつらの名前」
「そんな狂気染みた目をしてる人には教えられません」

あっさりとかわされ、ネイビスは拳を握り締めた。
アゼルは柔らかい笑みを浮かべると、悪戯は終わりとばかりに真剣な表情に戻った。

「ま、なんにせよだ。覚悟は決めなよ。いつかは言うんだろ？」
「……」
「ほんとクレセントさんのことになると、まるで駄目男だね」
「だ、駄目男っておまえ！？」

今度こそアゼルに掴みかかろうとしたネイビスの手を軽く避け、アゼルはシランド城へ走っていく。
そして、一度ネイビスを振り返ると、

「障害は多いだろうけど、頑張りなよ」

と言い残し、手を大きく振って視界から消えた。
残されたネイビスは伸ばした手を握り締め、天に翳した。
「言われなくても、わかってらぁ……」

※

「そう。クレセントが……」
「はい」
目を覚まし、事のあらましをソフィアから聞いたシレーネは小さく呟いた。その表情から見えるのは、少しの寂寥と安堵。
シレーネはベットの脇、自分の横ですやすやと寝息をたてるユティの髪を撫でた。

「ソフィアちゃん。ちょっと昔話を聞いてくれる？」
「ええ、是非」

真っ直ぐなソフィアの答えに、シレーネは顔を綻ばせた。ソフィアに優しく微笑みかけ、「ありがとう」と目を閉じる。
腹部に巻かれた包帯に手をやり、シレーネは喋り出した。

「クレセントはね、私の恩人なの」
「恩人、ですか」
「そう。私が師団入りしたのは結構遅くてね。そのことと、あと出生のことで、ずっと嫌がらせを受けてきたわ」
「出生……で？」

ソフィアの表情が曇った。シレーネは頷く。

「ソフィアちゃんは知らないかな。ここからずっと北のほうには結構な数の島があってね、そのなかの一つに『ルリ島』っていう島があるの」

聞きなれない地名に、ソフィアは首を傾げた。

シレーネは構わず続ける。

「正式名称は『流離島』。流れ離れる島。私はそこにある小さな村の出身なのよ」

「流れ離れる島……」

どことなく、嫌な響きの島だった。ソフィアは無意識のうちに表情が硬くなるのを隠せない。

「その顔はなんとなく想像ついてるのかな」

ソフィアは黙っている。

昔、習った世界史。その中の一つの小さな島国が、ソフィアの頭に過ぎった。

シレーネは花瓶に生けられた花を何となく見つめると、膝の上で手を組んだ。

「その島はね、昔の犯罪者達が流された島なの」

「マリア……これで」

雪に溶けてしまうほど白く輝く髪も、宵闇の中では青とも黒とも判別つかない色に染まっていた。

クレセントはマリアに一歩近づく。それを制したのは、マリアの手だった。

「悪いわね。あなたのそんな顔を見たら尚の事行かないわけにはいかなくなったわ」

「――っ」

クレセントの顔が歪む。マリアは踵を返し、クレセントに背を向けた。

「明日、決着をつけましょう。何が何でも、あなたには戻ってきてもらうわ」

そのまま歩き出したつもりだった。――だが、気付けば顔に当たるのは豊かな緑。腕は後ろで拘束され、背中の上には重み。

クレセントに後ろから押し倒されたのだと気付くのに、不覚ながら数秒を要した。まさかこのような暴挙に出るとはマリアも予想していなかった。

「クレセント、どういうつもり？」

「このようなこと本当はしたくはありませんでした。ですが、仕方ありません」

言葉自体が鋭利な刃物のような鋭さと重みを持つ。その冷ややかな声に、マリアは背筋が凍った。

「なにをする気？」

「足と腕を、折ります」

間髪いれずに返された答えに、マリアは息を飲んだ。

汗が流れる。喉が異常に乾いた。

「あなたたちに来られては迷惑なんです」

腕が強く締め付けられる。この細腕のどこにそんな力があるのかと疑いたくなるような力に、マリアの柳眉が曇る。

黄金に輝く月と、クレセントの瞳が、同じ輝きを帯びた。

「く――そうやってなにもかも遠ざけて、あなたに何が残ると言うの！？」

「……」

「答えなさい！　クレセント！」

暫しの沈黙。

再び口を開いたクレセントの口調は、酷く穏やかで、自虐的だった。

「このような話を知っていますか？」

まるで御伽噺を話すような、そんな流れるような口調。

「クレセント・ラ・シャロム、三度目の奇跡の生還」

一体クレセントが何を言いたいのか見当もつかなかったが、マリアは素直に頷いた。

「本来なら生還不可能と言われた任地へ赴き、三度とも部下を一人も死なせることなく生還したことでしょう。そのうち二つは任務達成。――輝かしい功績ね」

ありったけの皮肉を込めたつもりだったが、クレセントは全く気にしていない様子だった。

「ですが、部下は誰一人としてわたしと共に帰国していない。部下を先に逃がし、“クレセント・ラ・シャロム”はいつも一人で帰ってきた」

マリアは理解した。そのからくりを。クレセントの正体を知ってさえいれば、簡単に答えに辿り着く。

クレセントは小さく笑って、マリアの頭上から言葉を投げつける。

「分かりますね？　わたしは“三度”死んでいるんです」

予想と寸分違わぬ答えだったが、それは重くマリアの背に圧し掛かる。おそらくクレセント自身気付いていないのだろう。――彼女の声は、震えていた。

「なら、あなたは軍に入ってから三度入れ替わっているというわけ？」

マリアの口調が含みを持つ。クレアから齎された情報が本当かどうか、確認するために。

「いいえ。わたしは入れ替わっていません。任務の時だけ、別の複製が送り込まれましたから」
「……」
「なぜか分かりますか？　わたしが一番能力値が高かったからです。それが壊れることを、ヴァレリアは躊躇った」
マリアが一歩、確信する。
腕にかけられる力が更に強くなり、苦痛に顔を歪めるが、決して注意は逸らさない。クレセントの一挙一動見逃すまいと細心の注意を払った。
クレセントはマリアの腕への負荷を少し弱めた。
その時、雲によって月明かりが途絶えた時、マリアは見た。
「命を食われたわたしが……いまは他の命を食らって生きている」
クレセントの悲愴が宿った翡翠の瞳を。
「滑稽な話ですよね」
確信した。もうこれ以上の情報はいらない。やはりあれは真実だったのだ。
クレセントはマリアの顔を再び地面へと向けると、鋭利な言葉をマリアの首筋に当てた。
「マリア、最後にもう一度聞きます」
「聞くまでもないわ。私は引かない」
「そうですか」
――不快な音と共に激痛が走る。
「――あ……！」

悲鳴すらあげられず、マリアは苦悶する。投げ出された右腕。また、痛みが走った。

「次は、足です」

「……っ」

無慈悲な言葉が降り注ぐ。

足に冷たい手が当てられた瞬間、全身の血が引いたが、マリアは歯を食い縛って動かなかった。

「あなたはクレア様よりも厄介です。――迷惑なんです、マリア」

マリアは痛みで朦朧とする頭を動かし、もう一度クレセントを見る。

月はとうに雲の隙間から顔を出し、クレセントの顔は見えなかったが、口元だけははっきりと見て取れた。

紡がれた言葉に、マリアはその一瞬痛みも忘れてクレセントを見つめた。

「……く、れせんと」

そう呟いた時、マリアの頬に幾滴もの水滴が落ちる。

それに気付いたクレセントは慌てて顔を背けた。

「これで――」

クレセントが足を持つ手に力を込めたとき、

「少し、やりすぎだね？　お姫様」

闇に魅入られ、光から拒絶された神童が、常闇の中から姿を現した。

にっこりと笑ったセレンは、おもむろに数本のダガーをクレセントではなくマリアに投げつける。寸分の狂いなく、ダガーはマリアに肉薄する。

「馬鹿なことを！」

クレセントはすぐに腰から剣を抜くと、素早い動作でそれらを全て叩き落とした。

そして、焦りを含んだ表情で「お見事」と手を打ち鳴らすセレンを睨みつける。

「セレン・ウォン……どういうつもりですか？」

「君こそどういうつもり？　マリアが邪魔ならそのまま放っておけばよかったのに」

「――ッ！」

「それが君の覚悟の限界というわけ？　甘いね。ねぇ姫様。そんなにも甘い君がなにを為せるというの？　――なにもできないよ」

「うるさいッ！！」

マリアは目を見開いた。これほどまでに感情をむき出しにしたクレセントの声など、これまで一度として聞いたことがなかったからだ。それほどまでに、セレンの言葉がクレセントの触れられたくない傷を深く抉ったということだろうか。

セレンは喉元に剣が突きつけられているというのに、まったく物怖じしなかった。

それもそのはずだろう。クレセントが持つ剣は小刻みに震え、歯を食い縛ってセレンを睨みつけているものの、その顔にあるのは焦

燥以外の何者でもなかった。

「――引きなよ」

セレンの低い声が聞こえたかと思うと、クレセントが勢いよく後ろに飛びのいた。

そのまま二、三歩下がり、倒れるマリアの傍まで来たところで、マリアと目が合った。その翡翠の瞳には、明確な恐怖と動揺。

「あ……っ」

「クレセント――待って！　待ちなさい！」

マリアの制止の声も聞かず、クレセントは逃げるようにして闇の中へ消えていった。

※

「見ていて助けないなんて、相当意地が悪いわね。ディルナ」

クレセントとマリア、そしてセレンのやりとりを遠く離れた木の上で見ていたディルナは、不意にかけられた声に驚きもせず、苦笑しながら言葉を返した。

「それはおまえにも言えることだろう？　セフィリア」

「……聞いた？　クレセント・ラ・シャロムについて」

セフィリアはディルナの横に立ち、腕を組む。

ディルナはクレセントが走り去っていった方向を暫し眺め、視線

を逸らした。

「聞いたよ。クレセントが複製人間だというだけでも混乱していたのに、もう訳が分からない」

「それで、あなたは何がしたいの？　あなたが知るクレセントはもういない。でも、あのクレセントは――」

「言わないでよ。辛くなる」

セフィリアの言葉を遮り、顔を俯かせるディルナ。

ふと、マリアに視線を向けると、腕をだらりとぶら下げる痛々しい姿ながらも柔らかい笑みが目に入った。

「……どうして……あんな顔が出来る？」

「は？」

呆然と呟かれた言葉に、セフィリアは首を傾げた。

「あんな……あんな目に遭って、なんであの人は笑っていられる？」

「……さぁ、私には到底理解できない」

「私にも分からない。――けれど、少しだけ理解できる気がする」

ディルナが胸元を握り締める。

そこにあるのは、これまで感じていた憎悪ではなく、痛いほどに寂しい喪失感。

「後ろばかり見ていたら駄目だな。足元の小石にすら躓いてしまう」

「ディルナ……あなたさっきから意味がわからない」

「私もだよ」

「はぁ」

ディルナはとん、と立っていた枝を蹴ると、地面に着地した。
そして、いまだ木の上に立つセフィリアを見上げると、

「私の今やりたいこと、見つかった気がするよ」

そう微笑んで、ディルナはシランドへと歩き出した。
木の上に佇むセフィリアは、何となくその場に腰を下ろすと、満天の星空と月を眺めて息をついた。

「やりたいこと、ね。私はなにがしたいの？」

誰も答えてはくれない問い。
一度口に出してしまったそれは、留まることを知らないようにセフィリアの中で膨らんでいった。親に言われるがままに軍に入り、周りの雑音を払ううちに地位と名誉を手に入れた。
しかし、本当にそれが欲しかったのだろうか。
本当に求めていたものは、周囲の親に認められることか。賛辞か。地位か、名誉か。

「迷うなんて……何年ぶりかな。お兄ちゃんが死んでから、迷う暇もなかった……」

星は輝く。月は泣く。
空を見上げるセフィリアもまた、乾いた涙を流していた。

※

「犯罪者？」

ソフィアはシレーネが言った言葉を繰り返した。シレーネはゆっくりと首肯する。

「言っても、過去の話。私も詳しくは知らないけど、シーフォート時代の犯罪者たちが流され、興した島だと言われているわ」

「シーフォート時代というと、いまはそういう流刑みたいなものはないんですか？」

「あら。知ってたのね。ええ、その通り罪人を遠くの島へと流してしまう流刑は、現在のシーハーツにはないわ」

シレーネの口調は明るい。

「それにね、それもとっくの昔の話。今じゃルリ島の人たちもとっくに時効。シーハーツに復帰したって構わないのよ。――でも、そうする人は少ないわね」

戻ったところで、待ち構えているのは侮蔑と中傷の嵐だと、誰もが分かっているのだ。そんな中に突っ込むのは、余程の命知らずか、自分の意思とは無関係に連れて来られた者だけだ。

シレーネは、そのどちらでもなかった。無理やり連れて来られたのでもなければ、命知らずでもない。どちらかと言えば臆病でなほうだ。

「クレアのお母様――シャロン様って言うんだけど、この人が変わり者でね」

ソフィアは素直に信じられなかった。アドレーがあの調子なのだからクレアをあのように誠実に育てたのは母親のほうだと思っていたからだ。

その思いを知ってかしらずか、シレーネは楽しそうに続ける。

「本当に変わった方よ。元はアーリグリフ三軍の一つ、〈風雷〉の副団長。でも、突然アドレー様との結婚を発表したかと思うとすぐに引退。とても優秀な人だったらしくてね、ウォルター伯がいまだに副団長を取らないのは、彼女以上の人がいないからだとされているわ」

「え、ええ！？」

「でね、一応はシーハーツ国籍になったんだけど、自由奔放な人だったから、国内に留まることなんてそうなかったわ。戦争の時も、あの人はどちらの為にも闘おうともせず、どこかへ行っていたわ。一番長くてクレアを出産する前日から生んだ後の翌日の三日間かしら」

「そ、そんな……」

言葉がでず、ソフィアはただただ苦笑するしかない。

「そのシャロン様なんだけど、その人、度々ルリ島に来てたの。本当は調査のために来てたんでしょうけど、やることと言えば本国やアーリグリフの遊びや知識を伝えることだけ」

シレーネは話しながら絶えず笑いを堪えている。隣で眠るユティを気遣ってのことか、大声で笑うのが憚られるのかは分からない。

「私も随分良くしてもらったわ。色々話してくれた。シーハーツのこと、アーリグリフのこと、クレアのこと」

「クレアさん、ですか」

「なんだかんだで、あそこの二人は親馬鹿よ。シャロン様はたまに帰ると一日中クレアにべったりだから」

想像もつかないクレアの母親像。ソフィアは思わずアドレーの女版を思い浮かべてしまい、あまりに壮絶な姿に顔を青くさせて頭を振った。

「ああ、すぐに話が逸れるわ。――ええと、いつだったかな。シャロン様が言ったの。シーハーツに来る気はないか。あなたには他人を守れる力があるってね」

「それって……」

「ええ。私には高い施力があった。シャロン様も私が苦労することを見越してのことだった。だから強制はしなかったわ。でも、私は嬉しかった」

小さく呻いて寝返りをうったユティを落ちないように支え、シレーネはシーツを掛け直した。

「誰かの役に立てることよりも、シャロン様が誘って下さったことが、なによりも嬉しかった。両親の反対を押し切って、私はシーハーツに帰る決心をした」

「……」

「そこからはさっき話したとおり。私を待っていたのは誹謗中傷。軍にこそ入れたものの、私はずっと泣いてばかりだった」

想像を絶する程の嫌がらせだったのだろう。シレーネの表情にはうっすらと悲しみが浮かんでいた。

「私が二十一歳でようやく〈風〉の師団員になれた頃、クレアはもう一級構成員の地位にいたわ。少し嫉妬しちゃって、そこで何かが切れたのね。今まで我慢してきたものが爆発しちゃったの。気付いたら、高い崖の上に来ていたわ」

ソフィアが息を飲む。

「想像通り、私は飛び降りた。落ちながら、ああ、これで楽になれるんだって思った時ね、急に体が浮いたの」

「え？」

「私も最初何が何だか分からなかったわ。でも、すぐに冷たくて、でも温かい……そんな不思議な風に全身を包まれた」

肌に触れるものは冷たかった。でも心の中に入ってくる何かは、とても優しかった。

心地よくて、少し悲しい風。

「目を開けたら、目の前に綺麗な女の子。朝日の光できらきらと光る白銀の髪に深い翡翠の瞳。宙に浮いているなんてこと忘れるくらいに、その瞳に魅入ってた」

「……」

「ゆっくりと地面について、私を座らせた女の子は言ったわ。生きてください、って。無表情で、淡々とした言葉だったけど、不思議と優しい言葉だった」

「……それが、クレセントさんなんですね」

ソフィアが微笑みを浮かべて言った言葉に、シレーネも笑顔で頷く。

「ええ。それでそこで素直にお礼を言えば良かったんだけど、あの時の私は捻くれててね。思わず、『余計な事しないで！　どうせ私がいなくなったって誰も悲しまないのよ！』って大声でクレセントに当り散らしちゃったの」

半ば八つ当たりのようなものだった。両親には勘当され、シーハ

ーツに自分の味方はいない。
寂しさを、とにかく誰かにぶつけてしまいたかったのだ。

「私の言葉を聞いたクレセント、何て言ったと思う？」

いきなり投げかけられた質問に、ソフィアは首を傾げて分からないの意を示す。
シレーネも答えが来るとは思っていなかったのだろう、笑顔で頷いた。

「なら、わたしが悲しみます……クレセントはそう言ったのよ。おかしいでしょう？　会ったばかりでお互い名前も知らない他人なのに」

シレーネは一呼吸置く。

「でもね、何故かその言葉で胸の中の蟠りが消えちゃったの。びっくりするくらいにあっさりとね。そしたら今度はいきなり怖くなった。もしかしたら死んでたかもって思ったら涙が止まらなくて。クレセントの前で大泣きした」

「……」

「クレセントは慰めるでもなく、嫌な顔するでもなくそこにいたの」

ただ、そこに佇んでいた。何言うでもなく、ただそこに。

「その後私は泣きつかれて眠っちゃって、気付いたら夜になってた。朝から夜までよ？　でも、クレセントはそこにいたの」

眠ってしまう前に見たときと同じ、無表情な顔で。変わったことといえば、シレーネの背に小さな外套がかけられていたことぐらい

だった。

「そこに……いてくれたのよ。私が目覚めるまでずっと」

「その後は、どうしたんですか？」

「相変わらずの無表情で一言も喋らずに立ち去って言ったわ」

シレーネが口元に手を当てて笑っている。ソフィアもつられて笑う。笑いが収まると、シレーネは天井を仰ぎ見た。

「それから私はちょっとやそっとの嫌がらせなんか気にならなくなったわ。成績もぐんぐん伸びていった」

その頃には、周囲もシレーネを悪くいうことは次第になくなっていった。むしろ、その高い戦闘力と知識に敬意さえ払ったのだ。少し前までは、犯罪者と罵っていた彼等が。

「クレセントに最初に会ってから二年くらいだったかな、入団試験でトップの成績を取った特科生が〈風〉に入団を希望してきたの」

「その子の試験官に選ばれたのは、シレーネさんですか？」

ソフィアは自然と顔が綻んでいくのに気付かない。その様子を思い浮かべると、なんだか擽ったくて仕方ないのだ。

シレーネも今日最高の笑顔で大きく首肯した。

「その通り」

運命の再会とも言えるべき瞬間だったのだろう。

シレーネの驚く顔が、クレセントの優しい無表情と交わった瞬間。

「だからね、クレセントは私にとって存在意義なの。たとえこの世

界を敵に回すことになっても、私はクレセントを守る。……もう、迷いはないわ」

二つの風の不思議で優しい出会い。

それは例え幾年の月日が流れようとも、決して色褪せることはない。

そう信じ、ソフィアは目を細めて、窓の外から見える夜空に光る星達を見上げたのだった。

『ふむ、クレセント・ラ・シャロムさん……ってあなた!?』

『はい？』

『も、もしかして覚えてない？』

『……あ』

『遅……。えーと、クレセントって言うのね』

『はい』

『こんな所でなんだけど、ずっと言いたかったこと、今言うわ』

『……はい』

『あの時はありがとう。本当に感謝している。あなたが助けてくれなければ、今の私はいなかったから』

『――いえ』

『あ、あなたの試験だけど、合格ね』

『え？』

『いいのいいの。団長！　面接終わりましたぁ！　……え、早い？　だって特科トップですよ？　試験するまでもないじゃないですか。――ああ、うるさいなぁ。クレセント、これから暇？　暇だったらどこか食べに行かない？』

『え、でも……』

『いいからいいから。うーん、そうね。甘いものでも食べに行こうね？』
『あ……はい』
『決定！　団長！　お昼休憩行ってきます！　……今は朝？　仕事したんだからいいじゃないですか。……給料泥棒？　酷い団長！　私傷心の旅に出て来ます。さようなら！』
『……あの、いいんですか？』
『平気平気。……そうだ。自己紹介まだだったわね。私はシレーネ。シレーネ・リシャス』
『シレーネ、様』
『うーん、呼び捨てでいいんだけど……ま、いっか。いつか呼んでくれれば』

『どう？　美味しい？』
『ええ、とても』
『でしょう！　ここ、私のお気に入りの店なんだ。いつかあなたを連れて来たいと思ってたの』
『わたしを……ですか？』
『そう、クレセントを。気に入ってくれたみたいで、本当に良かった』
『……こんな美味しいケーキ食べたのは、初めてです』
『ふふ、クレセントってば大袈裟ね。――でも、甘いもの好きなんだ』
『そう、なんでしょうか』
『きっとね。……また食べにこようね、クレセント』
『はい、シレーネ様』

1－27　星の歌（後編）

「ああ、これは完全に折れてるね。あの細腕でよくやるよ」

力無くぶら下がったマリアの腕を取り、セレンは嘆息した。手近にあった木ををマリアの腕に添え、上着の裾を破って長い布を作り、手際よく固定していく。その後、手を患部へと翳し、短い詠唱。

腕を包んだ紫の紋章は、痛みが引くのとは反対に、悲しい力だった。

「一応応急処置程度だけど、痛みは引いたでしょ？」

「あなた……施術使っても体に負担は無いの？」

「ん、この程度ならね。――これ完全に治すのはいくらシーハーツの医療技術でも一週間はかかるかな」

マリアは「そう」と呟いて溜息を吐いた。骨折など数時間で治せる医療技術が、いま羨ましく思う。

「明日は――」

言い差したセレンの言葉をマリアは強く遮った。

「行くわ。行かなくちゃならないのよ」

「腕折られてまで、あの子に肩入れする理由はどうして？」

「聞かれるのは何度目かしらね。その質問」

マリアは腕を庇うようにして立ち上がった。

「だって気になるでしょ？　知り合ってからまだ短い君たちがどうしてお互いを信じられる？　どうして命を張れるの？」

「……あなた、頭はいいみたいだけど馬鹿なのね」
「え？」
セレンが目を瞬かせる。
「人と人との関係は時間じゃない。使い古された言葉だけど、正にその通りよ」
「そもそも人は簡単に信じられるものじゃないと思うけど」
「それも正論ね。信じてばかりいたら、いつか裏切られるわ」
「じゃあなんで」
眉を顰めるセレンに、マリアは片手を振って歩き出した。シランドではなく、ペターニの方へ。
「シーハーツの神童さんは、もう少し人の心を理解したほうがいいわね。計算や理論だけじゃ証明できないものが、この世には沢山あるのよ」
遠ざかるマリアの背中。
セレンは零れ落ちる苦笑に乗せて呟いた。
「人の心……ね。こんな世界にあるものなんて、信じるに値しないものがほとんどだよ」
自嘲めいた笑み。セレンは一息つくと、マリアの背を追うのだった。
「ここに、いまさらなんの用が？」

セレンが目の前に聳える建物を見上げて言った。

「さて。勘よ」

マリアは適当に言って大きな鉄の門を開ける。ギギ、と音を鳴らして開いた門を潜り、マリアは庭園のほうを向いて一度立ち止まる。一瞬目を閉じ、顔の前で十字を切った。

セレンはその行動の意味を理解しかね、首を傾げながらも、屋敷の中に足を踏み入れるマリアの後を、一歩遅れてついていった。

――ペターニ領主シャロム家の邸宅に。

「本棚や引き出しは全て調べたんだよね？」

「ええ」

マリアとセレンがいるのは問題の地下空間ではなく、シャロム夫妻の書斎。マリアは本棚を、セレンは引き出しを調べている。

「もうなにもないと思うけどな」

「あのアルバムがあったんだから、きっとあるはずなのよ。シャロム夫妻が私の想像する通りの人物なら」

「ふぅん。――あれ」

引き出しを探っていたセレンの手が止まる。引き出しを横から眺め、また視線を中へと移す。マリアは本棚から離れて、セレンのほうへと歩み寄った。

「なに？」

「これ、中と外の厚さが合わない」

促されるままに見れば、確かにその引き出しは外観から見た厚さの二分の一程度しか底がない。

マリアとセレンは顔を見合わせ、引き出しの中のものを全て机の上に出した。紙の下に隠されていたが、僅かなへこみがある。爪でそれを持ち上げると、薄い板が持ち上がり、下には一冊の本。

「見っけ」

セレンが薄く笑ってマリアに差し出す。それを手に取り、マリアは本を開いた。――とたんに顔を顰めたマリアを見て、セレンも中を覗き込んだ。

「これは……」

更に数ページ捲っていくと、一枚の白い紙。それに目を通したマリアは、震える唇を噛み締めた。

セレンは渡された紙を手に取って素早く読み通すと、首を振った。

「悲しいね。――最悪の擦れ違いだ」

「クレセントは、また辛い思いをしなくちゃいけないのね」

それぞれの決意と共に、夜は闇を深くした。

木々の共鳴も、星々のさざめきも、静かな音を奏でてその行く末を見守っている。

満天の星空の中、一際輝く三人の女神は、優しい光を帯びて沢山の涙を流していた。

――この先に起こる運命を、悼んでいるかのように。

※

緑輝くシランドにアペリスの恩恵が降り注ぐ。
いまはもうその水源はないというのに、シランドの周りを満たす聖水はまるで枯れることを知らないかのように、ゆったりとした流れを作っていた。
朝露が日光に反射し、神秘的な輝きを放つ。
水と緑の都シランドと肥沃なイリスの野を繋ぐ光の架け橋の端、それぞれの武器の最終チェックをする六人の男女と、それを少しはなれた所から見守る七人の男女がいた。
最後にチェックを終えたフェイトが大きく頷く。

「よし。――みんな、準備はいいかい？」
「ええ」
「問題ないわ」
「ああ」
「大丈夫だ」
「いつでも」

その呼びかけに、クレア、マリア、アルベル、ヴァン、そしてセフィリアが答える。

「絶対、ぜーったいみんな無事で帰って来てよ！　そうじゃなかったら末代まで祟ってやるからね！」

ルージュが彼女らしくも無い不安気な表情を浮かべる。

「私はあんたたちを信じてる。うまくやりなよ」

ネルがマフラーに顔を埋める。

「こちらのことは心配要りません。皆さんは皆さんの為すべき事に専念して下さい」

アゼルが微笑みを浮かべ、胸に手を当てる。

「フェイト、マリアさん、みなさん。お気をつけて」

ソフィアが頭を下げる。

「クレアちゃん、みんな。頑張ってね」

ネーベルがふわりと笑う。その顔には不安の欠片も見られなかった。

「グラオの為にも、よろしく頼むぞ。アルベル殿にヴァンも分かっておるな？」

アドレーにしては珍しく真剣な表情。アルベルが鼻を鳴らしてそっぽを向き、ヴァンが敬礼をする。

「……クレセント、連れて帰ってこなかったら承知しねぇからな」

ネイビスがフェイトの胸を手の甲で叩く。フェイトは微笑んで頷いた。

「ああ。心配いらないよ」

フェイトはネイビスの肩を軽く叩いて、一方後ろに下がった。
右手にある日のあたらない家の窓を見ると、セレンが小さく手を振って微笑んでいた。開けられた窓のから、セレンが言った。

「いってらっしゃい」
「行ってきます」

フェイトとクレアが応え、それを合図に六人はシランドに背を向けて疾走した。
彼らの後姿はすぐに見えなくなり、セレンはゆっくりと手を下げる。

「頑張ってよ」

小さく呟くと、セレンは窓を閉めて外套のフードを被った。
他の七人も、それぞれの仕事を全うするために、方々へと散らばっていく。
教会の鐘が朝を知らせ、人々が動き出す。礼拝に向かう人達が城へと向かって歩いていく。
一体彼らは何を祈るのだろうか。戦争が終わり、平和が訪れた今、一体何を。
大切な人の幸せ？
自分の幸せ？
それとも、形だけの祈り？
それは誰にも分からない。人の心を読める、全知全能の神でもいない限りは。
ただ一つ、唯一分かることは、誰一人として悲しい風の本意を知り、その為に祈るものはいないということ。
セレンはアペリスを信じてはいない。

だが、今だけは祈るのも悪くは無いのかもしれない。
願いを届ける先は、アペリスではないけれど。今はただ、あの憐れで悲しい風の為に。
そう苦笑を漏らし、セレンは光の届かない道を歩き、シランド城へと歩みを進めるのだった。

※

ヴァレリアの蠍討伐部隊は、フェイトを筆頭にクレア、マリア、ヴァン、そしてアルベルをしんがりに真っ直ぐにヴァレリアのいる洋館へと進んでいた。
身の軽いセフィリアが、遠くを見渡すために木の上を移動している。いまだ、機工兵との遭遇はなく、守備は順調だった。
流石に舗装された道を行くわけにはいかない一行は、クレアの指示の元、最短距離で進む。
クレアは時折木の上を見上げ、セフィリアに声をかける。

「どう、なにか見えた？」
「いえ、まだなにも」

短い返答。クレアは頷くとまた足を速めた。

「身軽な奴だな」

木から木へと難なく飛び移るセフィリアを見て、アルベルが呟いた。
自分より優れている者に対し、アルベルは素直に敬意を払う。歪のアルベルらしくもない。そう思える一面だが、その精神こそがこ

の横暴っぷりにもかかわらず兵士達に憧れられている理由かのだ。
――無論、純粋に強いということが一番の理由ではあるが。
そのままどれくら走っただろうか。不意にセフィリアの動きが止まり、手で止まるよう指示をした。一行が足を止めたのを確認し、セフィリアは木の上から軽やかに地面に降り立ち、声を潜めて言う。
「見えました。ここからおよそ五百メートル先。洋館の周囲は木の囲まれてよく見えませんでしたが、機工兵の姿は見受けられました。数はおよそ五十。屋敷内も含め、確認できなかった場所も考慮すれば百機といったところでしょうか」
的確な情報にマリアは頷き、全員に集まるように言う。
「じゃあ、作戦の最終確認。セフィリア、ヴァン、アルベルは正面から突入。思う存分暴れてちょうだい。敵の注意を引き付けて」
「はい」
「任せてくれ」
「ふん、そうでなくっちゃ面白くねぇ」
アルベルが手を打ち鳴らせる。
「私とフェイト、クレアは少し間を置いて裏口から進入。その後二手に分かれるわ。フェイトはクレアと……分かってるわね？」
「ああ。でも、一人で大丈夫かい？」
「これでも場数はクレアに負けないわよ」
「そうだったね。――じゃあ、行こうか」
フェイトの声を合図に、二手に分かれて走り出す。
アルベル、ヴァン、セフィリアは真っ直ぐに洋館を。フェイト、マリア、クレアは迂回して目指す。

「ヴァン、セフィリアをお願いね」
「ああ。大丈夫だ」
「安心してください、クレア様。怪我人のヴァンは私が守りますから」
「おい、俺の立つ瀬がない……」
「ふふ、頼むわね」

クレアの言葉に、セフィリアが笑顔で頷く。

「おい」
「なに？」
「……いや、なんでもねぇ」
「分かってるわよ。ちゃんと助ける」
「やっぱアルベルっていい奴だよな」
「死ね、阿呆」
「おっと、怖いな。じゃあ、また会おう」
「木偶の坊相手に死ぬんじゃないわよ？」
「当たり前だ。誰に向かっていっている」

そう不適に口元を吊り上げるアルベルを見て、蒼髪の双子は顔を見合わせて笑った。

危険な地に足を踏み入れようというのに、彼らの顔には迷いも不安もなかった。

思うところはただ一つ。

すべてを終わらせ、彼女たちを救う。

ただ、それだけだった。

※

「来たのか？」
「そのようです」

屋敷の二階窓から遠くを見つめていたクレセントは、蒼の影に一度顔を歪めてから、踵を返してヴァレリアに振り向いた。

「数は六。クレア・ラーズバードの姿も確認しました」
「そうか。これで何の問題もないな。――後はおまえが奴らを始末すればいい」
「はい。お任せください」
「……そういえば、昨夜はどこへ行っていた？」
「わたしはずっと部屋にいましたが」

間髪いれずにクレセントは応える。その顔は無表情そのものだ。
ヴァレリアは冷たい金瞳でクレセントを見ると、小さく笑って椅子を回し、背を向けた。

「そうか。――時に、シレーネ・リシャス……生きているようだな」
「！」

クレセントの顔に僅かな動揺が走る。

「腹に穴が空いた状態であの高さから落ちたというのに、大した生命力だな。シーハーツの兎どもは」
「シーハーツ六師団の中でも、師団長の力は侮れませんから」
「ああ、そうだな。十分に警戒するよ」
「では、わたしは準備に入ります。ヴァレリア様も、どうぞお気を抜かれることのないよう」

そう言い、ヴァレリアと顔を合わせぬままクレセントは部屋を出て行った。

一人になった部屋の中、ヴァレリアは歪な孤を口元に描いた。

「……人形の振りが下手になってきたな。クレセント」

※

「目算で百機。型は外敵駆除型。銃火器の装備あり。装甲は非常に堅く、普通の兵士では苦戦は免れないほどの相手です」

洋館の手前百メートルからその様子を見たセフィリアが、淡々と言う。

「“普通の”だろ？」

アルベルは刀を抜く。セフィリアも笑って刀を抜いた。

「その通りです。あんな鉄の塊の群れ、十分で鉄に戻してみせます」

「五分だ」

「二人とも戦うのは初めてだろ？　甘く見ると痛い目に遭うぞ」

「なら、ここで見ていろ」

「ええ。私たち二人で事足ります」

ヴァンの言葉も、二人の耳には届かない。意外と気が合うのではないだろうかと思ったが、やはり口には出さない。

そうこうしているうちに、機工兵の一体がこちらを向いた。鉄の人型機体の頭部に当たる場所で明滅する赤い光を見据え、セフィリ

アは目を細める。

「熱源に反応する感知器、というやつですか。――この距離でも反応されるとは、〈風〉の情報もあてになりませんね」

「御託はいい。――行くぞ！」

アルベルが、ヴァンが、セフィリアが駆け出す。

最初にアルベルたちを発見した機工兵は、魔剣・クリムゾンヘイトから放たれた衝撃波により、正真正銘の鉄の塊と化した。

それを火蓋に、次々と機工兵の銃火器が火を吹く。アルベルはこれを飛んで避け、セフィリア、ヴァンは防護壁を張って防ぐ。

「……思ったより動きは早い。銃火器もこれだけの数があると……」

接近戦を仕掛けてきた機工兵の体を刀で五つに解体しながらセフィリアが呟く。

「鬱陶しい」

一度距離を取って素早く詠唱をする。手を下に突き出せば、地に浮かぶは藍の紋章。

「サザンクロス！」

巨大な光の十字が、セフィリアに切りかかろうとした機工兵を飲み込んだ。

立ち上がったセフィリアは、髪を手で掻き揚げて嘆息する。

「四体……もう少し引き付けてからでも遅くはなかったですね」

言って、鉄の破片となった機工兵を踏みつけ、セフィリアは銃火器をこちらに向けていた機工兵に切りかかった。

「……やるじゃねぇか」

「伊達に光牙のエースじゃないってことさ。甘く見てると痛い目遭うぞ」

アルベルの感心したような声に、ヴァンは苦笑しながら剣を振るう。

二人は一度機工兵と距離を取り、背中を合わせる。

「何年ぶりだろうな、こうしておまえと背中を合わせるのは」

「さぁな」

「さっさとこれ片付けてフェイト君たちと合流しようか」

「言われるまでもねぇ」

二人は同時に地面を蹴った。

高く飛び上がったアルベルの周りに強大な闘気が集まる。地面に着地したと同時に、アルベルは刀を振った。

「喰らえっ！」

闘気の塊で出来た漆黒の竜が機工兵を飲み込む。竜が消えた頃、アルベルの目の前にいた六体もの機工兵は、残骸と化していた。

「孤月閃！」

ヴァンの剣が三日月状の衝撃波を生み出す。それに巻き込まれた機工兵が木の幹に叩きつけられ、動かなくなった。

一体、また一体と機工兵の数が減っていく。地面は黒に塗りつぶされ、凡そ十二分が過ぎたころには、機工兵の数は半分にまで減っていた。

「五分は無理でしたね」

セフィリアが涼しげな顔で言う。アルベルは罰が悪そうに怒鳴った。

「うるせぇな！　十分だって無理だったじゃねぇか！　すぐに全滅させてやる！」

「だといいのですけどね……ヴァンはもう駄目ですから」

アルベルが舌打ちをして遠く離れた木の根元を見る。脇腹を押さえたヴァンが、苦しそうに座り込んでいた。

――傷が開いてしまったのだ。

「チッ……だから来るなと言ったんだ」

「もう少し数を減らしたらここを任せてもよろしいですか？　ヴァンを安全な場所まで運びます」

「いますぐ行け」

「馬鹿なこと言わないで下さい。死にたいんですか？」

アルベルはもう一度舌打ちをして背後を見た。機工兵。ばらばらに動いていたと見えた機工兵は、いつの間にかアルベルとセフィリアを取り囲んでいたのだ。

絶え間なく放たれる銃弾を、光の防護壁で防いではいるが、そう長く続くものではない。

「駄目です。もう持ちません。三秒後に解きます」
「……根性ねぇな」
「刺しますよ」

アルベルとセフィリアが飛び上がる。同時に防護壁は消え、二人がいた地面は途端に蜂の巣となった。
空中を舞うアルベルとセフィリアは、お互いの顔を見合わせて頷くと、ヴァンが居るほうの機工兵へ向けて一斉に攻撃を放った。

「無限・空破斬！」
「レイ！」

幾重もの衝撃波と、降り注ぐ光が、一帯の機工兵を蹴散らす。
円の一部を崩したアルベルとセフィリアはそこに降り立ち、ヴァンを庇うように立ち塞がった。

「おい、息切れてるぞ」
「問題ありません……」

そうはいうものの、セフィリアの息は上がっていた。
理由は言うまでもない。長時間の防護壁である。ある程度の攻撃を緩和する障壁なら何時も展開しているが、完全に防ぐものを数分間にあたって張っているのは、相当体にくるのである。
それに加え、ヴァンにも防護壁は張っている。僅かずつだが、体から施力が流れ出しているのだ。

「残り四十……」

そう呟いてセフィリアは飛んでくる銃弾を避け、一体の機工兵を

鉄くずに変える。アルベルもセフィリアの様子を気にしつつ、かかってくる機工兵を片っ端から切り伏せた。
機工兵の数が、凡そ残り二十体を割った頃だった。機工兵の火器を障壁で防いだアルベルが、ふとセフィリアを見ると、

「ちっ！　なにをやってやがる！」

十体はいるであろう。機工兵に囲まれたセフィリアが目に入った。
アルベルが駆け出そうとするが、目の前には新たな機工兵。

「邪魔だ！」

刀を水平に薙いでアルベルが叫ぶ。機工兵の体は真っ二つに両断され、白煙をあげて崩れ落ちた。
そして、聞こえる銃声。セフィリアを取り囲んだ機工兵が、一斉に射撃を開始した。
アルベルは見た。防護壁が、音を立てて割れるのを。空中を見上げるが、飛び上がって避けた形跡も無い。

「畜生っ！」

額から流れる汗。アルベルは一直線に機工兵の集団へと走った。
そして、アルベルに背を向ける機工兵へ向け、刀を振り下ろそうとした、まさにその瞬間、

「！！」

十体もの機工兵が、空に舞ったのだ。
何が起きたのか分からず、アルベルはその場に立ち尽くした。それらに心などあるはずもないが、残りの機工兵もまるで驚いたよう

に動きを止めていた。
時間の止まった世界から、アルベルを連れ戻したのは、ヴァンの叫び声だった。

「アルベル！　その場から離れろ！！」

ヴァンに視線を向けるアルベルだったが、すぐに背後の殺気に気がつき、後ろを振り向く。

「おまえ――」

そこには、腕から鮮血を流し、狂気に満ちた瞳のセフィリアが立っていた。

「……くそ」

アルベルですらぞっとする瞳。無意識のうちに一歩後ずさっていた自分に舌打ちを鳴らし、アルベルは刀を構えた。
長年の勘が、引けと告げている。

「下がるんだ、アルベル！　いまのセフィリアには近づくな！」

ヴァンがまた叫ぶ。その声に冗談の色はない。アルベルは刀を下げると、ヴァンの元へと走った。傍により、流れた汗を拭う。

「説明しろ。あの女、なんなんだ」
「見ていれば分かる」

促されるままにセフィリアを見たアルベルは、驚愕に目を見開いた。

「――馬鹿な……」

セフィリアが刀を一振りするだけで、三体の機工兵が崩れる。そして、驚くべきはその尋常ではない速さ。

速さには自信のあるアルベルですらその動きを追うのがやっとだった。

おそらく一分も経っていないだろう。二十弱はいた機工兵は、物言わぬ鉄の塊となった。

黒い塊の中、足元の瓦礫を踏みつけたセフィリアが冷笑を浮かべる。

「もう少し楽しませてくれると思ったのですが……期待はずれですね」

腕から流れる血を舌で舐め取り、セフィリアは動かなくなった機工兵に刀を突き刺した。

「所詮は心無い人形。――この程度が限界ですか」

足元の機工兵を満足げに解体したセフィリアはおもむろにヴァンとアルベルの方を振り向く。セフィリアの口元が緩やかな孤を描いた。

「アルベル。下がっていてくれ」

「は？　てめぇ、死ぬぞ」

「これでもああなったセフィリアを二度も止めたのは俺だ。――大丈夫、なんとかなるさ」

ヴァンは剣を手に取った。アルベルは大人しく後ろに下がる。
そこから先は、瞬きの間の出来事だった。アルベルがセフィリアが消えたのを視認すのと同時に、くぐもった声が耳に届いた。
弾かれたようにヴァンを見ると、
「ほら。なんとかなったろ？」
腹に剣の柄を当てられ気を失ったセフィリアと、それを支えるヴァンの姿があった。
「――ッ、わたし、は……」
それから数分もしないうちに、セフィリアは唸りながら、体を起こした。
「気付いたか、セフィリア」
「ヴァン、どうして――まさか！？」
セフィリアの顔から血の気が引く。不安そうにヴァンを見上げるセフィリアに、ヴァンはゆっくりと頷いた。
「そんな……また――私はっ……」
「ああ。だがおまえの働きで機工兵は全滅だ。少し休んだら、すぐ行くぞ」
ヴァンがセフィリアの頭を撫でると、セフィリアはそれを手で振り払った。
顔を俯かせ、膝の上で手を握る。

「ふがいないです。こうならないように、強くなったつもりだったのに……」
「……おい、で、どういうことなんだ？　この女なんなんだよ」
「ああ……セフィリア、いいか？」
ヴァンが視線を向けると、セフィリアは黙って頷く。
「たまに、こうなるんだ。精神が不安定になった時とか、命が危なくなった時とか。おそらく一種の防衛本能だろう。枷が外れたぶん、通常では考えられないほどの力を発揮するんだが、見境が無い。敵も味方もな」
「なるほどな。便利な本能だ」
「――ッ！　な、にが――何が便利ですか！？　このせいで私は！」
そこまで言ってセフィリアは黙る。その瞳に浮かんだ涙に、アルベルは罰が悪そうに視線を逸らした。
ヴァンは苦笑を浮かべると、いまだ血を流すセフィリアの腕を布で拭いた。
「一度、これでクレアを殺しかけてる」
「……っ」
セフィリアの小さな肩が震える。
「さぁ、そろそろ行こう。セフィリア、行けるか？」
「当たり前です。でも、その前にあなたの治療が先です」
「いや、だが……」
「それくらいの力は残っています。迷惑をかけました。これぐらいしなければ私の気が収まらない」

そう言って遠慮するヴァンを押し切り、ヴァンの脇腹に手を当てた。

徐々に消えていく痛み。ヴァンはアルベルを見上げて微笑んだ。

「いい子だろう？」

少々悪戯を含んだ口調でそう言うと、

「死ね、阿呆が」

「本当です。捨て置きますよ」

両脇から、言葉の剣が突き刺さった。目が笑っていないアルベルとセフィリアを交互に見たヴァンは、冷や汗をかいて手をあげた。

「冗談だって、二人とも……いや、ほんと」

1－28　the Name

外から絶え間なく聞こえていた銃撃の音が止んだ。それまでけたたましく鳴り響いていた音が急に止むと、周りから音が消えたような錯覚を覚える。

心音がやけに大きく響いた。別行動を取ったクレアとフェイトが気がかりだったが、いまは他にやるべきことがある。――二人がレイナ達を救出するまでの時間稼ぎ。

スキャナーを開く。この奥の部屋に、一つの生体反応がある。その近くには、生体反応とは違った反応。機工兵だ。大きさから言って、ヴァレリアの専属の機体だろう。

となれば、そこに居るのはヴァレリアか、もしくは……。

マリアは顎を伝う汗を手の甲で拭い、ゆっくりと近づく。途中、ふと視線を横に向ける。閉じられた扉。しっかりと施錠され、その上で開閉できないよう板が何重にも打ち付けられていた。

――その部屋の扉の隙間を見て、マリアは唾を飲み込んだ。

紅かった。どす黒く変色している。間違いなく血だった。ドアの下の隙間を見れば、蒼い絨毯が変色していた。

一体この部屋で何があったのか。血液の様子や、打ちつけられた板の腐敗度からして、最近のものではないようだった。マリアは念の為スキャナーで中に生体反応がないのを確認すると、急ぎ足で目的の部屋へ向かった。

扉の横の壁に背をつけ、左手にフェイズガンを構える。持ちなれていないそれは、小さく震えていた。

深く、深く、深呼吸。

「よし」

マリアは覚悟を決めて扉を蹴破った。

散らばる木片。マリアはそれを踏みつけ、室内に足を踏み入れた。
銃口をピタリとそこに居る人物へと向ける。
真っ直ぐに銃口を向けられた人物は、その端正な顔を悲愴に染め、震える唇で言った。

「どうして――どうして来たんですか！　そんな腕で……どうしてっ……？」

クレセントが痛々しく包帯が巻かれた腕とマリアを交互に見つめる。マリアはしっかりと固定された腕を見、軽く微笑んでクレセントを見返した。

「さぁ？　なんでかしらね」
「死にたいのですか！？」
「馬鹿言うんじゃないわよ。誰が死にたいもんですか」
「なら！」

クレセントの叫び声。
いつもの淡々とした口調ではない。しっかりと感情の篭った声。
マリアは口元に笑みを作ってクレセントを手で制した。

「私はね、クレセント。諦める、ってことが一番嫌いなの」
「知っています。あなたは――そういう人です」

そう言いながら、クレセントは一瞬顔を伏せて機工兵に何か呟く。
機工兵は返事をするかのように一度吼え、マリアの横をすり抜け外へ飛び出した。

「どういうつもり？」
「外の機工兵が全滅させられたようです。これ以上戦力が増えては

厄介なので」

再び顔を上げるクレセント。マリアは肩を竦めた。

「そう。まぁ、こっちも一対一で好都合だわ。あなたが嫌がろうが泣き叫ぼうが、力ずくで連れて帰らせて貰う」

マリアの引き金を持つ指に力が入る。

「無理ですよ」

クレセントの体が僅かにずれる。その横を光の矢が通った。

「わたしはもう、戻れない」

放ったフェイズガンの銃弾は、紙一重のところで避けられた。左手で撃ったということも差し引いても、真正面からだったとしても、一度見ただけでそう簡単に避けられるものではないというのに。

マリアは再び銃口をクレセントに向けた。無論、殺さないように麻痺モードに設定して。

「伊達に師団長クラスの戦闘能力は有してないってことね」

立て続けに放たれる光。しかし、クレセントには掠りもせずに部屋の壁に穴を開けていく。

「へぇ」

「その武器は一度見ました。確かにやっかいですが、銃口の向きと手の動きさえ気をつけていれば、恐るるに足りません」

クレセントが左手を顔の高さまで持って行き、勢い良く振り下ろす。袖の中から手の甲へ向けて飛び出す刃。

恐らくクレセントのスピードで掛かってこられたら、それを防ぐ手立てはない。この腕なら尚の事。

マリアはふっと笑うと、銃をホルスターに納めた。クレセントの眉が動く。

「どういうつもりですか？　降参するというのですか？」

「まさか。――ねぇ、クレセント。あなた、私の能力がこの銃だけなんて思ってるんじゃなわよね？」

マリアの額が、蒼く発光する。

「……この施力の流れは……」

感じたこともない施力に、クレセントの柳眉が動く。

――無闇にかかるのは危険。だが、このまま放置しておくのはもっと危険。

そう判断し、クレセントは即座に走り出そうとした。が、

「！！」

急に足元が沈み、すぐに動かなくなった。危うく転倒しそうになったが、刃を床に差すことでなんとか踏み留まる。

起き上がって足元を見る。――クレセントの表情が驚きに染まった。

「――これは。どうして……こんなこと」

「悪いわね。私には特別な力があるのよ」

足首まで床に沈んだクレセントを微笑を浮かべて見下ろし、マリアは髪を払った。

言うまでもない。マリアのアルティネイションの力である。一度クレセントの足元の床を液状に変え、すぐに元に戻した。それにより、クレセントの足首から下は完全に床に埋まってしまったのである。

クレセントは足に力を入れるが、抜ける気配はない。

「く……」

「施術を使おうとしても無駄よ。あなたが施紋を体に刻んでいないことは分かってる。描かせる暇なんてあげないわよ」

「……」

「さぁ、観念するのはどちらかしら？」

このとき、マリアは勝利を確信していた。だから、気付けなかったのだ。

「あなたです、マリア」

――クレセントの口元が、微かに吊り上がったことに。

おもむろに腰の袋へと手を伸ばしたクレセントは、そこから黒い塊を出した。手榴弾である。

しかし、効果範囲は狭く、威力もさほどないタイプのもの。

「そんなもので何をする気？　そんなもの投げたって撃ち抜いて――」

「こう、使うんですよ」

クレセントは口でピンを外すと、足元に落とした。爆発音と共に、白い閃光がクレセントを飲み込む。

マリアは飛び散る破片から身を守りながら、爆発の中心へ目を向けた。
煙が晴れると、そこには全身に傷を負いながらも、両の足で立つクレセントの姿。床が抉られ、クレセントを縛るものはなくなった。
「足を抜くためだけに――」
信じられない光景に、一瞬でも動きを止めてしまったのが失策だった。クレセントは血が流れる足で床を蹴り、正面からマリアを床へ倒した。
首を手で固定し、手から銃を取り上げ、遠くへ放り投げる。
「あなたの負けです、マリア！」
「――ッ！」
「あ……っ」
倒された時の衝撃で折れた腕に激痛が走った。マリアの苦悶に満ちた顔を見たクレセントがビクリと震え、手の力が弱まった。
その隙を見逃すほど、マリアは愚かでも能無しでもない。左手で首を押さえる手を掴むと、すぐさま体を反転させて体勢を入れ替えた。
白銀の髪が、蒼い絨毯に散らばる。
「マリ――」
「馬鹿ね……クレセント」
起き上がろうとするクレセントの額に、銃口が突きつけられる。万が一のため、手首に隠しておいたものだ。
クレセントは悔しそうに顔を歪め、やがて観念したように目を閉じた。

「わたしの負けです。セレン・ウォンの言ったとおり……覚悟が、足りなかったようですね」

表情を歪め、クレセントは口角をかすかに上げた。

「――殺してください、マリア。……あなたの手で、終わりにして欲しい」

僅かに光を帯びた翡翠の瞳が、マリアを真っ直ぐに射抜いた。

マリアは暫くクレセントを見下ろしていたが、ふっと笑うと、銃口を外す。

「クレセント、幸せになりたい？」

「は？」

クレセントの瞳が丸くなる。何を言われているのか理解できない。そんな顔だった。

マリアは気にせず続ける。

「あなたは……人並みの幸せが欲しかったんじゃないの？　自分の居場所が欲しかった。他の誰かの代わりなんかじゃなく、自分自身の居場所が欲しかった」

真剣な碧の瞳に、クレセントが顔を逸らす。

マリアはクレセントの頭をそっと撫で、微笑んだ。

「そうでしょう？　だってあなたは、正真正銘――第三王女の娘なのだから」

※

朝日が差し込む大聖堂。朝の礼拝の時間も終わりに近づき、人々は姿を消した。

そんな中、光の当たらない場所で佇むセレン。目を閉じ、アペリスへ向けて頭を垂れている。

そこに近づく、一人の幼い少女。

小さな足音に、セレンはゆっくりと目を開き、微笑んだ。

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

まだ幼さの残る高い声。

「どうしたの？」

「お祈り……しに来たの」

「お祈り？」

「うん」

小さく頷く。セレンはにっこりと微笑むと、小さな頭を撫でた。

「そっか。お姉さんもなんだ。じゃあ、一緒にお祈りしようか」

「うん」

「ところで、君は何を祈りにきたの？」

「お姉ちゃんが……苦しそう、だったから」

「お姉ちゃん？　君のお姉ちゃん？」

少女は首を横に振る。

「知らないお姉ちゃん。きれいな白い銀の髪のお姉ちゃん。つらそうだったの……でも、わたしを抱きしめてくれたとき、とてもあたたかかった」
「……そう」
「お姉ちゃんは、どうしてこんなところからお祈りしているの？」
「え？　うん、そうだね。私は、光に嫌われちゃったから、かな」
「光に？」

少女が小首を傾げる。セレンは何事もないように首を振ると、そっと少女をアペリスへと向かせる。

「なんでもないよ。さぁ、そのお姉ちゃんのために祈ろうか」
「うん」

――悲しい風に祝福を。
そう願い、セレンと名も知らない小さな少女は目を閉じた。
少女の手の中で、大きなうさぎのぬいぐるみが光を浴びた。

※

「ここかい？」
「ええ。間違いないわ」
「生体反応は――四。君の情報どおりなら、ここにはヴァレリアもクレセントもいない」

フェイトがスキャナーの画面を見ながら言う。スキャナーをポケットに仕舞い、剣を持つ手に力を込めた。

「行くよ、クレア。万が一にも待ち伏せが居るかもしれない」
「ええ。私たちがここにくることなんて、容易に想像ついたでしょうしね」

クレアも腰の刀に手をかける。
フェイトとクレアは顔を見合わせて頷き、勢いよく扉を開けた。
フェイトが先行して辺りの様子を窺う。敵の気配はない。フェイトはクレアに手で入ってくるように指示すると、暗闇の中を見つめる。
ぼんやりと光る緑。

「レイナ様！」

クレアが真っ先に駆け寄った。フェイトも後に続く。
クレアの姿を見たレイナが、カプセルの内側に手を当てて表情を綻ばせた。

『良かった、無事に逃げられたのね。クレアちゃん』
「はい。レイナ様のおかげで」

クレアはガラス越しに手を重ねながら、凛とした声で言った。

「レイナ様。ここから脱出しましょう。この中から出ても少しの間は大丈夫です。館の外数百メートル先にシャロム邸にあったものを改良した生命時装置があります。一度それに入り、あとは――」
「この場が片付き次第、あなたを救います。僕には、その手立てがある」

手立てとは無論、宇宙船の医療機器である。
有事に備え、常にこの星の近くに待機させている航空艦。それに

収容しさえすれば、なんとか助かるだろうとフェイトは踏んだのだ。

『あなたは？』

レイナの視線がフェイトに向く。フェイトは背筋を伸ばして答えた。

「フェイト・ラインゴッドと申します。異国の者ですが、故あってこのシーハーツに身をおいています」

『あなたが……あのシーハーツとアーリグリフの二国間戦争終わらせた英雄』

「そんな大それたものではありません。僕はただ、シーハーツに救われた人間です」

『いい子ね。ヴァンは心配いらなかったけれど、アルベルも、あなたのような男性になってくれているのかしら』

昔を懐かしむように細められた真紅の瞳は、アルベルとヴァンのそれそのものだった。

『フェイト君、クレアちゃん。一つ、我儘を聞いて貰えないかしら？』

「はい」

「何なりと」

フェイトが、クレアが頭を下げる。

レイナは母親の笑みを浮かべると、静かに言った。

『私をここから出して……あの子たちの元へ連れて行って欲しいの』

たっぷり十秒はあった。フェイトとクレアは固まった頭を漸く動かし、それから慌てて反対した。

「い、いけません、レイナ様！　そのようなことをしていては外の生命維持装置まで持たなくなります！」

「クレアの言うとおりです。とりあえずはここから離れて、その後でも遅くは……」

『――遅い気がするのよ』

「え？」

レイナは泡立つ水の中、悲しげに微笑んだ。

『遅い気がするの。いま……いまあの子たちの下へ行かないと……私はきっともう二度とあの子たちに会えなくなってしまう』

レイナの言葉は、この広い部屋に静かに響き渡った。

フェイトも、クレアも戸惑いを隠せない。

ここからレイナを出し、クレセント達の下へ連れて行っては、確実にタイムオーバーだ。助かる確率はない。だが、今一人の母親が子供に会うことを望んでいる。それを止めることが、一軍人に出来るだろうか。

否。そんなこと、出切るはずもなかった。

この死を覚悟した瞳に、どんな言葉をかけてやれる？

生きろ？

言えるはずも無い。言ったところで、無駄な話だ。彼女は――母親だ。

フェイトは、ぐっと唇と噛むと、装置に手を伸ばした。

「分かりました。あなたの願いを尊重します」

「フェイト！？」
『ありがとう、フェイト君。……ほら、そんな顔しないのよ、クレアちゃん。フェイト君は、私のことを考えてくれているんだから。――もちろん、貴女も』
「でもっ……」
硝子に当てたクレアの手が、強く握られる。額を硝子につけ、叫んだ。
「どうして……いまでなくてもいいではないですか！　少しの間――少しの間我慢すればずっと一緒に居られるんですよ！？」
『……ううん、いましかないの。きっと、いましか』
顔を俯かせて泣くクレアを優しい瞳で見つめたレイナは、フェイトの方を向く。同じく涙を流したフェイトが、手の甲で乱暴に涙を拭って頷いた。
フェイトがカプセルの横にある装置を素早く操作すると、カプセルの中の水が引き、硝子が開く。
「貴方たちは、優しい子ね」
クレアの手が、やんわりと包まれる。水に濡れた長い、長い白銀の髪を片手でよけながら、レイナはしっかりとクレアの手を握っていた。
クレアは泣いていた。フェイトも泣いていた。
レイナはそんな二人を一度しっかりと抱きしめると、か細い声で言った。
「いいものね。外というのは……何十年ぶりかしら」
「……っ」

「く……」
「……さぁ、二人とも泣いてないで。私を連れてって」
そっと体を離したレイナは、満面の笑顔を浮かべた。フェイトは涙を流しながら頷くと、レイナを背中におぶる。
そして、一度部屋の奥を見ると、クレアに向き直った。
「“彼女たち”は、どうする？」
「まずは……レイナ様を」
「ああ」
「さあ、行きましょうか」
レイナのどこまでも明るい声が、フェイトとクレアの涙を更に深くする。
先に待つのが、永遠の暗闇だと知っているのに、なぜこんな声が出せるのだろうか。それは、まだフェイトとクレアには理解できない。
――人の親になる。その時までは。
※
「どうして……そのことを」
クレセントの目が驚愕に揺れる。覚束ない翡翠の瞳。マリアはクレセントを撫でる手を止めた。
「やっぱり――シャロム夫妻に引き取られたほうが、クローン体のクレセントというわけね」

「な――引っ掛けたのですか」

悔しそうに顔を歪めるクレセント。マリアは首を振って否定した。

「違うわ。確定情報よ」

「けれどわたしは誰にも……ヴァレリアにだって」

「――シャロムに最初に引き取られたクレセントが死んだとき、ヴァレリアはあなたじゃなくて、クローン体を入れ替えに使うつもりだった。でも、あなたはヴァレリアに秘密で直前に入れ替わった……そういうこと？」

「……その通りです。ですが、わたしが入れ替わったことはこの際どうでもいいです。どうしてマリアが知っているんですか？」

「そりゃ、赤ん坊の頃から離れてたら流石に無理でしょうけど、あなたはグリーテンに連れて行かれる四歳まで一緒にいたんでしょう？　まぁ、その時表に出ていたのは既にクローン体のクレセントだったから他の人に期待するのは無理。でも、あなたは母親とは四年間共に過ごしている」

「なにが……なにが言いたいのですか？」

クレセントの表情が強張っていく。おそらく、クレセントの中でもう答えは出ている。誰がその情報を漏らしたのかと言う事を。

だが、心はそれを否定し続けている。そんなはずはない。そんなことあるはずがない、と。

クレセントが不安に駆られマリアを突き飛ばそうと腕に力を込めた時、

「クレセント！」

懐かしい女性の声が響き、クレセントはその手を止めた。マリアはそっとクレセントに体を解放する。

ぎこちなく入り口の方を見つめたクレセントの唇が、小刻みに震えた。

「どう……して？」

――レイナがいた。ずっと思い出の中にいた母親の声が、いまこの耳に届いていた。

力の入らない腕で上体を起こしたクレセントを、レイナが力強く抱きしめる。

「ごめんね……ごめんなさい、クレセント！」

「わたしが……分かるのですか？」

クレセントは為されるがままに、抱きしめられている。マリアはフェイトとクレアの横に立つと、柔らかな笑みを浮かべて言った。

「クローン体といえど、全く別の固体よ。あなたの母親は、確かな目を持っていたようね」

「マリア……君は分かっていたのか。レイナさんがここへ来ることを……」

いきなり現れたというのに全く動じないマリアに、フェイトはそっと耳打ちをする。マリアは何も答えず、ただクレセントとレイナを見守るだけだった。

「ああ……クレセント。何度この手に貴女を抱くことを夢見たか……」

「……だめ、です。早く、あの中へ……」

クレセントが緩々と首を振る。レイナから体を離そうとするが、

力の入っていない腕では母の抱擁は外れるはずもない。
もし、クレセントが本気で押し返していても、きっと離すことはないのだろう。
レイナはクレセントの言葉を全く聞かず、揺れる翡翠の瞳を見つめて微笑んだ。

「クレセント……あなたを一度として守ることの出来なかった私だけど……一度。一度でいいの」
「……は、い？」
「母と……呼んでくれないかしら？」

クレセントの瞳が一層大きく揺れ、そこから零れ出すのは、涙。
込み上げてくる嗚咽を必死に堪え、クレセントはレイナを――母を見上げた。

「おか……さん」
「ええ、クレセント」

レイナがクレセントを抱き寄せる。クレセントもその背中に手をしっかりと回した。

「おかあ、さんっ――！」

そう、クレセントが涙声でその名前を呼んだとき、

「おい、外の奴らは片付けたぞ。なんか犬みたいな機工兵は途中で動かなくな――」

フェイトの後ろから姿を現したアルベルの動きが止まる。次いで現れたヴァンが目を見開き、部屋の中へ駆け込んだ。

「母さん！　どうして、こんなところに！？」
「いいのよ。それより、もっと近くに来て。ヴァン、アルベル……」
クレセントを片腕に抱いたまま、レイナはアルベルとヴァンに手招きをする。ヴァンが、不安そうな表情を隠そうともしないまま近寄り、アルベルもゆっくりとレイナの傍に片膝をついた。
レイナはアルベルとヴァンを残った腕で強く抱きしめる。しっとりと濡れた白銀の髪が、アルベルの顔に触れる。
「本当に……本物か？」
「ええ。アルベル。大きくなったわね。グラオにそっくり……」
グラオ、とう名前にアルベルは顔を顰める。レイナの腕を強く掴むと、吐き出したような声で言う。
「……悪い、親父は……俺の所為で」
「いいえ。いいえ、アルベル。きっとグラオはあなたを守れて誇りだった。私も、そんなグラオを誇りに思うわ。どこの世界に子供を守った夫を責める妻がいるの？」
「そう、か……」
それきり、アルベルは口を閉ざした。時折横で声を押し殺して泣くクレセントを見ては、顔を逸らした。
レイナは歯を食い縛って泣くのを堪えているヴァンに優しく微笑むと、その頬をそっと撫でた。
「ヴァン……あなたには辛い思いをさせたわね。私の身勝手であなた一人を逃がした事……辛かったでしょう？」
「俺なんかより、母さんとクレセントのほうが……」

「私がしたことで……なにが正しかったのか、なにが間違っていたのか。いまも分からないわ。でも、一つ……言えることが、ある」

レイナの呼吸が、だんだんと掠れてくる。それでも、我が子を抱きしめる手は決して離さない。

クレセントが、ヴァンが、アルベルが、一様にレイナを見つめた。レイナはぼやける目で、その泣き顔を見つめる。

「あなた、たちが……あなたたちのような子が、私の子どもで……本当に良かった」

抱きしめていた手が、崩れ落ちる。レイナの体が、ドサリと床に倒れた。

「あ……っ」

「母さん！」

「おい、しっかりしやがれ！」

ヴァンが必死に治癒施術をかける。見かねて駆け寄ったクレアとセフィリア、フェイトとマリアも必死で力を注ぎ込んだ。――だが、そんなものは気休め程度にしかならないことなど分かっている。

レイナの瞳が、徐々に閉じていく。呼吸が細い。

「く、れせんと……最後に……あなたに……」

「嫌！　最後だなんて言わないで下さい！」

「顔……近くに――あなた、の……名前。考えてた――ずっと、あの中で……」

「お母さ――！」

大きな瞳一杯に涙を溜めながら首を振るクレセントの頭を、マリアは無理やりレイナの口元へ近づける。

「マリア！？」
「聞くのよ。お母さんの二十年の想い。あなたが聞いてあげなくてどうするのよ！？」
「っ！」

クレセントははっとした様に動きを止め、すぐに唇を食い縛って耳を傾けた。零れる大粒の涙が、ポタリ、とレイナに落ちる。
マリアもまた、泣いていた。隣から聞こえる嗚咽は、セフィリアだろうか、クレアだろうか。確認する気に離れない。目を離す気になれない。
レイナは、マリアに一度微笑むと消え入りそうな声を絞り出した。

「あなた……の、なまえ。――やさ、しい……風……」

風が吹く。
締め切ったはずの室内。確かに風が吹いた。

「――――」

誰も、その名を聞き取ることが出来なかった。唯一人、クレセントを除いては。
レイナはひゅ、と空気を吸い込むと、天井を見上げて口元を僅かに吊り上らせた。

「ヴァン……ある、べる……くれせんとを……頼んだわ、よ」
「ああ、任せてくれ。クレセントは、絶対俺たちで守るから」

「心配すんな、阿呆」

笑顔を見せるアルベルとヴァン。

安心したように、レイナはそっと目を閉じる。

「グラオ……わたし、たちの子供は――こんな、に立派に……育ったわ――だから……もう、いい、よね」

もう一度、薄く目を開く。――蒼かった。あの暗い部屋からでは見る事すらままならなかった空が、いま、目の前に映し出されていた。

レイナの瞳から、透明な雫が流れる。

幾度、この光を望んだことだろう。あの暗い部屋で。絶望の中で、ただ一つの光を信じていた。

眩しいまでの太陽が、レイナの白銀の髪を輝かせる。その太陽に手を伸ばす。三人の子供が、その手を支えた。

「ぐらお……あなた――とこ……に、いっても――いい、よ……ね……」

レイナの腕から力が抜ける。うっすらと開かれていた真紅の瞳は閉じられ、もう開くことはない。

クレセントが、ヴァンが、アルベルが崩れ落ちるようにレイナの亡骸を抱きしめた。悲痛な叫び声が、泣き声が、部屋を埋め尽くす。

マリアがぽっかりと空いた天井を見上げ、横のフェイトへ視線を移した。

静かに涙を流したフェイトの額には、青く輝く紋章。紋章が徐々に消え、ふらついたフェイトの体をクレアが支えた。

「分かっていた……こうなること――それで、連れてきた。この罪

は、背負わなくちゃならない」
「フェイト、それは私も同じよ。あなただけのせいじゃない……だから、そんなに自分を責めないで」
フェイトの胸に顔を押し当て、クレアは声を押し殺して泣いた。
悲しみに支配された空間。そんな中、マリアだけはしっかりと前を見据えていた。
体の芯からくる震えをなんとか押しとどめ、足を踏ん張る。
「まだ……終わったわけじゃないわ。まだやるべきことがある。そうでしょう？」
心で泣くマリアの肩をそっと叩いたフェイトが、返事をしようとした。その時だった、
「クレセント！？」
「どうした！？」
ヴァンとアルベルの叫び声が、ぽっかりと空いた空へ響いた。
マリアは血相を変えてクレセントに駆け寄る。心臓を押さえて苦しそうに呻いている。マリアは頭をふった。
「そういえば……どうしてクローン体でもない彼女が？」
忘れていた。クレセントがクローンでないとするならば、この症状の説明がつかないことを忘れていたのだ。
必死に頭を働かせるが、思い当たる節もない。
今更やっぱりクローンでした？
そんなことあるはずがない。

「どうして……この子が」
その間にも、クレセントの容態は悪化していく。フェイトがカナンで見たそれよりも、遥かに深刻だ。
クレアとセフィリア、ヴァンが治癒施術をかける。だが、やはり効果はない。
「あ――くっ」
「クレセント！　マリア！　今すぐクリフに連絡を！」
時間はない。全てを片付けてからなどと悠長なことを言っている場合ではなくなった。フェイトが呼びかけると、マリアは頷いて手首に仕込んだ通信機を耳に当てる。
が、
「！！」
腕に走る衝撃。一本の細長い刃が、通信機を貫いていた。プロテクターのおかげで腕に損傷はなかったものの、通信機は煙をあげて真っ二つに割れる。
刃が引き込む、その方向をマリアが睨みつけると、仮面をつけた金の瞳の男が、口元に歪な孤を描いて立っていた。
「く――ハハハハ！　いや面白い！　なかなか泣ける演出だったじゃないですか！」
クレアの顔が憎悪に染まる。
一歩前へ踏み出し、真っ直ぐに刀の切っ先を男に向けた。
「ヴァレリア――！」

1－29　三日月の瞳

誰もが、何が起きたのか理解できなかった。気付けばクレセントを除く全員が入り口と反対側の壁に叩きつけられ、その場に倒れ伏していた。

そして、全身に走る痛みを堪えながら顔を上げたところで、漸く理解した。漆黒の狼が、そこにいたのだ。

「これは……機工兵。あの時は動かなかった、のに……」

セフィリアが自らに回復施術を施しながら体を起こす。そしてすぐさま近く倒れていたアルベル、レイナを抱えていたヴァンの傷を癒す。

クレアも同じようにしてフェイト、マリアの傷を癒していた。

ヴァレリアは入り口の前に立ち、それを邪魔するでもなく愉快そうに眺めていると、昂ぶった様子を隠そうともせずに両手を広げた。その格好のまま足元に転がるクレセントを見下す。

「ハハハハ！　まったく、とんだお笑い種だ。グリーテン本国にいるはずのオリジナル・クレセント。自らの人形を身代わりに使って抜け出した結果がこれか？」

「ヴぁ……レリア……っ」

「気に入らないんだ、その瞳。まだあの生気のない瞳のほうがましだったのだがね」

そう言って嘆息したヴァレリアが、クレセントの頭を踏みつける。

クレセントの顔が苦痛に歪む。心臓のほうの痛みは一時治まったようだが、何時再発してもおかしくはない。

「ぐ……っ」
「くそ！　その足を退けろ！」
「ヴァン・ノックス。君にも失望したよ。志半ばで篭絡されるとは……やはり君も男だな。惚れた女の前では大儀など霞むか？」
「下衆なことを――！」

セフィリアが刀を抜く。
ヴァレリアはくつくつと喉を鳴らせると、仮面を抑えて笑った。

「これはこれは美しいお嬢さん。下衆、などと汚い言葉、一体どこで覚えたのですか？　貴女のような方にそんな言葉は」
「な！」
「似合いませんね。不愉快です」

誰一人としてその行動を追えた者はいなかった。気付けば、セフィリアの前に冷笑を浮かべたヴァレリア。
傍に居たアルベルが止めようとするのも叶わず、セフィリアの体が強く壁に打ち付けられる。先程機工兵にやられたものの比ではない。肋骨が砕ける音が、その場に居る全員の耳に入った。
声をあげることも出来ずに、セフィリアは口から大量の血液を吐いて崩れ落ちる。

「セフィリアッ！」

クレアが慌ててその傍に駆け寄り、ヒーリングを施す。
だが、目覚める気配はない。折れた肋骨が肺に刺さってでもしていたら、一大事だ。クレアの顔から血の気が引く。

「……許さない！」

クレアが刀を握る。おぞましいまでの施力がクレアに集まる。それを刀に集中させ、クレアがヴァレリアに切りかかろうとしたところで、

「待ちなさい」

マリアが、それを止めた。

「マリアさん！　止めないでください！」

「馬鹿ね。いまの動きを見たでしょう？　闇雲にかかって勝てる相手じゃない。ここであなたまで戦闘不能になったら勝てるものも勝てなくなるわ。それに、あなたらしくもないわ。取り乱すなんて」

「……っ」

クレアの刀を握る手が白くなる。確かに、そうだ。

レイナの死、ヴァレリアの蠍の挑発、セフィリアの怪我。これらに触発され、冷静さを欠いていた。

クレアは大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐く。自分の頬を叩いた。

「く、クレア？　なにを……」

「大丈夫」

慌てるフェイトを尻目に、クレアは落ち着きを取り戻した。褐色の瞳の輝きは、シーハーツ軍総司令官のもの。

マリアは不敵に笑い、元の位置に戻っているヴァレリアを睨んだ。

「あなた……クレセントが本物だと気付いていたのね」

「当たり前だろう。いくら私でも出来損ないと本物の力量の違いくらい分かる。――クク、いやしかし……笑いを堪えるのは大変だったよ。自らを複製だと名乗る時のこいつの表情！」

言葉遣いが崩れるのも構わず、ヴァレリアは尚も続ける。

「健気じゃないか！　本国に身代わりを立ててまで私に会いにきた理由はなんだと思う？　これ以上複製を作らないでくれ、だぞ！？」

クレセントの顔が、悔しさに歪む。ぐっと拳を握り締め、涙を堪えているようだった。

アルベルは一度クレセントに視線を向けると、すぐにヴァレリアを睨みつける。

「で、きさまはどうしたんだ？」

「ああ、親切な私は快く承諾してやったよ。一生私の飼い犬になることを条件にな！」

「クソ虫が……」

「なにを言う。元々私の実験体だ。大して変わらんだろう。無条件と言ってもいいくらいだ。元より、このような欠陥だけの技術を使ったガラクタなど、これ以上作る気にもならなかったが」

「！！」

クレセントの瞳が大きく開き、ついに涙が零れた。ストッパーが外れてしまったように、止まらない涙を、クレセントは目を強く閉じて堪えた。

苛立たしげ舌打ちをしたマリアは、手首に仕込んだもう一丁の銃をヴァレリアに向けた。

「レイナの傍にあった。三つの生命維持装置に入っていたクレセント。あれを利用してクレセントを操っていたというわけね」

レイナがいた部屋の更に奥、そこにはレイナと同じように生命維

持装置に入れられたクレセントがいたのだ。ただ、その中にいることからして恐らく失敗作であろう。
言葉も喋らず、感情も無く、まさに生きた人形だった。

「ああ、すぐに処分しようかとも考えていたんだがな、あれがある限りこいつは私を裏切れん。母親と共に保険させてもらったよ。だが、最早なんの意味もないな」

ヴァンの手の中にいるレイナを見下ろし、ヴァレリアは喉を鳴らした。

「その馬鹿な母親も消えた。あのガラクタも全て消し去ってくれる。そして……」
「……っ」
「おまえも、用済みだ。飼い主の逆らう犬など、飼う価値もない」

ヴァレリアの手が、クレセントに向けられる。今、あの腕が岩石の刃と化せば、クレセントの体など、いとも容易く突き抜けてしまう。

「くそっ！」
「クレセント！」

フェイトが駆け出し、マリアが銃を放つが、機工兵により全てが遮られる。
ヴァレリアの手に力が入った。

「駄目だ！　間に合わない！」
「――死ね。向こうで両親と仲良くやるんだな」

向かってくる刃。仰向けに倒れているクレセントには、これを防ぐ手立てはない。

「……わたしは――」

マリアの自分を呼ぶ声を聞きながら、クレセントは瞳を閉じた。

「あなた……」

マリアの呻くような声。クレセントの呆然とした表情。

刃は、クレセントの顔のすぐ横に突き刺さっていた。ヴァレリアの岩石の刃は、一刀両断されていた。

クレセントと、ヴァレリアに切りかかった女性の目が合う。女性は大きく溜息を吐くと、唖然と切られた腕を見つめるヴァレリアを蹴り飛ばし、クレセントを抱き上げてマリア達の下へ連れて行く。

そして、クレセントの顔に付いた汚れを手で拭うと、

「クレセント、ごめん」

申し訳なさそうに、頭を下げた。

「ディル……ナ？」

「あなたどうして！？」

マリアの言葉には反応せず、ディルナはクレセントに頭を下げ続ける。

「全部聞いた。謝っても許されることじゃないのは分かってる。でも、それでも謝らせて欲しい」

クレセントは複雑な表情を浮かべた。おそらくディルナに対し、それほどの恨みはもっていないのだろう。

だが、あの時。詐称疑惑で囚われていた時に突然現れ、言われた言葉。それを思い出し、クレセントは痛む胸を押さえた。

ディルナはそんなクレセントの顔を見ると、顔を俯かせて呟くように言った。

「私を恨むのは当たり前だ。好きで……クレセントとして生きてきたわけじゃない。好きで、私たちを騙してきたわけじゃないのに……」

「……！」

「辛かっただろう。クレセントとして生きていくのは。だから、昔のおまえを、おまえじゃないクレセントを知る私は、苦痛だったはずだ」

「そんな、ことは……」

ないとは言えなかった。実際にそうだったのだから。

ディルナに話しかけられるたびに辛かった。この笑顔を向けられる相手は自分ではないはずなのに、それを言う事も出来なくて、次第に避けるようになった。

ディルナも傷ついたことだろう。なのに、助けてくれた。それは罪の意識からなのかもしれない。だが、そんなことはどうでも良かった。

クレセントはディルナの手を取ると、柔らかく微笑んだ。

「助けてくれてありがとう……ディルナ」

「あ……」

見たこともない笑顔だった。ディルナは小さく息をつくと、クレセントの手を握った。

「どういたしまして」

その様子を微笑んで見つめたマリアは、クレセントに向き直って言った。

「クレセント、もう一度聞くわ」

マリアの声が、広い空間に響く。それほど大きくない声のはずなのに、全員の耳にしっかりと届く声。

「幸せに、なりたいんでしょ？」

「なり、たい」

素直に、そう口にした。驚くほどあっさりと口に出た言葉。

幸せになってはいけない。犯した罪と、死んでいった複製達の無念を抱えながら生きていかねばならないと思っていた。

でも、今。それを捻じ曲げようとしている。クレセントは口にすることを恐れながら、それでもはっきりと言った。

「マリアやヴァン、シレーネ、アルベルさん、ネイビス様、クレア様、フェイト様、セフィリア様、ディルナ……皆と、もっと一緒の時間を生きてみたい……」

マリアはその答えに満足するように頷くと、クレセントに手を差し出した。

その手と、ディルナに支えられ、クレセントは立ち上がる。

「クレセント、覚えてる？」

マリアが銃を空に向ける。解き放たれた天井から差し込むのは、あの時とは違って雲からしっかりと顔を出した太陽。

「神がおまえは幸せになるなというのなら、そんな神倒せばいい」

マリアがフェイズガンの引き金を引く。光の奇跡は真っ直ぐに太陽の光と同化し、すぐに見えなくなった。

「あなたを倒してでも……」

『私は、幸せになる』

二人の声が、見事に揃う。それは何時かの雪の日。
マリアとクレセントが初めて会った日。

「まさかあの時は、あなたがこんな人だとは思いもしませんでした」

こんなにも人の心を乱す人だとは、知りもしなかった。
クレセントが擽ったそうに笑い、マリアを見上げたとき、

「笑い話も……ここまで来ると笑えないな」

ガラリと瓦礫が崩れる音が聞こえ、ヴァレリアが立ち上がった。
傷らしい傷を負っている気配も無く、腕はいつの間にかしっかりと元通りになっていた。

「馴れ合い……私の一番嫌いな言葉だ」
「なにを言っている。おまえだって組織の一員だろう！」

フェイトが、ヴァンが、アルベルが女性陣を庇うように立ち塞がる。
ヴァレリアは悪意に顔色を染めると、自らの仮面を取り払って叫んだ。

「それが気に食わないというのだ！　国王や元老院の奴らは私の力を認めようとしない。あの素晴らしき力を生み出した私を！！」

金の両目が、狂気の色に染まる。
その場の誰もが、その凶悪な殺気に身を強張らせた。

「だから私はグリーテンを滅ぼすのだよ！　いや、作り変えるのほうが正しいかな」
「そんな、そんな身内のいざこざの為にこんな犠牲を払ったというのか！？」

フェイトが叫ぶ。

「許さないぞ。おまえだけは……絶対に！」
「ふん、まぁ、待て。面白い余興を用意したんだ。君たちにも私の研究を直に見て頂きたい」
「……まさか」

クレセントの顔から血の気が引く。
数本のダガーをヴァレリアの足元へと投げ、素早く詠唱を行おうとするが、

「止めなさい！　あなたは施術を使うと体が……！」

マリアに口を押さえられ、中断された。

クレセントはマリアの手を振り払うと、ヴァレリアに向かって血相を変えて叫ぶ。

「止めてくださいヴァレリア！　いまこの場で実験を行って、もし失敗したら救う手立てはないんですよ！？」

「黙れ、役立たずが。実験体がどうなろうと私の知ったことではない。成功すれば良し、失敗すればよい見世物になる」

「あなたという人は！　フェイト様！　早く、クレア様を連れて逃げて下さい！　でないとクレア様が――」

「クレア？　クレアがどうなるっていうんだ！？」

フェイトがクレセントの肩を強く掴む。その力強さにクレセントは顔を顰めるが、そんなことを気にしている場合ではない。

「とにかく説明している暇はありません！　早くここからお逃げください！」

フェイトの腕を振り払い、クレセントはクレアを庇うように立つ。

だが、

「残念だったな。流石のおまえでも、その弱りきった体では、反応できなかったか」

「しま……」

気付いたときにはもう遅かった。ヴァレリアの細く、細く伸びた腕が、クレセントの足元を通り抜け、クレアの足に突き刺さってい

た。

「っ」

「クレア！」

フェイトがすぐクレアに駆け寄り、治癒術を施す。傷はすぐに治った。

しかし、クレセントはその場にへたり込み、絨毯を強く握った。全身がかたかたと震え、口からは言葉にならない声。

「クレセント、どうしたの！？」

「わたしのせい、だ……クレア様は……」

両手で自分を抱きしめ、クレセントは顔を真っ青にして呟く。フェイトに治療してもらったクレアが、クレセントに近づき、その肩に触れる。過剰なほど跳ね上がる肩。クレセントの怯えた瞳が、クレアを見た。

「クレセント？　私ならだいじょう……っ！？」

クレアは心臓を締め付けられるような痛みを覚えた。

痛みは治まり、それからくるのは得体の知れない感覚。強いて言うならば、体の中を何かが駆け巡っている。そんな感じだった。

「あ……な、これ……は」

クレアが体を抑えて座り込む。異変に気付いたフェイトとヴァンが、クレアの傍へ駆け寄った。

「クレア！」

「どうしたんだ！？」

二人の声も、今のクレアには届かない。

体の中を駆け巡っていたものが、脳に達したとき、クレアは恐怖に震えた。まるで自分が自分じゃない何かに浸食されるような感覚だった。

「さぁて。ラーズバードの最高峰の力は、お気に召すかな」

「貴様！　なにをした！？」

アルベルの言葉にヴァレリアは答えない。ただ興味有り気に事の成り行きを見つめている。

涙を零したクレアが、フェイトへと手を伸ばす。

「フェイ……ト」

「クレア！？」

フェイトは目を疑った。クレアの指先が、まるで岩石のようになっているのだ。

その意味を唯一理解しているクレセントが頭を抱え、ヴァレリアが舌打ちをした。

「あ……ああ」

「失敗――そうか。確かこの娘の母親は施力がなかったな。そこでバランスが崩れたか……」

「クレアになにをした！　答えろ！」

クレアの手をしっかりと握ったフェイトの額が蒼く輝く。ヴァレリアはそれを面白そうに眺め、顎を撫でた。

「ちょっとした実験だよ」
「実験だと!?」
――何の実験だ。
そうフェイトが叫ぼうとした、時とまさに同時だった。
冷や汗を流したクレセントが、よろけながらも立ち上がり、重々しく口を開いた。

「第二世代の人形遣いを造る……実験です」

※

「第二世代の……人形遣い?」
誰の言葉かは分からない。
クレセントは自らの体を強く抱きしめ、頷いた。

「元々フェイト様の国で言うクローン技術は、グリーテン王国で数が減少していく人形遣いを増やすために開発されました。ですが、寿命の短さ、能力の欠落など問題点が多く、それはすぐに廃止になったのです」

シーハーツで施術士不足を解消しようとしたように、グリーテンでは年々減少する人形遣いを増やそうと考えたということである。
そして、その欠落した技術はグリーテンで認められず、流れ着い

たシーハーツに悲劇を齎した。

「そのクローン技術に変わり新たに考え付いたのが、施力を持つシーハーツ人の体内に人形遣いの力の源ともいえる核を埋め込むこと。施力が人形遣いの力を著しく高めることは立証されていました。―既に施術士の血液や体組織から幾つかの薬品が開発され、強化剤として使用されています」

「核？」

「核とは我々ヒューマンで言う心臓のようなもの思ってもらえれば……ただ大きく違う点は、その位置を自由に決められること。極端な話、外部に出すことも可能です」

そう言い、クレセントは続ける。

「そこでヴァレリアが考え付いたのが、逆の発想です。人形遣いを強化するのではなく、施術士を人形遣いにしてしまえばいい。人形遣いの核を被験者の体内に埋め込む。あとは、直接体内に力を注ぎ込むことで、体の作り替えがおきます。そして、それを行うために必要な核はドールマスター級でなければ効果は低いことも判明しました」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

顔色を失ったヴァンが、掠れる声でクレセントに言った。

「シーハーツ人から薬を造るって……そんなに沢山の人をどうやって？」

「……現在、この薬品の開発は滞っている。そう言えば、理解して頂けますか？」

遠まわしな言い方。ヴァンは理解できずに唸る。

「なるほどね」

いち早く反応したのは、マリアだった。

「戦争。アーリグリフが捕虜のシーハーツ人を売っていたのかしら？」

「流石はマリア・トレイター。その物分りの良さには恐れ入る」

ヴァレリアが拍手を送る。マリアはあからさまに嫌な顔をした。

「……まるでマッドサイエンティストね。気が狂ってるとしか思えない」

「褒め言葉として受け取っておこうか」

「それで……失敗したらどうなるの？」

マリアがクレアを見ながら言う。岩石化はもう手首まで侵食が進んでいた。

クレセントは苦々しげそれを見つめ、顔を伏せた。

「ご覧の通り……全身がアンフロックのように岩石化し、それが心臓まで達した時点で……死に至ります」

「そん、な……なにか――なにか方法はないのか！？」

体が徐々に固まっていくのは、どれほどの恐怖と苦痛を与えられるのだろうか。想像も付かない。

フェイトは顔を歪めて呻くクレアを強く抱きしめ、クレセントを見上げた。

クレセントは顔を上げると、ヴァレリアを見た。

「勿論、このような場合に備えて本国では、核を溶かし消去する薬は開発済みです……しかし」
「残念だが、私は持っていない」
「……ヴァレリアは半ばグリーテンを追い出される形で抜けた身。組織の中枢にある研究機関から重要薬品であるあの薬を持ち出すなど、不可能だったのでしょう」

その通り、とヴァレリアは肩を竦め、クレアを見下したように笑った。

「しかし、ラーズバードの最高峰で失敗とは……やはりもう期待は出来ないか」
「どうしてそこまでラーズバードに拘るの？　施力を優先するなら、血統限界値の高いクレセントを選んでもおかしくはないでしょう？」
「いままで曲りなりのも成功したのは、ほとんどがラーズバードの人間だからだ。この役立たずを使うなど万が一にも有り得んな。血統限界値を下げる薬を飲んだやつにこのような負担のかかる実験をしようものならとっくに死んでいる」
「血統限界値を下げる薬？」

マリアが眉を上げる。クレセントが胸を押さえた。

「当然だろう。奴の血統限界値は六十九％だぞ。あの複製が十六％しかなく、それが公になってしまった以上こいつの血統限界値を下げるしかない」
「……よく、そんな薬が作れたわね」
「こと薬学や人体実験に関しては、グリーテンでも私の右に出るものはいない。だが、設備の整っていないここでは思ったように作れなくてな。半ば毒薬のようなものになってしまった」
「なんですって……？」

マリアの口調が怒気を含む。ヴァレリアは懐から小さな小瓶を取り出して手の中で弄んだ。

「血統限界値は確かに抑えられる。だが、強い力で抑えているため、施力に大して拒絶反応を起こしてしまうのだ」

「クレセントが時々訴える痛み……それが原因だったのね」

「まぁ、直接体に施紋を刻まないことで緩和しているが。奴は使いすぎた。まるで死を早めているとしか思えんほどにな。その上更に飲んだとあっては……最早体内は酷い有様だろう」

マリアがクレセントを振り返る。目が合ったクレセントは、罰が悪そうに顔を逸らした。

ようやく合点がいった。クレセントの血統限界値の低下は、更なる薬品の服用だったのだ。理由は大体想像は付く。十中八九、死期を早めようとしたのだろう。何せ、そうする原因は腐るほどあるのだ。

そして、クレセントが施術を使ったときに訴える痛み。それも納得がいった。

「ったく……ちょっとは自分の体を大事にしなさいよ！」

「……ごめん、なさい」

「そんな事を言ってる場合じゃない。クレセント、何か方法は無いのか？」

ディルナがマリアとクレセントの中に入る。

クレセントは暫く考え込むと、思い出したように顔をあげた。

「一つだけ……方法があります」

「本当か！？」

フェイトが顔を上げる。クレアの侵食は、腕まで進んでいた。
クレセントはクレアの苦しそうな顔を見つめ、震える腕を押さえて続ける。
「ドールマスター級の力があれば、外部から核を破壊することが可能です」
「そんなことが……」
「人形遣いが機工兵を操る際に出す、特殊な力を体内の核へと照射する。人形遣いの核は機工兵を操る源です。そして、それは人形遣いごとに異なる力。機工兵はこれに同調しますが、異なる核同士は反発しあい、いずれ壊れます。普通の人形遣いではドールマスター級の核は破壊できません。だから、破壊するならドールマスターの力が必要になります」
「でも、それだとヴァレリアじゃ駄目だってことだろう？　どのみち……不可能だ」
ヴァンが肩を落とす。フェイトの顔が、絶望に染まった。
クレセントは、治まることなく震える腕を無理やり押さえつけ、クレアの前にしゃがんだ。
「クレセント？」
「……わたしが、やります」
「え？」
フェイトが唖然となる。クレセントの言っていることが、理解できなかった。
クレセントは、無理やり作った笑顔をフェイトへと向け、胸に手を当てた。
「わたしは成功しているんです……」

マリアの心臓が、大きく脈を打った。聞きたくなかった。その続きを。

フェイトは見た。クレセントの翡翠の瞳が、徐々に色を変えていくのを。

そしてその瞳は、

「人形遣いを生み出す……実験に」

夜に浮かぶ三日月を、映し出した。

1－30　Last－S

「な……なにを言ってるんだい？　クレセント」

フェイトが数秒の時を経て絞り出した言葉は、かなり掠れた声だった。

クレセントの金色に輝く瞳はフェイトをしっかりと映し出していた。金の瞳はネイビスで見慣れていたつもりだったが、まるで違う。夜空にくっきりと浮かぶ三日月のように鋭く光るそれは、生きているかのようにさえ見えたのだ。

深い翡翠の色はどこにもない。全てを見通すかのような静かな金。ヴァレリアのような狂気を含んだものではなかったが、その沈黙を通す金に、フェイトは底知れぬ恐ろしさを感じた。

言葉を失ったフェイト。それに変わり、動揺した声を上げたのは、ヴァレリアだった。

「どういう……ことだ？　なぜ、おまえが」

「……」

クレセントの金が、ヴァレリアを睨み据える。白銀の髪から見える三日月に、ヴァレリアは一歩後ろに下がった。

「そうか、あの腐れ爺か。私が居ない間におまえに第二世代人形遣いの実験を施したのは……あの爺、勝手に私の研究を！」

「残念ながら、あなたの研究ではありません。ボノルル卿による、新たな人形遣いです」

「なんだと？」

「あなたも知っているでしょう。人形遣いの力を高める源は、なにも施力だけではないと言う事を」

ヴァレリアの表情が強張る。クレセントは立ち上がり、指を折りつつ言った。

「フェザーフォルクを含む、現在発見されているだけで四つの種族」

クレセントが小指を曲げる。

「そして、シーハーツ人。これら全ては人形遣いの能力に作用します。あなたは以前言っていましたね……これらの力全てを合わせたとしたならばどのような怪物が生まれるだろう、と」

「まさか……おまえは」

「その通りです。わたしがその原理の最初の被験者、第三世代の人形遣いです。六つの要素が絶妙なバランスで保たれている生命体です」

クレセントが胸に手を当てる。

「ちょっと、話が全然見えないんだけど……」

頭をふったマリアが、ヴァレリアとクレセントを見る。クレセントはマリアに向き直ると、落ち着いた口調で言った。

「グリーテン本国に居た頃、グリーテンの研究機関のトップであるボノルル卿から、わたしは人体実験を受けた。そういうことです」

「なんであなたが？」

「検査の結果。適合率が一番高かったのです。というより、現段階ではわたし以外に適合者は存在しません」

「どういう意味？」

「わたしの中に流れている血です。これは、もうわたしの血ではあ

りませんから」

マリアはその言葉に首を傾げる。

「意味がわからないわ」

「そうでしょうね。わたし自身、よくわかっていないのですから。とにかく、わたしは人形遣いとしての能力を持っていることは真実です。――いま重要なことは、それだけでしょう」

「じゃあ、あなたはあのヴァレリアよりも強い力を持っているっていうこと？」

「いえ、この実験は不完全です。力を解放すれば軽く凌駕するでしょう。しかし、そうなった時どうなるかは、わたしもわかりません」

クレセントは己の手を見つめ、それをぎゅっと握る。

「正直、恐ろしいです。自分の中に眠る力が。でも、そんな恐怖しか与えないと思っていた力も……誰かの役に立てるんですね」

「クレセント……」

「もしかしたら、力が暴走してしまうかもしれない。そうなればわたしがわたしでいられるかすらわからない。マリア……それでも、あなたはわたしを」

クレセントの瞳が、一瞬翡翠に戻る。

「嫌わないで……くれますか？」

不安に揺れる翡翠の瞳。マリアは息を吐いて微笑んだ。

「当たり前でしょ。王家の娘だのクローンだのであなたには驚かされっぱなしなんだから……今更大抵のことじゃ驚かないわよ」

「良かった……」

安堵したように微笑むクレセントの瞳が、金へと変わる。
笑みを引っ込めたクレセントはヴァレリアに振り向き、剣を向けた。

「ヴァレリア……邪魔するというのなら、あなたから先に片付けますが」
「……邪魔？　邪魔などするものか。そこのクレア嬢が生き残るより、おまえに生き残られたほうが後々面倒だからな。自ら死んでくれるというなら、有難い」

クレアとセフィリアを除く全員が一斉に背後を向く。
新しい玩具を見つけたかのような声音で笑うのは、ヴァレリア。
マリアが額に手を当ててヴァレリアを見た。

「どういう意味よ？」
「核を除去するためには、それ相応の力が必要だ。いくら第三世代とはいえ、そいつはもう死にかけの身体。よしんば上手く除去できたとしても、クレセントが生き残る可能性などないだろうな。それを分かっているのか、クレセント？」
「かまいません」

迷いのない言葉。マリアが力任せにクレセントの肩を掴んだ。
そのままクレセントを立たせ、その金の瞳を真っ向から睨む。

「クレセント！　どういうことよ！？　あなた言ったじゃない！　……生きたいって」
「……」
「あれは嘘だったの！？」

「……嘘じゃ……ありません。すべて、わたしの本心です」
「なら！」
「マリア」
酷く、穏やかな声だった。マリアを見つめる三日月の瞳も、また同じ。
クレセントはマリアの手にそっと手を添えると、柔らかく微笑んだ。微笑ったのだ。この、状況下で。
「わたしは――わたしが初めて人を救えるんです。初めて……誰かの為になれるんです」
マリアが絶句する中、次にクレセントを止めたのはフェイトだった。
「駄目だ、クレセント」
「このままでは、クレア様は死んでしまいますよ」
「……きっと、クレアは望まない。君の犠牲の上の命なんて。僕だってそうだ」
フェイトは苦しそうに呼吸するクレアの髪を優しく撫で、クレセントを見上げた。
クレセントは瞳を閉じ、フェイトの前にしゃがみ込む。
「ならば、どうしますか？　このまま見殺しにするというのですか？」
「そんなことは絶対にしない。救ってみせるさ……僕の力で」
蒼の紋章がフェイトの額に集束する。クレセントは首を傾げるだけだったが、マリアは慌ててフェイトを止めた。

「フェイト！？　まさかディストラクションを使うつもり？」
「ああ。イチかバチかだ。賭けてみるしかないだろう？　破壊の力で、クレアの中の核を消滅させる」
「無理よ。あなたはまだ完全に力の制御が出来ていない。こんな細かい作業が出来るわけがないわ」
フェイトの腕を抑えるマリア。それをフェイトは強引に振り払った。
蒼の紋章が消える。
飛び散った冷たい雫が、マリアの頬に当たった。
「じゃあ、どうしろっていうんだよ！？　クレセントを犠牲に！？　そんなことは絶対に出来ない！」
「そんなの……分かってるわよっ」
それはマリアとて同じことだ。クレセントを犠牲にすることなど、微塵も考えてなどいない。だからといってどうするのか。それも分からない。
アルティネイションを使うことも考えたが、あれは改変する力であってそれそのものを消すことは出来ない。それにいくらマリアが力の制御が出来るからと言って、体内の何処にあるかも分からない物を一点だけ改変するなど、神業に等しかった。
双子の睨み合いが続く。その様子を黙って見ていたクレセントは、横目でディルナを見た。
その瞳を見たディルナの顔色が、途端に色をなくす。クレセント

は、ディルナの視線にただ頷くだけ。

「お願いします」

「……後悔は……しないのか？」

「はい」

「そうか……分かった」

そう短く言うと、ディルナはフェイトとマリアの間に入り、二人をクレアから遠ざけた。

「ディルナ！？」

「なにをするんだ！？」

クレセントがクレアの元に寄る。

「てめぇ、まさか！」

「よせ！　クレセント！」

アルベルとヴァンはクレセントのなさんとしていることに気付き、止めに入ろうとしたが、

「行って。アルベルさんとヴァンを抑えて」

機工兵がアルベルの眼前に大きく立ち塞がった。

それに驚異の色を示したのは、他ならぬヴァレリアだ。

「馬鹿な……私の機工兵が！？」

「命令権限をわたしに与えたままなのをお忘れですか？　申し訳ありませんが、このまま貸していただきます」

「……」

「……邪魔は、しないと仰いましたよね」
「ああ。さっさと死ぬんだな」
そう吐き捨てるように言ったヴァレリアは、マントを翻してクレセントから距離を取る。
横を見れば、ヴァンとアルベルが必死に機工兵を退かそうとしているが、焦りからかろくな攻撃を与えていない。
「クレセント！　止めろ、止めてくれ！」
「ざけんじゃねぇぞ！　そこのクソ虫の力を使えばいいだろうが！」
その叫び声も、今のクレセントには覚悟を後押しするものでしかない。
クレセントは困ったように微笑み、アルベルとヴァンを見つめた。
「ヴァン、アルベルさん。忘れません、あなたたちのような誇り高い兄がいたこと」
「んなセリフ聞きたかねぇんだよ！　俺はおまえと一度戦ると決めた！　だから死なれちゃ困るんだ！」
アルベルが機工兵の間から刀を振り回す。
クレセントはアルベルの近寄ると、その刀に剣を合わせた。金属のぶつかる音が響く。
「いつか、機会があれば、お手合わせ願います」
「――ッ！」
唇を噛み締めるアルベルの横で、ヴァンがクレセントを見つめた。
「クレセント。フェイト君の言うとおりだ。おまえを犠牲に助かっ

たとしても、クレアは一生後悔する」
「そうですね。そうかもしれません」
「だったら！　だったら――止めるんだ……こんな、馬鹿なことは」
決して手は届かない。どれだけ手を伸ばしても、ヴァンの手は機工兵に阻まれ、妹には届かない。
守ると誓ったはずの手が、とても、遠かった。
機工兵は決してアルベルとヴァンに攻撃する素振りは見せないが、それでも通すようなまねはしない。
クレセントは伸ばされたヴァンの手にそっと触れると、一度強く握り締めた。
出会ってから数年。ずっと励まし続けてくれた手。この手に頭を撫でられたとき、感じたものは確かに温かかった。
腹部に巻かれた包帯と、滲む血を見たクレセントは、申し訳なさそうに表情を曇らせた。
「ヴァン……その傷、ごめんなさい」
「申し訳ないと思うなら、いますぐ機工兵の命令を解け」
「あなたも無茶を言いますね」
「おまえほどじゃない」
クレセントが笑う。ヴァンは笑えない。
「クレセント……っ」
ヴァンの手がクレセントの細い手首を掴む。離さないように、強く。
だが、
「さよなら。ヴァン、アルベルさん」

その手は、いとも容易くヴァンの手をすり抜けた。
空になった手。ヴァンは、それを握り締めることすら出来ず、静かに涙を流した。

ディルナに抑えられているフェイトとマリアを見る。ディルナ一人でよく二人を抑えていると思ったが、いつ起き上がったのだろうか、セフィリアがマリアを組み伏せていた。
苦痛に顔を歪めながらも、涙を流しながらも、セフィリアは暴れるマリアを離さない。
ディルナもフェイトを床に押し倒し、関節を押さえて止めている。いかなフェイトといえど、完璧に関節を押さえられては抜け出すのは難しいだろう。
ディルナとセフィリアとクレセントの目が合う。

「……おまえは馬鹿だ……最後まで」
「……ごめん、なさい」

懺悔の言葉。涙で掠れた声は、確かにクレセントに届いた。
ディルナは涙に濡れた瞳でクレセントを見つめると、口元に僅かな笑みを見せた。

「クレセント……生きたくは、ないのか？」
「ありがとう、ディルナ」
「……本当に馬鹿だよ……大馬鹿だ」

ディルナは瞳を閉じて笑い、クレセントから顔を逸らした。

その後ろ姿から目を離したクレセントは、微笑を浮かべて呟いた。

「はい。きっと、わたしは大馬鹿者です……ディルナ」

「クレセント！　待つんだ！　僕が！！」

フェイトが叫ぶ。

クレセントはフェイトを見つめると、眉を下げた。

「フェイト様は、少し優しすぎます。たまには我侭になって下さい。大切な人を、死なせたくはないでしょう？」

「馬鹿を言うな！　君だって大事だ！」

「――やっぱり……フェイト様は残酷ですね」

それは、クレセントがカナンでフェイトに言った言葉。

だが、あの時とは意味も、重さも違う。

「クレセント……」

「優しすぎるのは、時に残酷です。でも……」

クレセントが一度言葉を切る。

息を少し吸い、にっこりと笑った。

「だからこそ、フェイト様なのでしょう。いまは、その優しさを素直に嬉しく思えます」

その笑顔に、フェイトは喉まででかかった言葉を失った。死に往くものが、こんな笑顔をするのだろうか。

フェイトは泣いた。

フェイトが初めて見たクレセントの笑顔は、あまりに悲しく、あまりに残酷だった。

視線をフェイトから澄み渡る空へとあげたクレセントは、束の間目を閉じて呟いた。

「ごめんなさい……お母さん、お父さん。でも、許してくれますよね」

大切な人達を守るためだから。

初めて抱いたこの感情を、忘れたくはないから。

だから、たとえこの命が尽きようともかまわない。

零れ落ちた感情たちが、いま深海の底から引き上げられ、空白だった身体の中へ戻っていく。涙が出そうなほどの感覚。

だが、それでもいい。

あの時と同じ。ただ、この感覚に身を委ねていたかった。

目を開け、視線をずらす。眉を吊り上げ、涙を瞳に溜める蒼髪の女性と目が合う。

「マリア」

「クレセント！　やめなさい！　私は絶対に許さないわよ！　まだ、幸せになってないじゃない！　これからでしょ！？」

「幸せですよ、もう十分」

マリアの瞳が見開かれる。

クレセントは瞳を閉じて、クレアの胸の上に手を翳した。

「こんな……こんな人たちに出会えて……わたしは」

クレセントの手が翡翠の光を放たれる。その光は徐々に力強さを増し、まるでオーロラのような翠のヴェールを作り出す。

これが、平穏な日常のほんの一コマであったらなら、素直にこの光に見惚れていただろう。

綺麗ね。そう顔を見合わせて笑いあっていられただろうか。
消えてしまうのを惜しく思って、出来もしないのに頑張って繋ぎとめようとしただろうか。
消えてしまった後に、残念だったと、また笑っていられただろうか。

「止めて……止めてよ」

こんな悲痛な思いをしていなかっただろうか。
この悲しく、綺麗な翡翠の光に。
いまこれは憎むべき光以外の何者でもなかった。一つの命を救い、一つの命を犠牲にする光。

「わたしは、最後の一時、本物の幸せを手に入れることが出来た。人になることができた。すべてを……感じることができた。諦めていたものを、この胸に抱けたのです。――そしてそれは……あなたのお陰です」
「……っ」
「そんな顔をしないで下さい。わたしは、勝気に笑ってるマリアが大好きです。だから、マリア」

光が更に強くなる。もう誰も目を開けていられないほどの光が、部屋全体を包み込んだ。その場に居る全員が目を瞑る。
ただ一人、マリアを除いては。

「クレセント……ッ！」

だからこそ、マリアには見えたのだ。

優しい、それでいて悲しい光の中、クレセントが今迄に見たこともないような、幸福に満ちた表情で微笑んだのを。
心の底からの、笑顔を。
その唇が、紡いだ言葉も。

「――――」

そしてそれは、全て光の中へと消え去った。

1－31　ドールマスター集結

――怖いものはなに？

そう聞かれたとき、答えに迷った。

戦い、お化け、雷、親父。

どれも怖いと思ったことはなかった。正確には、思わなくなった。

この手に銃を持って、大切な人を守るため、約束を守るために戦うと決意したあの日から。

それから、怖いものなど無くなった。いつの日か死すらそれほど恐れることはなくなった。志半ばで死ぬのは躊躇われた。諦めるのは死んでも御免だ。

だが、諦めないで、最後まで頑張った結果ならば、仕方ないと思うようになった頃、自分の中から恐怖が消えた。

大切な人が、場所が消えるのは確かに怖かった。

でも、彼らは死なない。そんな自信があったから、それも恐怖の欄からは消えていった。

しかし、いま、確かに怖いものが目の前にある。

目の前の光が消えてしまうこと。それがなによりも怖い。

光が消えた後に、目の前にあるであろう現実が、なによりも怖い。

消えないで。――どうか、消えないで。

「クレセント――！！」

そして光は、蒼い空に消えた。

眩いほどの光が消え、いつの間にか瞑っていた目を開けたマリアの目に映ったのは、三つの人影だった。
一つはクレア。二の腕まで進んでいた岩石化は綺麗に消え、苦悶に満ちた表情は安らかなものへと変わっていた。
一瞬それに安堵し、すぐに気付く。
それが、意味するものを……。

「クレセン、ト……」

見知らぬ人物に抱えられている、まるで少女のような女性。見たこともない人物は、マリアの目には映らない。
ただ映るのは、その腕の中でピクリとも動かずに横たわっているクレセント。機工兵もその動きを止め、ヴァンとアルベルの傍に静かに佇んでいた。
マリアはふらつく足でクレセントに近寄る。

「クレセント……？」

動かない。堅く閉じられた瞳。呼べば、僅かな笑みを浮かべて素直にこちらを向くクレセントの顔は、酷く白かった。
マリアは目の奥から込み上げる涙を堪えることもしなかった。いや、出来なかった。
そんなことをする力など、どこからも沸いては来なかったのだ。
自分の身体のはずなのに、思うように動かない。まるで全身に何かが圧し掛かっているように、重かった。
ヴァンも、アルベルも、セフィリアも、ディルナも。皆一様に顔を俯かせて立っている。フェイトがクレアの元へ駆け寄り、ヴァレリアが、金の瞳を見開き、手を震わせていた。

マリアはクレセントの元へたどり着くと、その横にへたり込むように座る。そっと、その青白い手を握った。――残る温かみに、涙が零れた。

「……勝手に、いってんじゃないわよ……この馬鹿っ」

「勝手に殺さないのよ」

凛としたソプラノ。意志の強い、澄んだ声だった。

マリアは涙で濡れた瞳を、初めてクレセントを抱きかかえる人物へと向けた。

ヴァレリアと似通った格好。ただ、マントに付けられている飾りの色だけが、ヴァレリアの紫とは違い、深い翠だった。

顔は目元を鉄の仮面で隠されて見えないが、若い女性であると言う事は見て取れた。流れる薄い金糸は空から差し込む光に反射し、神秘的な輝きを放っていた。

女性はクレセントをそっとマリアに渡す。

その時、

「……っ、ん……」

「クレセント!?」

閉じられた瞼が僅かに動き、クレセントが苦しそうに身体を捩らせたのだ。

目覚める様子は無いが、確かに生きている。

「生きている……のか?」

「嘘……」

「ふん……思わせぶりしやがって」

フェイト、セフィリア、アルベルの言葉である。マリアが、皆が

目を見晴らせ、呆然と立ち尽くす中、女性は悠然とした態度でクレセントの額に手をあて、顔を顰めた。実際には分からないが、そのような雰囲気を確かに感じたのだ。

腕の中で再び静かになったクレセントを無意識のうちに片手で抱きしめたマリアは、口を一文字に結ぶ女性を見つめた。

「どうして……クレセントは生きてるの……？」

助かる確率はゼロに等しかったはず。だからこそ、クレセントは皆に言葉を残したのだ。

「核を全て消失しきる前に、気を失ってしまったのね。おかげでなんとか生きながらえたようよ」

マリアの疑問に淡々とした口調で答えたのは、金髪の女性だった。クレセントの額から手を離す。

その言葉にマリアは顔を綻ばせるが、すぐ思い出したようにクレアを振り向く。

「クレアは！？」

「問題ないわ。殆ど除去できてる。あとは私に任せて」

「は……？」

マリアの口から間抜けな声が漏れる。今、この女性は何と言ったのだろうか。任せろ、と聞こえたのは気のせいかとマリアは頭を抱えた。

女性はクレアの胸の上に手を翳すと、後ろを振り向かずに言った。

「ボノルル、ヴリジア」

「ここに」

「ねぇ、シルヴィア。これ、クーちゃん相当ヤバイんじゃない？核殆どないわけでしょ。バランス崩れちゃうよ」
「確かに……早急に手を打たねばなりませぬぞ」

マリアは息を飲む。マリアだけではない、その場でこの現実を見合わせたもの全てが、驚きを隠せないでいた。
ここにいるのは、全員がそれなりの腕に覚えのある者である。だが、誰一人、誰一人として、シルヴィアと呼ばれた女性の後ろから突如現れた老人と少女を感知することが出来なかったのだ。
そしてヴァン、セフィリアが気になったのは、女性の名前だった。シルヴィア。それは聖王国シーハーツの伝説の女王の名前。
かつて技術大国グリーテンの呪縛から逃れるため、サーフェリオの地においてアペリスの御使いより授かりし聖珠セフィラの力を解放し、グリーテンを打ち滅ぼしたとされる伝説の英雄。後に解放女王と呼ばれた、クレスティア・ダインの呼び名である。
偶然ということもありえなくは無い。それ故、二人はどこか違和感を覚えつつも敢えてこの場は沈黙を通したのだった。
そのような驚きは露ほどにも気にせず、シルヴィアはマリアに手を伸ばした。正確には、その腕の中のクレセントに。

「クレセントを……その子を私たちに任せてもらえないかしら？」
「え……？」
「このまま放置していたら、衰弱で死んでしまうわ。いいえ、それよりも恐ろしい事が起こるかもしれない」
「恐ろしい、こと？」
「説明している時間はないの。とにかく、私たちならなんとか出来るかもしれない。……いえ、私たちにしか出来ない」

シルヴィアの口調は厳しかった。伝わってくる焦りから、その言葉に偽りは無いのだろうと言う事も分かる。

核、などと言われてもマリアたちにはどうすることも出来ない。何とかなるとすれば、それは任せる他無いのだろう。

だが、だからといっていきなり現れた得体の知れない人物、ましてやヴァレリアと同種の格好をした者を一概に信用できないのも、当然のことである。

シルヴィアもそれは深く心得ていることだろう。だが、ここで引くわけには行かないとばかりに、更に口調を強めて言った。

「信用できないのは分かるわ。でも、このままにしておいたらこの子は死ぬ。下手をすればここにいる全員が死ぬわ。私は、そんな惨劇を招きたくない」

含みのある言い方だった。このままにすれば、ここにいる全員が死ぬ。その意味は到底図りかねないが、今のマリアはそれよりも気になることがあった。

「あなたたちは……何者なの？」

「あなたなら、予想くらい付いているんでしょう？」

間髪入れずに返された答えに、マリアは黙り込む。確かに、想像は付いている。十中八九これで間違いが無いという確信もあった。

口を閉ざしたマリアからシルヴィアは顔を外すと、一人部屋の隅に立っているヴァレリアへと視線を向ける。その瞬間、ヴァレリアの身体がビクリと震えた。

「本当に分からないのなら、そこの裏切り者にでも聞いて」

ヴァレリアを顎で指す。ヴァレリアはその顔を恐怖に歪め、震える指でシルヴィアを指差した。

「し、シルヴィア……それにヴリジアに爺さんまで。――なぜ貴様たちがここにいるのだ!?」
「何故じゃと？　それをお主が聞くのか、ヴァレリア？」
ボノルル、そう呼ばれた背の低い老人が、一歩前に出る。杖こそついてはいるが、白衣を着こなした背筋は真っ直ぐと伸び、表情は威厳あるものであった。
「キャハハ！　あたしたちを裏切っただけじゃなくて、シーハーツにまで手出しちゃうなんてね。あーあ、ほんとバッカじゃない？」
鮮やかな桃色の髪を上で留めた少女が、おかしそうに身体を揺すらせて笑う。シルヴィア、ヴァレリアと同じような服。飾りの色は、燃えるような真紅だった。
右半分を仮面で隠されたはいたが、露になっている左半分から窺える顔は、おそらく美人の域に入るだろう。
その瞳の色は、やはり金。
マリアは目を鋭く細め、それらの人物を見比べた。
「ドール……マスター」
「ええ。ご明察。私がその総司令、シルヴィアの蝶。あの子はヴリジアの狐。そして、研究機関の主任、ボノルルよ。彼はドールマスターではないけど」
「初めましてぇ」
「お初お目にかかる、シーハーツの諸君」
ヴリジアがにっこりと笑い、ボノルルが丁寧に頭を下げる。
しかし、マリアは名乗るどころか、更に目を細めて言う。
「……長年謎に包まれていたグリーテンのドールマスター。まさか

一度に三人もお目にかかれるなんてね」

シーハーツは幾度となくグリーテンに密偵を派遣していたが、ドールマスターについての情報は一切得られなかった。

表舞台に出てくるのは、国王とその諮問機関である元老院。人形遣い、取り分けドールマスターについては、その姿形はおろか名前すら判明していなかったのだ。

それがいま、目の前にいる。

「そもそも、シーハーツに害をなそうとした敵を信じろというの？」

「少なくとも、私たちはあなたたちに対して敵意も持っていなければ、争うつもりも無いわ」

「じゃあ、どうしてここに来たんだ？」

フェイトがクレアをその手に抱えながらシルヴィアを睨む。

シルヴィアは一度クレアを見下ろすと、すっと立ち上がった。

「決まってるわ。元仲間の不始末をつけにきたのよ」

「不始末？」

「そう。ヴァレリアのおバカさんがここで色々やらかしちゃったんでしょ？」

ヴリジアが肩を竦める。

「それを片付けにきたの。それにあたしたちはあなたたちを敵に回したくはないんだよね。むしろ仲良くしちゃいたいの」

「その矢先にヴァレリアの暴走。国内が混乱し、シーハーツに目を向けていなかった所を狙われたのじゃ。こちらの管理不足で、申し訳ないことをした」

ボノルルが真っ直ぐな背筋を曲げて頭を下げる。
その行為に、フェイトとマリアは揃って顔を見合わせる。想像していたグリーテンは、シーハーツに対し深い恨みを持っていると思っていたからである。
フェイトは視線でヴァン、セフィリア、ディルナに助けを求める。グリーテンについての一般知識はあるものの、そこまで詳しいわけではない。彼等のほうがきっとその道に詳しいだろうと思ったのだ。
そして、三人の中から代表として出てきたのは、ヴァンだった。
ヴァンはクレセントの無事とクレアの岩石化が治まったのを見てほっと安堵の色を見せると、シルヴィアの前に立った。凛然とした佇まい。やはり、ただの男ではない。そうフェイトは思った。

「シルヴィア様、と仰いましたね？」
「ええ」

シルヴィアがヴァンを見る。ヴァンは背筋を伸ばすと、胸に手を当てた。

「お初お目にかかります。私はヴァン・ノックス。聖王国シーハーツ六師団の一つ、光牙師団〈光〉の副団長を務めている者です」
「そう。それで……どうなの？　私たちがこの二人を助けると言う事、了承して頂けるのかしら？」

シルヴィアがクレア達を手で指し示して尋ねる。ヴァンは束の間目を閉じると、意を決したように頷き、目を開けた。

「お願いしても、宜しいでしょうか？」
「ヴァン！　なにを言うのですか！？」

真っ先に異論を唱えたのはセフィリアだった。痛む傷を抑えつつ、

ヴァンの横へと駆け寄る。
そしてヴァンの腕を掴んで止めようとした時、鋭い痛みが走り、その場に蹲ってしまった。

「セフィリア！」
「……っ」

手で大丈夫ということを示すが、苦痛に歪んだ顔でそのようなことをされても説得力が無い。
ヴァンは回復術を得意とはしないが、それでも気休めにはと思い、治癒術を施そうとしたところで、シルヴィアがセフィリアの前に膝をついた。

「見せて」

シルヴィアは傷に当てられたセフィリアの手をどけると、驚く彼女を気にせずに傷口へ手を翳す。
浮かび上がる金の紋章。輝かしいそれが一際強く輝くと、痛みは消え去っていた。

「あ……」
「完治はしていないわ。無理はしないことね」
「あ、りがとうございます」
「気にしないで。これも彼の不始末。それで、結局のところどうなのかしら？　早くしないと手遅れになるわよ」

シルヴィアが立ち上がりつつ辺りを見渡す。視線はクレセントを向き、やはり声は若干焦っているようだった。

「俺は構わん」

「私もだ。正直私たちの手に余るということは納得した。――だが、もし嘘だった場合は、私があなたたちを切り伏せる」

アルベルとディルナが首肯する。

「あなたたちは？」

それに頷いたシルヴィアは、マリアとフェイトを振り向く。

マリアは一度クレセントを抱きしめると、

「信じていいのね？」

「私の誇りにかけて」

クレセントを抱き上げ、差し出した。傍に立っていたヴリジアがクレセントを抱きかかえた。

マリアは軽々とクレセントを抱き上げる姿に少し驚いた。クレセントまでとはいかないが、ヴリジアも小柄な少女なのだ。だが、まるで苦にもならないような表情でクレセントを抱きかかえている。

そんなマリアを尻目に、シルヴィアは早々と指示を出す。

「ヴリジア、あなたはクレセントに用意した薬を十五分おきに与えて。絶対に目を離さないように。異変があったらすぐに報告」

「了解よ」

「ボノルルはクレセントに与えられた薬の解析、解毒剤を生成。……どれくらいで出来る？」

「三十分頂ければ」

「問題ないわ」

クレセントを抱えたヴリジア、そしてボノルルが部屋の外へと出て行く。近くで扉の閉まる音が聞こえたことから、隣の部屋へと移

動したのだろう。
それを見送ったシルヴィアはが、クレアを大事そうに抱きかかえるフェイトに視線を移す。

「どうするの？」

フェイトは強く瞳を閉じ、顔を俯かせる。
そして、低く唸るような声で、

「――……頼む」

そう言った。
シルヴィアは一つ頷くと、まるでフェイトを落ち着かせるような声をかける。

「大丈夫よ。私もこの子を死なせるつもりなんてないから」

「え？」

フェイトの疑問の声。
だが、シルヴィアはそれを無視してクレアに手を翳す。クレセントがそうした時と同じように、金のオーロラが辺りを包み込む。
数秒もなかっただろう。その光はすぐに弾けて消えた。

「これで大丈夫よ」

「ありがとう……助かった」

フェイトの脱力しきった顔を見て、シルヴィアは僅かに口元をあげた。

「どういたしまして。暫く眠るでしょうけど、明日には目を覚ます

と思うわ。クレセントの方はまだ時間がかかりそうだけど」
「あの子が助かるなら……いつまでだって待ってやるわよ」
「それを聞いて安心したわ。じゃあ、それまで私は私の仕事を済ませて貰うわね」
「仕事って……」
フェイトがそう言うのと同時に、シルヴィアは立ち上がった。
「ちょっと暴れるかもしれないから、きちんと仲間を守ってあげて」
マントを翻して真っ直ぐに歩き出す。その先にいるのは、
「どうするつもりだ……」
ヴァレリアだ。
シルヴィアは腰に差した細身の剣を抜くと、ヴァレリアの眼前に突きつけた。
「元老院の判決をそのまま伝えるわ。グリーテンを裏切り、他国に害を齎した罪」
剣を持つ手に力が篭る。
「死刑よ。この場で、あなたを裁くわ」
「くそっ！」
ヴァレリアはシルヴィアが剣を突き出す前に素早く身を屈めると、すぐ傍にあった窓の傍へ飛びずさった。
「このような所で殺されてなるものか！」

素手で窓ガラスを割り、外へ飛び降りようとするが、

「おーっと、逃がさねぇよ」

シルヴィアやヴリジア、ヴァレリアと酷似した服装。左半分を覆う仮面。胸元に輝く金の飾り。

「ダンデガの豹……！」

四人目のドールマスターが、ヴァレリアの頭を大きな手で捕らえていた。

「元とはいえ誇り高きドールマスターが逃亡とは……頂けないねぇ」

「ダンデガ……貴様まで！」

ダンデガと呼ばれたガタイのいい長身の男から逃れるようにヴァレリアが暴れる。すると、ダンデガの豹はいとも簡単にその手を離した。

ヴァレリアの身体が床に落ちる。ダンデガはヴァレリアを無視して、シルヴィアの前の前に立つ。

「よぉ、嬢ちゃん」

「なぜあなたがここにいるの？　あなたたちには本国を任せたはずなのだけれど」

「そんなのはやつ一人いりゃ事足りるだろ」

その短絡的な物言いに、シルヴィア深く溜息をつく。

「……で、なにをしにきたというの？　まさかヴァレリアを殺すため、なわけないわよね？」

「ああ。俺のものに会いにきた。どこにいる？」

「バランスが崩れかけている。いまはボノルルとヴリジアが治療中よ」

「へぇ、そりゃひょっとすると面白いものが見れるかもしれねぇってことかい」

その言葉を聞いたシルヴィアは、口元に孤を描いて嘲笑った。ダンデガの顔から笑みが消える。

「そうね。ただ、そのときはあなたの最後のときよ、ダンデガ」

「……恐ろしいねぇ」

「まぁ、いいわ。来てしまったものは仕方ないことだし、あなたはヴァレリアを殺りなさい」

「嬢ちゃんが望むならやるけどな」

不敵に笑い、ダンデガはヴァレリアの前に立つ。ヴァレリアはさきほどの格好のまま、床に腰を下ろしていた。

決して余裕に構えているわけではない。足が震えて立てないのだ。それほどまでに、この二人の力は恐ろしいということである。

ダンデガの手が巨大な鎌へと変化する。そのおぞましい光景に、フェイト達は声を発することも出来なかった。

「さぁて、おまえの核がどこにあるか教えれば、楽に殺ってやるぜ？」

「……ここだ」

そう言ってヴァレリアが指差したのは、頭。脳だった。

「素直じゃねぇか。それじゃ、お望みどおり一発で楽にしてやるよ。なにか言い残すことはあるか？」

「……地獄に落ちるがいい」

「ああ。それじゃ先行って待ってろよ」

ヴァレリアが観念したように目を瞑る。

ダンデガは満足したように笑うと、巨大な鎌をヴァレリアの頭へと目掛けて容赦なく振り下ろした。

が、

「止めろ！」

歯を食い縛ったフェイトが、剣でその重たい鎌を受け止めた。

ガチガチと震える剣。あまりの重圧に押しつぶされそうになるのをなんとか堪え、フェイトは渾身の力を込めて鎌を押し返した。押し返されたダンデガは、そのまま後ろに数歩よろける。傍で様子を傍観していたシルヴィアの目が、軽く開かれた。

「……とと。やるねぇ、兄ちゃん」

「まさか……ダンデガを正面から押し返すなんて……」

フェイトは痺れた手を握り締める。

「殺すことはないだろう！」

「あのな、兄ちゃん。こいつは敵なんだ……」

「彼はあなたたちにとっても憎むべき相手のはずよ。それを庇うなんて、どういうことかしら？」

ダンデガの言葉をシルヴィアが遮る。
真剣な表情を浮かべるフェイトは、剣を下しながら叫ぶ。
「確かにそうだ。でも、僕たちはヴァレリアを殺しにきたんじゃない。罪を償わせるためにきたんだ」
「……大切な人を殺されかけているのに、よくそんな事が言えるわね。普通は敵をとるものじゃないの？」
「やられたからやり返す。それは子どものすることよ」
マリアが、フェイトの横に並ぶ。そこから少し離れたところに居るアルベル、ヴァン、セフィリア、ディルナも、シルヴィアとダンデガを睨みつけていた。
シルヴィアは彼らを見比べ、頭を振った。
「でもね、こちらとしてもそう易々と納得するわけにはいかないのよ」
「じゃあ、賭けをしてくれないか？」
「賭け？」
「僕がヴァレリアと勝負をして、勝ったら彼を殺さないで欲しい。僕が負けたときは、大人しく引き下がる」
その言葉を聞き、ダンデガが呆れたような声をあげる。
「ハッ！　そんな賭け、俺たちになんのメリットもねぇだろ。大体、そんな内容だったらこいつがわざと手を抜くに決まってる」
「彼はシーハーツで大罪を犯した。本来なら、グリーテンで裁かれる前にシーハーツで裁くべきだ」
「……」
「もし、ヴァレリアが手を抜いてわざと負けるようなら、その時は君たちの好きにするといい。僕も大人しく従うよ。でも、この条件

が飲めないなら……」

フェイトが剣を構える。マリアも左手にフェイズガンを構えた。
アルベルやヴァンたちも、各々の武器を抜く。

「僕らが相手だ」

フェイトの碧の瞳と、シルヴィアの鉄の仮面から除く翠がぶつかる。
数瞬の睨み合い、破ったのは、シルヴィアだった。

「いいわ。その条件、飲みましょう」
「本気か？　爺さんたちにまた文句言われるぞ」
「あの人たちに怒鳴られることを避けるより、いまは彼らと無駄な争いを避けることのほうが重要事項のはずよ」
「それも、そうだな。分かった」

ダンデガは納得したように頷き、鎌を元の手に戻した。
シルヴィアは口元に握り拳を当てて微笑み、ヴァレリアを見る。
ヴァレリアは呆然としたまま固まっていたが、その視線に気付き、すぐに顔を引き締めた。

「聞いた通りよ、ヴァレリア。死にたくなかったら全力で戦って負けることね。手を抜いたら、その場で私があなたを殺すわ」
「……」
「そこの蒼髪の子に感謝するのね」

シルヴィアはヴァレリアとフェイトに背を向けて距離を取ると、くるりと振り返った。
そして、ヴァン達にも傍へ来るように指示し、フェイトとヴァレ

リア以外は部屋の入り口へ固まった。クレアはヴァンがしっかりと抱えている。
フェイトが剣を軽く振りながら問う。

「ルールは？」
「そうね。あなたに死なれても困るし、一本勝負でどちらかが負けを認めるまではどう？」
「分かった。それでいい。おまえも、依存はないな」
「好きにしろ」

ヴァレリアは投げやりだった。
眉を顰め、目の前で剣を握りなおす青年を見る。

「解せないな」

その呟きは、誰に聞こえることもなく。
フェイトが真正面に剣を構える。ヴァレリアの手が、長い刃へと変わる。

「遠慮することはないけど、隣の部屋にまで被害が及ばないようにすることね」
「ああ」

そこで、フェイトはふと思い出したように口を開いた。

「その前に、二、三質問に答えてくれないか？」
「なんだ？」
「あの武器、アーリグリフやサンマイトへおまえがばら撒いた武器はどうやって手に入れた？」

予想はついえいたが、やはり確信が欲しかった。
ヴァレリアは、何事もないように答える。

「一年ほど前か。アーリグリフのカルサア修練場で手に入れた。後々情報を仕入れてな。使えなかったが、おまえたちを分散させるのにいい餌だと思った」
「それで一人が死んだ。それはどういうことだ？」
「あれはその武器ではない。その銃の性能を参考に偽装したものだ。ああしておけば、おまえたちはすぐに動き出すだろう。使用可能なものがあると思って」
「クレセントは知っていたのか？」
「さぁな。奴なら気付くと思ったが、あの動揺。気付いていなかったのだろうな」

そう言い、クレセントがいるであろう部屋を見やる。
フェイトは一度剣を下ろすと、ヴァレリアを鋭く睨みつけた。

「最後に聞く。おまえはなぜこんな実験をした」
「探究心。それ以外あるまい」
「多数の犠牲者を……親子を犠牲にしてまでするべきことか！？」
「この世には犠牲を為さねば手に入らぬものが殆どだ。進歩の為ならいくら犠牲が出ようと知ったことか」
「……おまえとは、分かり合えないな」
「ああ、同感だ」

一室にしては巨大過ぎるほどの空間を、緊迫した空気が流れる。
張り詰めた緊張が、全てを包み込んだ。

「行くぞ！」

先に動いたのは、フェイトだった。数メートルの間合いを一瞬で詰め、下段から剣を振り上げる。ヴァレリアはそれをなんなく受け止めると、左足でフェイトの横腹を蹴った。

フェイトの体がくの字に曲がり、吹き飛ぶ。そのまま壁に叩きつけられるかと思ったが、フェイトは空中で二、三度回転して着地した。

腹を抑えたフェイトが咳き込む。対するヴァレリアは、余裕そのものだ。

シーハーツ最強の戦士と謳われるフェイトだが、ドールマスターの力は侮れなかった。

気を引き締めて正面から突っ込む。同じように下から剣を振り上げる。

「同じ事の繰り返しとは、愚かだな」

ヴァレリアはそれを受け止め、今度は空いた手を鋭い刃に変形させてフェイトを貫こうとするが、

「こっちだ」

フェイトはそれを素早いステップで交わすと、強烈な三段蹴りをヴァレリアの背中に叩き込んだ。

手ごたえは確かにあった。

だが、

「ぬるい」

ヴァレリアは苦痛に顔を歪めるどころか、その場から動くことさえしなかった。

手加減などしていない。まともに入れば骨が砕けてもおかしくな

いフェイトの蹴りだ。フェイトは一瞬呆気に取られたが、すぐに後ろに飛んで距離をとった。

「気をつけろフェイト君！　アンフロックは岩石から生まれた亜人。皮膚は我々とは比べ物にならないくらい堅いぞ！」

背後でヴァンが叫ぶ声を聞きながら、フェイトは顎を伝う汗を拭った。

「ああ、そのようだね。でも、負けるわけにはいかないんだ！！」

「最後の戦いだ、楽しませてもらう」

フェイトが床を蹴るのと同時にヴァレリアも駆け出した。

誰の眼にも、一瞬二人が消えたようにしか映らなかった。次の瞬間、刃の交わる音と共に、その姿を視認する。

剣を交えたまま、フェイトは剣に力を集中させ、

「ショットガン・ボルトッ！」

無数の爆発を引き起こした。だが、それは全てヴァレリアには届かず、岩の壁によって遮られる。

自由自在にその形を変える身体。先程まで刃だった手は、大きな盾へと変形していた。

無傷なヴァレリアに対し、フェイトは自らも巻き込まれることを覚悟で放った爆発により、所々から出血をしていた。

数多の戦いを潜り抜けたフェイトが苦戦する相手。フェイトは苦笑して額から流れる血を手で拭った。

負けるわけにはいかなかった。クレアの為、ヴァンの為、クレセントの為、シーハーツの為に。

「僕は――！」
「これは……！！」

フェイトの背中から光を放つ白き翼が現れる。それは創造主との戦いの中で新たに獲得し、いまのフェイトが制御できる限界の力。
これ以上は、出せない。出せば暴走してしまうから。
巨大な羽が一度羽ばたくと、フェイトの体が宙に浮く。
そして、

「喰らえ！　イセリアル――ブラストッ！！」

両の翼から、無数の羽がヴァレリアに向けて放たれる。無論、ヴァレリアの背後には誰も居なければ、クレセント達がいる部屋もないことを確認した上でのことだ。
一枚一枚が強力な破壊の力を秘めた羽。ある程度威力を絞っているとはいえ、その威力は絶大だった。壁に、床に、窓に次々と穴を開けていく。
ヴァレリアは自分の周りを岩の壁で覆うことで回避していたが、やがて、一枚の羽がその防御を突き破った。一度敗れてしまえば、後はそのままなし崩しに崩れるだけ。
更に数枚の羽が、ヴァレリアの身体を砕いていく。唸る騒音が消え、神々しいまでの光が消え去った後、そこに立っていたのは、顔面を蒼白にしたフェイトだった。
フェイトの視線の先にあるのは、床に伏したヴァレリア。両足と片腕を失い、満身創痍の姿で倒れている。

「……決まりね」

シルヴィアが息をつく。フェイトを見上げて笑った。

「私たちの中じゃ一番劣ってたとはいえ、ドールマスターを倒すなんて見事なものね」
「……そう、かな……どうにも僕は、虚をつかれて本気が出せずじまいだったように、見える、けど」
「いい読みね。確かに、彼はまだ戦えたでしょうね。でも、あの姿では彼は本気だった。あなたの勝ちよ」
その言葉を聞いた瞬間、フェイトは薄く笑って崩れ落ちた。
「フェイト！」
肩膝をついて息を切らすフェイトに、マリアが駆け寄る。その背中を優しく撫でると、フェイトは大丈夫と手をあげる。
「ちょっと、最近使ってなかったもんだから、疲れただけだよ。情けないな、君みたいに完全に使いこなせればいいんだけど……」
「私はあなたより前に力に目覚めていたんだもの。あなたがまだ使いこなせないのは当然よ。それに、勝ったんだから問題ないわ」
フェイトは決して努力を怠ってはいない。暇を見つけては訓練を重ねてはいたが、力が力なだけに公に練習することも出来ず、訓練はなかなか捗らなかったのだ。
それに加え、ここ数週間は色々と問題が起き、訓練する間もなかった。そこで急に使ったことで、疲れは通常の倍以上だった。
フェイトはその場に座り込むと、長く息を吐いた。
「そう言ってもらえると……少し楽になるよ」
そう、フェイトがマリアに微笑んだ、まさにその時だった、

「シルヴィア！！」

焦りを含んだ声が、響く。誰もが声のほうへ目を向けた。
そこには、今にも倒れそうなほど顔色を蒼くした、ヴリジアの狐の姿。よく見れば、右腕の肘から下がなくなっている。
シルヴィアはヴリジアに駆け寄ると、よろける身体を支える。

「どうしたの？　まさか！？」
「うん……急に暴れ出したと思ったら、目の前が真っ白になって」
「それで、彼女は？　ボノルルはどこ？」
「分からない……気付いたら、こうなってて」

ヴリジアが目線を腕へと落とす。シルヴィアはダンデガへヴリジアを渡すと、フェイト達へと振り向いた。
その緊迫した表情を読み取ったヴァンが、尋ねる。

「どうしたのですか？」
「最悪の事態よ。恐れていたことが、起こってしまった」

その瞬間、なにかが風を切る音が聞こえた。

1―32　おかえりなさい

「上だ！」

誰かが、そう叫んだ。

その声のまま、上を向いた者達の表情が凍る。天井に空く大穴。

そこから見える雄大な空。

その空を背後に、一つの影が空に浮いていた。正確には、飛んでいた。

「クレセント？」

マリアが呟く。

「いや……しかし、あれは」

ヴァンが呻く。

彼らが目を疑うのも、無理はなかった。驚くべきは、クレセントの背中から生えた二対の翼。

クレセントの身の丈を遥かに超えるその翼は、フェイトのそれと形は似ていたが、神々しさは微塵も感じられず、そればかりか恐怖のみを与えた。

「天使……いや――」

フェイトは自然と自らの肩を抑えていた。そこから生えるフェイトの羽は純白。しかし、クレセントのそれは違った。

片翼は、薄い翡翠を帯びた白。

だが、もう片方は、

「悪魔か」

漆黒だった。

底知れぬ黒。相反する色の翼を生やしたその姿は、異形という名が最も相応しかった。

「クレセント！」

マリアがクレセントの名前を大声で呼んだ。しかし、クレセントは返事をするどころか、視線を向けることさえしない。

その虚ろな金の瞳は、冷酷にマリア達を見下ろしていた。

そして、その手には、

「ボノルル」

下半身を失った老人が、頭を掴まれてぐったりとぶら下がっていた。手が微かに動いていることから生きていることは間違いなかった。

フェイトはクレセントからシルヴィアへと視線を移すと、震える声で言った。

「どういうことだ？　クレセントはどうしたんだ！？」

「……クレセントが第三世代の人形遣いだということは知ってるわね」

低く声を押さえてシルヴィアは言った。

「第三世代の人形遣いの実験はまだ不完全。七つの要素のバランスを取れるのは奇跡に近い。誰もがその力の反動に耐えられずに壊れ

ていった。彼女はその唯一の成功例なのよ」
「ちょっと待って。七つ？　私たちは六つと聞いたのだけど」
　確かにクレセントは六つといった。
「もう一つあるのよ。彼女も知らされていない極貴重な、安定を取るための成分がね。それが成功の素だったといっても過言ではないわ」
「それは？」
「そんなことはどうでもいいの。とにかく、絶妙なバランスで成り立っている力。一つでもそのバランスが崩れれば、その強大な力はたちまち崩壊するわ」
「バランスか崩れるって……まさか」
　フェイトの視線がクレアへと向く。シルヴィアは苦々しげに頷いた。
「彼女の核除去のために、クレセントの中の核はほとんど無くなってしまった。つまり、バランスが取れなくなった彼女は――」
「暴走しちゃったのよ。いま、クーちゃんの精神は完璧に巨大な力に取り込まれてる。理論だけで言えば第二世代をも凌駕する力。最悪最凶の力。シルヴィア、あなたでも止められるか分からないよ」
　ダンデガに抱きかかえられたヴリジアの瞳が、細められる。
　シルヴィアはぎり、と奥歯を噛むと、早口で言った。
「あなたたちはすぐにこの場を離れて。ヴリジア、あなたはヴァレリアを連れて逃げなさい」
「どうするつもり？」

マリアがシルヴィアに近寄る。
シルヴィアは細身の剣を抜くと、真っ直ぐにクレセントへと向けた。

「決まってるわ。排除するのよ」
「なっ！？」
「助ける手立てを試している余裕はないわ。このままじゃ、全員が死ぬ」
「だからって殺すって言うの！？　無責任じゃない！　あの子をあんなにしたのはあなたたちでしょ！？」

激昂したマリアがシルヴィアの胸倉を掴む。
シルヴィアはその手を払おうともせずに、詰まった声で言い返した。

「私だってそんなことしたくないわ。でも、仕方ないのよ。クレア・ラーズバードのように核を消失させればいいのとはわけが違う」
「どういうこと？」
「核を埋め込まれたヒューマンは時を経て体の中を変えていくの。人形遣いとしての能力を一番安定した状態で使える、アンフロックにね。そして、あの状態をどうにかするには、核を消滅させるしかない。でもね、同時にそれはクレセントの死を意味するのよ」

アンフロックにとって、核は心臓ともいえるもの。当然長い年月を経てアンフロックと化したクレセントは、それが無くなれば死んでしまうだろう。

「でも、クレセントからはちゃんとした血液が流れてたわよ？　あれはどういうこと？」
「そこが第二世代と第三世代の大きな違い。どういう原理か知らな

いけど、心臓が核の役割を担っている。だから、本来アンフロックには流れるはずのない血液があの子の中には流れてるわ。――六つの生命の結合体だからなのか知らないけれど、ただの施力を有したアンフロックとは違う」

シルヴィアがマリアの腕を掴む。

「でもね、身体は確かにアンフロックよ。ただ、中にあるのが核ではなく、それに近い心臓というだけで。試しに腕でも壊してみる？　すぐに再生するから」

「……っ」

「分かったならあなたも早く避難しなさい。その腕では足手纏いよ」

緩んだマリアの腕を外し、シルヴィアは手を振る。

どこから現れたのか、巨大な漆黒の機械鳥がシルヴィアの下へと降り立った。その上にシルヴィアは飛び乗り、ダンデガも同じく乗る。

「――せめて、苦しまないように殺してあげる」

「ま、そもそも勝てるかどうかが怪しいがな」

「勝てる勝てないじゃない。勝たなきゃいけないの。……それが、せめてもの罪滅ぼしでしょう」

小さくそう言って、シルヴィアが機工兵のに指示を出そうとしたとき、

「待ちなさい」

左手に銃を構えたマリアが、それを止めた。

その横には、フェイト、ヴァン、アルベル、そしてディルナが立

っている。

「つまり、あの子がアンフロックじゃなくなれば……中にある核が、核じゃなくなればいいのよね？」

マリアの目が、強い光を放つ。シルヴィアを真正面から見つめ、はっきりとした声で口を開いた。

「私に、協力しなさい」

「協力？」

確認するように、シルヴィアは繰り返した。マリアは真剣な表情のまま頷き、上空を飛ぶクレセントを見つめる。

幸か不幸か、今のところ攻撃してくる気配はない。

「そうよ。あの子を二度も死なせたりなんかしない。私の力で、救ってみせる」

「どうやって？」

「説明の時間が惜しいわ。とにかく、協力して。あなたたちに少しでも罪の意識があるのなら」

「……どうする？　俺は正直賭けてみたいね。出来れば殺したくはない」

ダンデガが後ろから声をかける。

シルヴィアはほんの数秒黙ると、機工兵から飛び降りた。

「いいわ。可能性があるというのなら、賭けてみるのもいいでしょう。私たちはなにをすればいいのかしら？」

「クレセントを捕縛して。あとは私がやるわ」

「了解よ」

「あなたたちも協力してくれるわよね？」

マリアが後ろを振り返る。フェイトが、ヴァンが、アルベルが、ディルナが大きく頷く。

「当たり前だろ」

「ああ、大事な妹だ」

「ふん、久しぶりに腕が鳴る」

「調子に乗って殺さないで下さいよ、アルベル・ノックス」

「ありがとう。セフィリアはヴリジアの狐と一緒にクレアを連れて避難。なるべくここから離れなさい」

マリアがそう言うと、セフィリアはクレアを担いで二階から飛び降りた。

まだ肋骨は完治していないというのに、それを苦ともせずに地面に着地する。

「無理はしないでと言ったのに……ヴリジア、いざとなったら守ってあげて」

その様子を見たシルヴィアが溜息をつき、ヴリジアを見る。先程までなかった腕は、見事に復元されていた。

「了解。ダンデガ、シルヴィア、ここは任せたからね」

「ああ、お子様は安心して寝てろよ」
「ふん、あたしより年下なくせに！」

誰もが硬直する言葉を残し、ヴリジアはレイナの遺体を抱え、同じく両手両足が元の姿に戻ったヴァレリアと共に地面へと降り立つ。
顔を引きつらせたフェイトが、シルヴィアをまじまじと見つめる。

「え、マジですか？」
「アンフロックはヒューマンとは比べ物にならないくらい長寿なのよ。そのくせ見た目は擬態してあるから、本当の年齢なんてなかなか分からないわ」
「……」
「なんか、失礼なこと考えてない？」

真剣な顔をして見つめてくるフェイトに、シルヴィアは静かな殺気を放ったのだった。

「行くぜぇ！」

先陣を切ってクレセントに飛び込んだのは、ダンデガの豹だった。
腕から先が大鎌へと変形し、クレセントを襲う。
だが、

「おおっと！」

突如クレセントは手に持っていたボノルルをその前に突き出した

のだ。ダンデガは慌てて手を止め、シルヴィアの機工兵に飛び乗る。
空を飛べないというのは、飛んでいる相手に対しそれだけでかなりの不利になる。

「ほぉ。少し見ない間に随分と強かになったじゃねぇのよ」
「無駄口を叩いている場合？　とにかく下に叩き落すわよ」

同じく機工兵に乗っていたシルヴィアが突きを繰り出す。狙うは、翼。
だが、その神速とも言える速さの突きはいとも簡単に避けられ、クレセントの手からボノルルが投げつけられた。
シルヴィアがそれをなんとか受け止める。

「なにをやってるのよ！」
「仕方ないじゃろ。一瞬でやられてしまったんじゃから。老人に無理をさせるものではない！」
「それだけ元気なら自分で着地できるわね」

そう言うと無情にもシルヴィアはフェイトたちの下へとボノルルを落とす。――いや、投げつけた。

「年よりは大事にせんかぁあああああ！！」

絶叫と共に轟音が響く。確認はしなかったが、おそらく階下まで突き抜けたのだろう。
シルヴィアはそれを全く気にすることなく、機工兵をクレセントへと突っ込ませた。
いままで攻撃らしい攻撃を加えてこなかったクレセントだが、いまや完全にシルヴィア達を敵と認識したのだろう。クレセントの腕が鋭い刃へと変形される。

黒白の翼を翻し、素早くシルヴィアの背後に回る。が、そこに待ち構えていたダンデガにその刃は受け止められた。

だが、

「チィッ！」

次の瞬間、その大鎌は音を立てて粉々に砕け散った。手首から先を失ったダンデガが悪態をつく。

「くそ！　有り得ねぇだろ！」

「ダンデガ、下がって」

「は？　嬢ちゃん一人でなんとかなると――」

「下がりなさい」

その言葉に、ダンデガは有無を言わずに機工兵から飛び降りる。フェイトたちの下へと降りたったダンデガが手首に力を込めると、周辺の皮膚が岩状になり、蠢いた。そして、それが治まった時には、そこには元通りの手。

確認するように二、三度手を握ると、ダンデガは上空を見上げた。姿は見えない。ただ黄色い火花と鈍い音が鳴り響いているだけ。

「すごい……」

マリアだった。空を飛べないマリアたちは、シルヴィアとダンデガがクレセントの翼を封じたところで一気に叩く算段だったのだ。

だが、肉体と言う枷から解き放たれたその巨大で禍々しい翼は、折れる事を知らないように強固だった。

「おい、おまえ、俺たちを上に吹っ飛ばせるか？」

「あ？」

刀を握り締めたアルベルとヴァンが、上を見上げながらダンデガに声をかける。
ダンデガは上を見上げ、顎を撫でながら答えた。
「まぁ、出来ねぇこともない。だがな、正直おまえが行っても足手纏いだ」
「うるせぇ。やってみなきゃわかんねぇだろうが」
「それに、俺たちには行かなくちゃならない理由がある」
「ははん。ヒューマンの情ってやつか。……俺たちには理解出来んねぇ」
ダンデガが大袈裟に溜息をつく。アルベルは不敵に笑ってクレセントを見上げた。
「ふん、その割には随分とあいつを気に入ってるみてぇじゃねぇか」
「そりゃ、な」
「それで、送ってもらえるんですか？」
「仕方ねぇ。その代わり嬢ちゃんの足手纏いになるようならすぐに降りて来い」
ダンデガの腕が変形し、太く長く伸びた。
アルベルとヴァンがそれに捕まる。
「足手纏いかどうかは俺の力を見てから言え」
「まずは足場を確保しないと始まらない」
「行くぞ！！」
ダンデガの体が大きく振りかぶられ、アルベルろヴァンは真っ直ぐに空へと昇って行く。

機械鳥を発見し、体を反転させ、それに飛び乗った。シルヴィアの目が点になり、すぐにその表情が一転した。

「ちょっと！　なんで来たのよ！？」

「喧しいぞ、阿呆」

「大切な妹だ。俺たちの手で守らなくてどうする」

一瞬目を丸くしたシルヴィアは、小さく笑い、視線をクレセントへと戻す。

「……好きにしなさい」

「そのつもりだ」

その言葉と共にアルベルの刀から無数の衝撃波が放たれる。クレセントはそれを上に飛んで避け、数本のダガーをアルベルへ向けて投げる。アルベルはそれをなんなく叩き落すとが、その時既にクレセントの姿は視界になかった。

「下だ！」

ヴァンが叫ぶ。シルヴィアは舌打ちをして機工兵の背中を叩く。機工兵はすぐさま反転しようとするが、時既に遅い。強い振動がアルベル達を襲った。

焦げるような匂いが鼻をつく。

「やられたわね。まだ持つけど、そう長くは飛べないわよ」

「その前に決めてやる。ヴァン！」

「ああ」

再び眼前に姿を現したクレセントへ向け、ヴァンが立て続けに衝

撃波を放つ。クレセントはそれを硬質化した片腕で防ぐ。
全く効果は見られなかったが、それでも足は止まっている。
アルベルは闘気を剣に集中させ、クレセントへしっかりと狙いを定める。

「いい加減目を覚ましやがれッ！」

数多の竜が真っ直ぐにクレセントに放たれる。ヴァンの衝撃波と交わり、空中に漆黒の竜が舞った。
だが、

「が――ッ」

背中を切り裂かれる衝撃。
いつの間に移動していたのか、クレセントはアルベル達の背後にいた。
クレセントは表情を一切崩さないまま腕に付いた血を振り払い、アルベルを蹴り飛ばす。

「アルベル！」

宙に投げ出されたアルベルを捕まえようとしたヴァンも、一緒に地上へと落下する。
シルヴィアはそれを助けようともせず、冷たい鉄の仮面の中から、禍々しい黒白の翼を睨んだ。

「まったく……あなたはいつもそうだったわね。無表情で……無感情で」

シルヴィアが、薄っすらと笑みを作る。

クレセントは答えない。だが、その虚ろな金の瞳は確かにシルヴィアを映している。

シルヴィアが手を振ると、機工兵が素早い動きでクレセントの頭上に上がる。そのまま急降下しようした瞬間、白き雷鳴がシルヴィアへと襲い掛かった。

「うぐっ！」

「施術を使えるのか！？」

落下してくるアルベルとヴァンを受け止めたフェイトが信じられないといった表情で叫んだ。

「当たり前じゃ。もう解毒は済んだ。……身体にはなんの負担もない」

床に空いた穴の下から、老人の声が響く。

フェイトは手を横へ振った。

「違う！　クレセントは施紋を刻んでいないんだ！　施紋を刻んだ武器も使わずにどうやって」

「そんなものいらないわ。なんたって奴は……」

ボノルルの言葉は空に轟いた轟音によって掻き消された。フェイト達の頭上に火の粉が降り注ぐ。

シルヴィアは黒コゲになったマントを脱ぎ捨てた。

「初めて見たわよ……あなたのあんな顔」

漸く辿り着いた目的地。場所はすぐに分かった。

そこで見たのは、眩いまでの翠のオーロラ。その中心にいたのは、

見慣れているようで、初めて見るものだった。

「どうせ死ぬなら、ああいう顔で逝きなさいよね」

綺麗だった。柔らかい光の中で微笑むクレセントは、とても綺麗だったのだ。

そう笑ったシルヴィアの姿が消える。機工兵はそのままの位置で静止している。クレセントですら、その姿を見失ったように左右を見渡していた。

「ここよ」

まるで瞬間移動のごとくクレセントの背後に現れたシルヴィアの蝶。クレセントが反応するよりも早く、その漆黒の翼に剣を突き刺した。

そのまま上へと切り上げる。漆黒の羽が空を覆った。

「あああああああッ！！」

痛覚が通っているのか、クレセントが絶叫を上げる。その悲痛な叫びに、マリアは思わず顔を歪めた。

クレセントの身体がガクリと崩れ、このまま落ちてくるとフェイト達は身構えたが、

「ぐぅ！」

翡翠の羽を羽ばたかせたかと思うと、宙を舞う無防備なシルヴィアの首をその手に捕らえた。完全に切り裂いたと思った翼は、既に復元していた。

シルヴィアの手から、剣が落ちる。クレセントはそのまま高く飛

び上がった。

「アンフロックの治癒能力の高さが裏目に出たか！」
「マズイぞ！　このままじゃ！」
「僕が行く！」

フェイトが純白の翼を広げる。決して余裕がある表情ではなかったが、この状況を打破できるのはフェイトしかいない。誰も、止めることは出来なかった。
マリアがフェイトの胸を軽く叩く。

「頼んだわよ」
「ああ！」

シルヴィアの剣を拾い上げ、足に力を篭め、跳躍の力と合わせて高く、速く飛び上がった。
ものの数秒でクレセントとシルヴィアの居る地点まで辿り着いたフェイトは、手から逃れようと足掻いているシルヴィアの間に入り、クレセントの腕を思い切り蹴りつけた。
悲鳴をあげたのはフェイトの足のほうだったが、それでも手は外れる。フェイトはシルヴィアを受け止めると、一時クレセントから距離を取った。
細身の剣を、シルヴィアに渡す。

「大丈夫かい？」
「え、ええ。油断したわ」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、シルヴィアの機工兵が現れる。それに飛び乗ったシルヴィアは、一瞬フェイトと視線を交わす。

クレセントの手から放たれた風の刃を避けた二人は、両サイドから攻撃を仕掛ける。

「ディレイ」

シルヴィアが時の流れを歪め、クレセントの動きを鈍らせる。

「ヴァーティカル・エアレイド！」

そこに放たれた無数の蒼の衝撃波が、クレセントを容赦なく襲った。それは全弾クレセントへと命中したはずだった。

だが、それは黒白の翼により、全て遮られる。

「はは、参ったなぁ」

「ちょっと、息切れてるみたいだけど」

「平気さ。下でマリアたちが僕らを信じて待ってる。その期待に応えなくちゃね」

「そうね……来るわ」

シルヴィアがフェイトの体を押す。数多の漆黒と翡翠の羽が、先程までフェイトがいた場所を通過した。

遥か下のほうで、轟音が響く。チラリと視線を向けると、広大な焼け野原が広がっていた。

「あなたより性能いいんじゃない？」

「そうかも」

口調こそ余裕があるものだったが、その表情は引きつり気味だ。

フェイトが気を取り直して剣を構えた時、急激な眩暈に襲われ、片翼が消えた。

「しまっ――！」

当然バランスを失った身体は地面へと急降下する。もう片方を必死で羽ばたかせるが、意味は無い。

そして更に最悪なことに、クレセントがフェイトに狙いを定めたのだ。

シルヴィアを羽の弾丸で威嚇し、すぐさま急降下する。すぐにフェイトに追いつき、その鋭く尖った腕がフェイトに振り下ろされた。

「フェイト！」

世界が、まるで暗幕がかかったように暗くなるのを感じた。

※

「え？」

いつまでたっても訪れない身体を貫かれる感覚に疑問を持ったフェイトは、硬く閉じた瞳を開いた。

誰かに抱きかかえられている。そしてそれがシルヴィアだと気付くのに、更に数秒を要した。足元には漆黒の機械鳥。

フェイトは一瞬最悪の事態が頭を過ぎり、慌ててシルヴィアの方を向く。

「安心して。私があなたを庇ったわけじゃないわ。有り得ない」

予感は見事に外れた。喜ぶべきことなのだろうが、何故かフェイトは胸の奥に小さな痛みを覚えたのだった。

そして、おもむろに上を向くと、手のひらに乗った何かを見つめ、固まるクレセントの姿。

「刺される直前、あれがあなたのポケットから零れたのよ。それで、なにを思ったのかクレセントはあなたを刺すことも止めてあれに突っ走っていったわ」

「あれは……」

フェイトは自然とポケットを探る。無かった。

全てが終わったら渡そうと思っていた、レイナの形見の腕輪が。

「クレセント……君は」

機工兵が、静止したまま動かないクレセントの真正面までフェイトたちを運ぶ。

「！！」

「……」

フェイトが目を見開き、シルヴィアが眉を潜ませる。

腕輪を大事そうに見つめるクレセントの瞳は、変わらぬ虚ろな光を宿していた。だが、そこからは、確かに一筋の涙が流れていた。

顎を伝って落ちた雫が、腕輪に落ちる。

「くれせん……」

フェイトがクレセントに手を伸ばした、まさにその時だった、

「――あああッ！」

クレセントが目を見開く。音も無く背後に回っていたシルヴィアが、無防備な両翼を切り裂いたのだ。

切断とまではいかなかったが、かなり深い。今度こそ、クレセントは地上へと落下した。

「クレセントっ！」

フェイトは力を振り絞って翼を広げる。機工兵を蹴り、なんの抵抗も無くただ落ちていくクレセントの腕を掴んだ。強く、クレセントの頭を抱く。

そのまま緩やかにマリアの元へ着地すると、腕に抱いたクレセントをそっと寝かせた。

腕輪を握り締め、光を取り戻した瞳に涙を溜めた姿に、誰もが言葉を失った。先程までフェイトたちと闘っていた時も、クレセントからは殺気は感じられなかった。

「……自我があったのか……」

クレセントが僅かに首を縦に動かした。

巨大な力に飲み込まれてなどいなかった。勝手に動いてしまう身体を、ずっと止めようとしていたのだ。

最初、暴走したらすぐにその場の生命体を殺すと予想しながらも、クレセントがなかなか動かなかった理由は、クレセントが自らの意思でブレーキをかけていたから。だが、フェイトたちの攻撃で、それが出来なくなってしまった。

今もその力に押しつぶされそうになるのを、必死に堪えているのだろう。

小さな身体と大きな翼は、震えていた。

フェイトはそれに気付いてやれなかった悔しさに、ぐっと拳を握り締めた。

「まり、あ……」

クレセントが手を伸ばす。マリアはその岩肌のような手を強く握った。

「なに？」

金の瞳から、涙が落ちる。歯を食い縛ったクレセントが、いまにも消え入りそうな声で言った。

「……たす、け……て」

マリアが一瞬顔色を驚きに染め、それから嬉しそうに笑った。

「この期に及んで殺せとか言うなら、あなたを殴ってた」

マリアの額が、蒼く、力強く発光する。

正直、いまからやろうとしていることに、絶対の自信があるわけではない。むしろ、成功する確率のほうが遥かに低いのだ。

自分でもよくこんな大それたことを考え付いたものだと、苦笑する。

マリアはクレセントの体を抱き起こし、真正面から笑いかけた。

「大丈夫。私を信じて」

「……しん、じます……いつ、でも」

クレセントも、微笑む。

マリアは少し照れたように笑い、クレセントの腕に腕輪を通す。

「じゃあ、精一杯期待に応えなきゃいけないわね」

「なにをする気？」

いつの間に降り立ったシルヴィアが、マリアの背後に立つ。

マリアは顔だけをシルヴィアへと向け、不敵に微笑んだ。

「『変える』のよ。クレセントをアンフロックから、人に」

「変える？」

シルヴィアは意味が分からず首を傾げる。そしてそれは、ヴァンやディルナ、ダンデガも同じことだった。

その意味を理解できているフェイトとアルベルだけが、どこか落ち着いた表情でその様子を見つめている。

「おい、成功するんだろうな？」

「どうかしらね。でも、私たちをＦＤ空間でも存在できるように『改変』したのは私よ」

「ああ、僕たち存在自体を『変えられた』んだ。きっと」

空に浮かぶ蒼の紋章が、マリアとクレセントを包み込む。

それに触れないように、フェイトたちが後ろに下がる中、シルヴィアで落ち着いた口調で言った。

「あなたは……何者？」

「さぁ、神様にでも聞いたらどうかしら。――いれば、の話だけれど」

マリアはシルヴィアから視線を逸らす。

真っ直ぐにマリアを見つめたままのクレセントと目が合い、お互

い何言うでもなく微笑んだ。

「帰るわよ、クレセント。皆で、一緒に」

1－33　翠の空、蒼の風

灰色の空から白い粉が舞い、マリアの髪を薄く彩った。
アーリグリフの街の片隅にある墓地。その中の一つ。真新しい墓石の前に彼女は佇んでいた。その横には顔を俯かせるフェイト、アルベル、ヴァン、そしてクレアの姿。
先程まで大勢いた参列者はその姿を消し、墓の前には沢山の花と供物が置かれている。

「……幸せ、だったんじゃないかな」

墓石に刻まれた名前を見ながらフェイトが呟く。
マリアが顔を上げ、フェイトを見る。その顔は穏やかに微笑んでいた。

「きっと、喜んでいるよ。君たちが、一緒にいること」
「ああ……」
「そうだと、いいけどな」

アルベルとヴァンが墓の前で十字を切った。

「そういえば、どこに行ったんだい？」
「ディルナとペターニに行くって言って飛んでいったわ。多分もうすぐ……あ、来た」

フェイト達がいる場所から少し離れた場所。人目を気にするように降り立った二つ人影が向かってくる。
揺れる白銀の髪と、漆黒の髪。白銀の髪の女性の背中から生えるのは、柔らかい翡翠を帯びた白い両翼。

白銀の髪の女性は、とん、と地面を蹴ると、正面からマリアに飛び込んだ。ふわり、とまるで舞い降りた羽のように軽い身体を受け止め、マリアは微笑んだ。

「おかえり。――お墓参りはすんだ？　クレセント」
「はい」

クレセントは微笑む。翡翠の瞳が、マリアを真正面から映している。

「まったく、死ぬかと思った」

一つに縛った髪留めを外して乱れた髪を風に靡かせたディルナは、やれやれと肩を落とした。

「クレセント……高度上げすぎ」
「でも、見つかったら困るでしょう？」
「そりゃ、そうだけど……私は落ちたら死ぬんだぞ」

クレセントの背中から生える翼を軽く叩く。クレセントがすっと瞳を閉じると、翼は雪に溶けるように消えた。

「ほんと、不思議よね。どういう原理なのかしら」
「おまえがやったんだろうが」
「そんなこと言われても、私はこんな風になるなんて思ってなかったわよ」

あの時、マリアの試みは成功した。光の柱が消え、目を開けたクレセントの瞳は、元の翡翠に戻っていた。クレセントの身体はヒューマンに戻り、核は改変され、正真正銘の心臓となった。

だが、翼は消えなかった。黒白の翼に変わり、翡翠を纏った翼が、しっかりとクレセントの背中から生えていたのだ。

どうするか迷いもしたが、特に身体に害はなく、クレセント自身がこのままでいいと言い切ったので、無理にどうにかしようとはしなかった。

「それにしても、良かったの？　あの腕輪」

クレセントは自分の腕を見つめる。そこには、紫の三連腕輪はなかった。

クレセントは、レイナの遺体をグラオと同じ墓に入れ、そこに実験体の三人も一緒に埋めた。実験体の三人をどうするのかは最後までマリアたちの心を痛めたが、このままこのカプセルの中で朽ちていくのはあまりにも耐えがたかった。

ならば、せめて安らかな死を与えようと決定したのは、他ならぬクレセントだった。泣きながら装置を操作する手をアルベルとヴァンはそっと握った。罪を背負わなければならないのなら三人で。それが、アルベルとヴァンが出来る唯一のことだった。

正しい決定だったのかは、誰にも分からない。だが、息を引き取った彼女たちは苦しそうな顔はしていなかった。

そして、シャロム夫妻の遺体は、シャロム邸の庭に埋葬した。

以前マリアが見たシャロム邸の墓。最初にシーハーツに送り込まれた、ディルナがよく知るクレセントの墓へ。

「ええ、いいんです」

クレセントは三連の腕輪を三つに分解し、一つをアーリグリフの三人の墓に、一つをペターニの墓に入れた。

そして、もう一つは……。

「マリア、あとで海に付き合っていただけますか？」
「かまわないけど、どうするの？」
掌の上で光る紫の腕輪を見つめながら、クレセントは瞳を閉じた。
「あの三人が、どこで死んだか分かりません。だから海に投げてきます」
あの三人とは、言うまでもなくクレセントの代わりに任地へ送り込まれた複製達である。
マリアはクレセントから視線を外すと、髪を押さえながら頷いた。
「ええ」
「でも、いいの？　それだとあなたのは……」
クレアがクレセントの髪に積もった雪を払いながら問う。
クレセントは緩々と首を振り、腕輪を強く握った。
「はい。わたしは、もう充分です」
そう、幸せそうに微笑むクレセント。
アルベルとヴァンはお互い顔を見合わせると、おもむろに腕輪を外し、三連の輪の一つを分解した。
そして、それをクレセントに差し出す。
「ほら、クレセント」
「え？」
「やる。手、出せ」
「で、でも……」
「うるせぇ。素直に受け取りやがれ」

突然のことに戸惑うクレセントの手を掴み、腕輪を通す。
ヴァンはそれに苦笑すると、優しくクレセントの手を取り、同じく腕輪を通した。

「これで、同じだ」

自分の腕で光る二連の腕輪を見せ、ヴァンは柔らかく微笑んだ。
クレセントは目の奥が熱くなるのを感じながら、ヴァンとアルベルの手を取った。

「ありがとう、ございます……ヴァン、アルベルさん」
「どういたしまして」
「おい、そのアルベル“さん”っての止めろ。気色悪い」

悪態を吐きつつも、無理にクレセントの手を離そうとしないアルベルを見たマリアが、にやにやと意地の悪い笑みを見せる。

「あら。“お兄ちゃん”って呼んで欲しいのかしら？」
「ばっ！　ざけんな！」

アルベルの顔が一瞬で朱に染まる。
意地の悪い笑みを一転させ、首を傾げるクレセントに輝かしい笑顔を向けるマリア。

「だそうよ、クレセント？　呼んであげたら？」
「おい、呼んだら殺すぞ」
「駄目なのですか？」

クレセントがマリアとアルベルを交互に見上げる。

マリアが半ば噴出しつつも、必死に口を押さえて答える。

「らしいわよ。嫌なお兄ちゃんね。アルベルお兄ちゃ――ぶっ！」

「殺す！」

「やってみなさい」

顔を引きつらせて刀を抜くアルベルの額に、マリアが銃を突きつける。左腕とはいえ、この距離で外すほどマリアは甘くない。

アルベルは刀を抜いたままの格好で固まり、怒鳴り散らす。

「てめっ、正々堂々勝負しやがれ！」

「怪我人相手に抜刀するあなたに言われたくないわよ」

「てめぇが怪我人名乗れるクチか！」

「あら、この腕を見て怪我人といわずになんと言うの？」

フェイトとヴァンが同時に溜息をついた。子供染みた上を持つ苦労が身に染みた。

尚も続く言争いに終止符を打ったのは、申し訳なさそうに眉を下げるクレセントだった。

「あの、ごめんなさい……」

「え？　あ、ああ」

一瞬何のことか分からなかったマリアだったが、クレセントの目がマリアの右腕にいっている事に気付き、苦笑した。

そこで素直に許せばいいのだが、折角だから少し仕返しをしようと、マリアは悲しそうに視線を伏せた。

「そうね……まさか本当に折られるなんて思わなかったわ……」

肩が震えている。フェイトから言わせれば、どこからどう見ても演技なのだが、クレセントはそれに気付かない。

「ごめん、なさい」

「……」

こうなると居心地が悪いのはマリアのほうである。取り分け二人の兄からの視線が痛い。額に手を当てて溜息をつき、クレセントの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「……言い訳くらいしなさいよ。私たちを死なせないためだって」

「……」

「まぁ、そこがあなたの良いとこでもあるんだけどね。融通が利かないというか、純朴というか……」

黙り込んだまま動かないクレセントから手を離す。

マリアはこういう冗談をクレセントにするのは最後にしようと堅く決心し、クレセントと目線を合わせた。

こういうタイプは口で言っても効果はない。何か条件を出すのが一番なのだ。

「じゃあ、ペターニにある高級スイーツ店で全品奢って貰おうかしら？」

「鬼か」

ディルナが腕を組んで呟く。マリアは華麗にスルーをする。

ペターニの街角高級スイーツ店といえば、一品一品が全て高級食材で出来ていて、安くても数千フォル。それこそ一品が一万を超えるものもあるのだ。

品数もそれなりにある。それを全品など、誰も想像出来ないだろ

う。
　クレセントは軽く目を見開くと、フェイトがマリアに冷たい視線を向ける。
「マリア、そんなの無茶だ――」
「それで、いいんですか？」
「ろ……って、え？」
　フェイトがクレセントを見る。マリアも口をぽかんと開けている。
「そ、そんなのってあなた……あそこのスイーツ全品っていったいくらすると……」
「ああ。そういえばあそこはシャロム家が経営してるんだったな」
　と、顎に手を当ててディルナが頷く。
「ええ。でも、シャロムの名は使いませんよ」
　一時は納得した事を、またクレセントは覆す。ディルナが腰に手を当てた。
「いや、それは無茶だろ」
「大丈夫です。軍から支給された給金は、ほとんど手をつけていないので」
「え？」
「衣食住は困りませんでしたし、特に欲しいものもありｍせんでしたから」
　当然のように言ってのけるクレセントからクレアへと視線を移したマリアは、そっと耳打ちをする。

「ちょっと、六年分の給金って」
「そ、そうですね。〈光〉や〈闇〉と比べると〈風〉は低くなりますが、クレセントは二級師団員ですし。それに特科出身ということも考慮されるので……」
クレアがそっとマリアに耳打ちをする。
フェイトも耳を寄せて聞き、その顔を強張らせた。ディルナとヴァンは分かっているのか、目を丸くしている。
「余裕……そうだな」
「もっと高い要求すれば良かったわ」
そう呟き、マリアは大きな溜息をついたのだった。
※
「それは、真なのですか、フェイト」
「はい、確かに彼女、グリーテン王国がドールマスターの長、シルヴィアの蝶の言葉です」
レイナの墓参りをすませたフェイトとクレア、ヴァンは、一足先にシランドへと帰国していた。
マリアとクレセントは別の用でシランドへ留まり、、ディルナはセフィリアのお見舞いにシランドの中央病院へと足を運んでいる。
そして、明後日の重大発表の段取りの最終確認をしていた女王とラッセルに元へ届けられたのが、驚愕の事実である。

「グリーテン王国は一年後、鎖国状態を解放し、シーハーツと国交を回復させる、とのことです」

『我々は、シーハーツとの国交を回復したいと考えているわ』

気を失ったマリアとクレセントの傍らで、シルヴィアの蝶はフェイトとヴァンを相手に落ち着いた口調で言った。

フェイトこそそれほど驚きはしなかったが、ヴァンにいたっては顔が崩れるのではないかというほどの驚いていた。

『どうしていまになって』

『数年ほど前、新たな王を迎えてからというもの、グリーテンは新しくなった。もはやシーハーツに対する恨みなどは存在しないわ』

『だが、グリーテンはそうでも、シーハーツの民はそうはいかないんじゃないか？』

最もな返答だったが、シルヴィアの返答も最もだった。

『それについては、我々ではどうしようもないでしょう。誠意をもってあたり、駄目ならそれまでよ』

『そうですか。では、すぐにでも使者を？』

『いいえ。女王陛下は、あれらの研究を国民に発表する気なのでしょう？』

フェイトとヴァンが顔を見合わせる。

『え、ええ。良く分かりましたね』
『あの方はそういう人よ』

シルヴィアは仮面の下で笑う。

『その混乱を治める期間も必要でしょう？　だから、一年』

シルヴィアの長い人差し指が立てられる。

『一年後、我々は正式な使者をシーハーツへ送る。その旨をそれとなく女王陛下に伝えてもらえないかしら？』
『ああ、分かった』
『ありがとう。それにしても、大したものね。あなたも、あの人も』

その視線はクレセントと手を重ねて眠るマリアへと向いている。
フェイトは大きく頷いて、笑った。

『ああ、最高の姉だよ』
『そう言われれば、姉としては誇り高いでしょうね』

おもむろに仮面に手を当てたシルヴィアが、それを外す。その下から出てきた顔に、フェイトとヴァンは同時に息を飲んだ。
シルヴィアは仮面を手に持って優雅に腰を曲げると、柔らかい笑みを浮かべた。

『また、会いましょう。フェイト・ラインゴッド、ヴァン・ノックス』

そしてまた仮面をつけると、ダンデガの豹とボノルル老を従え、

その姿を消した。
フェイトとヴァンは、その後暫く声を出すことも出来ずに、呆然と立ち尽くしていたのだった。

「……荒れますな」
「ええ。ですが、これを機にシーハーツは生まれ変われるかもしれません。少しずつ、ですが確実に」

閉鎖的な国家体制に終止符を打ち、新たな時代へと生まれ変わる。

「とにかく、グリーテンのことも気がかりではありますが、当面の問題は別にあります」
「はい」

クレアが真剣な面持ちで答える。

「発表は明後日。シーハーツ全域で同時発表を行います」
「人選はそなたに任せます」
「シランドは女王陛下自らということでしたので、ペターニはネルとネイビス、アリアスには私とルージュを考えております」

優秀な部下に、女王は穏やかに微笑んだ。

「それと、あの件に関しては、彼女はどうすると言っているのですか？」
「はい。どうやら決心したようです」
「そうか。罪に関しては、グリーテンの侵攻を止めたとうことで不

問になったのだが」
「彼女なりのケジメなのでしょう」
表情を暗く落とすラッセルとクレア。
そこに明るい口調で声をかけたのは、フェイトだった。
「平気ですよ、ラッセル様、クレア」
ラッセルとクレアが同時に顔を上げる。
自信たっぷりに微笑んだフェイトが、女王とヴァンと顔を合わせて微笑んでいた。
「僕の姉は執念深いんです」
「ええ。私にあのような物も書かせたことですし」
「そう簡単には、逃がしてはくれませんよ」

※

「本当に、いいのね」
「はい」
シランドの近郊にある転送ポイント。新調した服を纏い、ヴァレリアの機工兵を傍に置いたクレセントは、マリアに向かって微笑んだ。
その傍にいるのはクリフ。
「でもよ、罪は帳消しになったんだし、わざわざ国外追放処分受け

なければいつだって……」
「いいんです。きっと、こうするのが一番」
「ま、嬢ちゃんがそう言うなら俺は構わねぇけどな。いまは一人でも多く人手が欲しい。悪いが、仕事はすぐに覚えてもらうぜ？」

クレセントが選んだ道。それは、自らを国外追放処分とし、その上でエリクール星系から姿を消すことだった。
本来ならクレセントとヴァンは国家反逆罪なのだが、今回は被害者も殆どなく、結果的にグリーテンの侵攻を食い止めることが出来たということで、二人は無罪となった。
――だが、クレセントはそれを良しとしなかった。結果的に悪い方向へ転ばなかったにせよ、国を裏切ったと言う事には変わりはない。罰は受けなくてはならない、と言うのがクレセントの言い分だった。
クレセントが国を出て行き、もう二度戻るつもりがないということを聞いたマリアは、宇宙を飛び回るクリフの助手を提案した。以前から人手が欲しいとぼやいていたクリフの言葉を思い出したからだ。
いきなり宇宙や星やと理解を超えたことを言われ、最初は目を白黒させていたクレセントだったが、全てを納得したとき、覚悟を決めたのだ。どうせ姿を消すなら、完全に。

「それにしても、これ入るの？　クリフ」
「……まぁ、なんとかなるんじゃねぇか？」

そう言ってクリフが見上げたのは、ヴァレリアが操っていた漆黒の機工兵。既に人形遣いとしての能力を失くしているクレセントだったが、命令権限をクレセントに与えられたまま放り出された機工兵は、クレセントの指示に従うようだった。
クリフは頭を掻くと、肩を竦めてクレセントを見た。

「別れの挨拶は、いいのか？」
「ええ。きっと、止められちゃいますから」

クレセントは擽ったそうに笑った。
この事はマリアとフェイト、クレアとヴァン、アルベル。そして女王とラッセル以外誰も知らない。
ネイビスやシレーネがこれを聞けば力づくでも止めに来る。だから、クレセントは敢えて黙って出ることを決めたのだ。
この時、クレセントは自分のことで頭が一杯で気付かなかった。マリアたちがやけにあっさりとそれを了承したこと。そんなことはありえないということを。

「さ、そろそろ行くか」
「……はい」
「元気でね、クレセント」
「マリアも」

不意に溢れそうになる涙を堪えながら、クレセントはマリアを見つめた。
そうして、転送ポイントへと足を踏み入れる。足が震えた。息を大きく吸い、最後の別れを言うためにクレセントがマリアへと振り返ったとき、

「いいわよ！」

マリアの指が打ち鳴らされる。次の瞬間、蒼い柱がクレセントを覆った。
光の柱の中でうろたえるクレセント。その頭を強く抱きしめられた。

「行かせるわけないでしょ？」
「え……あ、え？」

抱きしめられているため誰かは分からなかったが、視界の端にちらつく翠の髪で、ようやく合点がいった。

「し、シレーネ様？」
「当たり。馬鹿クレセント、あなたの居場所はここでしょ？」
「そうだぜ。俺はまだおまえに言ってないことがあんだからよ」

シレーネから解放されたかと思うと、大きな手に頭をくしゃくしゃに撫でられる。

「ネイビス様？　どうして……」
「まったく、あんたもいちいち演出に拘るね」
「いいじゃんいいじゃん。私こういうの好きだよ」

ネルとルージュがクレセントの手を取る。

「上司の私に通さずに出て行くなんて、これは処罰対象だね？」
「だってさ、クレセント。覚悟しといたほうがいいよー？」
「ネル様……ルージュ様も」

クレセントはただただ首を傾げることしかできない。
最後に転送されてきたアゼルが、にっこりと微笑んだ。

「あなたも大変な人たちに囲まれましたね」

蒼の光が切れる。

見渡せば、そこにはマリアとクリフだけじゃなく、フェイト、クレア、ソフィア、アドレー、リーゼルの姿もあった。

「これでも、まだどこかへ行く気かい？　クレセント」
「私はまだあなたに恩返ししていないんですからね。勝手にいなくなることは許しません」
「ふふ、観念したほうが良さそうですよ、クレセントさん」
「お主はもう十分苦しんだんじゃ。これからは自由に飛ぶがよい」
「アドレーは少し檻に入ったほうがいいですけどねぇ」

五人の師団長に囲まれたクレセントが、フェイト達を見比べる。
マリアは茶目っ気たっぷりに微笑み、クレセント手を引いた。
円形に並んだフェイト達。その中央へマリアとクレセントは移動した。クレセントがわけがわからないとマリアを見上げる。

「マリア……これはどういう……」
「全部嘘よ、嘘。最初から誰もあなたをどこかへ行かせるつもりなんてなかったのよ」
「悪ィな、嬢ちゃん」
「え？」
「でも、普通に止めたって聞かないと思ってね。なにがなんでも行かせない状況を作るしかなかったってわけ」

背後で、クレセントの名を呼ぶ声が聞こえる。
クレセントが振り返ると、そこにはいつかの小さな少女の姿。

「お姉ちゃん、お名前、教えて？」
「え……」
「ね、教えて？」
「く、クレセント」

クレセントは一瞬躊躇いながらも答える。少女はにっこりと笑った。

「きれいな名前。お姉ちゃんにぴったり」

「……そんなこと」

「わたしね、大きくなったらクレセントお姉ちゃんみたいな軍人さんになりたい。お父さんとわたしのために泣いてくれた、お姉ちゃみたいな人に。――だから、いなくなっちゃやだよ？」

「……っ、卑怯ですよ、マリア」

「なんのことかしらね？」

そ知らぬ顔で口笛を吹くマリア。クレセントは少女を抱き締めると、涙を浮かべて微笑んだ。

「なれるよ。わたしが保証してあげる。でも、〈風〉だけは止めておいてね。大変だよ」

「ちょ、クレセント！　どういう意味！？」

シレーネが両手を振り回して叫ぶ。

笑い声がイリスの野に響く。

それから間もなく、両手一杯の荷物を抱えたディルナとセフィリアがシランドから駆けてくる。

「人使い荒いよ」

「まったくです。クレア様の命だからこんなことしたんですからね」

両手に抱えきれないほどの飲み物や食べ物を抱えたディルナとセフィリアが、同時に悪態をつく。

「ありがとう、セフィリア。ところで、ヴァンとアルベルさんは？」
「残り全部押し付けてきました」
「今頃荷台でも押してるんじゃないですか？」

さらりと言ってのけるセフィリアとディルナに、どっちが人使い荒いのだ、と誰もが突っ込みたくなったが、敢えて誰も突っ込まなかった。

「さぁ、男たちはさっさと準備する！」
「ちっ、命令すんじゃねぇよ！」
「口答えしないほうがいいよ、ネイビス。後が怖い」

そう言いつつ黙々と手を動かすアゼル。ネイビスは一度ルージュに舌を突き出すと、鼻を鳴らしてディルナから荷物を受け取った。
イリスの野の片隅、昨日までのことが嘘のように和やかな空気が流れていた。
息を切らしながら大量の酒を運んできたヴァンとアルベルに労いの言葉をかけるクレアは、すぐにルージュとシレーネに連れ去られた。

「おい。俺と今すぐ勝負しろ」
「いま……ですか？」
「止めろ、アルベル。それじゃ一分と持たないぞ」

肩で息をしながらクレセントに詰め寄るアルベルを、フェイトが後ろから羽交い絞めにする。

「うるさいです。こういう場くらい静かにして下さい、アルベル・ノックス」

尚も暴れるアルベルだったが、背後からセフィリアの容赦ない一撃が入り、そのまま地に沈んだ。

「乾杯じゃ！」

その声と共に複数のグラスが合わされる音。

アドレーとクリフが樽ごと酒を一気飲みし、倒れる。リーゼルとネルが笑顔でその二つの巨体を遠くへ蹴っ飛ばした。やはりなんだかんだ言っても、親子である。

まるでボール球のようにぽんぽんと転がっていく体。皆が爆笑する中、クレアとマリアだけがその様子を赤面した顔で眺めていたのだった。

「楽しんでる？」

「複雑です」

年齢的には成人なのだが、なぜか酒を飲むことを許されずジュースの入ったグラスを持ったクレセントが、声の主を確かめもせずに答えた。

マリアは苦笑すると、クレセントの横に立った。

「どうしてわたしが飲酒禁止なのですか……」

「仕方ないでしょ。ここは飲酒は十五歳から。肉体的には十四歳なんだからね。飲酒は厳禁よ、クレセントちゃん」

「年はわたしのほうが上ですからね」

「はいはい」

不満そうにブルーベリージュースを飲むクレセントの頭を、マリ

アは宥めるように撫でる。
　前々から不思議に思っていた、クレセントの成長のなさ。それは、クレセントの体がアンフロックと化していたからだった。
　アンフロックは基本的に老いることはない。あの見た目も擬態でいくらでも変えられる。ヒューマンでいう、老化がないのだ。
　ただ、それは『死』という概念がないわけではない。核が消滅すれば死ぬし、時が経つにつれて核は磨り減り、いずれは消滅する。ただし、それこそヒューマンでは考えられないほどの年月を生きるわけではある。つまり、ヒューマンとアンフロックでは流れる時間が違いすぎるのだ。
　そういうアンフロックとなっていたからこそ、クレセントの肉体年齢は実験を施された十四歳で止まり、成長することはなかった。
　しかし、ヒューマンとなった今、クレセントは成長するだろうとマリアは確信している。十四歳といえば、丁度女子の成長期頃である。

「……どうせ、変わりませんよ」
「あら、分からないわよ。数年後にはすっごい長身になってるかもしれないじゃない？」
「マリア……絶対信じてないでしょう？」
「バレた？　正直あなたが身長高くなるなんて……ちょっと、ねぇ」

　笑いを堪えつつ言うと、クレセントはふいとそっぽを向いた。

「そのうちマリアを追い越していても知りませんよ」
「そんなこと言ってるうちは、まだまだ子どもよ。ほんとにあなた二十四歳？」
「この期に及んで嘘言ってどうするんですか。それにしても、国のトップが揃いも揃ってこんなこと……」

こんなこと、とはこの宴会である。

「陛下がね、この国にとってなくてはならない者を引き止めるためなら、構いませんってね」

「……」

「ま、その皺寄せは各師団の副官たちにいっちゃってるけどね」

〈光〉などは師団長どころか副官二名すらいないのだ。混乱は目に見えている。

クレセントは額に手を当てて嘆息した。

「恨まれますね」

「言わないの。明日っから存分に働いてもらうんだから」

そう言いつつ、マリアは宴会場と化した場所と反対の方を指差した。

「ちょっと、いい？」

クレセントは頷き、マリアの後を付いて行く。賑やかな宴会場から少し離れた場所。

マリアは、クレセントに一枚の紙を差し出した。

「これは？」

「読んでみなさいよ」

言われるがままに、その文面に目を通すクレセント。

束の間の沈黙。この時だけは、賑やかな笑い声もクレセントの耳には入らなかった。

冷たい風が、クレセントの髪を靡かせる。透明な水滴が、その紙

に小さな染みを作った。

「……どうして、気付いたときには遅いのでしょうか……」

マリアがクレセントの顔を見ると、静かに涙を流していた。

拭うこともせず、ただただ、何度もその文面を見る。

「シャロム夫妻は、あなたやクローンクレセレントに余計な感情を与えるなと命令されていたみたいね」

マリアが遠くに見える翠を見つめながら言う。

「でも、クローンクレセントには天性の明るさがあった。もちろん、ディルナの存在もあった」

「……」

「でもね。シャロム夫妻は止めようと思えば止められたはずよ。子どもが隠れて遊ぶ場所なんて、少し考えれば予想がつく。でも、止めなかった。奪いたくなかったのよ。あなたたちの感情を。あなたたちを大切思っていたからこそ」

マリアの髪が風に靡いた。

「これ」

手渡されたのは、アルバム。中を開けば、クレセントが師団入りしたときの写真。その他、全て隠し撮りではあったが、複数枚の写真が、小さなメッセージと共に貼られていた。

決して数は多くない。しかし、それはクレセントを撮ったものだった。

「シャロム夫妻は、あなたとあなたのクローンを全く違う存在として見ていた。立派な人物だったみたいね」

手紙に綴られていたのは、謝罪の言葉と、感謝の言葉の羅列だった。

そして、最後の一文を見たとき、ついにクレセントはその場に座り込んで泣いた。

『私達が言えた言葉ではないが、どうか幸せになって欲しい。愛する娘たち』

「……っ」

膝の上に置いた手を強く握り、静かにクレセントは泣いた。

くしゃくしゃになった手紙。手の甲には、幾滴もの涙が落ちていった。

悲しい擦れ違い。シャロム夫妻を直接殺めたのは、クレセントやヴァンではなかったことがせめてもの幸いだったのだろうか。

否、きっとそんな簡単なことではないのだろうと、マリアは遠くの景色を眺めた。

マリアはクレセントの隣にそっと座ると、何となく呟いた。

「あなた、これからどうするの？」

「え？」

「あなたはこれからどう生きるの？　クレセント・ラ・シャロムとして？　それとも、第三王女の娘として？」

もしもクレセントが第三王女の娘としての名を選ぶのなら、女王

はそれを快く受け入れるだろう。
血統も確かで、施力も申し分ない。次期女王としても、十分に認められる存在となる。

「名前、貰ったんでしょ？」
「はい」

暫しの沈黙。クレセントは涙を拭いて立ち上がると、手紙を小さく折ってポケットに仕舞った。

「わたしは、クレセント・ラ・シャロムとして生きます」
「だと思った。シャロム家を潰し、ペターニ領主になろうとする不届きな輩が動き出したそうよ。どうするの？　現領主様」
「シャロム家は潰させません。……それが、わたしが唯一出来る恩返しです」
「軍は？」
「抜けます。少し、残念ですが」

クレセントが寂しそうに笑う。確かにペターニ領主の仕事は生半可なものではない。
あの膨大な交易の取り纏めをしなければならないのだ。軍と両立するのはよほどの理由でもない限り不可能と言ってもいい。
だが、マリアは小さく笑って立ち上がると、手元に持っていた封筒から一枚の羊皮紙を取り出した。

「そ、でも抜ける必要ないわよ？」
「――え？」

クレセントにその紙を手渡す。

「はい、辞任表」
「は……あの、これ……」

クレセントが辞任表とマリアを交互に見る。
マリアはクレセントから辞任表を取り上げると、声高らかに読み上げた。

「クレセント・ラ・シャロム。交易を担当する五本目の柱として、クリムゾンブレイド直属部隊〈星海〉に転属」
「……嘘」
「いえ、本当」

クレセントは頭の上にプレスを落とされた気分だった。小さなバーニィが端々に散っていく幻覚を覚えつつ、マリアを恨めしそうな目で見る。

「これを進言したのは、マリアですね」
「ご名答。勿論家業を続けながらやってもらうわ。交易の全権を担う領主様、これほど適任な人材はいないわね。必要なら部下も用意する。大変だけど、出来る？」
「女王直筆の辞任表。わたしに断るという選択肢は残されていないのでしょう？」
クレセントは深々と溜息をついた。
その顔はこれから待ち受ける障害を予期し、疲れきっている。

「……シレーネ様にどういう申し開きをして〈風〉を抜ければいいんですか……」
「ああ、それがあったわね。〈風〉も掛け持ちする？」
「できるわけないでしょう。わたしを引き込んだのはマリアなんですから、せめてマリアがシレーネ様を説得してください」

「絶対無理」

はっきりと言い切ったマリアは、宴会の場所へ歩き出す。
クレセントは肩を落とすと、苦笑して顔を上げた。

「マリア」

クレセントが、マリアを呼び止める。
マリアは足を止め、クレセントを振り返った。

「なに？」

「一つだけ、あなたに伝えたいことがあります」

「ありがとう、とか、ごめんなさい、とかなら聞かないわよ」

そう言うと、クレセントは翡翠の瞳を細めて、微笑んだ。

「マリア・トレイターは……」

翠の風がマリアとクレセントの間を通り、蒼い空へと吹きぬける。
白銀の髪が空に舞い、クレセントの唇が動く。

「――――……の大切な、友達です」

その言葉は、マリアの中へすんなりと入っていった。
まるでずっと昔から知っていた言葉のように。
クレセントは、息を吐くと、もう一度にっこりと笑った。

「ヴァンも、アルベルも知りません。でも、あなたにだけは知って

いて欲しかった。マリア、あなたには」
「良い名前だわ」
マリアが手を差し出す。クレセントがそれを強く握る。
「行きましょう、クレセント」
「はい」

遠くで、二人を呼ぶ声が聞こえる。
マリアとクレセントは大きく手を振ってそれに応え、同時に駆け出した。
握った手は、決して離さない。

やっとの思いで手に入れた居場所。それを確認するかのように、二つの手は強く、強く握られた。

人物紹介（前書き）

一章までのネタバレがあります。

人物紹介

□聖王国シーハーツ

○福音師団〈星〉

フェイト・ラインゴッド：主人公。軍部担当。破壊の紋章をもつ。クレアの恋人。

マリア・トレイター：政界担当。改変の紋章をもつ。元反銀河連邦組織クォークのリーダー。フェイトの姉。

ソフィア・エスティード：施術担当。繋ぐ紋章をもつ。士官学校で施術講師をしている。

セレン・ウォン：開発担当。元抗魔師団の師団長。不治の病をかかえている。クレアの幼馴染。

クレセント・ラ・シャロム：交易担当。シーハーツ女王の二番目の妹レイナの娘。ヴァレリアの手から解放され、現在は王族としての権利を破棄し、シャロム家の当主となっている。ヴァンとアルベルの妹。

ディルナ・シュテンノ：クレセントの直属の部下。シュテンノ家の三女であり跡取り候補。〈星〉の発足と同時に〈炎〉から転属した。

○光牙師団〈光〉

クレア・ラーズバード：師団長。クリムゾンブレイドの片翼。シーハーツ軍総司令官。

ヴァン・ノックス：一級構成員。実父にグラオ・ノックスをもつ。母親はシーハーツ王族。アルベルの弟であり、クレセントの兄でもある。クレアの右腕。

セフィリア・S・フラン：最年少一級構成員。クレアを尊敬している。

○封魔師団〈闇〉

ネル・ゼルファー：師団長。クリムゾンブレイドの片翼。クレアの幼馴染。

アストール・ウルフリッヒ：一級構成員。

タイネーブ：二級構成員。ネル直属の部下。ファリンの相棒。

ファリン：二級構成員。ネル直属の部下。タイネーブの相棒。

○連鎖師団〈土〉

ネイビス・ティモール：師団長。アゼルの幼馴染。

アイーダ・シュテンノ：四級構成員。シュテンノ家の次女。

・抗魔師団「炎」

ルージュ・ルイーズ：師団長。クレア、ネル、ヴァンとは幼馴染。

イライザ・シュテンノ：二級構成員。シュテンノ家の長女。

○幽静師団〈水〉

アゼル・クロイツ：師団長。ネイビスの幼馴染。

○虚空師団〈風〉

シレーネ・リシャス：師団長。クレセントのことになると暴走癖がある。

○その他

シーハート27世：シーハーツ女王。アペリスの聖女。

ラッセル：執政官。

エレナ・フライヤ：施術開発部部長。

ユティ・ウォン：セレンの妹。医師見習い。

２一００　遠い日の誓い

初夏。蒼く、碧く、青く色づいた新緑の中。

「ずっと、ずーっと三人でいられたらいいのにね」
「どうしたのよ？　急に」
「急なのはいつものことだけどね」

少しばかり小高い丘の上に、大の字になって寝転がり、見上げた空。

「だって、なんでも変わっていくでしょう？　人も、時間も、思いも」
「それは……まぁ」
「変わらないものなんてないんじゃないかな。既に起きてしまったことですら、人は都合のいいように変えてしまうから」

忘れない。どこまでも蒼く澄んだ空。

「そんなの嫌じゃない。この時間を、変えたくない」
「……相変わらずメルヘンね」
「はは……らしいなぁ」

銀色に輝く風。

「大事だもん。私にとって、あなたたちと一緒にいるこの時間が」
「……よくもそんな恥ずかしい事をさらりと言えたものよね。恥ずかしい」
「そこで素直に、私もよ！　って言えないところが君らしいね」

夕暮れに沈む世界。

「素直じゃないんだから」
「あなたたちはそのご都合主義な頭を治すといいわ」
「あれ？　顔が赤くなってるけれどどうしたのかな？」

いつまでも、こんな時間が続けばいいと願っていた。――叶わないと知りながら。

「あ、そっぽ向いちゃった」
「……うるさい」
「拗ねない拗ねない」

それでも、私達は願っていた。

「私たちは、変わらずにいようね」

「そのお気楽な脳はそう簡単には変わらないでしょ」
「じゃあ、約束しようか」

変わって行く日々の中でも、私たちだけは変わらずにいようと。

「私たちは変わらない」
「……たとえどんなに月日が流れても」
「ずっと、一緒にいる。ずっと、友達だ」

手を繋いで、漆黒に染まって行く空を見上げた。

「約束、守らなかったら髪の毛切っちゃうからね」
「なによ、その罰。髪の毛なんか気にしてるのあなただけじゃない」
「うん、私は別にいいや」

三つの月と、一番星が煌く中。

「二人とも女の子っていう自覚もったら？」
「よく言うわ。一番男気溢れるくせに」
「それは言えてる」

私たちは、

「ど、どういう意味よ！？」
「見た目は可愛い部類に入るのに残念よね」
「本当に。でも、らしいよ」

約束をした。

「もういいわよ！　ほっといてちょうだい！」
「拗ねない拗ねない」
「このやり取りも、何度目かな」

変わらないでいようと。

「……もう、怒ったらなんだか眠くなってきちゃった」
「お子様」
「そういう君も、目がとろんとしてるけど？」

この心を胸に抱いたまま、三人でこの空を眺めていようと。

「あ、流れ星！　あんなに沢山！」
「――流星群」
「すごい……」

星降るような初夏の夜。あの日見た流星群は、私たちの中に鮮明に残っている。

「すごい！　すごいね！！」
「ええ、綺麗」
「目、覚めちゃったな」

無数の星が、空を駆けていった。

「願い事、叶うかな？」
「若干一名、非科学的だ、とか言いそうな子がいるけどね」
「……そう思ってる人はほっといて祈ろうか？」

手を繋ぎ合わせて、目を閉じた。瞼の裏は、いつもと違ってすごく輝いていたのを、今でも覚えている。

「うん」
「ちょ、私じゃないってば！」
「あれ？　そうだったの？」

あの夜、私たちは確かに一緒だった。

「ね、声に出して言おう？」

「出していいものなの？」
「ま、いいじゃない。我らがお姫様の言う事だし。仰せのままにいたしましょう」

声を高らかに祈った願いは、

「準備はいい？」
「いくわよ」
「せーの！」

私たちの心からの願いは、

『ずっと一緒にいられますように！！』

ちゃんと、届きましたか？

もし、もし届いていたのなら、

どうして、

いま、私たちは、

別々の道を歩んでいるのでしょうか？

２－０１　新たなる師団

大聖堂を埋め尽くすばかりの人々の視線が、女王の前に跪く五人の男女に集まる。
それほどの大勢の視線を集めているというのに、皆二十歳前後の彼らに緊張の色はなかった。
女王が落ち着いた、それでいてはっきりとした口調で彼らの名前を呼ぶ。

「フェイト・ランゴッド」
「は！」

精悍な顔立ちの青年が答える。

「マリア・トレイター」
「は」

冷然とした印象を受ける女性が瞳を閉じる。

「ソフィア・エスティード」
「はい」

唯一緊張した面持ちを見せる少女が頭を下げた。

「セレン・ウォン」
「は」

長身痩躯の女性がかすかな笑みを見せた。

「クレセント・ラ・シャロム」
「はい」

目を奪われるほど美しい白銀の髪の少女が、女王を見上げた。
女王は一度柔らかく微笑むと、広い大聖堂に滞りなく響き渡る声をあげた。

「ここに、新たな国を守る盾として、独立特務師団……福音師団〈星〉の成立を認めます」

その瞬間、会場が割れる。
溢れんばかりの拍手が五人に降り注いだ。
彼らはお互いに顔を見合わせて微笑むと、もう一度深く女王に頭を下げたのだった。

「おめでとさん！」

就任式を終えた後、祝宴のため広い会場に移動したフェイトたちは、そこで待ち構えていたネイビスを初め、各師団長や師団員たちの熱い歓迎を受けた。

「まさか発足から一年で師団になっちゃうなんてね。流石っていうべきかな」
「ああ。あんたたちだからこそだね」

フェイトたちに飲み物を配りながら、ルージュとネルが微笑む。

「僕も驚きました」

アゼルが酒を一口煽りながら笑った。

「私はまだクレセントが抜けること納得してないからね！」

「いや、あんたはいい加減諦めろよ」

腕を組んでそっぽを向くシレーネを、ネイビスが呆れた目で見る。

フェイトはその様子を苦笑しながら、並々と注がれた酒を飲んだ。

「僕らも、まさかこんなことになるなんて思わなかったよ」

「ほんとだよ。私もう緊張でへとへと……」

「私は別に……見慣れた顔ばっかりだったし」

がっくりと肩を落とすソフィアの横で、マリアがさらりと言う。

いくら集まったのが国の重鎮達とは言え、それらの面々と日々顔を突き合わせて議論しているマリアにとっては、なんということもないのだろう。

「でも、少し緊張しました。こんなこと初めてですし」

「そう言う割には、一番落ち着いてたけど？」

「セレンさんほどじゃありません」

胸に手を当てて苦笑するクレセントの言葉に、セレンが空になったグラスを振りながら笑う。

「で、初の入団試験は明後日だって？　ハードね。鬼だわラッセル様」

「ま、任務の内容が内容だからね」

半ばほろ酔気味のルージュに酒を注ぎ足してやりながら、フェイトは笑う。

ソフィア、マリア、セレン、クレセントを見つめ、お互いに微笑んだ。

福音師団〈星〉。この師団が新たに創設されることが決定されたのは、今から凡そ半月ほど前である。

半年前に起きた国内の大規模な暴動。〈銀の研究〉と名づけられた研究が発表されたシーハーツは国民を揺るがし、国内は一時混乱の波に飲まれた。

特筆すべきは貴族の暴動。大小の暴動が勃発し、罪から逃れようとする貴族達が取った行動が、身代わりを立てるということだった。

そこで活躍をしたのがフェイトたちである。

身代わりにされ、犯罪者となってしまった人々を独自調査で調べ、罪を晴らした。

その他にも〈星海〉の活躍は目覚しく、鎮圧に1年はかかると言われてた暴動は、僅か数ヶ月で治まったのだ。もちろんフェイトたちばかりではなく、各六師団やラッセル、そして女王の働きがあってこそのことだ。

――その結果、主にフェイトたちによって救われた人々が〈星海〉への入隊を希望してきたのだ。

〈星海〉は五人の少数精鋭部隊である。仕事上副官をとらなければならないクレセントは例外であるが、他は一切取ってはいなかった。だが、噂が噂を呼び、つい一ヶ月ほど前には、入隊希望者が三桁を軽く越えたのだ。こうなると流石に無視はできない。

そこでラッセルは、〈星海〉を解散させ、五柱を主とする新たな師団を創設することを決定した。――それこそが、福音師団〈星〉である。

こたびの活躍で、貴族はフェイトたちを信用しなくなった。既に女王たちが恐れていた裏で小細工をし、罪無き人を陥れる部隊が生まれたという話もあった。

そうなってしまえばフェイトたちが細々と動く必要はない。戦力を確保することも含め、堂々と部隊を作り事に当たろうと判断したのだ。

そして〈星〉は先に懸念されるグリーテンとの国交についてを担当する部隊となった。

〈風〉は曲がりなりにもグリーテンを探っていた師団である。流石に友好関係を築こうというのならば、別の師団を当たらせるべきだという判断だった。

公には知られていないが、フェイト、マリア、ソフィアは星の世界の住人。グリーテンの技術の前に遅れを取ることなく話を進められる。クレセントも幼い頃からずっとグリーテン育ちだったのだ。グリーテンということだけを考えれば、この国で一番有力な人材だろう。

その他の〈星〉の主な任務は変わらず総纏め役とクリムゾンブレイドの補佐である。無論重要案件を処理できるのは規定通り五柱だけではあるが、その他の雑務を師団員に任せられることにより、能率は格段にあがる。

戦になれば独立部隊として、少数人数で動く。それゆえ選ばれるのは事務に徹する者以外は、武に優れる者を少数選抜する予定なのである。

そして、その新師団〈星〉の師団員を選ぶ試験が、明後日行われる。

「祝いの席で申し訳ないんだけど、その資料を今クレアとヴァンが……あ、来たわ」

「フェイト」

人混みの間から、銀髪の女性と金髪の青年が姿を現す。

フェイトは女性に満面の笑顔を向けると、手を振って歩み寄った。

「クレア」
「おめでとう、フェイト。マリアさんたちも」
「一年間で二度もこんな盛大なパーティーをするなんてそうそうあることじゃない。流石はフェイト君たちだな」
ヴァンも柔らかな笑みを浮かべる。フェイトは目を丸くし、マリアたちを振り返った。
「そうなのかい？」
「そうだな。多分初めてじゃねぇ？」
「え！？」
頭を掻きながら投げやりに答えるネイビスに、フェイトは更に目を丸くした。
が、突如ネイビスの背後から現れた手が、その頭を叩く。
「いい加減なこと言わないで下さい、ネイビス様」
「次女……上官を殴るとはおまえ……」
「君は？」
「初めまして、フェイト様。連鎖師団〈土〉のアイーダ・シュテンノです」
薄茶色の髪の女性がフェイトに頭を下げる。一番に目がいったのは、その瞳だった。両の目の色が異なっているのだ。澄んだ翠と蒼。一瞬誰もが目を留めてしまうような、綺麗な瞳だった。
だが、それ以上に気になったことがあったフェイトは首を傾げてアイーダを見つめた。
「シュテンノ？　もしかしてディルナの妹さん？」
「いえ、姉です。私は一番下ですから」

「あ、ディルナ。イライザも」

次いで現れたのは、長かった黒髪を肩まで切ったディルナと、薄茶色の髪の女性だった。その女性もまた、瞳の色がアイーダと同じ色をしていた。ただ、左右は逆であるが。

ディルナの横に立つ女性は軽い足取りでフェイトに近寄ると、フェイトの顔をまじまじと見つめて笑った。その妖艶な笑みに、フェイトが思わずドキリとする。

「あら、流石はクレア様の選んだ人。実力だけじゃなくて顔も抜群ですね」

「い、いや……そんな……」

「ふふ、赤くなっちゃって可愛い」

「姉上、それぐらいにしておないとクレア様の雷が落ちますよ」

調子に乗ってフェイトをからかい続けるイライザの腕をディルナが軽く引っ張る。

イライザは意外とあっさり引き下がり、ルージュの元へ駆け寄って行った。

「い、いまのがイライザさん。噂には聞いてたけど、本当に似てない姉妹ですね」

その瞬間、フェイトとマリア、そしてソフィアを除く面々の空気が変わったが、フェイトは気付かなかった。

「それよりも、はいこれ

クレアがやや上擦った声でフェイトに分厚い書類を渡す。

ヴァンも同じようにクレセントとマリアに書類を渡していた。た

だ、フェイトに比べ随分と薄かった。

「これは」

「ええ。入団希望者の中から、ある程度の基準を通った受験者たちよ。約五百人。この中から五十人程度を選抜ですって」

「ご、ごひゃく……」

「もちろん必要な人員は派遣するわ。選抜の方法は正規の試験でもあなたたち独自の審査でも構わないそうよ」

フェイトの顔が引きつる。いますぐにでもこの宴会を抜け出し、明日の準備に備えて眠りにつきたい気分だった。

「これはマリア様の部隊の分で全部で六十七名です。――で、これがクレセントだ。七十名、だったかな」

手渡された書類に目を通していくマリアとクレセント。

手際よく資料に目を落としていたクレセントの手が止まり、二枚の紙をおもむろにヴァンにつき返す。

「六十八名です」

「は？　あ、ああ……」

一瞬何を言われたのか理解できなかったヴァンであるが、その二枚を見た瞬間、納得したように頷いた。そして、その様子を情けない顔で見つめていたネイビスとシレーネに目を向けると、大きく溜息をつく。

「ネイビス様、シレーネ様。おふざけはよして下さい」

「なにを！　俺は本気だ！」

「そうよ！　大本気よ！」

「よけいに悪いです。師団長が二人も辞めたらどうなると思ってるのですか」
「ちっ」

尚も食い下がるネイビスとシレーネを呆れ顔で見つめながら、ヴァンはクレセントの頭に手を乗せた。

「おまえも、苦労するな」
「でも、嫌じゃないです」
「そうか」

そう、以前なら考えられないような笑顔で笑うクレセントを見つめ、ヴァンは思わず顔を綻ばせる。
クレセントもそんなヴァンの手に自分の手を重ね、もう一度笑うのだった。

「ところで、ヴァン君」
「なんですか、セレン様」
「私のところは？」
「申し上げにくいのですが……一人も」
「え、ほんと？」
「あははぁ。みんなシャイなんだからぁ」

いつの間にか現れたエレナ。セレンは数秒エレナを凝視すると、納得したように頷いた。

「なるほど。はい、了解」

「あら、セレン。どういうことかな？」
「みんな素直ってことですよ。上司がエレナ様ときたらね。そりゃ私だって何度やめたいと思ったことか」
「言うわね？」
「すみません。正直者で」
「私は好きよ。正直者」
「ありがとうございます」

終始笑顔で交わされる会話に、ヴァンは小さく身震いをして立ち去った。

※

「で、明日……というか今日のことなんだけど……」

シランド城に作られた執務室で、フェイトは頭を抱えながら資料に目を通していた。
宴会は丸一日以上続き、終わったのは入団試験当日の午前三時を過ぎた頃であった。まだ続けると言い出すアドレーを無理やりクレアが殴って押しとどめ、フェイト達は早々に執務室へと移動した。
そしてこれから今日の午前から始まる入団試験の打ち合わせなのだが……。

「セレン……弱いなら弱いで少しは自重してくれ……」
「の、飲んでる時は平気なんだけど……あ、無理。やっぱ無理。気持ち悪い。ごめん、寝ていいかな」
「セレンさん、水どうぞ」
「ありがとぉ……ソフィアちゃん」

半ば呆れ顔で水を渡すソフィアにセレンは真っ青の顔に少しの笑顔を浮かべる。

「まぁ、そこの酔っ払いは放っておいて、話進めるわよ」

「マリアの部隊は人数もそれほど多くはないので、マリアと〈光〉から数人を。わたしの方はディルナが選抜担当してくれます。それほど人数が必要な試験ではないですし、彼女一人で充分でしょう。ですからわたしはフェイトさんの部隊の選抜をお手伝いします」

ディルナは半年前、クレセントが五柱に就いたと同時に〈炎〉を抜けた。そして、軍と家を両立させなければならないクレセントの右腕となったのだ。

元々商家の跡取りであるディルナにとってもこちらのほうが色々と都合がよかったのだ。そのせいもあり、ディルナとクレセントの確執は無くなった。少なくとも、傍目からはそう見えた。

クレセントも、ほぼゼロのスタートであった商取引の勉強を僅か数ヶ月で終わらせ、今では前領主フローレンスには遠く及ばないものの、ペターニ領主として恥じない働きをしていた。ただ、度々無理をし過ぎる機雷があり、マリアとディルナに雷を落とされることが欠点である。

「助かるよ、クレセント。選抜方法は事務担当はセレンに任せたいと思ってただけど……無理そうだからね、他の人に頼むよ」

「いや、やるよ。これ以上ラッセル様に叱られたくない」

「……そうか。じゃあ君はもう寝てくれ」

五柱の仕事量は決して少なくなく、家に帰らず仕事中に仮眠を取ることもしばしばである。それゆえ、部屋には仮眠用の別室が用意されていた。

本来は男性用と女性用で二つ作る予定だったのだが、〈星〉は構成メンバーの大半が女性であり、かつ唯一の男性が人畜無害なフェイトであることから、予算を減らす意味でも一つになったのである。

「じゃあ、お言葉に甘えて。――はあ、またユティに怒られるなぁ……」

「大丈夫ですよ。こうなるだろうと思ってユティちゃんは知り合いの先生に頼んでおきましたから」

「ありがとう。毎度毎度迷惑かけちゃってるね」

「いえ。先生も可愛い娘が出来たみたいて喜んでましたから」

「そうだと、いいんだけど……」

セレンの声が徐々に尻すぼみになる。眠たそうに目を擦ると、セレンは扉の奥に姿を消した。

フェイトはセレンの後姿に手を振ると、クレセントに向き直った。

「あとの試験官だけど、誰が空いてるんだい？」

「〈光〉からはヴァンとセフィリア様。〈闇〉はタイネーブ様。〈土〉はネイビス様。〈炎〉はイライザ様。それとお名前は窺いませんでしたが、十名ほどが協力して下さるそうです」

「僕らを合わせて十八人か。ソフィアとイライザさんには施術を見てもらいたいから十六人。一人頭約三十強か……いけそうだな。施術は使えない人もいるだろうし、ソフィアとイライザさんの独断で評価をつけてくれ。僕らの部隊は施術を基準にはしていないんだからね」

「うん、わかった」

ソフィアが頷く。

フェイトはこれをチャンスだと思っていた。各六師団は、入団試験に置いてどうしても施力が重視されてしまう傾向がある。

だが、〈星〉はフェイトたちに選考方法が任された。つまり、施力がなくても上につけるということである。そうして積極的に施力重視の傾向を崩していくことで、少しずつだがシーハーツは変わる。それは、フェイトの一つの目標でもあった。

「じゃあ、詳しい評価基準はこれを見ておいてくれ」

そう言ってフェイトは前々から準備しておいた資料をソフィアとクレセントに渡す。セレンの枕元にもそっと置き、薄手のシーツをかけなおした。

「時間は午前十時。場所は中央修練施設だ」

フェイトの一言で会議は締めくくられ、それぞれがベットに潜り込む。シランド住まいのフェイトやマリア、ソフィアはまだしも、クレセントは実家に帰っている時間はない。

そもそも、ユティが待つセレンや、家が好きなソフィア以外は大抵この場で寝泊りすることが殆どであった。

「おやすみ」
「ええ、おやすみなさい」
「おやすみぃ」
「おやすみなさい」

そう言って、目を閉じる。

ベットの中で明日の予定を整理をしながら、フェイトは深い眠りについたのだった。

※

福音師団〈星〉にとって重要な日となる今日。
他の三人が手際よく仕事をしている中、フェイトとクレセントは今だ夢の中であった。
最初は放っておいた三人だったが、流石に時間が危うくなり、仕方なしに起こそうとしたが、マリア、ソフィアが立て続けに失敗し、そこで立候補したのがセレンだ。

「フェイト、朝だよ。君が遅刻してどうするの」
「……もう、少し……」
「……そう。わかった。ソフィアちゃん、あれ持ってきて」
「あれってなんですか？」

ソフィアが疑問の声をあげる。セレンはにっこりと笑って言った。

「ほら、あのエレナ様が造った――」
「おはようございます」

セレンの言葉を遮り、神業ではないだろうかと思うほどの勢いでフェイトは飛び起きた。

「はい、おはよう」とセレンが微笑む。

以前の苦い記憶がまざまざと蘇り、フェイトは口元を抑えた。

「クレセントも寝坊かい？　珍しい」

軍服に着替えたフェイトが、開け放たれた扉の向こうに見えるベットで丸くなっているクレセントに目を向ける。
普段ならとっくに起き出している時間である。
マリアはクレセントの机の上に広がる書類を呆れ顔で見つめ、大きく溜息をついた。

「昨日私たちが寝た後に仕事してたらしくてね。全く、迂闊だったわ」
「クレセントらしいと言えばらしいけど……またディルナに怒られるな」

そうフェイトが苦笑しつつクレセントを起こそうとしたところで、執務室の扉がノックされ、ディルナが顔を出した。

「フェイト様、会場のほうは準備が整いました。既に受験者も配列済みです。あとは試験官を集めて最終確認を……」

淡々と報告を済ませていたディルナが、急に不機嫌そうな顔になる。眉間に皺を寄せ、つかつかと室内に足を踏み入れた。
当然ながら目指す場所はクレセント。大きく息を吸い込み、ディルナは寝息をたてるクレセントの耳元に口を近づけ――

「起きろッ！！」
「――ッ！！」

クレセントが体を跳ね上がらせて起き、痛む耳と頭を押さえて蹲った。
そして、片目でディルナを見上げる。

「お、おはようございます……」

「おはようございます、クレセント様」

いまの状況では不気味でしかない、ディルナの爽やかな笑顔。クレセントはベッドの上で身を縮こまらせた。

「でぃ、ディルナ？　なにをそんなに怒ってるのですか？」

「怒ってる？　ええ、そりゃ怒りたくもなりますね。こんな大事な日に上司が寝坊してるとあっては……」

「え！？　い、いま何時ですか？」

途端にクレセントの顔から血の気が引いていく。

ディルナは大きく溜息を吐き、クレセントにタオルを投げた。

「試験開始三十分前。わかったらさっさと顔洗ってこい」

「ご、ごめんなさい」

「大丈夫だよ、クレセント。まだ時間はあるから」

申し訳なさそうに頭を下げるクレセントにフェイトは手を振って答える。

クレセントはもう一度深く頭を下げると、すぐさま部屋を飛び出していった。その様子を盛大な溜息を共に見送ったディルナは、乾いた笑みを漏らす。

「随分と、変わりましたね。あんな顔もいまじゃ見慣れていますけれど……」

「前なら信じられないわね」

同意するようにマリアが頷く。

半年前、アンフロックから人へと変わったクレセントは、この半年で僅かだが様変わりをしていた。身長の伸びはそれほどでもない

が、背中ほどまで伸びた髪が、あの幼い顔つきを随分と大人びて見せた。

――そして、感情も。

長年の間クレセントを蝕んでいた感情の欠落は、もう殆ど見られない。

普通に笑い、普通に泣き、普通に怒る。まだ多少のぎこちなさは残ってはいるが、まるで人形、そう呼ばれていたクレセントはもはや存在しないのだ。

「戻ってきてくれたみたいだ」

呟かれた言葉は、誰の耳にも入らない。

声無く笑い、ディルナは執務室から姿を消した。

※

「試験の方法ですが、試験官自らが受験者と五分間、一対一で試合形式を行ってください。武器、施術の使用は可。とにかく総合的な判断でお願いします」

試験官用に用意されたテントの中で、フェイトは約二十名の試験官に説明をしていく。

クレアの計らいか、集まった人はどちらかと言うと施術に重点を置いている人物ではなかった。つまり、試験官の私情が入ることはない。

「五百名の受験者は五十人ずつ十ブロックに分けています。僕、ヴァン、ネイビスが一人で一ブロックを担当します。残りはその組み

分け表どおり各ブロック二人ずつで担当してください。なにか質問は？」

説明を終えたフェイトが辺りを見渡す。

「ないみたいですね。では、よろしくお願いします」

フェイトが頭を下げる。

試験官はフェイトに敬礼をすると、それぞれのパートナーと共に各々の持ち場に向かって行った。

「まさかあなたと組むことになるとは思いませんでした」

翡翠の双剣を腰に差すクレセントに後ろから声がかけられた。

クレセントが振り向くと、そこには藍色の髪を持つ少女。

「申し訳ありません、セフィリア様」

「な、なぜ謝るのですか。それにですね、いまではあなたの方が私の上司です。様付けは止めて下さい。それにあなたは……」

「もう王家の権利は返上しました。わたしはペターニ領主シャロムの当主です。それ以外何者でもありません」

クレセント、そしてヴァン、アルベルは半年前に王家の名前と権利を放棄した。

反対する声も多かったが、クレセントたちは引かなかった。クレセントはシャロムの名を継ぎ、ヴァンとアルベルはノックスの名を選んだのだ。

クレセントは黙り込んだセフィリアに一度微笑むと、剣をしっかりと腰のベルトで固定した。

「それにわたしは軍管轄ではないので、あなたの上司ではありませんよ」
「とにかく駄目です！　クレア様からあなたの言葉遣いが誰に対しても敬語なのは窺っていますから、それについては申しません。ですが、様付けはご遠慮願います」
「では、なんとお呼びすれば？」
「……調子が狂いますね。セフィリアで構いません」
やや肩を落としながら、セフィリアが答える。クレセントは柔らかく微笑んで頷いた。
「わかりました。では、わたしのこともクレセントと」
「あ、あのですね……そういうわけには」
「ディルナもそう呼んでいます。ですから問題はありません」
全く持って筋が通っていないのだが、クレセントは引こうとはしない。
意外と引かないタイプなのか、とセフィリアは頭を抱えた。
「そういう問題では……」
「平気です」
「……分かりました。ですが、公式な場ではクレセント様とお呼びします。それでいいですね、クレセント」
「はい。ありがとうございます」
「ほんと……調子狂う……」
「フェイト君」
「ん、なんだい？」

「さっき会場を一回りしてきたんだがな、どうやら豊作だぞ」

テントの外でウォーミングアップに剣を振っていたフェイトに、ヴァンがこっそりと耳打ちをする。

フェイトは一旦剣を振る手を止めた。

「へぇ、それは楽しみだね」

「特にクレセントの所だな。平均的に期待できそうだが、一人気配の違う子がいた」

「強そうなのか？」

「ああ。見た感じでは段違いだ」

離すヴァンの目は真剣そのものだ。

フェイトはクレセントとセフィリアが担当するブロックへと視線を向ける。遠めでよくわからなかったが、女性よりも男性の比率のほうが多かった。

そんな中、一際目を引いたのが頭にターバンらしきものを巻いている少女。シーハーツでは珍しい、かといってグリーテンでもサンマイトでもない服装の少女だった。

「彼女かい？　あの変わった服装の」

「さすがだな。その通りだ」

そう言いつつ、ヴァンが一枚の資料をフェイトに渡す。フェイトは資料に目を通し、首を傾げた。

「ナミア・トゥムルス。十六歳。出身は……ないな」

「どうやら旅の者らしい。詳しいことはよく分からんが」

「でも、いいことじゃないか。有能な人材なら是非協力してもらいたいしね」

「ああ。それはその通りだ」

フェイトから返された資料を袋に仕舞いながら、ヴァンは笑顔で頷いた。

「それよりも、ヴァン」

「ん、なんだ？」

剣を鞘にしまったフェイトは、やや意地の悪い笑みでヴァンを見ると、

「クレセントばっかり気にしてるのはいいけど、ほどほどにしないと嫌われるよ？」

「な――！」

驚くヴァンを尻目に、担当ブロックへと駆け出した。

「では、これより福音師団〈星〉入団試験を開始します！」

そして、シーハーツの新たな一ページを告げる声が、高らかに響いたのだった。

2－02　風雷の戦乙女

「制限時間は三時間。――始め」

セレンの一声で五十人近い受験者が一斉にペンを走らせた。積み上げられた書類に目を通し、メモを取っていく。

ペンが紙を滑る音だけが聞こえる中、扉がゆっくりと開いた。そこから顔を出したのは、銀髪の美しい女性。受験生の何人かがその姿に気付き頭を下げるが、女性は気にしなくて良いという風に手を上げ、セレンに歩み寄った。

「どう？」

「やぁ、クレア。結果を見てみないとどうとも言えないかな」

「ちなみになにをやらせてるのかしら？」

「情報処理。少ない時間で膨大な量の情報を捌ける人材が欲しいからね。ちょっと意地悪しちゃった」

羽ペンで顎を撫でるセレン。クレアが首を傾げる。

「意地悪って……どういうこと？」

「あれね。ためしに姫様にやらせてみたんだけど、五時間かかっていたよ」

受験生の横に詰まれた書類を親指で指し、セレンが小さく笑う。

常人とは比較にならないほど情報処理に優れているクレセントで五時間を要したのだ。それを三時間でやれなどというのは無理難題だ。

三時間など到底不可能。ただ一人を除いては。

「ちなみにあなたは？」
「二時間」
あっさりと言ってのけるセレン。クレアはお手上げとばかりに肩を竦めた。
「頭が下がるわね」
「ま、終わらなくてもいいんだ。処理の能力と、長丁場の集中力さえ見られれば」
「なるほどね」
「で、君はなにをしに来たの？　お忙しい師団長様？」
「え、ああ。丁度ひと段落着いてね。フェイトの所の応援に行こうとしたら、施術兵器研究所からあなたへの伝言を頼まれたのよ」
クレアが思い出したように手を叩き、脇に抱えていた封筒をセレンに渡す。その厚さは今受験生たちが処理している紙束の比ではない。
セレンはあからさまに顔を歪める。
「こういうの好きじゃないんだけどなぁ」
「選り好みをするならキチンと仕事をすることね」
「手厳しいね」
「いいから。どうせ暇でしょう？　この試験が終わるまでに見ておいて」
返事はない。クレアがセレンに目を向けると、既に真剣な顔で書類を読んでいるセレンの姿があった。
クレアは気付かれないように微笑むと、長い銀髪を揺らしてその場を後にしたのだった。

※

「ブロックを担当するクレセント・ラ・シャロムと――セフィリア・S・フランです」

クレセントがセフィリアを手で示すと、後ろに控えていたセフィリアが一歩前に出た。

約五十人の受験生。受験資格を得た年頃の少年少女から中年まで年齢層は様々であるが、彼らには一つの共通点があった。

それは、自分、親親族、もしくは親しい者をフェイト達に救われたことである。だからこそ彼らはこの師団を求めた。少しでも恩返しをするために、今度は自分達が救うために。

クレセントは綺麗に整列した受験生を見渡すと、声のトーンを少し上げた。

「試験方法は簡単です。わたしか彼女と一対一で戦ってもらいます。施術、武器の使用は可。真剣勝負です。本気でかかってきて下さい」

「それと、先に注意をしておきますが、施術が使えるからといってそればかりに頼っていては駄目です。〈星〉は施術を重要項目に置いてはいません」

セフィリアの言葉に、一瞬集団がどよめいた。

「では、受験番号の早い方から。試合の前に受験番号と名前をお願いします」

そう言ってクレセントは四角く線が引かれた枠内に移動する。約五十m四方。隣では、既にヴァンのブロックが試験を開始していた。

最初の受験生。まだ幼さの残る少年が、枠内に足を踏み入れた。
緊張のせいか、手と足が一緒に出ている様子を見て、クレセントは小さく笑った。

「緊張しなくても大丈夫です。落ち着いて、いつもの通りにやればいいのですよ」
「は、はい！」
「では、受験番号とお名前を」
「さっ、三百一番！　シュナ・レインフィルドです！」
「レインフィルド」

クレセントが口の中で繰り返す。知っていた。国内でも有数な貴族である。
通常の試験ならばこの時点でいくらかポイントがプラスされることだろう。しかし、それはない。
クレセントは腰の双剣を抜くと、ピタリとシュナと名乗った少年へ向けた。

「では、始めましょうか」

シュナが息を飲む。
穏やかだったクレセントの空気が、一瞬で緊迫感のあるそれへと変わったのだ。
腰からその身の丈につり合ったブロードソードを抜き、斜め下に構える。

「始め！」

そして、セフィリアの合図と共にシュナは全力で駆け出したのだった。

「それまで」

セフィリアが短く告げる。クレセントはシュナの眼前に突きつけていた剣を引き、一歩後ろに下がった。

悔しそうに黙り込むシュナにそっと手を差し出す。

「真正面から突っ込んでいくだけでは駄目です。一太刀一太刀に意味を篭めるようにして下さい」

「は、はい！」

「では、あなたは第二次の試験へ」

フェイトが決めた入団試験の方法は、内容は違えど正規の通り第三次までの総合評価で合否を決めるものだ。

一次が総合戦闘能力、二次が一般常識、三次が施術である。ただし、施術が使えないものは別途に実技試験が控えている。

シュナはクレセントとセフィリアに深く一例をすると、早足に二次の試験場へと歩いていった。

「評価は？」

紙とペンを持ったセフィリアがクレセントにそっと耳打ちをする。

「Dです」

「辛口ですね」

「フェイトさんからは厳しくつけるようにと言われました」

半端な戦力で戦いに出し、みすみす殺したくはない。そのフェイ

トの心境を分かっているからこその判定なのだ。
入団試験で一定期間の訓練を経て師団入りする六師団とは違い、『星』はこの試験に合格すればすぐに師団員である。だから選ばれるのは即戦力になる精鋭のみなのだ。
そうして着々と審査は進み、丁度十五人目の男性がクレセントに深く頭を下げて立ち去っていった。

「では、次」
「はい」

クレセントが受験生を見やる。高めの声で返事をしたのは、明らかに異国の少女だった。
頭にぐるぐると巻かれたターバンのような布の隙間から見えるエメラルドグリーンの髪が印象的な、好戦的な少女。服装はややゆったりとしたスカートに上着を羽織っている。

「番号は三百十六番。名前は……ナミア。ナミア・トゥムルスです」
「見ない服装ですね」
「単なる旅の根無し草です。ただ、腕には自信があります」
「頼もしいです」
「あ、試験官さん。一つお願いがあるんですけど」

にっと笑い、ナミアは手をあげた。

「なんでしょう？」
「フェイト・ラインゴッド様と、やらせて貰いたいんです」

人懐っこいナミアの笑みが一瞬で別のものへと変わったのを、クレセントは見逃さない。
だが、あくまでも表情を崩さずにクレセントは言った。

「理由を教えていただけますか？」
「単純です。あなたでは物足りない」

またも人の波が揺れた。
試験官に面と向かってこのような事を言えば、本来即退場である。
怒るどころか、驚いたようにナミアを見つめるクレセントに代わり、セフィリアが眉を顰めてナミアを嗜めた。

「失礼ですよ。そういうことは受験者が決められることでは……」
「分かりました」
「ちょ、クレセント様！」

セフィリアの言葉を遮り、笑顔を見せるクレセント。セフィリアは慌ててクレセントの腕を掴んだ。
しかし、クレセントはそれを気にすることもなく続ける。

「では、こうします。一度私と手合わせして頂き、わたしが負けるようでしたら、フェイト・ラインゴッドに取り次ぎましょう」
「おもしろいですね」
「クレセント様！　そのような事を勝手にお決めになられては！」

尚も抗議するセフィリアをクレセントはやんわりとした笑顔で宥める。

「大丈夫です。良い人材ならば、フェイトさん自身に見ていただいたほうがいいでしょうし、わたしが負けないかもしれません」
「負けないかもって……ああ、もう分かりました。私は知りませんからね」

折れた。どうしてだか、クレセントには口で言っても勝てる気がしない。そう観念したセフィリアは溜息をついて引き下がるしかないのだった。

「はい。責任は全てわたしが」

クレセントはそう言い、ナミアへと視線を戻す。

そしてその姿を見て、首を傾げた。

「武器は？」

「あたしは素手です。剣も槍も使えないことはないですが、これが一番しっくりきます」

「そうですか。では、わたしも素手でお相手をします」

クレセントは腰から双剣を外し、セフィリアに預ける。もう何も言うまいと心に決めたセフィリアはそれを黙って受けとる。

その様子をいかにも不満気に見つめるナミアに、クレセントは変わらぬ表情で言った。

「別にハンデでも、あなたをなめているわけでもありません。あくまでもあなたを審査するのがわたしの役目ですから」

「あまり傷つけちゃ申し訳ないとおもったんですが、取り消します」

「はい、その心配は無用です」

威圧的なナミアの視線を、クレセントは涼しげな顔でやり過ごす。

クレセントの双剣を片手に下げたセフィリアは、その姿が蒼髪の女王と被り、盛大な溜息を吐くのだった。

「クレセント……少しマリア様から離れたほうがいいわ」

※

「よし！　これまでだ！」

フェイトが額についた汗を拭いながら声を張り上げる。

五十人。それなりの実力者を審査をしながら、なるべく傷をつけないように気を使っていると、流石のフェイトでも疲れが見え始めていた。

涼しい風が吹いているとはいえ、初夏である。照りつける太陽の中ぶっ続けで剣を振るっていればそれも当然のことだろう。

最後の受験生がフェイトに深く頭を下げて立ち去っていく。

フェイトはそれを見送ると、備え付けの椅子に腰を下ろし、書類にペンを走らせた。

と、

「お疲れ様」

「わっ！」

冷たいカップが頬に当てられ、フェイトは思わず声を出した。

上から降り注ぐ忍び笑い。フェイトは罰が悪そうにカップを受け取ると、冷えた水を一気に飲み干した。

「ふぅ、生き返った」

「手伝おうと思ったんだけど、必要なかったみたいね」

カップを差し出したクレアが、フェイトの横に腰掛ける。

「そんなことはないよ。その心遣いが嬉しい」

「ふふ、どういたしまして。うーん、じゃあネイビスのところでも手伝ってこようかしら。彼、体力ないのよね」

全く情けない、と首を振るクレア。フェイトは苦笑して書類に目を通した。

現段階でA判定は三人。Bが七人。Cが十人。Dが三十人という結果だ。

「ふぅん、随分と辛口な判断ね」

「国を良くするために必要な事だからね。それは慎重にもなるさ。ちなみに、このA判定の三人のうち二人は施力なし」

フェイトが指で軽く書類を弾く。

「こんなに優秀な人材が埋もれさせるなんてね。勿体ないよ」

「ええ、その通りね」

クレアも渋い顔で同意する。

施力重視の社会。このせいで苦渋を舐めざるを得なかった人が過去どれほどいただろうか。

「ま、言っても始まらない。ネイビスとクレセントの所が滞ってるみたいだから、そっちの人を少しこっちに回してもらおう」

「ええ、じゃあ私はネイビスの所に……」

「ちょっと、いいかしら？」

立ち上がろうとしたクレアの前に、一つの人影が立っていた。深く被られたフード。ハスキーな声だったが、女性のものだった。

クレアはその声に首を捻った。どこかで聞いたことのある声だったのだ。

受験者の一人かと思ったフェイトが女性の前に立つ。

「なにか御用でしょうか？」
「飛び入りなんだけど、試験をして欲しいの」
「え？」

フェイトが目を丸くする。
この修練施設に入るためには、それなりの検査を通らなければならないはずである。飛び入りなどはありえない。

「お手合わせ願えるかしら？」

本来ならば受け入れることなど決して出来ない。
だが、

「いいでしょう」
「ちょっと、フェイト！」
「いいじゃないか。いまは一人でも多く人が欲しい。それに、僕の見立てではこの人は相当強い」
「あら、嬉しいこと言ってくれるわね」

フードの下で女性が笑う。上品な口調に似合わない快活な笑い方だった。

「では、そちらに」

フェイトが女性を枠の中へと招き入れる。

「武器は？」
「槍を、貸してもらえるかしら？」
「分かりました」

受験生の会場への武器の持ち込みは基本的に禁止されている。そのため、試験場には様々なタイプの武器が用意されているのだ。
フェイトが壁に立て掛けられている槍の中から柄が細く、刃が少し大きめの槍を取り、女性に手渡す。
女性はそれを手に取ると、二、三度振り、頷いた。

「いい槍ね。武器を選ぶ目も確かってことかしら」
「ありがとうございます。では、始めましょうか」
「ええ」

フェイトが剣を構える。女性は槍を片手で構えた。
それなりに重量のある槍だったのだが、女性はそれを苦ともしないようだった。
その独特の構えに、クレアは目を見張った。

「まさか……」
「じゃあ、行くわよ」

女性が駆け出す。容赦ない連続の突きがフェイトの真正面に繰り出されるが、フェイトはなんなくそれを交わしていく。
一度距離を取り、素早く女性の真横に移動し、剣を振る。
だが、

「なっ！？」
「甘いわ」

それは防がれた。
フェイトが驚いているのは防がれたことについてではない。むしろあの角度で防がれるのは当然のことである。

驚くべきは女性がまだ片手で槍を操っているということだ。フェイトの一撃は決して軽くはない。そして受け止める女性も決して屈強な体つきではないのだ。

だが、その腕はフェイトの剣を受け止めているというのに、全く動かない。

「見た目に騙されちゃ駄目よ。女だって力持ちなんだから」

女性が槍をずらし、フェイトの剣を払う。

「さぁ、次はあなたからかかってらっしゃい」

フェイトが真正面から斬りかかる。小細工も何もない。真っ向からのぶつかり合いだ。

次々と繰り出される剣撃は、吸い込まれるように女性の槍に流されていった。

だが、フェイトは焦りもしなければ動揺もしなかった。むしろ、どこかでこの状況を楽しんでさえいたのだ。

フェイトは戦いを好むタイプではないが、強者との試合は一剣士としてやはり胸が高鳴る。

「ふっ！」

力を篭めて剣を振るう。それを受けた女性の体が、僅かに後ろに下がった。

女性が初めて槍を両手で持つ。

「やるわね」

「流石にこのままじゃ負けられませんからね」

「じゃあ、長丁場もなんだし……これで決めましょうか」

女性が頭の上で槍を回し、斜め下に構える。
フェイトは気付かない。女性の声が、何時の間にかハスキーボイスから澄んだ声に変わっていたのを。
クレアは大きく溜息を吐いた。額を手で押さえ、大きく肩を落とす。

「三年ぶりに帰って来たと思えば……」

その呟きと共に、フェイトと女性は同時に地面を蹴った。
常人の目には消えたようにしか映らないだろう。金属が交わり、弾き飛ばされる音。何かが地面に倒れる音。
そして、

「惜しかったわね」

地に倒れるフェイトの顔の真横には、槍の切っ先が深々と突き刺さっていた。
フェイトは呆然と女性を見上げていたが、やがて観念したように両手を上げた。

「参りました。僕の負けです」
「でも、ちょっと計算外。完全にかわしたと思ったんだけど……」

女性の顔をすっぽりと隠していたフートが二つに割れる。きめ細かな薄水色の銀髪が風に揺れた。
戦乙女。その言葉はまさにこの女性の為にあると言っても過言ではないほど堂々とした壮年の女性が、フェイトを好戦的な蒼の瞳で見下ろしていた。

「あなたは……」

フェイトが体を起こしながら女性を見つめる。
女性は楽しげに喉を鳴らし、槍を引き抜いた。

「あら、まだ分からない？　フェイトくん」
「え？」
「私たちってそんなに似ていないかしら？」

女性が槍を投げる。

「さぁ、どうなんでしょうか」

それを受け取ったクレアが、壁に槍を立て掛けてフェイトと女性に近づく。
フェイトは目を白黒させ、女性とクレアを見比べた。

「え、え？　まさか――」
「ええ、そのまさかよ。フェイト」

クレアが女性の横に立ち、女性を手で示した。

「私の母……シャロン・ラーズバード」
「はあああああ！？」

蒼く澄み渡る空。その日一番の絶叫がその空に響き渡った。

2－03　夢の花

「え？　え……え？」

数多の女性を虜にしてきたフェイトであるが、いまのこの姿を見ればその夢も覚めるかもしれない。

それほど、今のフェイトは情けない顔をしていた。気が動転しているのか、視点は定まらず、言葉にならない声をあげている。

クレアの母、シャロンはクレアを後ろから抱きしめた格好でフェイトを面白そうに見つめていた。

「おもしろいわねぇ。あなたの彼」

「お母様、いつお戻りに？」

「ついさっき。一刻も早く貴女に逢いたくて」

アドレーもアドレーであるが、シャロンも親馬鹿である。

クレアは大きく溜息を吐き、シャロンを引っぺがしてフェイトの頬を抓った。

「ほら、フェイト。いつまで呆けてるのよ」

「あ、ああ。そうだった」

抓られた頬を押さえながらシャロンの前に立ち、頭を下げた。

「初めまして、シャロンさん。フェイト・ラインゴッドです」

「初めまして。シャロンよ。娘がお世話になってるわね」

「いえ、僕のほうこそクレアには助けられてばかりです」

「またまた。で、何処までいってるかしら？」

「え」

フェイトの目が点になる。
シャロンはあくまで笑顔を崩さないままフェイトの肩に手を回した。

「さぁさぁ、未来のお母さんに話して御覧なさい？」
「え、あ、いや……」
「あら。あの堅物娘を落としたくらいだからどんな色男かと思えば……意外と純情？」

真っ赤になって俯くフェイトを、シャロンは意外そうな目で見つめた。

「孫の顔を見るのはまだまだ先になりそうね」
「お母様？」
「あら、クレアってば怖い顔」

右手に鞘に差したままの刀を構えたクレアが、笑顔でシャロンの眼前に立つ。
いまのいままでフェイトをからかっていた表情が消え、シャロンの表情からは血の気が引いていく。

「約三年ぶりですが……全く、お変わりないようで」

笑顔。クレアはあくまで笑顔である。
そのままクレアが刀を振り上げたところに、

「クレア！　フェイト！」

光に当たらない兵舎の窓からセレンが顔を出した。

「試験終わったよ。それでいくつか相談したいことが――」

その瞬間、セレンの表情が凍る。

後にフェイトは語った。あんな顔をしたセレンを見たのは、初めてだったと。

セレンの視線は真っ直ぐにシャロンへと向いている。シャロンも真っ直ぐにセレンを見ている。

恐る恐るシャロンを見たフェイトはその表情に絶句した。恐ろしいまでに歪んだ口元。喉の奥で短く悲鳴をあげるフェイトを尻目に、シャロンはゆっくりと兵舎に歩を進めた。

セレンの体がびくりと震え、一目散に駆け出した。

「あんの小娘！　逃がすかッ！」

その声を聴いた瞬間、フェイトは風が通り抜けるのを感じた。

ゆっくりと横に目を向けると、シャロンの姿はない。

更に数秒後、兵舎の中から叫び声が聞こえる。クレアは本日何度目か分からない盛大な溜息を吐き、やや覚束ない足取りで兵舎へと歩いて行く。

フェイトは躊躇いながらもクレアの後を追い、兵舎へと駆け出した。

フェイトは目の前の光景が信じられなかった。

開いた口が塞がらない、とはまさにこの事である。

「セレンが……怯えてる」

廊下の床に正座をし、怯えた目つきで目の前に仁王立ちをするシャロンを見上げては、罰が悪そうに顔を逸らしている。
シャロンはセレンの頭を鷲掴みにし、顔を近づけた。

「くぉらセレン！」
「ご、ごめんなさい！」

フェイトは目ばかりか耳も疑った。
あんな声で謝罪するセレンなど、見たことも聞いたこともない。

「勝手に出て行ったと思えば音沙汰なし。帰って来たと思えば私になんの連絡もなし。いい度胸ねぇこら」
「そ、そんなこと言っても連絡手段なんて……」
「あ？」
「ごめんなさい」

シャロンの口調が急変していることなど、最早フェイトにとっては些細なことだ。
目の前にいるのは本当にあのセレンなのか。この半年セレンを見続けてきたが、その余裕の表情を崩した所など見たこともなかった。唯一あるとすれば、クレアがグリーテンの手に落ちた時のみである。
しかし、その時ですらこんなに余裕がなかっただろうか。
答えは否、だ。

「クレア……あれは本当にセレンかい？」
「ええ。あの子唯一の弱点よ」

クレアの答えは投げやりだ。
シャロンはセレンの頭から手を離すと、セレンの前に屈み込んだ。

「で、申し開きはあるか？」
「ありません」
「あんたがいなくなってから何度クレアが泣いたか、教えてあげるわ」
「ごめんなさい。それだけは勘弁して下さい。本当に申し訳ないと思っていますから」

座ったまま深々と頭を下げるセレン。その声は切羽詰っている。
クレアは一度被りを振ると、シャロンを押しのけてセレンを立たせた。

「お母様。セレンが大事なのは分かりますが、愛情の表現が歪です」
「違うよ、クレア。私はいつかシャロン様に取って食われるんだ……」

セレンの表情に生気はない。ただただ乾いた笑いがもれるだけだった。
その引きつった頬を、シャロンが力強く抓る。

「あら。そんな事を言うのはこの口かしら？」
「い、いひゃ！」
「お母様！　ああもう！　フェイト、どこかへセレンを連れてって」
「了解です」

触らぬ神に祟りなし。フェイトはにべもなく頷いた。

「こら！　逃げるな！」
「お母様はこちらへ」

クレアがシャロンを押しやるように適当な部屋へと押し入れる。

フェイトもふらふらになったセレンを支えながら、なるべく離れた部屋にセレンを入れ、椅子に座らせた。

「だ、大丈夫かい？」

「……こ、殺される……絶対殺される」

頭を抱えて蹲るセレンの背中をフェイトは優しく撫でてやる。

「そ、そんな大袈裟な」

「フェイトは知らないんだ……あの人がどんな人か……」

「どんなって……」

「人間じゃない」

まさか、喉まででかかった言葉は、セレンの言葉によって引っ込んだ。

「訓練だって魔物の巣窟に投げ込まれたり、意味わかんない仕事を押し付けられたり、クレアの料理を食べさせたり……」

「それは……酷い」

クレアは料理が下手だ。それが子供の頃といえば、味は今よりも更に悲惨だろう。

「悪鬼だよ……あの人は」

「あらぁ、それはそれは大層な褒め言葉ね？」

「酷い料理で……悪かったわね？」

セレンとフェイトが同時に開け放たれた扉を向く。

背筋から嫌な汗が吹き出る。フェイトはこの時ほど、死を予感したことはなかった。

額に青筋を浮かばせたラーズバード母娘が、笑顔で入り口に寄りかかって立っていたのだ。

「このガキ」

「フェイト。あなたの本心はよく分かったわ」

ポキリと嫌な音を立てるシャロンとクレアの指。

フェイトとセレンは顔を見合わせ、その場に正座をし、

『ごめんなさい』

声を揃えて頭を下げたのだった。

※

「勝負あり……ですね」

仰向け倒れたナミアの眼前には、ピタリとクレセントの拳が突きつけられている。

ナミアの大きな瞳が更に大きく見開かれ、その拳を呆然と眺めている。静まり返った空間に、歓声が走った。

セフィリアですらこれが試験だということを一時忘れてしまうほどに、観客を魅せる試合だった。

クレセントはナミアの上から体をどけると、そっと手を差し出した。

「大丈夫ですか？」

「は、はは……まさかあたしが負けるなんて思いもしませんでした。

それも、完璧に」

ナミアはクレセントの手を取ると、苦笑して立ち上がった。クレセントは首を緩々と振り、ナミアの手を離した。

「いえ、紙一重でした」
「そんな涼しい顔で言われても説得力ないですよ」
「そんなことは」
「おもしろい……おもしろいです。絶対にこの試験受かって、いつかまた再戦を」

真っ向からぶつけられる視線。
クレセントはやんわりとした笑みを見せた。

「喜んで」
「では、私は次の試験会場へ行きますね」

にっと笑い、ナミアは第二の会場へ向けて足を進めた。
クレセントはセフィリアを振り返る。

「セフィリア、判定は――」
「分かってます。それよりもクレセント様。まだ十六人目ですからね？」
「……あ」
「どれだけ時間をかけるんですか」
「す、すみません」

大袈裟に溜息をつくセフィリアにクレセントは大きく頭を下げる。

「かまいませんよ。――まったく、こんな試験見たこともない……」

セフィリアは髪をかき上げると、クレセントに双剣を押し付けた。
「お疲れでしょう。後は私に任せて休んで下さい」
「え、でも」
「いいですね？」
「は、はい」

全く目が笑っていない笑顔を間近で見せられたクレセントの顔が引きつる。双剣を受け取り、大人しく後ろに下がった。
セフィリアはそれを満足そうに見つめると、既に準備を整えている十七人目の受験者と控えの受験者を見渡し、不敵に微笑んだ。

「では、ここからは私がお相手をします。言っておきますが、私はクレセント様のように甘くはありませんから」

その笑みを見た受験生が肩を竦ませ、十七人目の青年に憐れみの目を向けたのだった。

※

「で、この後どうするのかしら？」
「そうですね。取りあえずフェイトと私は試験会場に戻って……」
「酷いよ、クレア！　ここでシャロン様と二人で居ろって！？　拷問だよ！」
「なにか言ったか、病弱」
「いえ、何でも」

シャロンのひと睨みで、セレンは即座に顔を逸らした。容赦なく殴られ、じんじんと痛む頭を押さえ、同じように頭を押さえるフェイトを横目で見る。

その訴えるような視線を受けたフェイトは控えめに手をあげた。

「ぼ、僕はセレンと事務の審査に当たろうかななんて……ごめんなさい」

フェイト撃沈。鋭い二つの視線の前に、フェイトはあえなく撃沈した。

それを予想していたのか、セレンもこの世の終わりのような顔を浮かべながらも、クレアに引きづられるフェイトを見送ったのだった。

扉が閉まり、暗い室内に静寂が訪れる。

内心この場から速く逃げ出してしまいたいセレンだったが、そんなことは到底不可能だということは分かりきっていた。諦めのいい頭を、酷く恨んだ。

暫しの沈黙。それはシャロンの一言によって破られた。

「で、体は？　それに光を浴びれないですって？」

「……体は相変わらずですよ。これは、そうですね。一種の罰かもしれません」

「罰？」

「約束を破った罰」

そう困ったようにセレンは笑った。

シャロンは足を組みなおすと、セレンのほうをしっかりと見た。

「どうして……サンマイトへ行ったの？」

「それは、治療法を探しに……」

「嘘を吐くな。伊達にガキの頃からあんたを見てきちゃいないのよ」
セレンは正座をしていた足を崩し、その場に膝を抱えて蹲った。
「言えません。言いたくありません」
「……」
「言えば、私を支えているものが崩れてしまいます。弱さを曝け出したくはないんです。クレアにだけは、弱い姿を見せたくない」
「……馬鹿娘」
シャロンは足を解いて立ち上がると、セレンの頭を抱きしめた。
セレンの瞳が軽く開かれる。
シャロンは手に力を篭めると、セレンの髪を撫でた。
「おかえり、セレン」
「……ただいま、おばさん」
セレンは擽ったそうに微笑むと、躊躇いがちにシャロンの背中に腕を回したのだった。
※
「セレン……大丈夫かな」
試験会場へ向かう途中、フェイトは何度も後ろを振り返っては呟いた。
まさか本当に取って食われることはないだろうが、それでも不安は拭えない。

「平気よ。あれであの二人、仲が良いんだから」
「あれで？」
「とにかく大丈夫。多少歪んでるけど、あれも愛情の一環よ」

多少ではないだろう。
そう思いながらも、やはり口には出せないフェイトは、自分の弱さに呆れた。

「それにしても、君が何時も言っていたシャロンさんの凄さがやっと分かったよ」
「でしょ」
「それにしてもあまり似てないんだね。てっきりクレアは母親似かと思ってたよ」
「ええ、私はお婆様似らしいから」
「へぇ、それは初耳だな」

そう返しながらも、フェイトの脳裏に一人の女性の顔が過ぎった。
出会ってすぐに分かれた女性。
別れ際に見たその顔は、いまもフェイトの頭に鮮明に残っていた。

「あ、クレア様」
「セフィリア……確かまだ全然進んでいないって……」
「いえ、たったいま終了しました」

試験会場で真っ先に向かった先、クレセントとセフィリアの管轄ブロックには、人っ子一人いなかった。
刀を鞘に納めたセフィリアが水を飲み、何故か蒼い顔をしたクレセントが黙々と書類に何かを書き込んでいる。

「その他のブロックも無事終了したようです」
「そ、そう。そりゃ良かった」

そう言いつつ、フェイトはクレセントに歩み寄ってそっと耳打ちをした。

「なにがあったんだい？」

次の瞬間、クレセントの持っていた書類が真っ二つに裂けた。

「く、クレセント！？」
「ご、ごめんなさい……わたしの口からは……とても」
「うん、ごめん。言わなくていいよ」

小刻みに震えだすクレセントの肩にそっと手を置き、フェイトは顔を逸らした。

なにがあったのか気になるところだったが、その欲求を押しとどめる。そのほうが懸命だと頭が必死に訴えかけてくるからだ。

既に周りでは後片付けに入っている。室内では、もう2次試験が始まっていることだろう。

「二次試験終了まであと二時間か。空いてる人を誘ってお昼休憩にしよう」
「そういえばお腹空いちゃった」
「ですが、この時間お店は混んでますよ」

セフィリアが時間を確認しながら言う。

正午過ぎ。確かにどの店も混雑する時間だろう。下手に並んで食べる時間がなくなっては元も子もない。

どうしようかとフェイトたちが頭を悩ませていると、

「軽食でよければ用意してますけど」
突如現れたディルナが、大きめのバスケットを差し出した。
「ディルナ。いつからそこに？」
「たったいまです。――それよりどうぞ。他の試験官の方にも配り終えましたから」
「あ、ありがとう」
フェイトがバスケットを受け取る。
中を開けば、サンドウィッチを初めとし、その他諸々の副菜が彩り豊かに並んでいた。
フェイトとクレア、セフィリアの目が点になる。
「これ作ったのってもしかして」
「私ですけど」
「まさか。ディルナみたいなタイプは料理出来ないと思っていたのに」
「失礼な」
心底意外そうにするセフィリアに、ディルナは冷たい視線を送ったのだった。
「美味しい」
「ほんと」
兵舎の休憩所へと場所を移したフェイト達は、一つのテーブルに

ついて食事をしていた。
最初にサンドウィッチを口にしたフェイトとクレアが一斉に賛辞の言葉を送る。

「ディルナは昔から料理が出来たのかい？」
「いえ、つい最近です」

そう言ったディルナが隣に座るクレセントを指す。

「料理はしたことがなかったんですけど、一ヶ月くらい前からクレセントに教えてもらって、それから」
「たった一ヶ月で？」
「ディルナは飲み込みが早いんです。マリアは半年教えても駄目でした。クレア様にいたっては……」
「く、クレセント！」

顔を赤くしたクレアが身を乗り出してクレセントの口を塞ぐが、もう遅い。
意地悪な笑みを浮かべたフェイトが、クレアを無理やり元の位置に座らせ、クレセントに微笑んだ。

「ちなみにクレアの様子はどんな感じなんだい？」
「ちょっと、フェイト！」
「砂糖と塩を普通に間違えます。あとは、施術で火をおこして火事騒ぎになったり、食材が炭になったり……」
「お願い、クレセント。もうそれ以上は言わないで……」

※

「どうですか？　守備は」
「上々。っていうか、見てたくせに」
「それはそれは随分な変貌振りで」
「嫌味ね。それにしても面白いわ、この国」
「お気に召されましたか？」
「一通り見て回ったけど、面白い子が沢山いる。蒼の騎兵に銀の司教……駒は十分ね」
「……」
「あちらの駒も揃ったようだし、黒白の盤面にどう配置するのかしらね」
「一つ、白が不利な要素がありますが」
「分からないわよ。歩兵は最後で化ける」
「相変わらず、ゲームがお好きだ」
「人生は楽しまなきゃ損。暫く動きはなさそうだし、楽しませてもらうわ」
「楽しまれているのはいいことですが、本来の任務をお忘れなく。我々の役目はあくまで監視。彼らに知識と技術を与えてしまった我等の古来からの務めです」
「……分かってるわ」
「ならば問題ありません。ですから、無用な情などは移さないように。いざという時、非常になりきれなくなっては困りますからね」
「分かってるってば」
「あなたは性格上、感情的になりすぎる機雷がありますから」
「気をつける。それにしても、その馬鹿丁寧な口調やめたら？　二人きりなんだし」
「……ああ、悪い。つい、な」
「それで、あっちの方はどうなの？」
「いまのところ音沙汰なしだな。目立った動きは見られない」
「そう。でも注意は怠らないで。もう二度とあんな酷い目に会う子

を出したくない」
「ああ、分かってる。その為にお前はこうして動いているんだろう？　あいつも心配している」
「ごめん。あの子にはあなたから謝っておいて。いつか自由にしてあげるって」
「あいつだって分かってるさ。ところで、白の駒の一つの……」
「ええ、あたしも驚いた。噂は聞いていたけど、やっぱり信じがたいものがあるわね」
「……我々も、昔はあのような技術を多様していたらしいがな。だが、気にしていても仕方ないさ。伝えるべきときはいずれ来るだろう」
「そうね。……じゃあ、あたしはそろそろ行くわ」
「気をつけろ」
「心配性」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2798t/

Star Ocean3　After Story

2012年1月5日23時46分発行